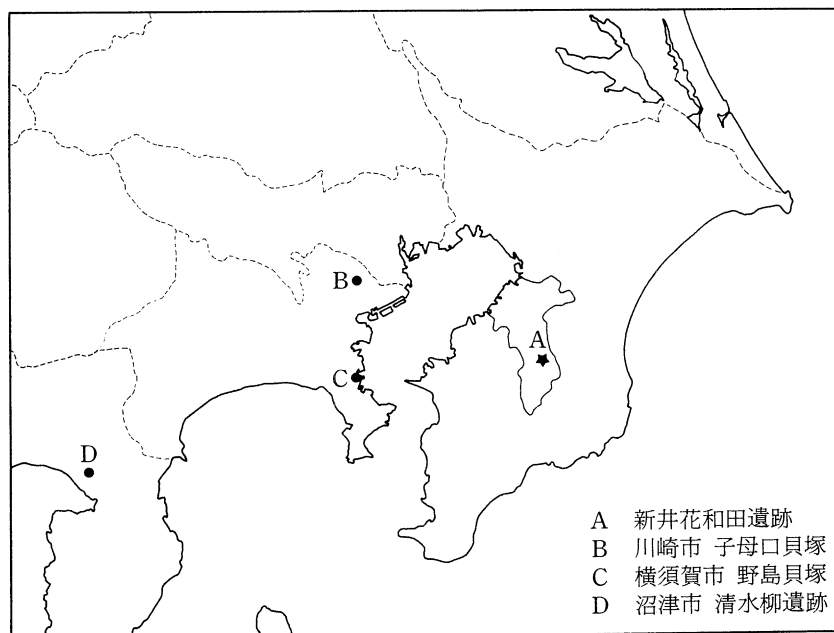


あ ら い は な わ だ

市原市新井花和田遺跡



2001

市 原 市 水 道 建 設 課

財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、養老川の創り出した豊かな平野と、その河の流れを生み出す丘陵地が、バランス良く組み合わせられた土地であります。

今回、ご報告する新井花和田遺跡は、そうした丘陵地において発見され、縄文時代早期の人々の生活を垣間見せてくれました。携帯電話が普及した今、どこにいても手軽にコミュニケーションがとれる現代と比する時、今から数千年も昔に、山奥の頂で生活する縄文の人々の苦労は、到底はかりしれないものがあります。その当時の生活文化を究明することで、我々が忘れかけた何かを学ばねばならないことが数多くあるのではないのでしょうか。また、それが現代に生きる我々の使命でもあると考えます。

今回は、花和田遺跡のほんの一部分の調査にすぎないものではありませんが、市原市の歴史だけでなく、縄文時代早期の研究にいささかなりとも寄与できたのではないかと思います。本報告書を、多くの方々に活用して頂き、かつご助言、ご指導いただければ幸いと存じます。

最後に、千葉県教育庁文化課、市原市生涯学習部ふるさと文化課をはじめとする関係機関のご指導、ご協力に深く感謝申し上げます。また、末尾ではございますが、発掘作業および整理作業にご尽力いただいた調査補助員の方々に、この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

平成13年 3 月

財団法人 市原市文化財センター

理 事 長 小 茶 文 夫

例 言

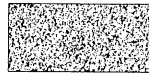
1. 本書は、千葉縣市原市新井字花和田731・733番地地先における市原市水道建設課の新井浄水場建設事業に先行して実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に所収した遺跡は、新井花和田遺跡（市原市埋蔵文化財分布地図 遺跡番号59）および花和田三山塚（同 遺跡番号193）である。
3. 発掘調査は市原市水道建設課の委託を受け、千葉県教育委員会・市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 発掘調査の対象面積は1次調査が2,000㎡、2次調査が480㎡、合計2,480㎡である。
5. 調査期間および担当者は以下の通りである。

1次調査	昭和59年5月15日～10月9日	担当者：鈴木英啓 近藤敏
2次調査	平成元年8月1日～9月30日	担当者：忍澤成視
整理作業	平成11年7月1日～平成12年3月15日	
	平成12年5月10日～平成13年3月15日	担当者：高橋康男 牧野光隆
整理協力者	： 国吉由意子 近藤久美 細田裕子 森京子	
トレース	： 半澤敏子 宮澤直美 山崎朋子	
6. 本書の編集および執筆は「第6章 花和田三山塚」の項を高橋が、それ以外を牧野が行った。
7. 石器および礫の石材同定は臼杵直氏（千葉大学研究生・理学博士）に依頼した。
8. 石器の実測および旧石器時代遺物の事実記載は宇井義典が担当した。
9. 当文化財センター内での調査コードは1次調査が「セ16」、2次調査が「セ107」である。
10. 1次調査時点では基準点測量は任意のグリッドで設定した。2次調査のグリッド設定は平面直角座標第Ⅸ系を用いている。そのため、1次調査と2次調査のグリッド配置はまったく異なっており、本報告書でも統一していない。1次調査区のグリッドは座標北から西に約17.5°傾いている。
11. 本書に使用した座標は平面直角座標第Ⅸ系であり、方位は座標北である。
12. 本書に使用した遺跡位置図は、市原市遺跡情報管理システムより出力した。なお、背景図面は、国土地理院発行1/2,500地形図「鶴舞」「大多喜」である。図面の接合部分の空白は、球面である地球を平面に写し取ることによって生じたものである。周辺地形図は、市原市昭和57年発行の1/2,500基本地形図M-7・N-7である。
13. 本書を作成するにあたり、当センター職員一同の多大なる協力を得た。また、蜂屋孝之氏、松田光太郎氏、中村薫氏にはご指導ならびにご協力をいただいた。改めて謝意を表したい。
14. 1次調査の担当者であった鈴木英啓氏は、昭和63年9月に夭折された。この場を借りてご冥福をお祈り申し上げたい。

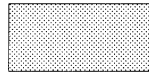
凡 例

1. 遺構図面の縮尺は、竪穴住居跡 1/80、それ以外 1/60であるが、例外は明記してある。出土土器の拓影図は原則として 1/3 である。石器実測図はレイアウトに応じて縮尺に種類が生じたので記してある。それ以外の遺物図の縮尺も明記してある。なお、1 枚の挿図に複数の遺構とその出土遺物がある場合でも、スケールは基本的にそれぞれの縮尺につき 1 本ずつとした。石器など例外の縮尺が間に入る場合はその限りではない。
2. 使用したスクリントーン・レタリングは以下のとおりである。例外はその場で明記した。

遺 構 図 焼土 No.320



土層断面図 新期テフラ No.1208



遺物分布図 土器 [・] / 石器および礫 [△]

石器実測図 磨り痕 No.1081



敲き痕 No.320



3. 図示したほとんどの土器の胎土に混和剤の繊維がみられるため、断面図に特にその旨を示していない。例外は原稿中で記載する。
4. 遺構の名称は、一覧表と遺構記載の原稿見出しに「0 6 6 竪穴住居跡」などを使用し、その他の記述では「0 0 1」、「0 0 2」と番号のみ表記した部分が多い。
5. 遺構外出土遺物の出土位置は、遺物番号の下に「D 6 - 21」のようにグリッド名を記した。複数のグリッドにわたる一括遺物には「D 6 - 16・17・21・22」（最大 4 グリッド）の様にグリッド名の間に「・」を入れた。出土位置の離れた接合関係は「A - 17/ D 6 - 20」、「D 7 - 6 / 3 区」のようにグリッド名の間に「/」を入れて表記した。
6. 遺構出土遺物は、その遺構実測図と隣接してレイアウトされているが、同一個体と判別できた遺構外出土遺物も、遺構の挿図に組み入れた。その場合、遺物番号の下に出土位置を明記した。その遺構内の出土遺物と遺構外出土遺物が接合した場合には、遺物番号下の出土位置名の前に「/」がある。
7. 遺構出土遺物の記載に用いた「C 類 1 c 種」などの分類名は、第 4 章「遺構外出土土器の分類」（p. 65～）に基づいている。
8. 土層断面図およびエレベーション図のポイント左横に記した数字はそのラインの標高を示し、単位はメートル（m）である。

本文目次

序文

例言・凡例

本文目次・挿図目次・表目次・図版目次

序章 新井花和田遺跡について	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と周辺環境	1
3. 調査の方法	5
4. 遺跡の基本層序	6
第2章 旧石器時代の遺物	8
第3章 検出された遺構とその遺物	11
A. 竪穴および竪穴住居跡	14
B. 炉穴	29
C. 陥し穴状土坑	38
D. その他の土坑（下層遺構）	48
E. その他の土坑（上層遺構）	54
F. その他の遺構	62
第4章 遺構外出土遺物	64
遺構外出土土器の分類	65
遺構外出土石器	95
第5章 遺構外出土礫	106
岩石の肉眼鑑定について	109
第6章 花和田三山塚	112
第7章 まとめ	120
写真図版 遺構	
出土遺物	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 周辺地形図	3
第3図 調査前コンタライン図	4
第4図 グリッド配置図	5

第5図	基本土層図	7
第6図	旧石器時代遺物(1)	9
第7図	旧石器時代遺物(2)	10
第8図	調査区全体図	13
第9図	001、004、035、061、072 実測図・出土遺物	15
第10図	011、037 実測図・出土遺物	16
第11図	038、039 実測図・038 出土遺物(1)	18
第12図	038 出土遺物(2)	20
第13図	038 出土遺物(3)	21
第14図	039、044 実測図・出土遺物	22
第15図	066 実測図・出土遺物(1)	25
第16図	066 出土遺物(2)	26
第17図	066 出土遺物(3)	27
第18図	066 出土遺物(4)	28
第19図	066 出土遺物(5)	29
第20図	002、026、019 実測図・019 出土遺物(1)	31
第21図	019 出土遺物(2)・027、028、031、032、034 実測図	32
第22図	041、042、062、046 実測図・出土遺物	34
第23図	046 遺物分布図・出土遺物(2)	35
第24図	049 実測図・出土遺物	37
第25図	063、064、068、069、074、101、102、103 実測図・出土遺物	39
第26図	005、010、075 実測図・出土遺物	42
第27図	047 実測図・出土遺物(1)	43
第28図	047 出土遺物(2)	44
第29図	047 出土遺物(3)、104 実測図・出土遺物(1)	45
第30図	104 出土遺物(2)、105、106 実測図・出土遺物	46
第31図	南側斜面部 048、050 周辺遺構実測図・050 出土遺物	47
第32図	016、070、051 実測図・出土遺物	50
第33図	003、012、040、020、043 実測図・出土遺物	51
第34図	107、108、110 実測図・出土遺物	55
第35図	109、111、112、113 実測図・出土遺物	56
第36図	114、116、115、117、053 実測図・出土遺物	57
第37図	006、007、008、009、015、024 実測図・出土遺物	59
第38図	013、014、017、018、022、021、023 実測図・出土遺物	60
第39図	025、030、033、056、118 実測図・出土遺物	61
第40図	080、081、093、094、045 実測図	63
第41図	遺構外出土土器片点数分布図	64

第42図	遺構外出土土器 (1)	A 類	69
第43図	遺構外出土土器 (2)	A 類	70
第44図	遺構外出土土器 (3)	A 類	71
第45図	遺構外出土土器 (4)	A 類	72
第46図	遺構外出土土器 (5)	B 類	73
第47図	遺構外出土土器 (6)	B 類・C 類	74
第48図	遺構外出土土器 (7)	C 類	75
第49図	遺構外出土土器 (8)	C 類	76
第50図	遺構外出土土器 (9)	C 類・E 類	77
第51図	遺構外出土土器 (10)	C 類・D 類	78
第52図	遺構外出土土器 (11)	E 類	79
第53図	遺構外出土土器 (12)	F 類	80
第54図	遺構外出土土器 (13)	F 類	81
第55図	遺構外出土土器 (14)	F 類	82
第56図	遺構外出土土器 (15)	F 類・G 類	83
第57図	遺構外出土土器 (16)	G 類	84
第58図	遺構外出土土器 (17)	G 類	85
第59図	遺構外出土土器 (18)	G 類・H 類	86
第60図	遺構外出土土器 (19)	H 類	87
第61図	遺構外出土土器 (20)	H 類	88
第62図	遺構外出土土器 (21)	H 類	89
第63図	遺構外出土土器 (22)	H 類	90
第64図	遺構外出土土器 (23)	H 類	91
第65図	遺構外出土土器 (24)	H 類	92
第66図	遺構外出土土器 (25)	H 類	93
第67図	遺構外出土土器 (26)	I 類	94
第68図	遺構外出土石器 (1)		97
第69図	遺構外出土石器 (2)		98
第70図	遺構外出土石器 (3)		99
第71図	遺構外出土石器 (4)		100
第72図	遺構外出土石器 (5)		101
第73図	遺構外出土石器 (6)		102
第74図	遺構外出土石器 (7)		103
第75図	遺構外出土石器 (8)		104
第76図	遺構外出土石器 (9)		105
第77図	遺構外出土礫重量分布図		106
第78図	花和田三山塚土層断面図		113

第79図	塚基底部遺物出土状況・盛土内遺物出土状況	115
第80図	塚盛土内出土遺物垂直分布	118
第81図	三山塚出土遺物(1)	118
第82図	三山塚出土遺物(2)	119

表 目 次

第1表	旧石器時代検出遺物観察表	8
第2表	検出遺構一覧	11
第3表	遺構内出土石器観察表	96
第4表	遺構外出土石器観察表(1)	96
第5表	遺構外出土石器観察表(2)	105
第6表	遺構外出土礫石材別集計表・グラフ	107
第7表	三山塚出土カワラケ観察表	116
第8表	三山塚出土銭観察表	117

図 版 目 次

図版1	昭和36年撮影航空写真
図版2	1次および2次調査区全景
図版3	調査前風景・基本土層断面
図版4	包含層調査風景・001・004・035・011・037
図版5	038・039・044・061
図版6	066・070・072
図版7	002・019・041・027・028・031・032・012・026
図版8	041・042・049・062・063・034
図版9	068・069・074・046・047・101・102・103
図版10	005・010・047・048・075・050
図版11	050・104・105・106・003・012・016・020
図版12	040・051・063・064・107・108・109・110
図版13	111・112・113・114・115・116・117・006
図版14	007・008・009・013・014・017・018・021・022
図版15	023・024・025・033・056・015・118・045・2次調査区
図版16	三山塚調査前・盛土断面・調査風景
図版17	三山塚盛土内遺物出土状況・地山整形部

- 図版18 三山塚盛土除去後全景・080・081・093・094
- 図版19 038 出土遺物
- 図版20 001・004・035・061・072・011・037・038・039・044・066 出土遺物
- 図版21 066 出土遺物
- 図版22 066 出土遺物
- 図版23 019・062・042・046 出土遺物
- 図版24 049・103・074・101・005・010・047 出土遺物
- 図版25 047・104・118・050・016・051・012・020・043・107 出土遺物
- 図版26 108・110・111・112・113・114・116・105・115・117・053・008・
024・014・018・021・023・025・118 出土遺物
- 図版27 遺構内出土石器・旧石器時代遺物
- 図版28 遺構外出土遺物 A 類
- 図版29 遺構外出土遺物 A 類・B 類・C 類
- 図版30 遺構外出土遺物 C 類
- 図版31 遺構外出土遺物 C 類・D 類・E 類・F 類
- 図版32 遺構外出土遺物 F 類・G 類
- 図版33 遺構外出土遺物 G 類
- 図版34 遺構外出土遺物 H 類
- 図版35 遺構外出土遺物 H 類
- 図版36 遺構外出土遺物 H 類・I 類
- 図版37 遺構外出土遺物 I 類、G 類・H 類内面、C 類土器拡大
- 図版38 遺構外出土石器
- 図版39 遺構外出土石器
- 図版40 遺構外出土石器、101 炭化物・焼土層出土クルミ殻、三山供養塔
- 図版41 三山塚出土遺物
- 図版42 三山塚出土銭

序 章 新井花和田遺跡について

1. 調査に至る経緯

市原市では、高滝ダムからの給水管理をするために、市内新井字花和田地先に市営水道浄水場の建設を計画した。このことから、市原市長より千葉県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて」が提出され、これに基づいて現地踏査等を行った結果、新井花和田遺跡の存在が確認されたため、発掘調査を実施することとなった。調査の対象は台地上2,480㎡ならびに塚1基であり、昭和59年5月15日～10月9日ならびに平成元年8月1日～9月30日の2次にわたって、財団法人市原市文化財センターに委託して実施している。

(市原市教育委員会生涯学習部 ふるさと文化課)

2. 遺跡の位置と周辺環境

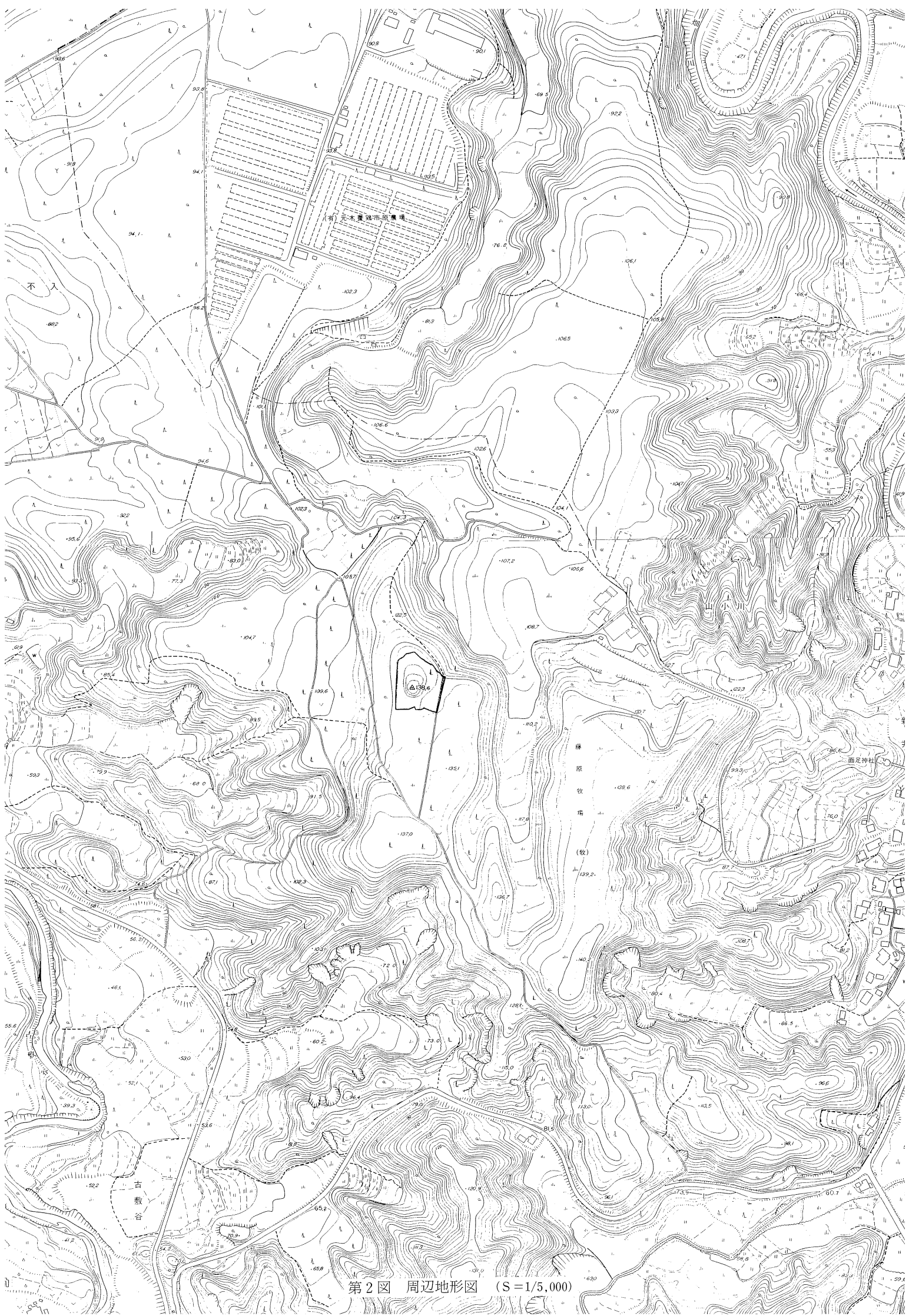
新井花和田遺跡は、上総丘陵の中央付近に位置する。現在の高滝湖（人工ダム）から東に2kmほどの距離で、養老川の右岸となる。その高滝湖（元養老川）に流れ込む古敷谷川と、平蔵川に流れ込む小草畑川に左右を挟まれて、複雑に開析され起伏に富んだ丘陵地に、遺跡がある。その標高は130mを越える。調査前の花和田三山塚の頂部には四等三角点があり、その標高値は138.56mであった。

遺跡の所在する場所は小さな独立丘陵状を呈しており、北側方面180°は大きく眺望が開けている。この場所より高い丘陵はなく、北風を遮るものはない。北側および西側の斜面下方には標高100m前後の段丘面が1段あり、さらにそこから川面まで30mほど落ちる。調査区の西側、2次調査区域には、北側から緩やかな谷が入り込む（第3図参照）。花和田遺跡としての範囲は南側に続き、尾根伝いに東側の丘陵へと広がるものと考えられる。この辺りはさらに急峻な斜面が多く、谷底との比高差は50～60m以上にもなる。調査区域の現況は山林であり、遺跡の南側は一部耕作が行われていた。

本遺跡（第1図59）の周辺には、著名な遺跡として、北西に1.5kmの位置に奈良時代の須恵器生産の拠点である永田・不入窯跡群（69-1・2）や、その南西に大和田窯跡、大和田横穴群（66）がある。高滝ダム造成時に調査された番後台遺跡（65）は弥生時代後期から古墳時代にかけての集落である。早期後葉条痕文期の土器片も数点認められる。周辺の縄文時代の遺跡としては、北西斜面の下方一帯が、中期から後期にかけての柏野遺跡（58）である。その北側に位置する山小川遺跡（70）や関尻遺跡（71）、その東方の十代原遺跡（61）、滝下遺跡（62）、シッカマ台遺跡（63）などは、いずれも未調査ではあるが、縄文時代の遺跡として周知される。やや遠方となるが、北北西5kmにある南富士台遺跡において野島式土器が包含層より出土しており、北北西8kmに位置する奉免上原台遺跡では、主に鶴ガ島台式から茅山上層式期にかけての炉穴群が調査された。市域北半に目を向けると、規模の大きい早期の調査事例がいくつかある。国分寺台地区の南端に位置する諏訪台・天神台遺跡は、条痕文期の数百基の炉穴群および長台形竪穴住居跡を9軒検出している。東間部多遺跡や今富大道遺跡、新生荻原野遺跡、そして今富の大作頭遺跡を初めとする東関道関連調査などでも、条痕文期の炉穴群を数多く検出している。しかしこれらの調査事例は、主に台地上縁辺部などの平坦面に分散的に立地するものであり、本遺跡のような狭い独立丘陵上に展開するものではない。

花和田三山塚（193）は市原市内でも最大級の規模を誇る三山塚であった。周辺には北西に1kmの場所に神山塚（58：一辺18m）や北北西2.8kmにある長塚台三山塚（79：一辺20m）などがある。





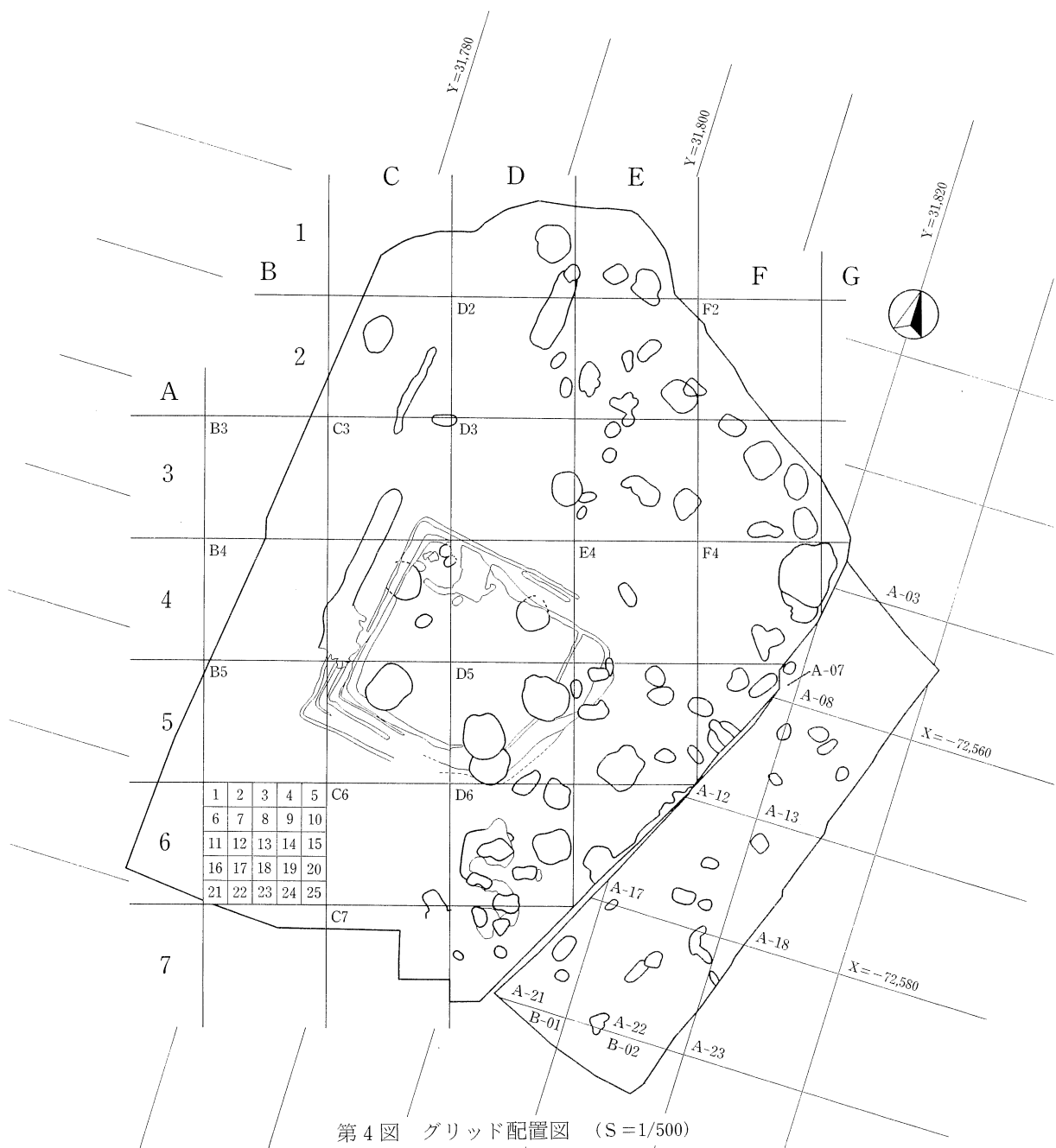
第 2 図 周辺地形図 (S=1/5,000)



第3図 調査前コンタライン図 (S=1/300)

3. 調査の方法

1次調査区は調査区の西側、三山塚とその周辺2,000㎡である。三山塚の調査を行い、併行して周囲の上層および下層遺構の調査をおこなった。そして、三山塚の盛土部分が完全に除去された後、基底部（＝地山整形部分）に存在する縄文時代の遺構の調査を行った。1次調査のグリッドは平面直角座標とは関係なく、三山塚頂部にあった四等三角点を基準点（グリッド名：D5－1）として組まれている。10mの大グリッドの中に2mの小グリッドを25個設定した。大グリッドの横列をA～G、縦列を1～7と呼称し、小グリッドとあわせて「D5－9」などというグリッド名とした。塚を調査するにあたって、その四等三角点は、昭和59年6月に建設省国土地理院に移転申請を提出し、廃点としている。



2次調査区は、調査区の東側の南北に細長い480㎡である。1次調査時とは変わって平面直角座標第Ⅸ系によってグリッド設定を行い、調査区に対して大きめの範囲を想定してグリッド名をつけた。変則的ではあるが、南北に並ぶ50m×50mの大グリッドAおよびBをさらに10m四方の小グリッド25個に区切り、それぞれ「A-17」「B-02」のように呼称した。

1次調査では、南東側斜面の遺構密度が一番高い部分(D5～7、E5～6、F5)は包含層出土物も多くあり、小グリッド内で位置とレベルを記録してとりあげる包含層調査を行っている。2次調査では、10m四方のグリッドの中で位置とレベルを記録している。本来ならこの報告書において両者を統一した記録を提示すべきであるが、できなかった。そのため、2次調査分の遺物は、大グリッド内一括遺物として扱う形となった。ただ、2次調査区内の包含層遺物の出土状況をみると、特に遺構周辺などの部分的な分布の偏りはなく、埋没谷の入り込む斜面の低い方へと集まっている傾向がみとれる。

4. 遺跡の基本層序

本遺跡の堆積土層には、いわゆる「新期テフラ」が認められる。「Ⅱb層」とも言われるこの火山灰層がいつ頃堆積したものなのか、地域によって差があり、いまだ判然としていない。しかしながら、なかにはローム層と見間違ふほどの黄褐色を呈するためその検出は容易であり、近年は事例が増えつつある(近藤1993、建石他2000)。市原市内では千草山遺跡・祇園原貝塚・武士遺跡・山見塚遺跡などで、縄文時代後期掘之内期の遺構を覆うように検出されている。

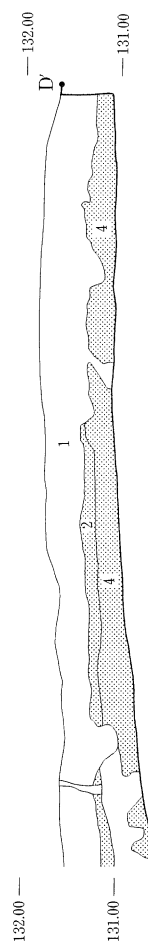
これまで新期テフラと呼ばれる層は少なくとも2枚ある(Ib層およびⅡb層)ことが確認されており(北見2001)、本遺跡でもその事例を追加する形となる。市街地でこのIb層を確認することは困難であるということを考えると、やはり人の動きや開発が少ない本遺跡のような地域で検出される可能性が高いということであろう。ただ、土壌の色調は多分に当時の植生によって左右されるため、見過ごしている可能性も否定できない。

本遺跡の基本層序は第5図の通りである。旧石器時代の試掘は3カ所で行ったものの、遺物は確認できなかった。調査区の南端にあたる谷頭部分の土層断面図を掲載しておく。

今回の調査では、Ⅱb層(新期テフラ2)に覆われた遺構は縄文時代早期の所産であると判断した。しかし、Ⅱb層の上面で確認できる遺構は、正確な時期は判断できない。つまり、出土遺物がほぼ縄文時代早期に限られる本遺跡では、その「新期テフラ2」の降灰時期が特定できない状態であった。縄文時代早期であると確定できる遺構はほとんどがⅡb層に覆われた状態であり、それ以降の時期の遺物は近世に至るまでほとんど存在しないからである。本報告書ではその「新期テフラ2」を基準に「下層」「上層」と呼称し、大きく時期を区分している。上層遺構からも早期の遺物が出土しており、それが伴うものなのかどうか、今となっては判別できない。果たして「上層遺構」としたものがすべて近世の所産であるのかどうか、考えるところである。

<参考文献>

- 近藤 敏 1993「房総半島の新期火山灰の降下について」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』
建石 徹・松田隆夫 2000「千葉県内「新期テフラ」のテフラ分析―縄文時代研究の前提として―」
『日本文化財学会第17回大会』
北見一弘 2001『喜多仲台遺跡』(財)市原市文化財センター



土層説明

- | | | | |
|----|--------|------------------------|---------------------------------|
| 1 | I a 層 | 表土層～近世 | 一部盛土。三山塚の造営時に台地の中央部周辺が削り取りられる。 |
| 2 | I b 層 | 新期テフラ 1 | 黄褐色。しまりなし。2次調査区のみで検出された。 |
| 3 | II a 層 | 暗褐色土 | この面では生活痕跡はみられない。 |
| 4 | II b 層 | 新期テフラ 2 | 黄褐色。粘性あり。一部斜面を除いて全面的に堆積している。 |
| 5 | II c 層 | 富士ブラック | (F B層) 粘性あり。縄紋時代早期の遺物包含層である。 |
| 6 | | ローム漸移層 | 丸みを帯びたソフトローム小塊の集合層に暗褐色土が混入している。 |
| 7 | III 層 | いわゆるソフトローム | ここまでは掘り込まれない遺構も多い。 |
| 8 | | ソフトローム小塊含む。 | 茶褐色の粒子(赤色スコリア)をやや多く含む。 |
| 9 | | 茶褐色の粒子(赤色スコリア)をやや多く含む。 | 赤色スコリアの混入少ない。 |
| 10 | | 赤色スコリアの混入少ない。 | 赤色スコリア多量を含む。酸化皮膜に覆われた粘土塊を少量含む。 |
| 11 | | 赤色スコリア多量を含む。 | やや大型の赤色スコリアを含む。他層にはみられない小礫を含む。 |
| 12 | | やや大型の赤色スコリアを含む。 | 武蔵野ローム漸移層 |
| 13 | | 武蔵野ローム漸移層 | くすんだ明褐色。スコリアは含まない。 |
| 14 | | 武蔵野ローム上面 | 全体に白みがかかる。 |

第 5 図 基本土層図

第2章 旧石器時代の遺物（第6、7図・図版27）

試掘は3ヶ所にトレンチを設定し、手作業でIV層を下げていった。結果的に、遺構や遺物は検出されなかったが、整理作業の段階において、旧石器時代の所産であろう遺物を抽出した。出土位置は、縄文時代早期の遺構の中や、遺構外グリッド一括遺物中にもみられた。

第6図1は細粒砂岩製の尖頭器である。右側縁の調整がやや急であり、形態的にもナイフ型石器の範疇に捉えられる。だが左側縁の両面からの平坦な剥離を考慮すると、全体的に調整も十分ではないが尖頭器に含めた方が妥当である。2は安山岩製の尖頭器である。両端とも欠損しているが、やや細身の形態をしていた。周辺調整は粗い。3は黒曜石製の尖頭器である。器体の一部しか残っていないが、木葉形を呈していた可能性もある。表面には自然面が多く残されている。肉眼観察であるが、信州系の石材と考えられる。4は珪質頁岩製の二次加工のある剥片（RF）である。石材的には東北系と言われているものに近い。5は安山岩（トロトロ石）製の剥片である。6・7は唯一の接合資料である（第6図8）。石材は安山岩であり、接合状況からすると拳大より一回り小さい礫であったと考えられる。細かい剥離が行われた様子は見られず、おおまかな剥離に止まっている。6は剥片である。背面には自然面が全体に残っている。厚みがあり、粗割段階の剥片である。7は石核に分類した。大きな4枚の剥離面から構成される。調整は見られない。他に1点、同一母岩と考えられる剥片がある（図版27）。第7図9は安山岩（トロトロ石）製の搔器である。背面に自然面が一部残っており、やや大形の剥片を用いている。覆面側にも剥離が施されている。スクレイパーエッジの削出は粗い。10は安山岩（トロトロ石）製の石核である。打面は2枚の剥離から成っており、打面調整は見られない。あまり大きな礫は用いられていない。11は黒色頁岩製の石核である。剥片剥離はそれほど進行していない。石核用としてはかなり大きな礫である。

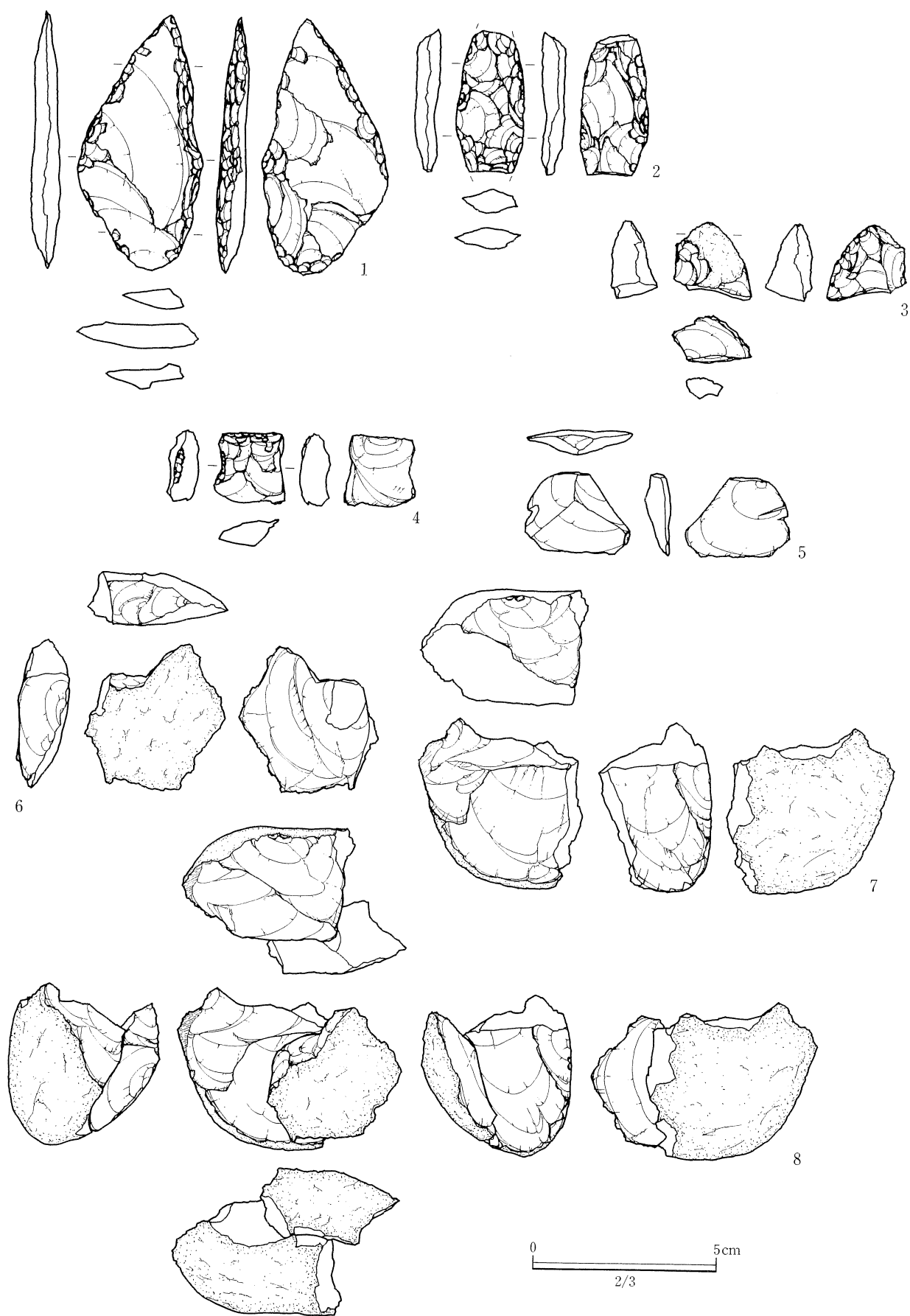
以上の遺物は、縄文時代の遺構やグリッド一括の遺物であるため、原位置は確保されていない。まとまった範囲での出土でもないため、一概に時期のことは述べられない。しかし尖頭器や遺構から検出されたことを考慮すると、立川ローム層のIV層～Ⅲ層辺りの可能性が考えられる。他の遺物についても、時期はそれほど下がるようには見受けられない。

第1表 旧石器時代検出遺物観察表

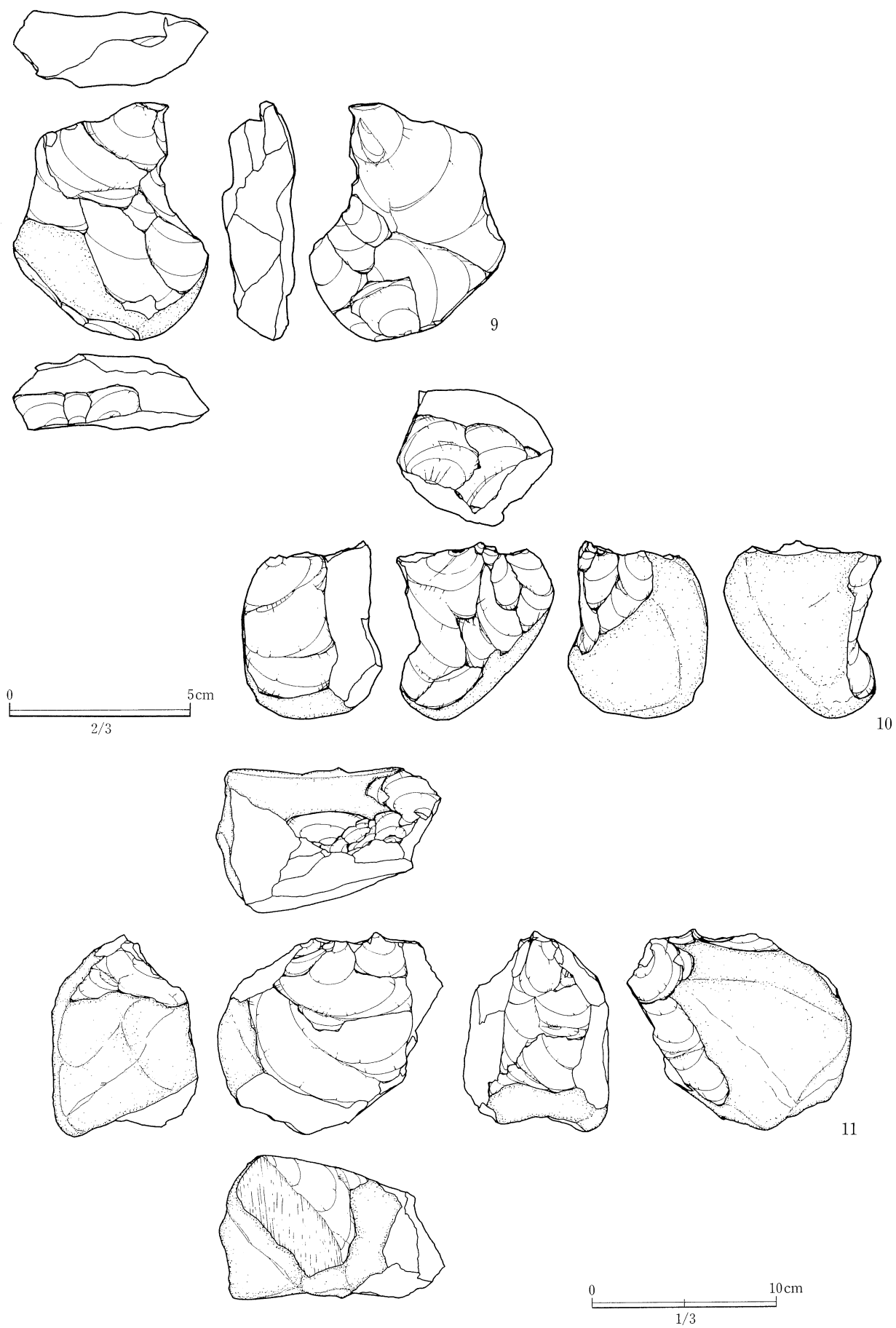
挿図番号	出土位置	器種	石材	長さcm	幅	厚さ	重量g	備考
第6図 1	Aトレ	尖頭器	細粒砂岩	6.72	3.41	0.86	18.6	
第6図 2	A-08	尖頭器	安山岩	3.88	1.87	0.68	6.0	
第6図 3	A-13	尖頭器	黒曜石	2.05	2.22	1.31	4.3	
第6図 4	D6-10	二次加工のある剥片	珪質頁岩	1.95	2.05	0.83	2.8	
第6図 5	塚内	剥片	安山岩トロトロ石	2.27	2.83	0.70	3.3	
第6図 6	塚内	剥片	黒色緻密安山岩	3.85	3.76	1.41	19.9	7と接合
第6図 7	D6-13	石核	黒色緻密安山岩	4.51	4.55	3.11	68.2	6と接合
第7図 9	塚内	搔器	安山岩トロトロ石	6.32	5.38	2.06	57.7	
第7図 10	O O 7	石核	安山岩トロトロ石	4.83	4.31	3.99	87.7	土坑覆土より
第7図 11	全体一括	石核	黒色頁岩	10.99	12.22	7.93	1227.4	

 欠損のため現存値

※観察表の「石材」は臼杵氏の同定結果ではない。考古学でいうところの「トロトロ石」は、臼杵氏に見ていただいたところ、肉眼鑑定なので限界があるが、「安山岩」ではなく「凝灰岩」に見える、とのこと。



第6図 旧石器時代遺物（1）



第7図 旧石器時代遺物（2）

第3章 検出された遺構とその遺物

遺跡は主に縄文時代早期後半の遺構によって構成される、いわゆる「集落」の様相を呈している。

1次および2次の調査を通して、竪穴住居跡11軒、炉穴19基（燃焼面23面）、陥し穴9基（下層8基、上層1基）、土坑44基（下層25基、上層19基）、その他の性格不明遺構7基、時期不明の方形周溝状遺構1基、近世の三山塚1基とそれに関連する溝状遺構4条、近世もしくは近代の炭窯2基が検出された。

遺構は、北側から東側の斜面にひろがっている。その山頂部分の高い場所を占めるように、竪穴住居跡が円形に6軒（2軒は重複）並んでおり、そのまわりを囲むように炉穴や陥し穴が広がる。非常に綺麗と呼べる遺構の配置である。東側の2次調査区部分には緩やかな谷が入り込んでいる。包含層の遺物はその谷側に偏って出土する傾向がみられた。これは東側斜面の遺構密度の高さと、斜面地形による自然の作用によるものであろう。

遺跡には「新期テフラ」と呼ばれる黄褐色の火山灰層が堆積している。その層の堆積時期を特定はできなかったが、遺構の確認面がその層の上面で確認できるものを「上層遺構」と呼び、火山灰層を除去した後に検出された遺構を「下層遺構」と呼称した。図面から層位を確認できない遺構は「不明」と記載した。

遺構の事実記載をするにあたって、主に調査担当者の残したメモノートをもとにした。ただ、記載があっても図面に示されていないことがあり、床面の硬化や焼土範囲など、文字情報のみとなった部分も多い。

第2表 検出遺構一覧(1)

挿図番号	遺構番号	種別	グリッド	小グリッド	確認層位	備考	調査時番号
第9図	001	竪穴	D1	14/15	下層	ビット・炉などなし	
第9図	004	竪穴	E2	20/25	下層	ビット・炉などなし	
第10図	011	竪穴住居跡	F4	5/10/15	下層	不整形 プラン不明確 堀込み浅い	
第9図	035	竪穴住居跡	C2	7/8	下層	円形 半壊	
第10図	037	竪穴住居跡	C5	3/8	下層	隅円長方形 燃焼面あり	
第11図	038	竪穴住居跡	D5	12/17	下層	円形 燃焼面あり 039竪穴住居跡に切られる	
第14図	039	竪穴住居跡	D5	22	下層	円形 038竪穴住居跡を切る	
第14図	044	竪穴住居跡	D6	14/15	下層	隅円方形 炉無し	
第9図	061	竪穴住居跡	D4	14/19	下層	円形 塚基壇により半壊 燃焼面あり	
第15図	066	竪穴住居跡	D5	9/10	下層	円形 燃焼面あり 覆土上層より大型遺物出土	
第9図	072	竪穴住居跡	C4	9/14	不明	円形 塚基壇西側により半壊	
第20図	002	炉穴	E2	16	不明	木の根による攪乱をうける	
第20図	019	炉穴	F5	11/12/16	下層	竪穴状土坑を切る	
第20図	026	炉穴	E4	13	下層		
第21図	027	炉穴	E3	16	下層		
第21図	028	炉穴	E3	16	下層		
第21図	031	炉穴	E3	3	下層	円形 032炉穴を切る	
第21図	032	炉穴	E2	21/22	下層	不整形	
第21図	034	炉穴	D2	15	下層		
第22図	041	炉穴	E5	20	下層	019炉穴に隣接	
第22図	042	炉穴	D5	24	下層	炉床の焼け弱い	
第24図	049	炉穴	D7	6	下層	浅い 炉床の焼け弱い	
第22図	062	炉穴	C4	19	下層		
第25図	063	炉穴	C4	5	下層		
第25図	068	炉穴	E5	2	下層	焼土少ない 炉床の焼け弱い	
第25図	074	炉穴	E5	7	下層		
第22図	046	炉穴・土坑	D6	12/13	下層	炉穴と土坑の重複	
第25図	101	炉穴	A-22		下層	3基重複 クルミ殻を含む炭化物層あり	55
第25図	102	炉穴	A-23		下層		56
第25図	103	炉穴	A-22		下層	3基重複	57
第26図	005	陥し穴	E1	23	下層	L字状	
第26図	010	陥し穴	F3	23	下層	底面ビット1基	
第27図	047	陥し穴	D6	18/19	下層	底面ビット3基	
第31図	048	陥し穴	D7	2/3	下層	底面ビット1基	
第31図	050	陥し穴	D6	17	下層	底面ビットなし	

第2表 検出遺構一覧(2)

挿図番号	遺構番号	種別	グリッド	小グリッド	確認層位	備考	調査時番号
第26図	075	陥し穴	C3	5	下層	底面ビット2基	
第29図	104	陥し穴	A-21		下層	底面ビット2基	59
第30図	105	陥し穴	A-12/A-13		下層	底面ビット1基	66
第30図	106	陥し穴	A-22		上層		53
第33図	003	土坑	E2	13	下層		
第33図	012	土坑	E3	2	下層		
第32図	016	土坑	F5	3	下層		
第33図	020	土坑	E5	19	下層		
第33図	040	土坑	E5	22/23	下層	竪穴状遺構	
第33図	043	土坑	D6	5	下層	浅いスリパチ状	
第32図	051	土坑	D6	23	下層	047陥し穴と類似覆土	
第31図	052	土坑	D7	3	下層		
第36図	053	流水路跡	E6	12/17	下層	F B上位の流水跡 当時の水場?	
第31図	054	土坑	D7	8	下層		
図面なし	055	土坑	E6	4	下層	詳細不明	
第25図	064	土坑	C4	5	下層	063と同規模の土坑 覆土も類似	
第32図	070	土坑	E5	6	下層	066竪穴住居跡に隣接	
図面なし	071	土坑	C4	5	下層	詳細不明	
第34図	107	土坑	A-21		下層		58
第34図	108	土坑	A-18		下層		60
第35図	109	土坑	A-17		下層		61
第34図	110	土坑	A-22		下層		62
第35図	111	土坑	A-13		下層		63
第35図	112	土坑	A-13		下層		64
第35図	113	土坑	A-13		下層	底面に大型ビット	65
第36図	114	土坑	A-07		下層		67
第36図	115	土坑	A-13		下層		68
第36図	116	土坑	A-17		下層		69
第36図	117	土坑	A-17		下層		70
第37図	006	土坑	F3	2	上層		
第37図	007	土坑	F3	8	上層	小竪穴状	
第37図	008	土坑	F3	14/15	上層	小竪穴状	
第37図	009	土坑	F3	25	上層	小竪穴状	
第38図	013	土坑	F4	19	上層		
第38図	014	土坑	F4	18/23	上層	平面形態は陥し穴状	
第38図	017	土坑	F5	2	上層	覆土中焼土検出	
第38図	018	土坑	F5	6	上層		
第38図	021	土坑	E2	13/14	上層		
第38図	022	土坑	E3	20	上層		
第38図	023	土坑	E5	4	上層		
第37図	024	土坑	E5	9	上層		
第39図	025	土坑	E5	22/23	上層	040土坑の上層遺構	
第39図	030	土坑	E3	7	上層		
第39図	033	土坑	D2	20	上層		
第39図	056	土坑	C6	25	上層	詳細不明	
第37図	015	土坑	E3	13/18/19	不明	詳細不明	
第39図	118	土坑	A-22		上層	覆土中に焼土・炭化物を含む	54
第25図	069	土坑	E5	1/2	不明	068炉穴を切る	
図面なし	036	不明	C2		不明	詳細不明	
図面なし	057	不明			不明	詳細不明	
図面なし	058	不明	C2	21	不明	詳細不明	
図面なし	059	不明	D3	19	不明	詳細不明	
図面なし	065	不明			不明	066の覆土中の焼土跡か	
図面なし	067	不明	D5	4/5	不明	066に隣接 不規則ビット群 詳細不明	
図面なし	060	焼土跡	D5	記録なし	上層	066上層の焼土跡 近世か	
図面なし	073	動物痕跡	D4	7/11/12	上層	動物穴	
図面なし	029	木根	D3	15	不明	巨木の根による攪乱	
第40図	045	方形周溝状	D6	12/17	上層	時期不明 主体部など検出されず	
第40図	080	炭窯跡	D1	25 D2-5/9/10	上層		炭窯A
第40図	081	炭窯跡	E1	17/22	上層		炭窯B
第78図	090	三山塚			表層	一辺23m、高さ5m	塚
第79図	091	溝			上層	塚築造に関わる溝	1号溝
第79図	092	溝			上層	塚築造に関わる溝	2号溝
第40図	093	溝			上層	三山塚西辺に平行 長さ18.64m、幅1.36~1.76m	3号溝
第40図	094	溝			上層	三山塚関連か 長さ7.74m、幅0.51~0.78m	4号溝



A. 竪穴および竪穴住居跡

001 竪穴（第9図・図版4、20）

位置 D1-15付近 北側斜面 層位 下層

規模 長軸3.0m 短軸2.68m 不整円形 壁高 10.0cm～48.0cm

ピット 深さ（cm）P1：16.9、P2：35.7、P3：35.0、P4：43.7、P5：8.9

炉 なし 所見 竪穴状遺構ではあるが、積極的に住居跡とは断定できない。

遺物 土器2点 無文の土器が出土している。図示できるものは少ない。

004a 竪穴・004b 土坑（第9図・図版4、20）

位置 E2-20付近 層位 下層

規模 長軸2.92m、短軸2.16mの竪穴状遺構と長軸1.88mの不整形土坑が重複している。

壁高 11.5cm～28.8cm ピット・炉 なし

所見 竪穴状遺構ではあるが、住居跡かどうか判断できない。004bは004aが埋没した後に掘り込まれた土坑であり、深さは50～70cmである。

遺物 土器3点、礫2点（135.6g：砂岩1、チャート1、被熱2、割れ2）

011 竪穴住居跡（第10図・図版4、20、27）

位置 F4-10付近 層位 下層

規模 長軸5.84m（現存）短軸4.16m 形態 不整楕円形 壁高 4.1cm～27.7cm

ピット 深さ（cm）P1：52.3、P2：49.9、P3：26.6、P4：37.8、P5：28.1、P6：28.5、P7：31.1、P8：46.3、P9：37.7、P10：12.9、P11：19.0、P12：23.5、P13：20.3 炉 なし

所見 他の竪穴住居跡と比較してプランは不明確であるが、ピットは深い。ただ、検出したピットすべてが伴うかどうか判別できない。P11～13は竪穴より新しい可能性がある。

遺物 土器9点、磨り石1点、礫4点（2076.6g：砂岩、凝灰岩、デイサイト、チャート、被熱3、割れ3） 第10図12は微隆起線による区画をもち、口唇面は縄文施文である。内面は貝殻条痕である。13は口唇が大きく外反し、斜めの刻みが施される。外面は縦方向の擦痕、内面は横位のナデである。066竪穴住居跡出土遺物に同一個体（第16図96）がある。066は011と23mほど離れている。17はデイサイト製の磨石である。短軸方向の端部を使用している。

035 竪穴住居跡（第9図・図版4、20）

位置 C2-7付近 層位 下層 規模 長軸3.12m 短軸2.32m（現存）

形態 長円形（推定） 壁高 最大58.8cm（斜面に1/3程度削られる）

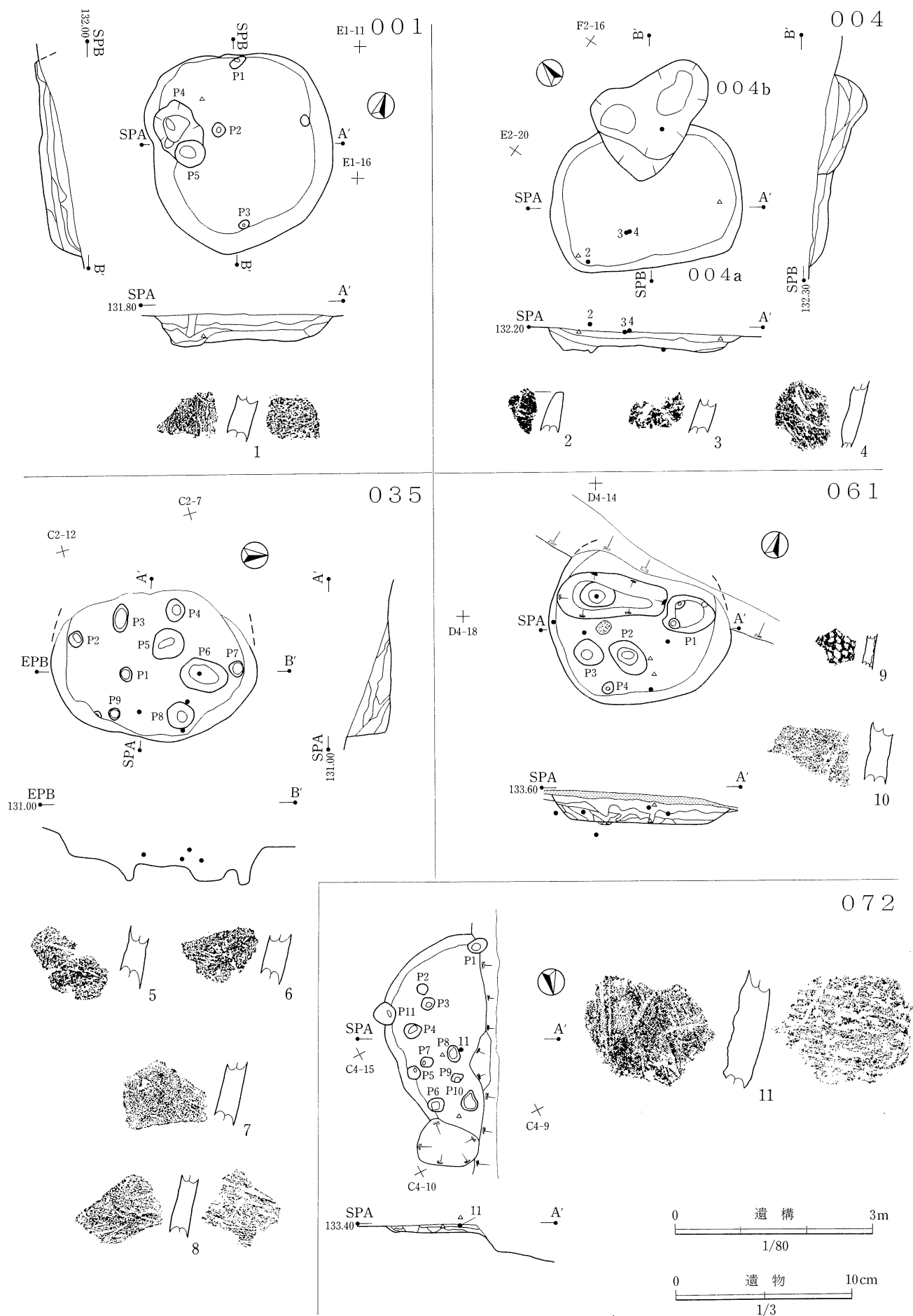
ピット 深さ（cm）P1：27.6、P2：20.3、P3：22.1、P4：26.8、P5：31.0、P6：19.0、P7：25.4、P8：26.8、P9：20.4

炉 なし 所見 床面付近で焼土を微量検出した。床面はやや硬化している。確認面からの掘り込みは最大50cm以上と深い。斜面地に位置するため、壁の1/3程度流れてしまっている。

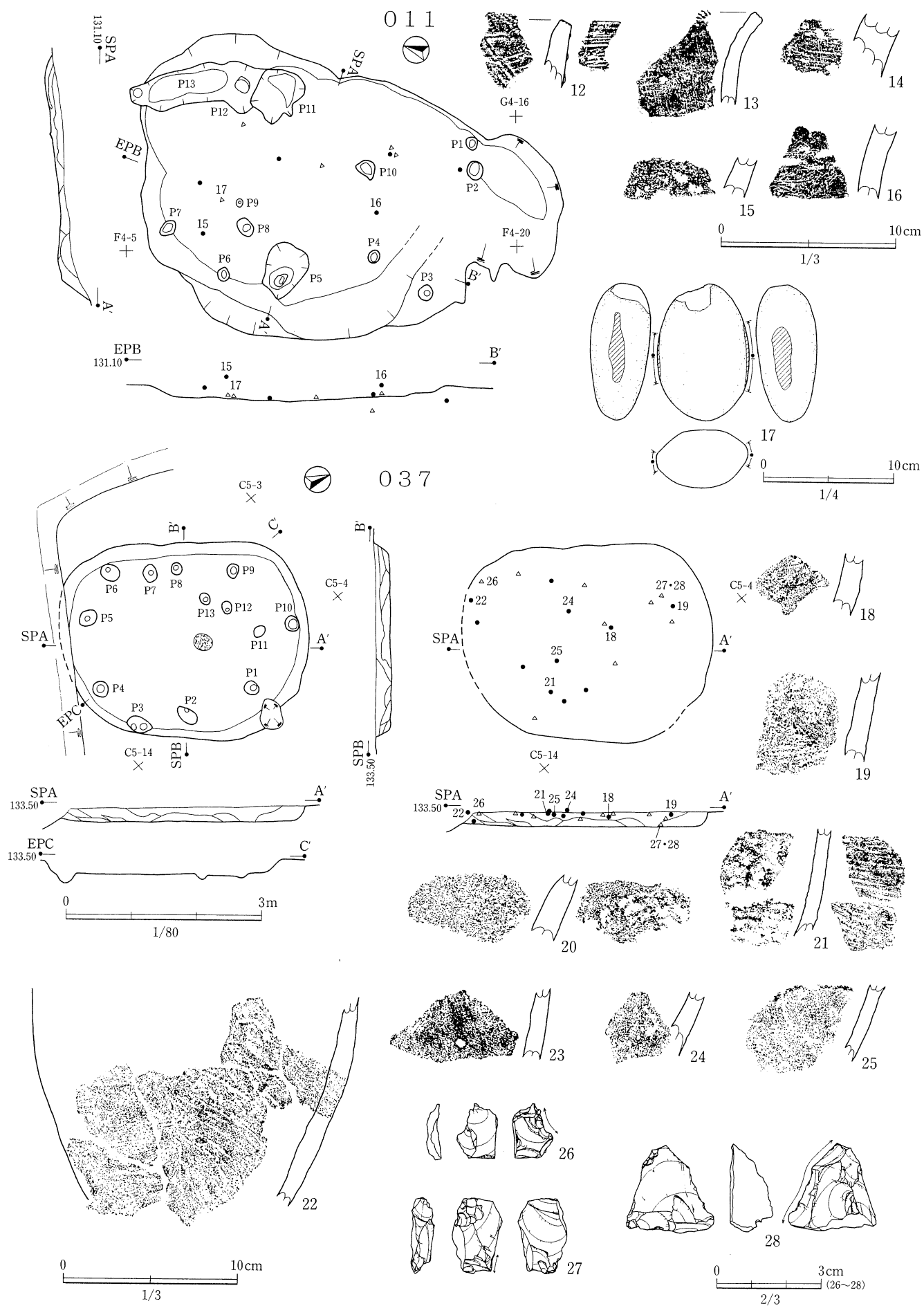
遺物 土器9点、黒曜石剥片2点（2.7g）図示した4点とも、無文、擦痕調整である。

037 竪穴住居跡（第10図・図版4、20、27）

位置 C5-3付近 層位 下層 規模 長軸3.80m 短軸2.96m 形態 隅円方形



第9図 001、004、035、061、072実測図・出土遺物



第10図 011、037実測図・出土遺物

壁高 7.1cm～24.1cm ピット 深さ (cm) P1: 5.4、P2: 43.7、P3: 14.3、P4: 12.6、P5: 12.0、P6: 14.3、P7: 18.6、P8: 11.1、P9: 6.3、P10: 8.8、P11: 2.7、P12: 6.3、P13: 11.1

炉 円形 掘り込み深さ3.2cm 所見 遺物は主に覆土上層から中層にかけて出土している。塚の基底部南端に位置し、壁の掘り込みおよび覆土の上部を削平されている。

遺物 土器18点、剥片石器3点、黒曜石剥片2点(2.3g)、礫15点(1180.7g:砂岩5、チャート4、流紋岩2、デイサイト2、凝灰岩1、珪質泥岩1、被熱8、割れ8) 21は胴部下半である。器壁外面がほとんど剥離しているが、一部隆帯が残る。内面は横位の貝殻条痕がみられる。22は底部付近であり、外面は擦痕調整がなされ、内面は薄く剥落し荒れている。19と同一個体である。24・25は底部に近い。26は2次加工のある剥片、27は楔形石器、28は使用痕のある剥片で、3点とも黒曜石製である。

038 堅穴住居跡(第11～13図・図版5、19、20、27)

位置 D5-12付近 層位 下層 規模 長軸3.72m 短軸3.44m 形態 円形

壁高 27.1cm～63.2cm ピット 深さ (cm) P1: 23.1、P2: 24.6、P3: 27.9、P4: 34.3、P5: 22.1、P6: 17.3、P7: 13.5、P8: 13.4、P9: 20.1、P10: 36.3、P11: 19.9、P12: 15.1、P13: 18.6

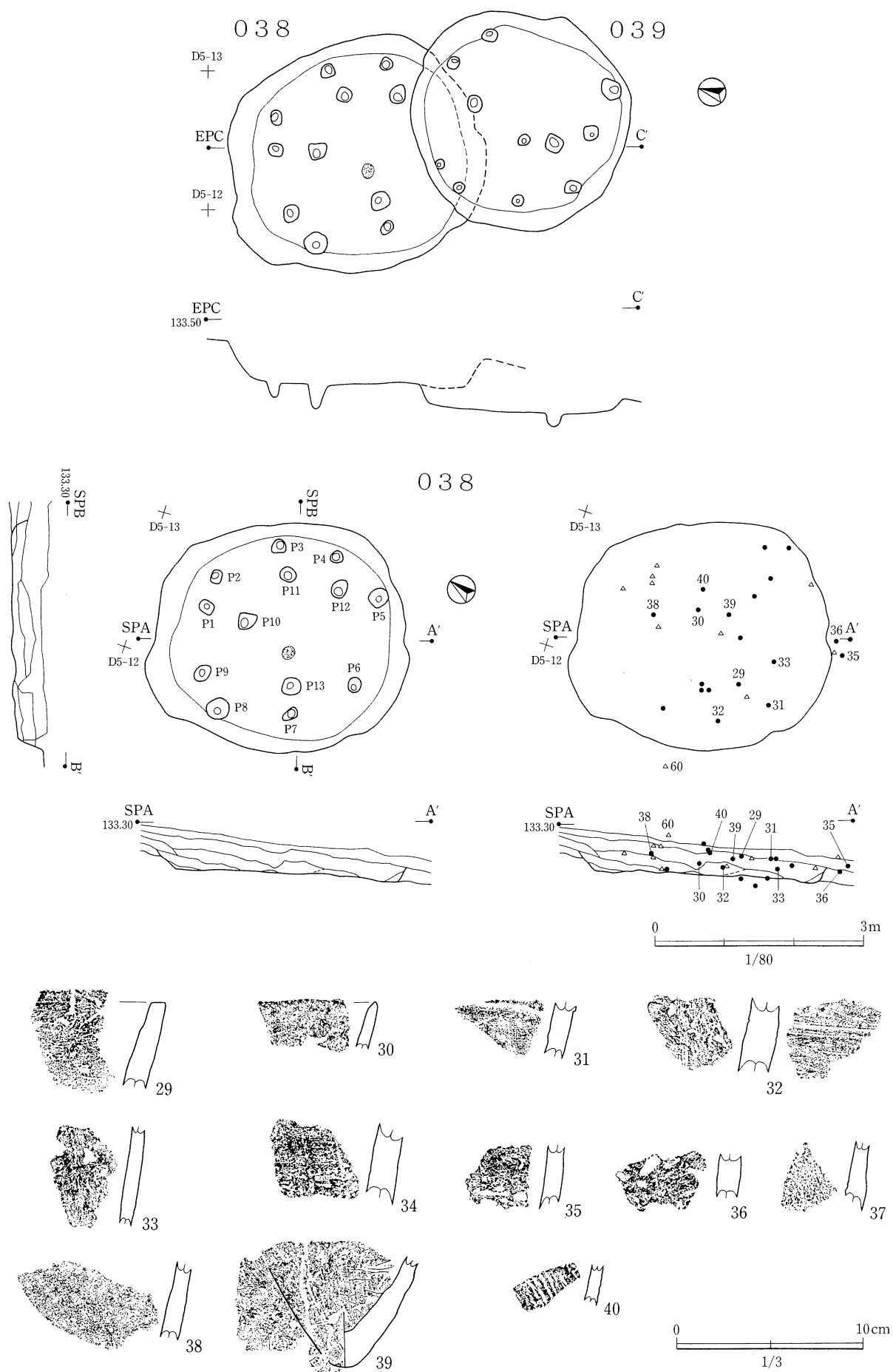
炉 円形を呈するが、焼けは弱い。

所見 炉の周囲で硬化部分を検出した。重複した039より時期的に新しく、Ⅱc層上面より掘り込まれている。斜面の北側上方に位置するため、039の床面を壊すまでには至っていない。調査時の図面では、堅穴の覆土は近世の三山塚の盛土が大半を占めると記載されているが、重複関係にある039の図面と合わせると、ちょうど038の一番上層が039を覆う新期テフラ層にあたっているため、そのように統一した。塚の基底部は、新期テフラ層を掘り抜いていない、ということになる。

遺物 土器34点、剥片石器2点、磨り石1点、黒曜石剥片11点(4.2g)、礫20点(2166.8g:砂岩6、チャート5、流紋岩4、デイサイト2、ホルンフェルス2、泥岩1、被熱9、割れ10、チャートは被熱なし) 29は口唇の断面が角状を呈し、若干内削ぎ状になる。擦痕調整である。30は口唇付近の内面が削られて薄くなるH類1b種で、小型の器種である。31は水平の隆起線があるが文様構成は不明である。32と34は同一個体であり、025土坑出土遺物(第39図125～127、131)とも同一である。器壁は厚く、焼成が良く、擦痕調整がきれいに残っている。40は撚糸文系の土器である。塚造成時に覆土に入ったものであろう。第13図60は安山岩(紫蘇輝石安山岩)製の磨石である。端部だけでなく、全面を使用している。礫だと紫蘇輝石だけが風化に強く、表面より突出するが、この磨石では全面摩耗して平坦になっている。61は石鏃。基部を欠損している。62はエンドスクレイパーである。

貝殻腹縁文および隆帯を有する大型個体について(第12図41～第13図59)

口径は48.3cmを測り、推定の器高は60cmを越える大型の深鉢となる。第12図41は42点の破片を接合したものであるが、038より出土したものは3点のみであり、他は遺構外の出土である。胎土には白色粘土塊(φ～6mm)が目立ち、焼成は良好である。色調は全体的に橙色を呈するが、割れ口を観察すると、器壁内外面から幅1～2mm程はっきりと発色しており、その内側の胎土は暗灰色である。口縁は緩やかな4単位の波状を呈し、口唇断面形は若干外削ぎ状となる。口唇面には丸棒状工具による斜めのキザミが施される。口縁部文様帯には、横位の擦痕調整の後、縦方向3段で10cm前後の幅に貝殻腹縁文が施される。貝殻の向きは土器の口唇に対して常に表面(背面)が左である。41ではちょうど欠失しているが、53をみると、波頂部直下には縦方向の隆帯が貼り付けられていたことがわかる。



第11図 038、039実測図・038出土遺物（1）

隆帯の両側に施された貝殻腹縁文は隆帯を軸に左右に開いた角度で施文されるが、波頂部間において次第に直立する。44はその施文角度のつじつま合わせの部分であろうか。54は小片だが、隆帯部分である。口縁部文様帯以下は横位に緩やかに弧状を描く貝殻条痕である。上部の腹縁文と同一もしくは同サイズの原体（貝殻）が使用されており、その条痕の間隔は2.5mm～3mm程である。施文順序としては、条痕が腹縁文より後である。内面には貝殻条痕は認められず、横位の擦痕調整である。

なお、この土器の底部もしくは底部付近と考えられる破片は1点もない。この土器の出土位置は038の他に066 竪穴住居跡からも1点（41に接合）出土している。他は遺構外であるが、すべて038 竪穴住居跡より南東方向に散って出土している。

039 竪穴住居跡（第11、14図・図版5、20）

位置 D5-22付近 層位 下層 規模 長軸3.12m 短軸3.04m 形態 円形

壁高 11.9cm～45.6cm ピット 深さ（cm）P1：19.1、P2：17.0、P3：14.0、P4：11.8、P5：24.3、P6：17.5、P7：15.0、P8：9.7、P9：5.9、P10：9.4、P11：18.2

炉 掘り込みはなく、中央部に円形に被熱したロームと焼土の散布が認められた。

所見 038より古く、部分的に切られる。覆土はロームが多く混入しており、人為的埋め戻しが想定される。床面中央から北側部分にかけて硬化面が認められる。竪穴の掘り込みはⅡc層（FB層）下部である。

遺物 土器20点、黒曜石剥片1点（0.6g）、礫2点（558.9g：ホルンフェルス1、チャート1、被熱1、割れ1） 63は角頭状の口唇に竹管状工具を寝かせて浅い角度で刺突している。64～66、69は遺構外出土の同一個体である。ただ、垂直分布図からわかる通り、63も直接この遺構に関係あるとは考えられない。67の外表面は、横位の擦痕調整後、その擦痕を縦方向に間隔をあけて磨き、擦り消している。交差する帯状の擦痕が格子目状に見え、意匠的效果を期待したものであろうか。他は床面付近からの出土もあるが、いずれも繊維を多量に含んだ無文擦痕調整の小片であり、図示し得るものはなかった。

044 竪穴住居跡（第14図・図版5、20、27）

位置 D6-15付近 層位 下層 規模 長軸2.92m 短軸2.68m（現存）

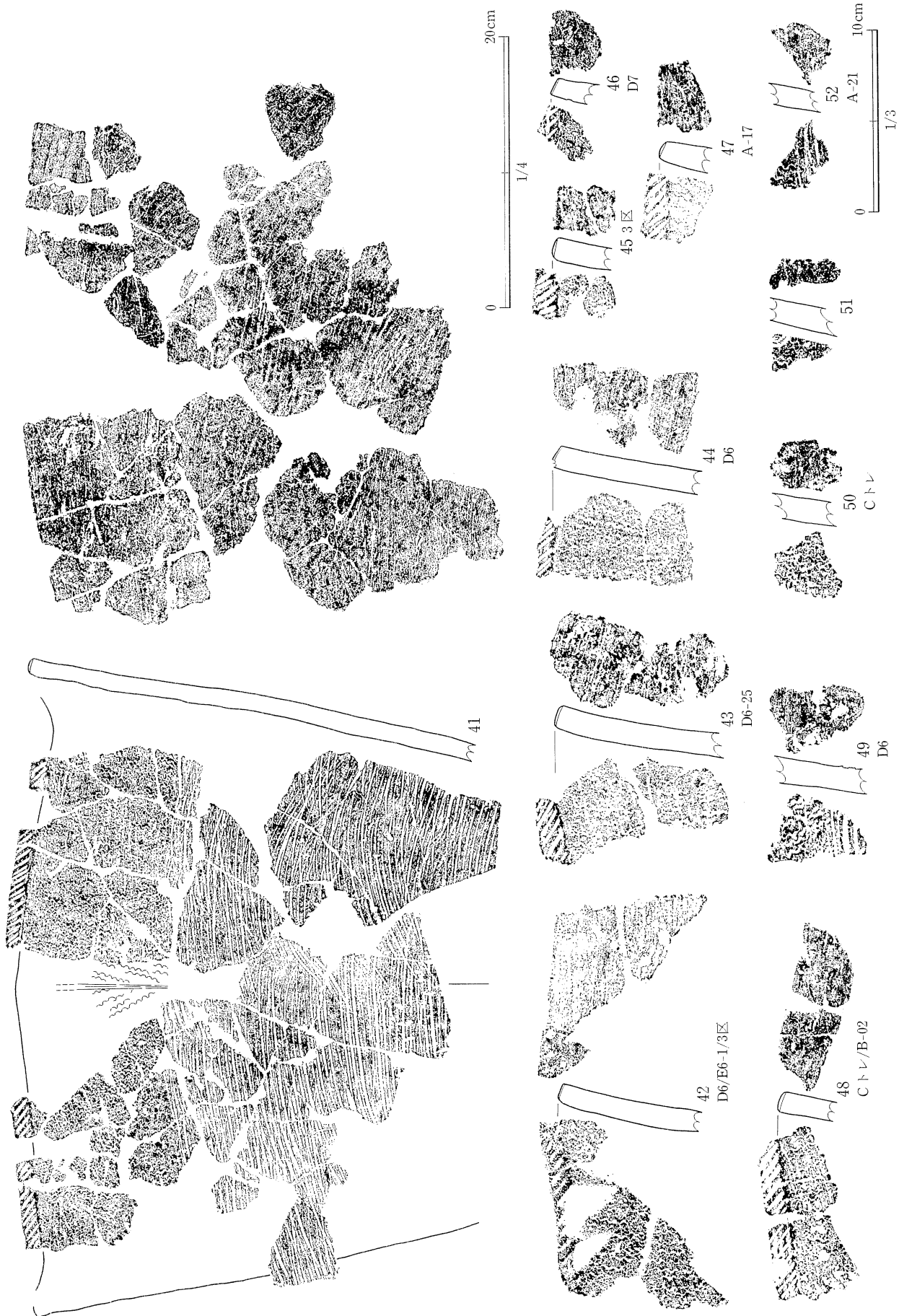
形態 隅丸方形 壁高 最大42.8cm ピット 深さ（cm）P1：10.6、P2：12.9、P3：17.7、P4：9.4、P5：18.2、P6：13.9、P7：9.0、P8：16.8、P9：29.2、P10：15.3、P11：16.0

炉 なし 所見 中央部P9付近に若干の焼土粒が散る。床面東半面は硬質になっている。南東側の壁は斜面に流されてなくなっている。

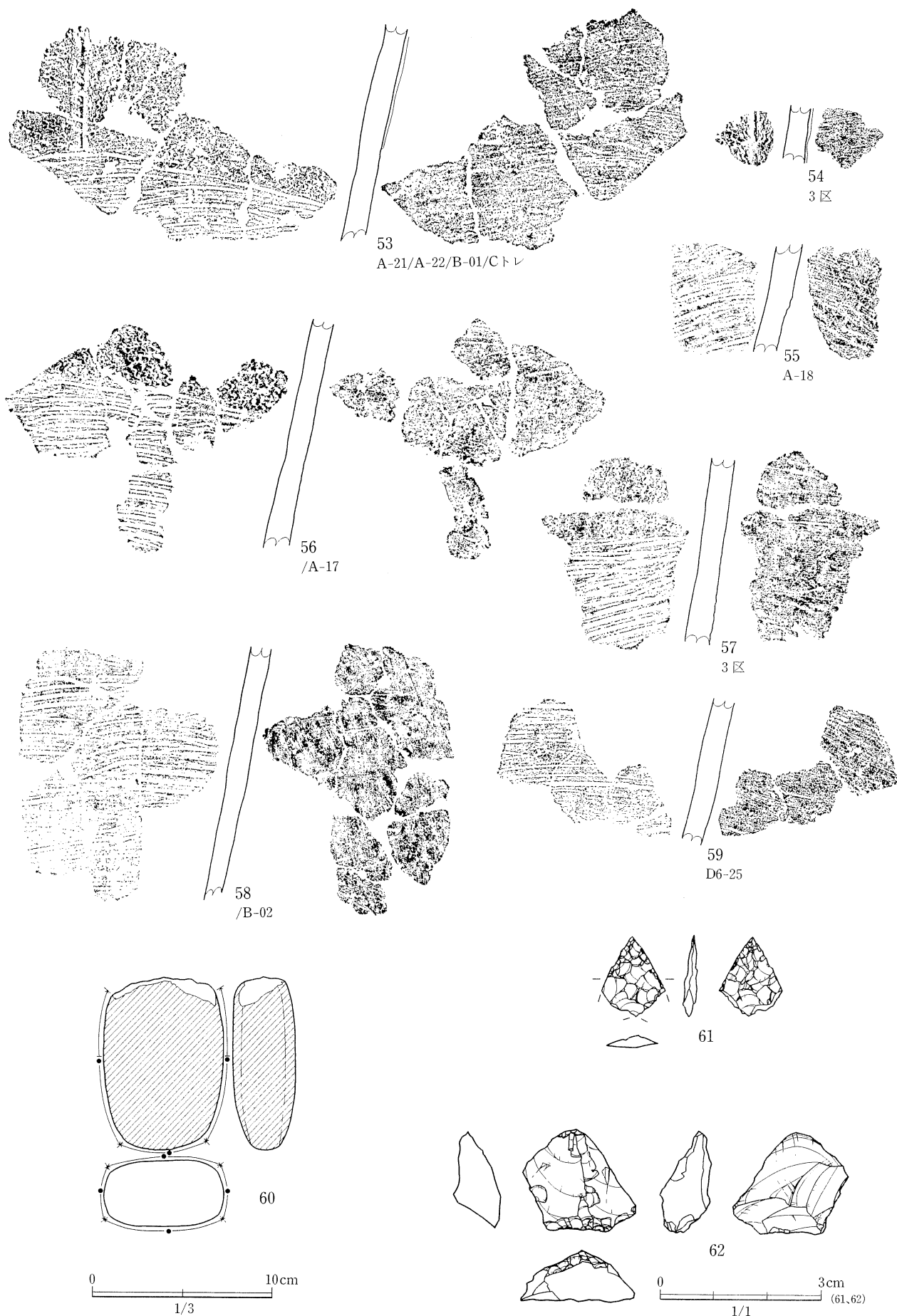
遺物 土器45点、礫斧1点、礫10点（237.6g：チャート5、砂岩、流紋岩、デイサイト、ホルンフェルス、長石、被熱7、割れ7） 72の口唇はやや外削ぎ状で、口唇面にクサビ状工具によるキザミが施される。73は角状工具による連続刺突文（C類1c種）を有する。74は細沈線2本によって文様もしくは区画が描かれているが全体は不明。75と77は外面のみ貝殻条痕調整である。76は内外面ともに貝殻条痕を施すが、外面ははっきりとしていない。78は胎土に繊維が少なく、内外面ともに縦方向の擦痕調整である。86はホルンフェルス製の礫斧である。基部を欠損している。色調的には被熱したものと見える。

061 竪穴住居跡（第9図・図版5、20）

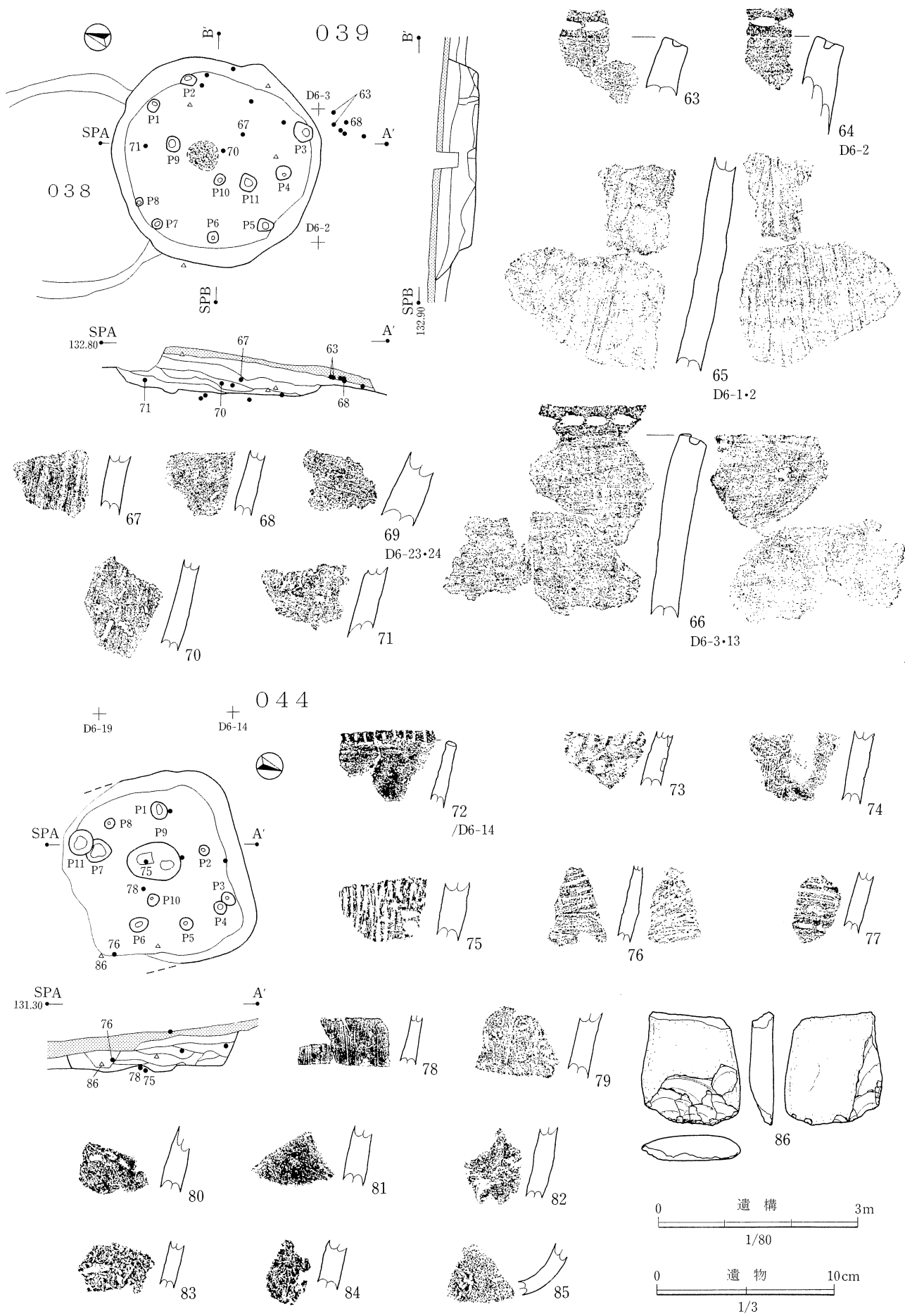
位置 D4-19付近 層位 下層 規模 長軸2.76m 短軸2.36m（現存）



第12図 038出土遺物 (2)



第13図 038出土遺物（3）



第14図 039、044実測図・出土遺物

形態 円形（推定） **壁高** 最大35.8cm **ピット** 深さ（cm）P1：11.1～27.3、P2：20.9、P3：17.2、P4：17.6 **炉** 円形を呈し、掘り込みは浅く焼土も薄い。

所見 床中央部分のみ硬化している。北西部分の長円形の穴は根による攪乱と思われる。P1は不整形の土坑とも考えられる。

遺物 土器2点 第9図9は単節LR縄文を施した中期の土器である。中期の遺物はこの調査区全体で30点ほどしか見つかっていない。10は胎土に繊維と小礫を多く含み、擦痕調整である。

072 竪穴住居跡（第9図・図版6、20）

位置 C4－9付近 **層位** 下層 **規模** 長軸3.16m（現存）短軸1.6m（現存）

形態 半円形（現存、推定円形） **壁高** 7.9～11.6cm **ピット** 深さ（cm）P1：15.9、P2：18.8、P3：17.7、P4：9.6、P5：20.5、P6：29.0、P7：19.8、P8：7.3、P9：14.7、P10：11.7、P11：12.2 **炉** 燃焼面はみられないが、削平された中央部分付近に焼土粒が集中していた。

所見 塚造成の地山整形時に半分削られた状態である。炉は削られた側にあった可能性もある。図示はないが、床面が一部硬化している。P11は壁を壊す形で掘られており、この竪穴に伴うものかどうか判断できない。

遺物 土器1点 第9図11は025土坑（第39図125～127、131）および066竪穴住居跡（第17図124～126）から出土した土器と同一個体の胴部破片である。

066 竪穴住居跡（第15～19図・図版6、20～22、27）

位置 D5－9付近 **層位** 下層 **規模** 長軸3.80m 短軸3.76m **形態** ほぼ円形

壁高 最大39.1cm **ピット** 深さ（cm）P1：30.3、P2：30.6、P3：22.4、P4：20.4、P5：18.6、P6：13.0、P7：12.1、P8：16.3、P9：11.9、P10：23.1、P11：18.6、P12：21.3、P13：11.3、P14：18.9、P15：28.0、P16：13.4、P17：21.7、P18：13.3、P19：15.6、P20：16.8、P21：22.9、P22：29.4、P23：22.7、P24：16.5、P25：16.7、P26：17.7、P27：18.6、P28：17.5、P29：不明、P30：9.2、P31：10.4、P32：7.2、P33：19.4、P34：19.8、P35：17.2、P36：17.5

炉 ほぼ円形、東側による **所見** 三山塚の地山整形時に半分削られたものの、残りは悪くない。隆起線のめぐる大型土器など、復元できる個体遺物は全て覆土上層の「遺物集中部分」からの出土であり、この竪穴住居跡の使用時期に伴うものではなさそうである。2/3ほど埋没した段階において一括廃棄されたものであろう。ピットは炉のある東半付近は二重にめぐる。

遺物 土器218点、磨製石斧1点、凹石1点、剥片石器3点、黒曜石剥片8点（20g）、礫24点（2389.9g：砂岩9、デイサイト4、ホルンフェルス4、チャート3、流紋岩2、頁岩2、被熱17、割れ14）

第15図87～91は同一個体。口唇の1点はA－13グリッドから、他は5点がD5グリッド内出土であり、042炉穴覆土からも1点出土している。大半の破片は本遺構北よりの「遺物集中部分」にまとまっていた。内外面ともに横位の擦痕調整がなされ、焼成は良好である。外面の底部付近は、斜位もしくは縦方向の調整もみられる。口縁部文様帯に3本1セットの角棒工具による連続刺突（C類2a種）が3段めぐる。一見貝殻腹縁文のように見えるので、そのような模倣であるのかもしれない。現存する口唇はほんの一部であるが、断面形状は先細りで、絡条体圧痕によるキザミがはいる。

第16図92はこの遺跡出土の他の土器とは雰囲気が違う。推定口径は6.4cmと小型である。いわゆる田戸上層式の特徴を持ち、瘤や貝殻腹縁による文様構成である。キザミのはいる隆帯もみられる。外反する口

唇には内外面にキザミがめぐる。胎土に繊維と砂を含むが、内外面は綺麗にナデられている。94は推定口径10.3cmである。口唇は外削ぎ状を呈し、斜位のキザミが弱くはいる。口唇直下に水平の隆起線が1本めぐり、そこから直角に長さ1cm程の3本（右2本剥落）の隆起線を配し、その左右両端に上部の隆起線と平行の2本目の隆起線がつながる。そこからさらに胴部へと斜位の隆起線および2本の平行沈線によって、区画あるいは文様が描かれる。裏面は横位の擦痕調整である。95は波状口縁を呈し、推定口径は22cm～24cm程となる。口縁部文様帯には野島式のモチーフが沈線のみによって描かれる。文様帯の下端は沈線によって閉じられている。沈線は慣れて手早く描いた力強い感じであり、決して丁寧ではない。先細りの口唇には絡条体圧痕によるキザミがはいる。焼成は良好できれいな擦痕がみられる。内面は口唇から5cmほどは波状の口縁に沿った斜めの擦痕調整で、その下は横位の擦痕である。胎土には赤褐色粒（ $\phi \sim 0.8\text{mm}$ ）が多く入る。92、94、95の土器はいずれも「遺物集中部分」からの出土である。96は推定口径23cmで、大きく外反する口唇に鋭い斜位のキザミが入る。011出土遺物（第10図13）と同一個体である。

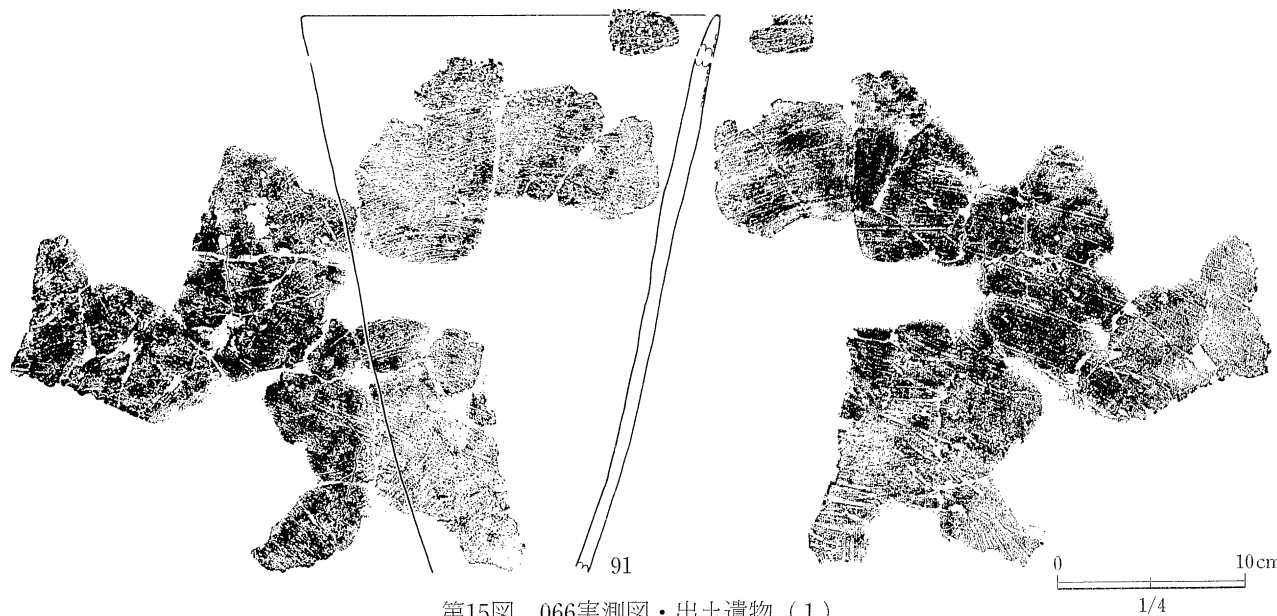
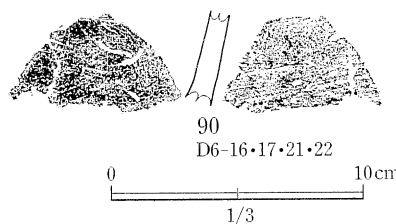
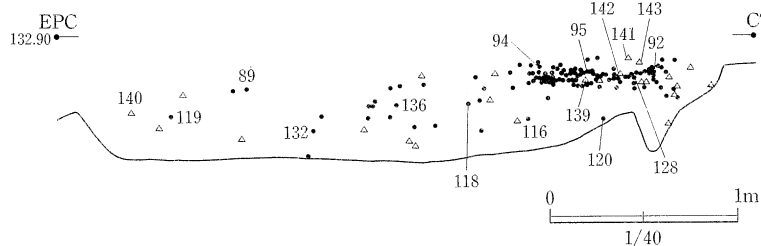
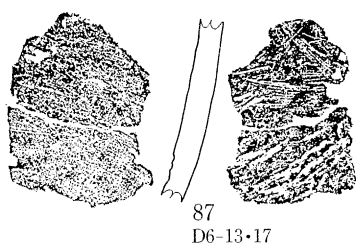
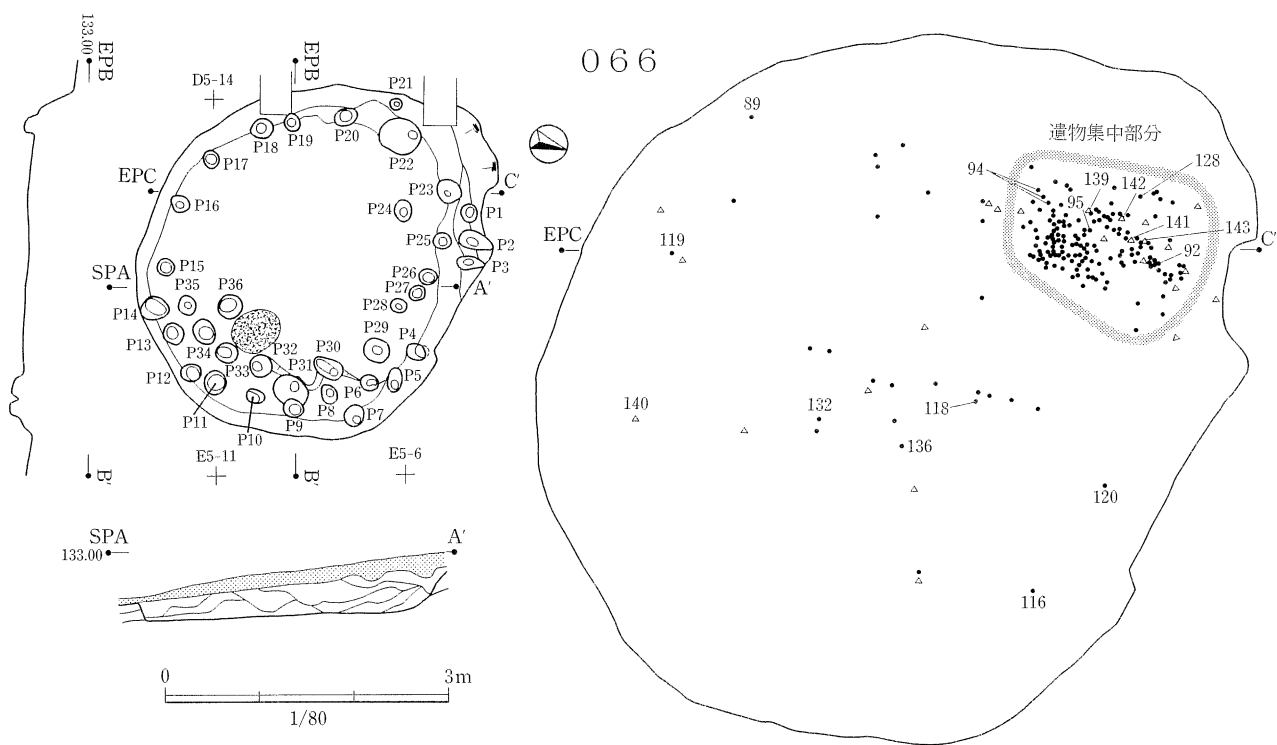
97～115は同一個体であるが、接合・復元できなかった。いずれも「遺物集中部分」の出土である。口縁は緩やかな波状を呈し、99が波頂部である。口唇は先細るがはっきりと外側に面取りがある。焼成は非常に良好できれいな擦痕が残し、一部の破片（103）には条線もみられる。第15図91の個体とよく似ているが、胎土には赤褐色粒（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）が目立ち、判別できる。111や114、115の器壁は若干外反しており、91とは器形もやや異なる。103の割れ口には焼成前の穿孔がみられる。

第17図116は弱く外反する口縁部である。117と119は、046出土土器（第23図46）と同一個体である。118の胎土には白色粘土塊がみられる。120と122、123は97～115の個体と類似するが、判別できない。123は底部付近である。121は内外面貝殻条痕調整だが、擦り消されておりはっきりしない。124～126は器壁が厚く、口縁は外反する。口唇面には太いキザミがラフに並ぶ。025土坑出土土器（第39図125～127、131）や072竪穴住居跡出土（第9図11）と同一個体であり、内外面とも横位の擦痕調整である。焼成はあまりよくない。128は胎土に小石を多く含む。外面は棒状工具により縦方向に調整し、その後擦り消し、さらに横位に弱い沈線状の線を引いている。

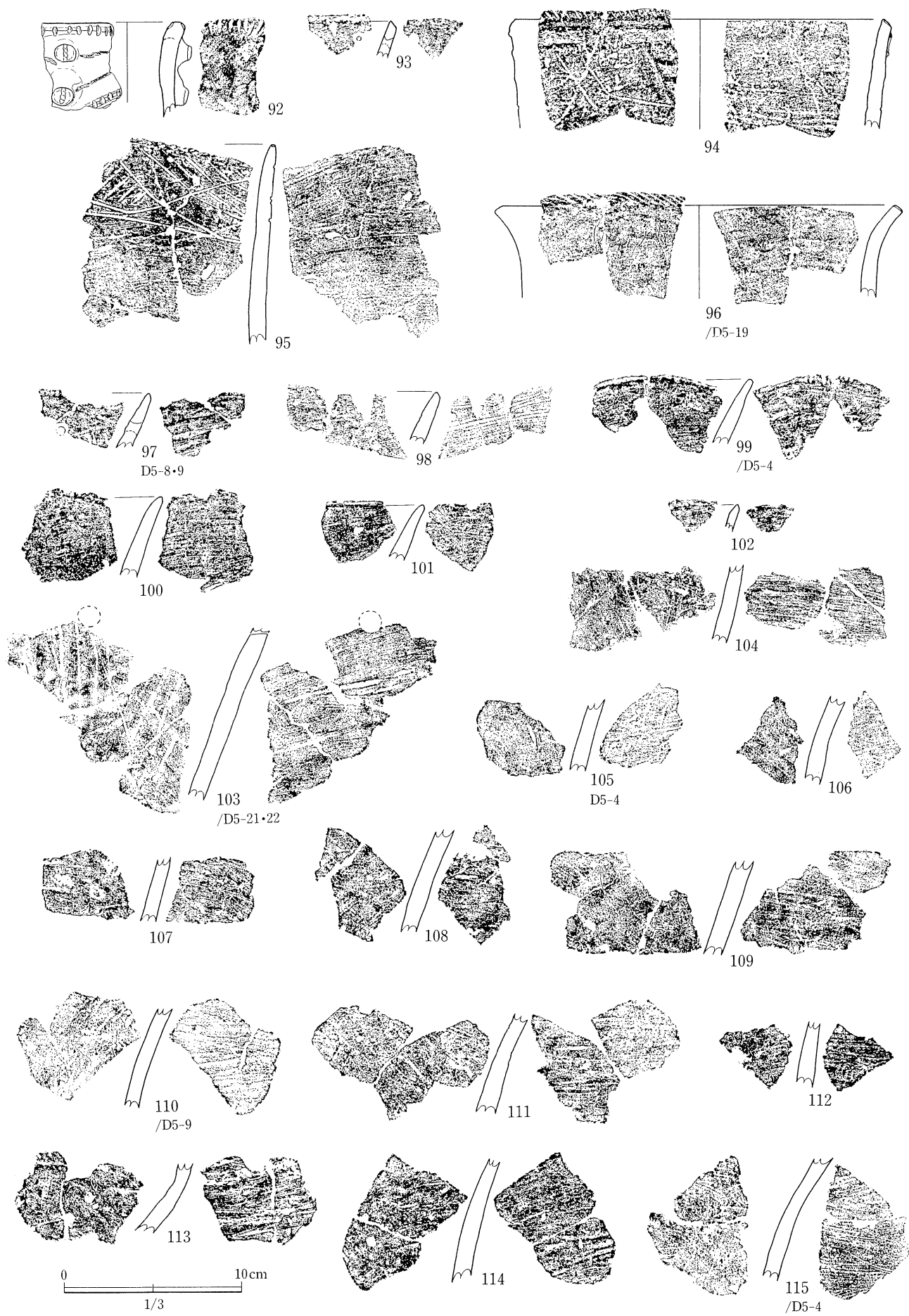
第19図139と140は石鏃、141は使用痕のみられる剥片である。142はホルンフェルス製の磨製石斧であり、刃部を欠いている。143は凹石である。焼けてススやタール状物質が付着している。

多条隆起線がめぐる4単位波状縁の土器について（第18図138、第17図129～137）

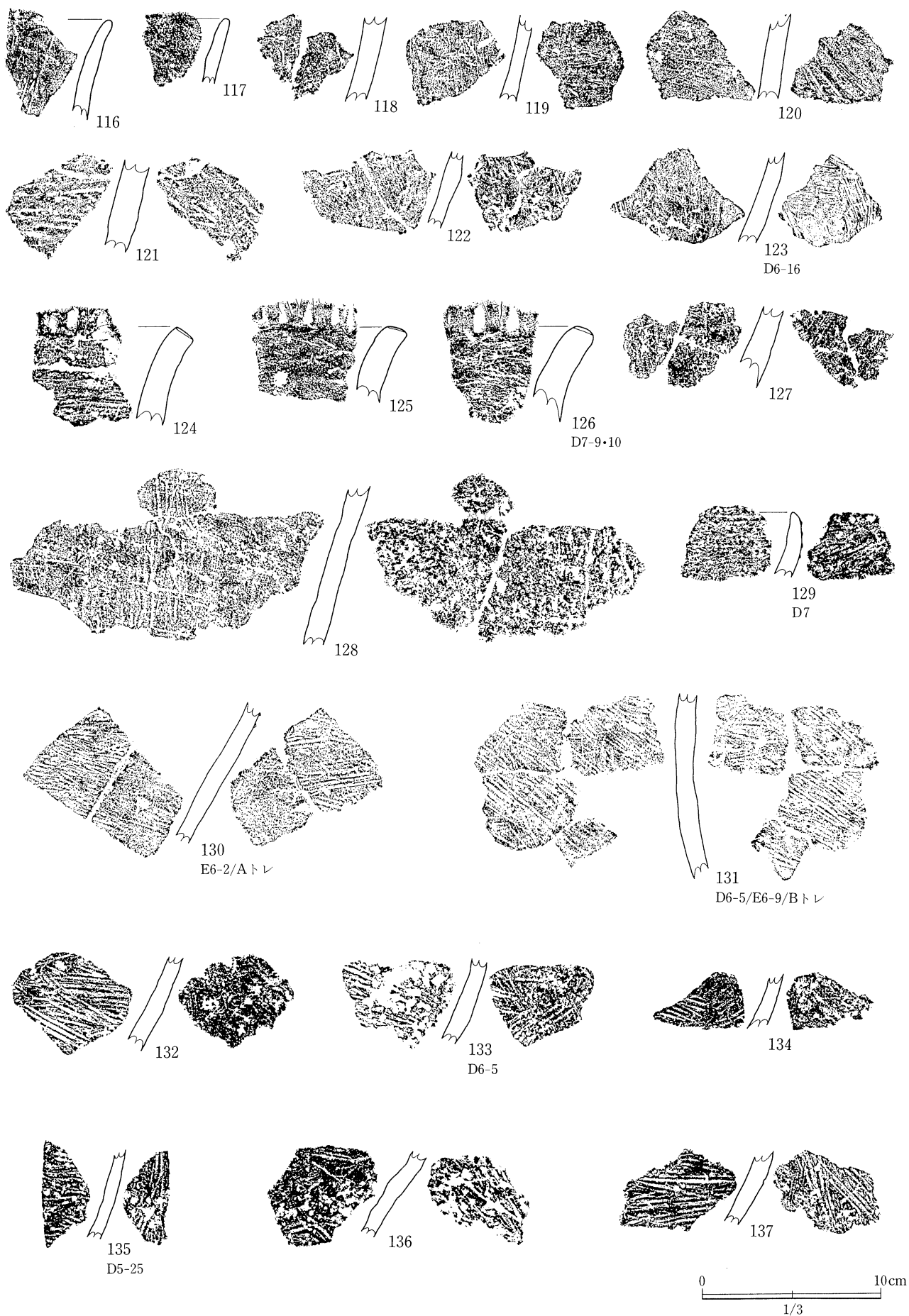
破片の主要部分はほとんど「遺物集中部分」の出土であり、遺構外包含層出土の破片は、066の東から南にかけて数点が散在する。推定口径40.2cm、推定器高50cmを測り、器形はキャリパー型を呈する。口縁は推定4単位の波状縁である。内外面ともに丁寧な貝殻条痕地文を施す。原体の貝殻はやや小型の貝が使用されており、第12図41の条痕とはかなり趣を異にする。口唇部はやや内反し、断面形状は先細りとなる。キザミなどはみられない。直下に5本の隆起線が口縁に沿ってめぐる。部位によっては一番上の隆起線が認められない場所もある。波頂部付近にはこの隆起線に変則的に交差する隆起線が現れる。ただ、波頂部の破片は1点もなく、この隆起線がどのようなデザインになるのか推測できない。胴部の一番くびれた部分のやや上方に4本の隆起線が水平にめぐる。口縁部の隆起線より、隆起線間の間隔がやや広い。ここにも波頂部と推定される直下よりややずれた位置に、交差する3本の隆起線が付く。斜めに交差させることで平行四辺形的になるものと、直交に近い角度で交差させるものがある。4単位のうち、1カ所だけが波頂部直下より右よりで、あとの3カ所は左よりである。通有なら波頂部の真下にくるべきであろうモ



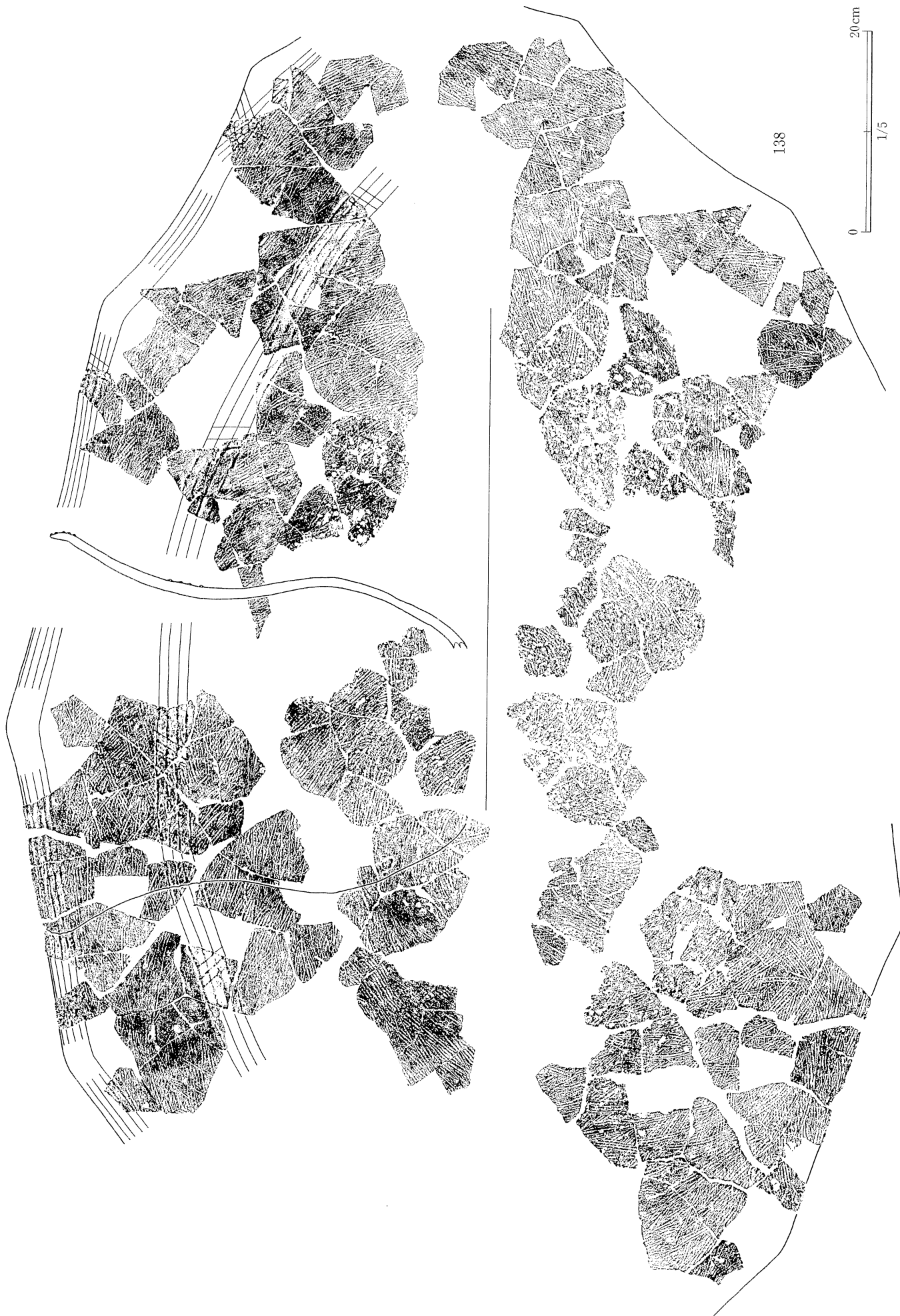
第15図 066実測図・出土遺物（1）



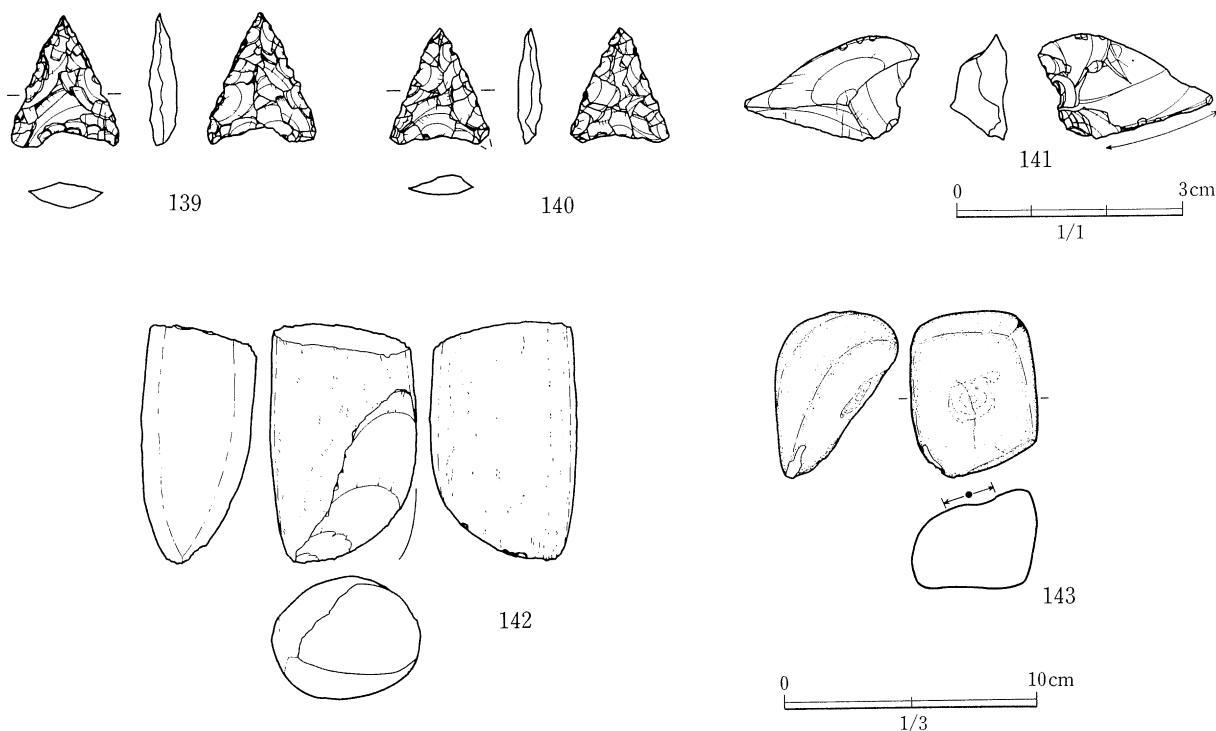
第16图 066出土遺物（2）



第17図 066出土遺物 (3)



第18図 066出土遺物（4）



第19図 066出土遺物（5）

チーフが、口縁部の隆起線でも胴部の隆起線でも、波頂部直下をわざわざはずしてワンポイントを入れたことに意味がありそうである。ただ、前述の通り波頂部片は無いので、そこに何が描かれているのか知る由もないが、全体的にバランスの悪い状態であろうことは予想できる。

第17図129～137は第18図138に接合し得なかった同一個体の破片である。129は口縁部で、内外面ともに摩耗が激しく、かろうじて5本の隆起線の痕跡が見える程度である。066とは20m程離れた場所から出土している。130は隆起線がみられる。口縁直下の破片であろうと推定した。

B. 炉 穴

022 炉穴（第20図・図版7）

位置 E2-16付近 層位 不明 規模 長軸1.65m（現存）短軸1.59m

所見 塚の構築時に上層を削平されているため、「新期テフラ2」の上下も不明である。燃焼面が強く焼けており、炉穴である可能性が高い。木根が絡んでおり遺構の形が不明確である。 遺物 なし

026 炉穴（第20図・図版7）

位置 F4-13付近 層位 下層 規模 長軸1.99m 短軸0.90m 形態 長楕円形

所見 斜面に対してほぼ直行する状態で掘り込まれている単独の炉穴である。炉床は強く焼けている。掘り込みの上層を三山塚造営時に失う。 遺物 なし

019 炉穴（第20、21図・図版7、23）

位置 F5-11付近 層位 下層 規模 長軸2.48m（現存）短軸1.08m

所見 円形の堅穴状の遺構を切るように炉穴が掘り込まれている。斜面に対して直行する状態である。

出土遺物は他の炉穴に比べて多量である。覆土の上層からの出土が圧倒的であり、本遺構に伴う遺物は少ない。礫が多く出土した。1次調査区域の東端にかかるため、東端を一部調査できなかった。

遺物 土器93点、礫27点（3789.8g：流紋岩9、砂岩8、ホルンフェルス3、デイサイト2、チャート2、安山岩1、凝灰岩1、頁岩1、被熱19、割れ23）第20図1と2はともに口唇が角頭状を呈する。2の内面は繊維条痕状の調整がみられる。3は口縁部がくの字状に内反する器形である。口唇面には丸棒状工具によるキザミが斜位にはいり、さらに外側の稜に列点状のキザミをめぐらせる。口唇直下と屈曲部直上に水平の沈線を配して区画をつくる。その区画内に、沈線によって山形のモチーフを描く。山は区画沈線に接するように上下から交互に描かれ、その中にさらに充填沈線が3本以上入る。7は口唇外削ぎ状を呈し、口唇面には絡条体圧痕によるキザミが入る。8は内外面貝殻条痕調整がなされ、隆起線を有する一群の土器（A類2c種）に類似する。9は焼成良好で内外面にきれいな擦痕調整がみられる。特に内面の調整は単位が認められ、擦痕の原体工具は、幅2.0cmのささくれだった板状のものであることがわかる。工具の止め痕より、樹皮や繊維ではなく、板もしくはへら状を呈するものであろう。11は底部付近である。外面は縦、内面は縦横方向に、ともに繊維条痕が施される。外面は先端幅2mm弱の棒状工具、内面は先端幅6mm程の板状工具である。外面は調整後、さらに部分的に粘土を塗りつけており、整っていない。

第21図12と13は同一個体で、連続刺突を有する小型の深鉢である。口径11.5cmを測り、推定器高は19.5cm程である。口唇にはキザミがはいり、口縁部はススが付着する。繊維が多く焼成が甘いため、内外面ともに脆くなり剥落しかけている。刺突は角がやや丸くなる竹管によるものと、板状のもの2種類が認められる。口縁と並行に2段めぐるが、器面下方に斜行する部分がある。14は12の個体より若干胴部径が大きい。内面は比較的きれいに擦痕調整がなされるが、外面は荒れた状態で焼成されている。16は連続刺突文のC類1b種である。同種に比べて文様が大柄であり、焼成は堅い。鋭い角がみられない刺突である。連続刺突文の下位に細沈線による水平区画が認められる。17～24は主に擦痕調整のみの破片である。

027 炉穴（第21図・図版7）

位置 E3-16 **層位** 下層 **規模** 長軸0.99m 短軸0.60m **形態** 卵形

所見 028炉穴に隣接する。炉床は強く焼けている。掘り込みの上層を026と同様に失う。

遺物 なし

028 炉穴（第21図・図版7）

位置 E3-16 **層位** 下層 **規模** 長軸1.50m（現存）短軸0.57m **形態** 長楕円形

所見 029（木根の攪乱）により西端を壊され、三山塚造営時に掘り込みの上位を失う。

遺物 なし

031 炉穴（第21図・図版7）

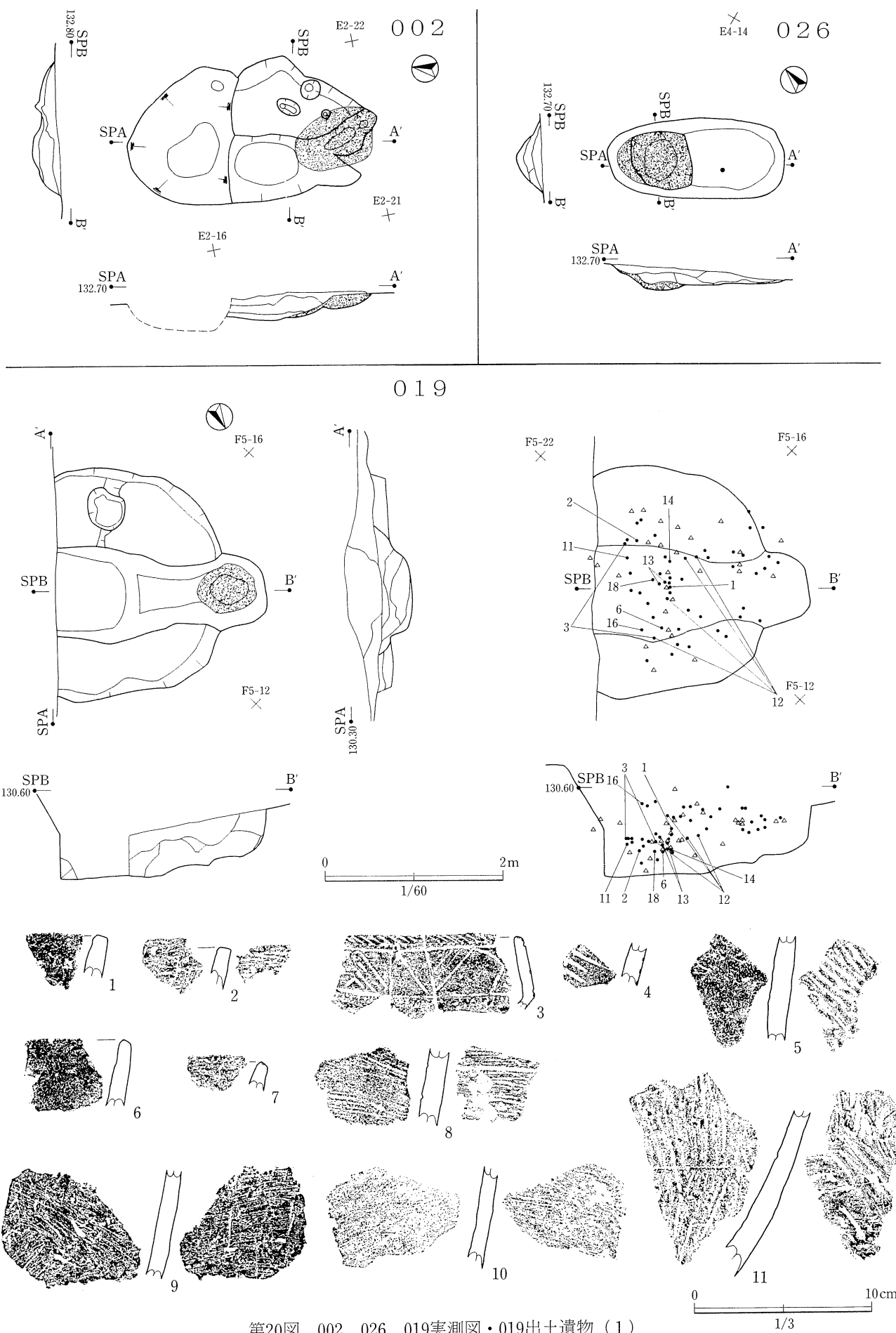
位置 E3-3付近 **層位** 下層 **規模** 長軸1.05m（現存）短軸0.93m

所見 032炉穴と切り合うが、032より新しい。1次調査区内で唯一重複している炉穴である。

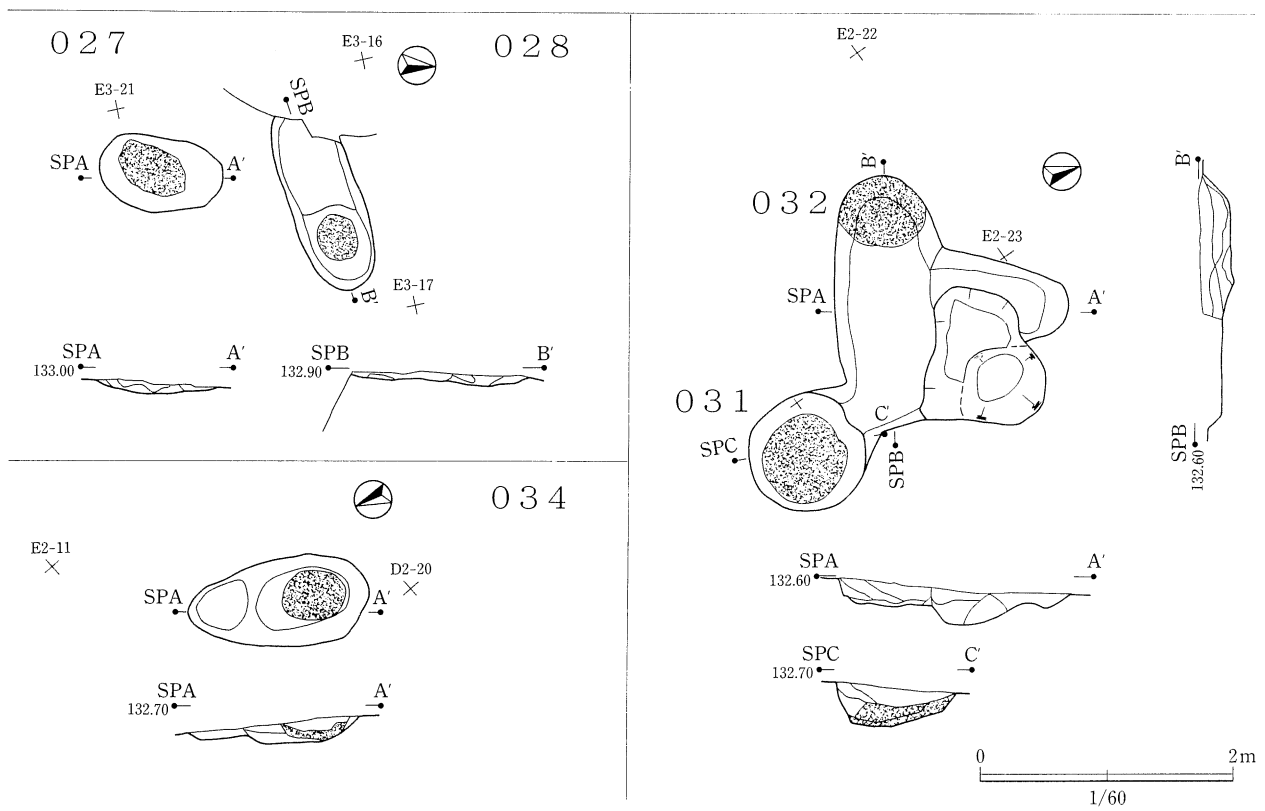
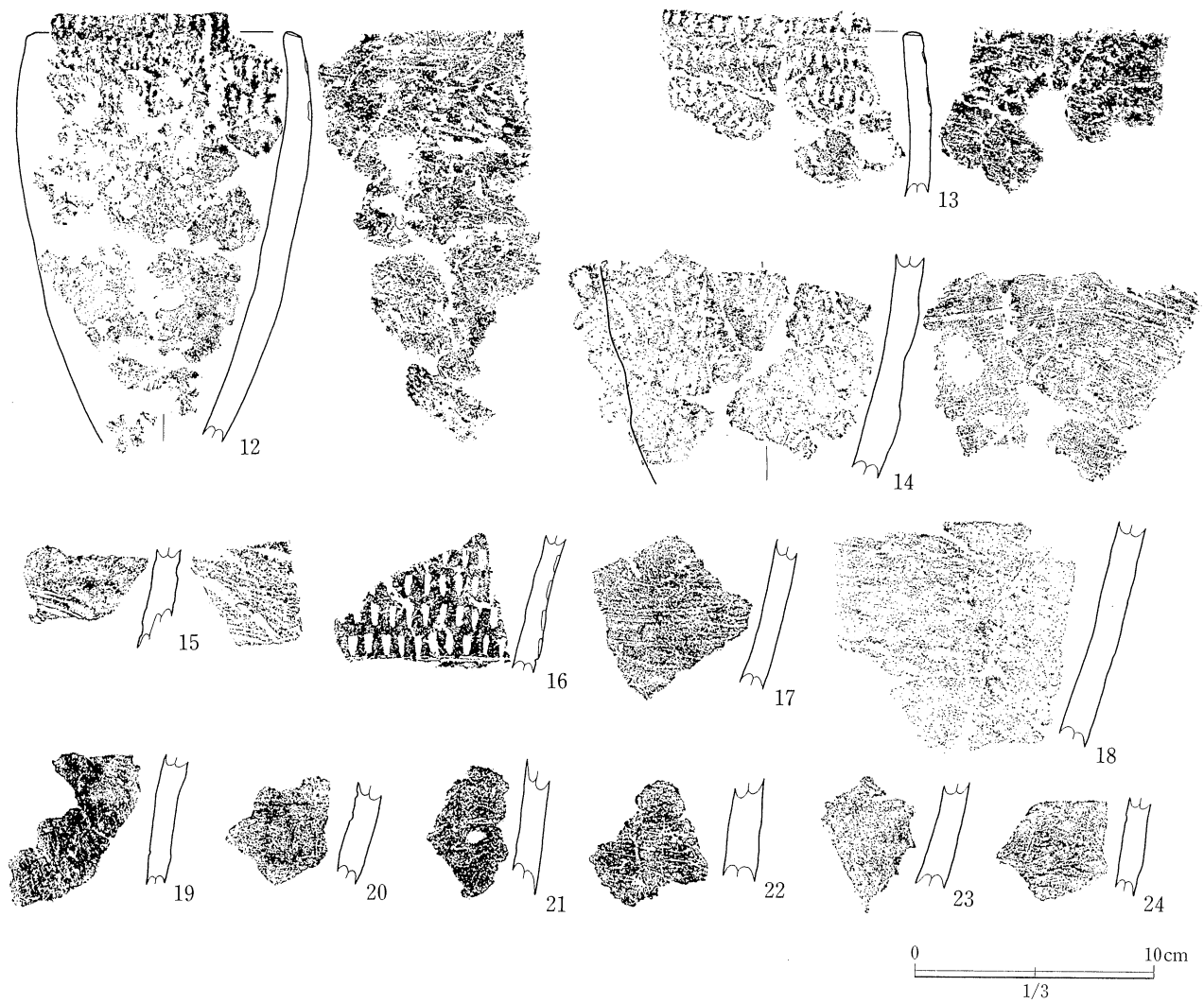
遺物 なし

032 炉穴（第21図・図版7）

位置 E2-22付近 **層位** 下層 **規模** 長軸2.01m 短軸0.87m（現存）



第20図 002、026、019実測図・019出土遺物（1）



第21図 019出土遺物(2)・027、028、031、032、034実測図

所見 031 および木根と切り合うため形状は不明確である。 遺物 なし

034 炉穴（第21図・図版8）

位置 D2-15付近 層位 不明 規模 長軸1.44m 短軸0.74m

所見 炉床は強く焼けている。上層は三山塚造営時に削られて失う。 遺物 なし

041 炉穴（第22図・図版7、8）

位置 E5-20付近 層位 下層 規模 長軸1.60m 短軸0.72m

所見 019の南側に隣接してつくられた炉穴である。規模は019よりひとまわり小さい。

遺物 なし

042 炉穴（第22図・図版8、23）

位置 D5-24付近 層位 下層 規模 長軸2.61m 短軸1.32m

所見 039 竪穴住居跡の東側に隣接する。炉床の焼けは弱い。

遺物 土器5点、礫2点（751.4g：砂岩2、被熱なし、割れ1）土器はいずれも小片である。

062 炉穴（第22図・図版8、23）

位置 C4-19 層位 下層 規模 長軸1.38m 短軸0.87m 形態 卵形

所見 塚の基底部内にあったため、上層を削られていなかった。新期テフラ2に覆われている。しかし掘り込みは浅い。炉床は強く焼けている。

遺物 土器1点、礫2点（42.9g：砂岩、流紋岩、被熱割れ2）

046 炉穴・土坑（第22、23図・図版9、23）

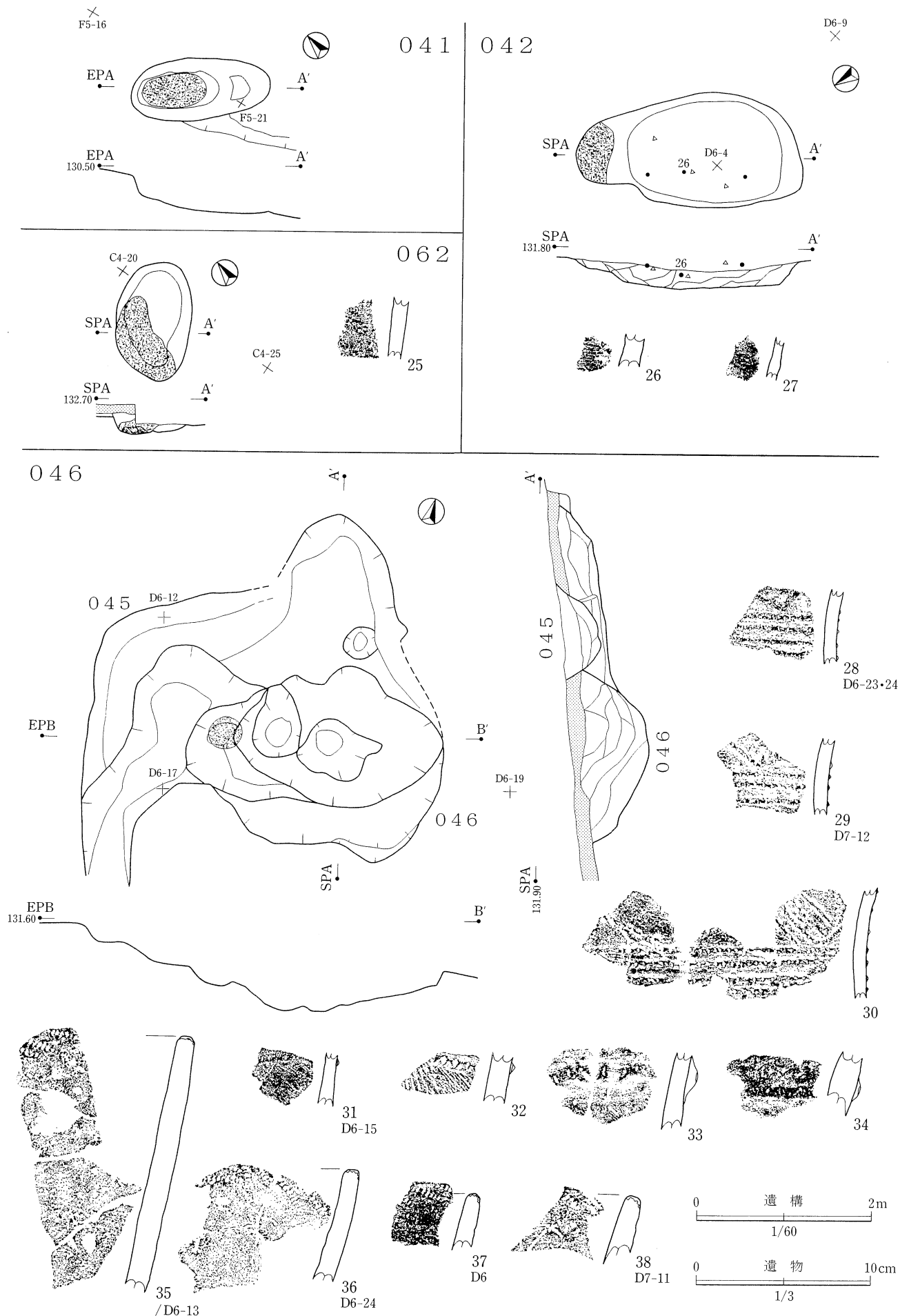
位置 D6-12付近 層位 下層 規模 長軸2.96m 短軸2.32m

所見 炉穴単独ではなく、東半は土坑と切り合っている。045 方形周溝状遺構のコーナー部分が隣接するため、形状が明確でない。出土遺物は多いが、主に土坑の覆土に集中する。

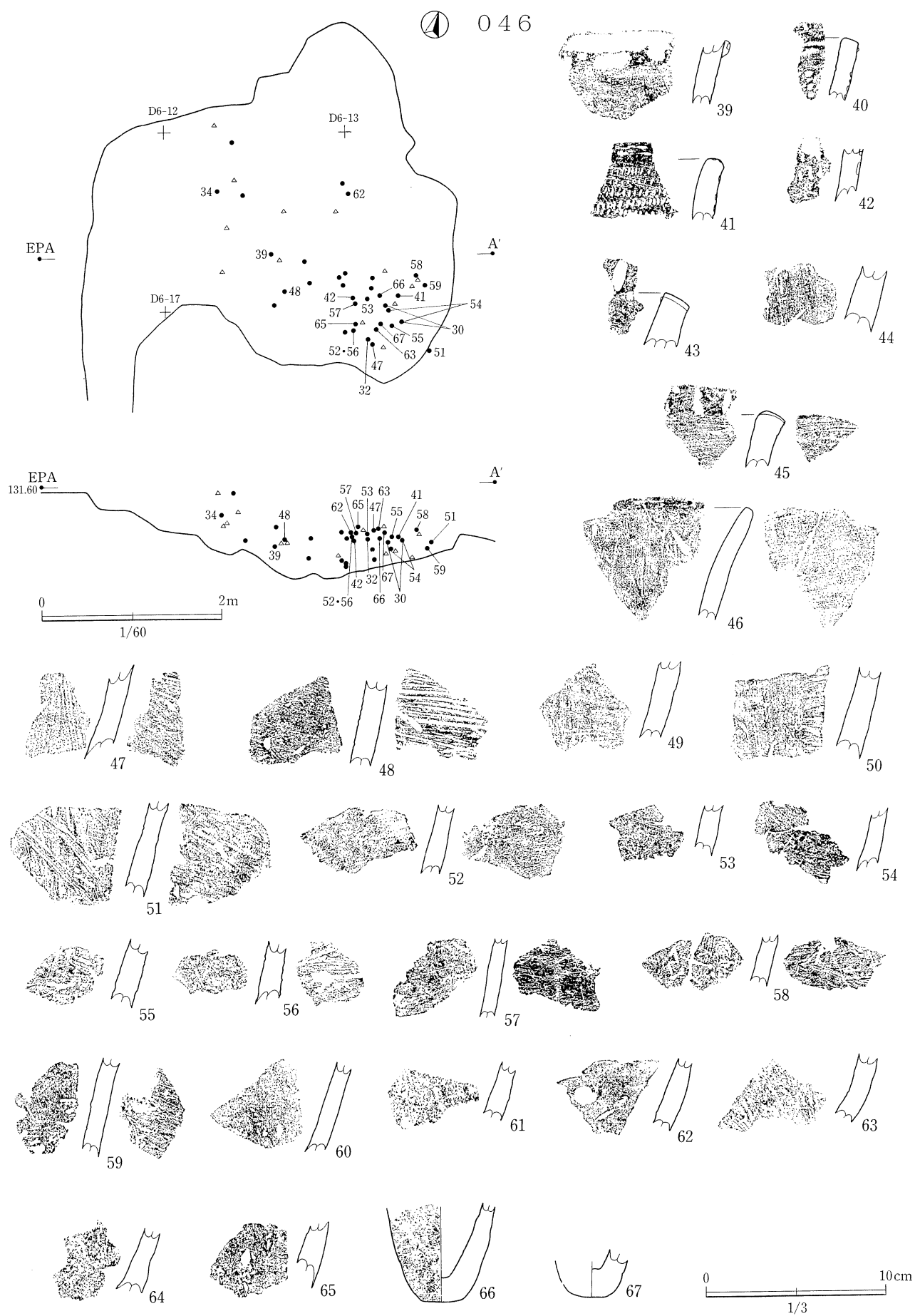
遺物 土器95点、礫31点（2589.5g：砂岩9、流紋岩7、チャート7、凝灰岩3、デイサイト2、ホルンフェルス2、頁岩1、被熱20、割れ21） 第22図28～31は同一個体であり、キザミのはいる隆起線と貝殻腹縁による列点を有する。内面はスが多量に付着している。胴部推定径は14.5cmで、器形は口縁部に向かって外反する。4本の隆起線を水平に貼り付け、キザミを施す。その一番上の隆起線より斜位の隆起線が1本あるいは4本延びる。詳細は判然としないが、おそらく三角形の区画内を充填する野島式のモチーフであろうと考えられる。拓影図ではわかりにくい、斜位に充填する隆起線に沿って、貝殻腹縁の先端をわずかに押圧する列点がみられるのが特徴的である。貝殻腹縁文と異なる点は、腹縁部を深く押圧しないために、連続クランク状につながらず、単独の列点状に見えることである。

32は細かい貝殻条痕調整にキザミの入る隆帯を貼付する。33と34、39はともに太い隆帯にキザミが入るが、別個体である。39のキザミは角状工具によるものであり、刺突的である。

35から38は同一個体で、口縁が山形の波状を呈する。小破片のため推定であるが、口径は30cmを越えるであろう。36が波頂部である。口唇は角状だが、口唇面から器面外面にかけて斜位に絡条体を押圧する。山形波頂部の中央のみ、絡条体圧痕が垂直になる。内面は横位の擦痕調整だが、外面はナデられている。40は角状の口唇に斜位の絡条体圧痕が施され、その直下に水平の隆起線が貼付される。その下位は1.2cmほどの無文帯を挟んで、角状工具による刺突が縦4列以上ある。横位の連続刺突文



第22図 041、042、062、046実測図・出土遺物



第23图 046遺物分布図・出土遺物(2)

になると予想される。小片であるためこの部位だけかもしれないが、隆起線下の間が微妙な特徴点である。41は横位擦痕調整の後、絡条体圧痕が横方向に5段以上施される。これだけを見る限りでは、1つの原体の長さは3cm弱である。やや外反する口唇には、口唇面に対して水平に2列のキザミがみられる。この方向のキザミは少ない。第50図319～327と同一個体である。42は連続刺突文C類1a種である。43と44は、039 堅穴住居跡で掲載した遺物（第14図63～66）と同一個体である。45は外反する口唇に太く浅いキザミを施す。口唇の稜の形状が他より鋭いが、025 出土土器（第39図125～127、131）や066 出土土器（第17図124～126）、072 出土土器（第9図11）と同一個体であろうと考えられる。46は066 出土土器（第17図117、119）と同一個体である。焼成が良く、外面は縦横、内面は横位の擦痕調整がみられる。口縁は微妙に波状となるようだ。48は内面に貝殻条痕がみられ、胎土に白色粘土塊が認められる。49は縦横方向の帯状の擦痕によって格子目状に見える調整である。039 出土土器（第14図67）に外面は類似するが、同一個体とは断定できない。広義の繊維条痕と言えようか。50の外面も縦横の擦痕がみられる。横位擦痕の後、縦方向で磨り消している。51は内外面ともに繊維による擦痕というより条痕に近い。52～62は擦痕調整の胴部資料であり、63～67は底部付近もしくは底部である。

049 炉穴（第24図・図版8、24、27）

位置 D7-6 層位 下層 規模 長軸0.84m 短軸0.64m 形態 卵形

所見 燃焼面のみ検出された単独の炉穴である。上層が削られて足場などの部分を失ったものと考えられる。炉床は部分的に焼ける程度である。尖底土器の底部から胴部下半にかけてと石皿片が、炉床からまとまって出土している。割れた石皿は熱をうけていないため、炉穴の廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

遺物 土器63点、石皿1点、礫1点（75.2g：流紋岩、完形被熱） 68は推定口径9.0cmの小型の深鉢である。胴部片のみであるが、3段の横位絡条体圧痕が口縁部直下と胴部中央、そして底部付近の3ヶ所にめぐる。原体の縄は細い単節LRを用いる。絡条体原体の押圧の間隔などに明確な規則性は見出せないが、3～4巻で単位をなしているようにも見える。内面はナデ調整である。69～72は同一個体である。胎土に砂が多く含まれ、焼成は良くない。推定径20.4cmだが、口唇と思われる部分も明確な状態とは言えない。輪積みの取れた擬似口縁状にも見える。74～76は同一個体であるが、接合はできない。76の尖底部分外面は貝殻条痕がみられるが、その直上部位であろう胴部片（74、75）ではわずかに痕跡が認められる程度である。胎土に礫を多く含み、焼成が甘いため、器壁内面は荒れており調整は不明である。77は安山岩製の石皿片である。両面を使用した痕跡が認められる。被熱はないが、ごくわずかに黒色の付着物がある。

063 炉穴（第25図・図版12）

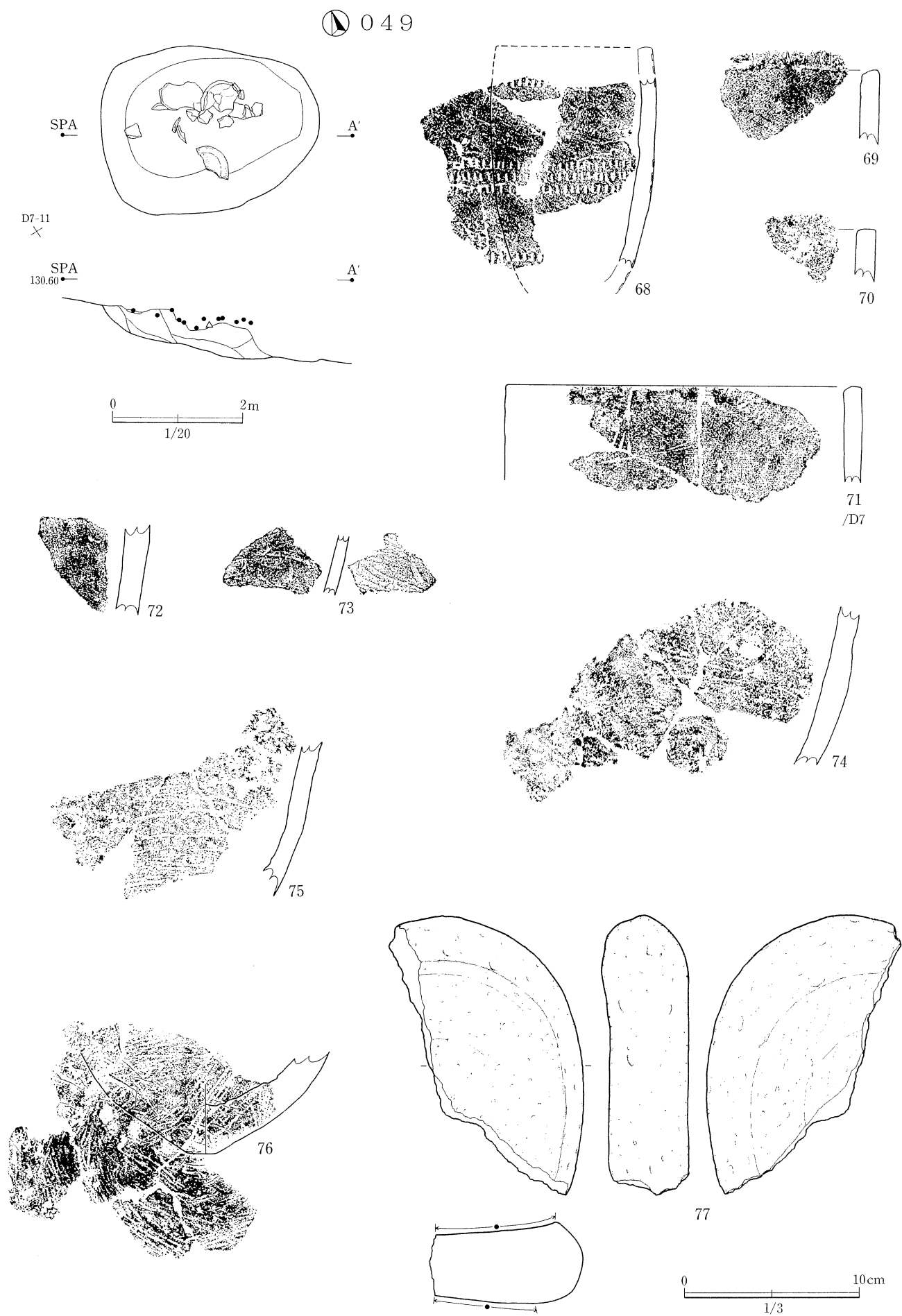
位置 C4-5 層位 下層 規模 長軸1.20m（現存）短軸0.93m 形態 卵形

所見 隣接する064土坑とともに、上層の塚を調査するためのサブトレンチに切られる。064と形状、規模ともに類似する。 遺物 なし

068 炉穴（第25図・図版9）

位置 E5-2付近 層位 下層 規模 長軸1.62m（現存）短軸0.60m

所見 069土坑に切られる。焼土の堆積が薄く、燃焼面の焼けも弱い。 遺物 なし



第24図 049実測図・出土遺物

069 土坑（第25図・図版9）

位置 E5-2 付近 層位 不明 規模 長軸1.74m 短軸1.14m 深さ 69.0cm～100.9cm

所見 新旧関係は土層断面では判然としないが、写真観察によると068より新しいと考えられる遺構である。その形状から陥し穴の可能性もある。 遺物 なし

074 炉穴（第25図・図版9、24）

位置 E5-7 付近 層位 下層 規模 長軸1.44m 短軸0.78m（推定）

所見 066 竪穴住居跡の東側に隣接している。土層断面 A-A' より東半面が炉穴であり、西は新しい土坑もしくは攪乱である。

遺物 土器4点、礫5点（995.7g：流紋岩、デイサイト、凝灰岩、頁岩、ホルンフェルス、うち被熱3、割れ3）土器は小片のみである。

101 炉穴（第25図・図版9、24）

位置 A-22 層位 下層 規模 長楕円形の炉穴3基（A/B/C）が重複

A：長軸0.99m（現存）短軸0.48m B：長軸1.62m（現存）短軸0.75m C：長軸1.65m 短軸0.69m

所見 炉Aおよび炉Bが埋没した後に炉Cを掘り込む。炉Aと炉Bは直接切り合っていないため新旧関係はわからない。炉Cの燃焼面上部に、炭化物を多量に含む焼土層が認められた。サンプルとしてほぼ全量（20,800g）を採取し、フルイにかけて洗浄したところ、クルミ（種類不明）の殻161.3gが検出された。他に炭化した不明種子状球体（径1.8～2.2mm）が4点みられた。炉穴の焼土層内から炭化物が多量に検出されることは珍しい。また、燃焼面直上より検出されていることから、覆土に投棄され混入したのではなく、これらのクルミを炉穴で焼いていたと考えた方が自然であろう。

遺物 土器11点 第25図83～85はいずれも無文擦痕調整の土器である。85は補修孔が開けられる。

102 炉穴（第25図・図版9）

位置 A-23 層位 下層 規模 長軸1.41m 短軸0.66m

所見 101 炉穴の南西に隣接する。 遺物 なし

103 炉穴（第25図・図版9）

位置 A-22 層位 下層 規模 長軸1.98m 短軸1.26m

所見 形状は2基の炉穴が重複しているようだが、燃焼面は3面ある。

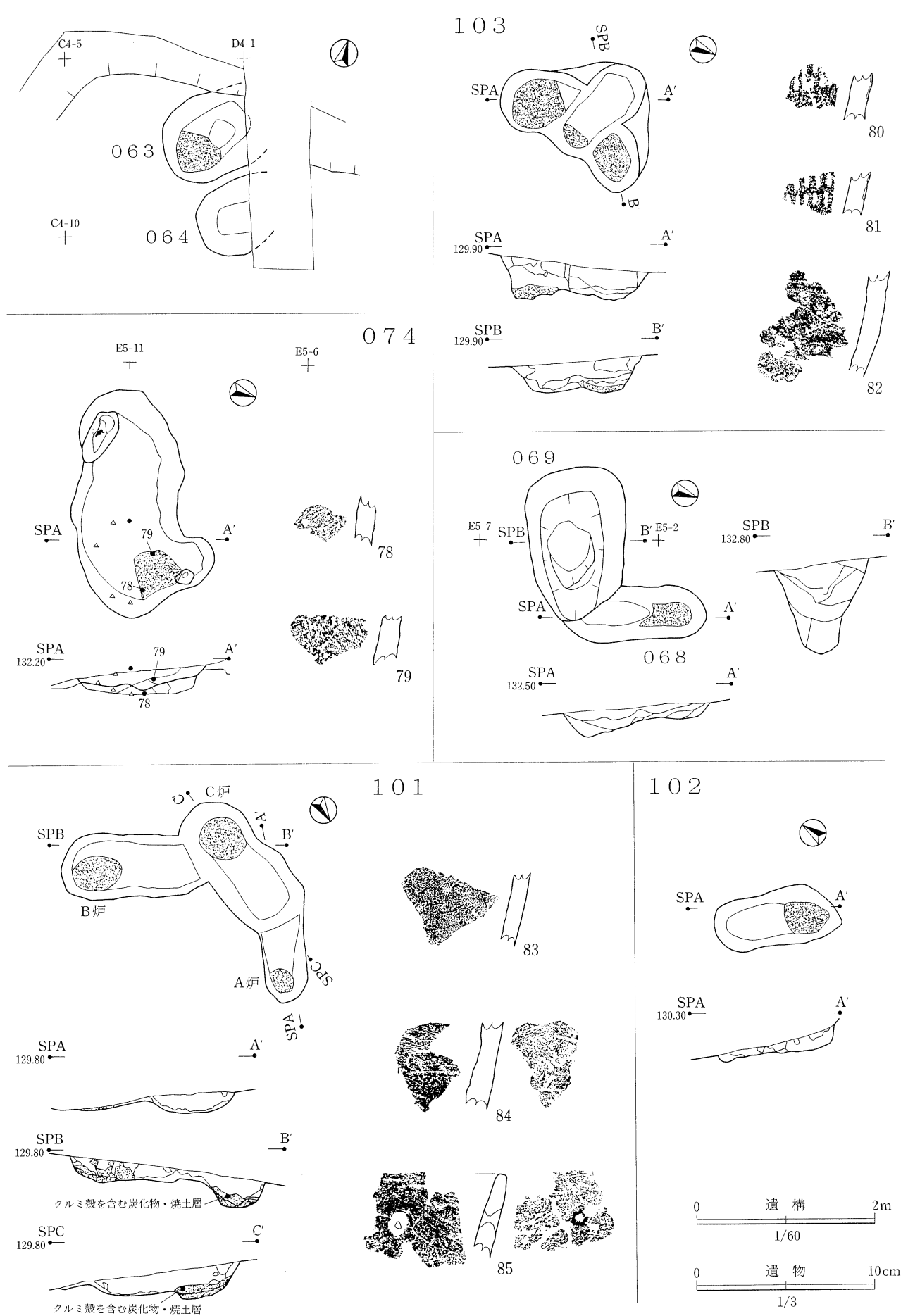
遺物 土器6点 第25図80と81は同一個体であり、板状工具による連続刺突（C類1b種）が施される。82は擦痕調整で、胎土に海綿骨針が多く含まれる。本遺跡出土の土器に関しては、胎土に海綿骨針が目立つ土器は、焼成が悪く器壁が荒れている傾向が強い。

C. 陥し穴状土坑

005 陥し穴（第26図・図版10、24、27）

位置 E1-24 付近 層位 下層 規模 長軸2.97m 短軸2.52m 深さ 109.9cm～174.0cm

底面ピット なし 所見 平面形態はL字型を呈する。土層断面から2基の重複ではなく、この形状で1基と考えられる。覆土の上層には木根がからんでおり、その分上場は大きく広がって見える。縄文時代中期の土器が2点出土しているが、調査図面がないため出土位置およびレベルは不明である。



第25図 063、064、068、069、074、101、102、103実測図・出土遺物

この遺構に伴う遺物ではないと考えている。 **遺物** 土器8点、礫2点（10.6g：砂岩、ホルンフェルス、被熱1、割れ2）1は内外面ともに横位の貝殻条痕調整をなし、隆起線を貼付する。口唇は外削ぎ状となり、口唇面には絡条体圧痕が認められるが、はっきりしない。口唇直下に水平の隆起線を配し、そこから斜行する隆起線もみられる。2と3は器形が特徴的な、中期加曾利E2式である。縦回転の0段多条RLR縄文を施す。0段は3条を撚り合わせたものである。4は黒曜石製の、使用痕のある剥片である。

010 陥し穴（第26図・図版10、24）

位置 F3-23 **層位** 下層 **規模** 長軸2.68m 短軸1.28m **深さ** 74.3cm～116.6cm

底面ピット 深さ P1：20.4cm **所見** 底面には長楕円形の浅いくぼみがあり、そのなかに円形の小ピットがある。

遺物 土器5点 5は口縁が外反する。内面は繊維条痕がみられる。6は角棒状工具による連続刺突が3段めぐる（C類1c種）。器壁は口縁部に向かってキャリパー状になると考えられる。7と8は大柄の貝殻による縦位の腹縁文を施す。第12図41の個体より原体の貝殻は大きいものと見える。腹縁文の上から重ねて集合沈線的に菱形となるであろうモチーフを描く。文様下端には、弱く水平沈線による区画が存在する。8は遺構外出土の同一個体であるが、斜行する7本の沈線が認められる。ともに内面は横位の擦痕調整となる。

075 陥し穴（第26図・図版10）

位置 C3-5付近 **層位** 下層 **規模** 長軸1.83m 短軸0.87m **深さ** 18.9cm～50.1cm

底面ピット 深さ（cm）P1：39.7、P2：28.4

所見 他に検出した陥し穴がすべて斜面に位置するのに対して、本遺構は孤立して台地最上部付近の平場にある。 **遺物** なし

047 陥し穴（第27～29図・図版10、24、25、27）

位置 D6-19付近 **層位** 下層 **規模** 長軸1.94m 短軸1.30m **深さ** 42.6cm～88.5cm

底面ピット 深さ（cm）P1：31.0、P2：17.0、P3：31.7

所見 長方形の陥し穴である。底面には3つのピットが並ぶ。付近にある048・050陥し穴からはほとんど遺物が出ないのに対して、本遺構は覆土の中層から上層にかけて遺物が多量に出土している。土層は短期間に埋没した状態が認められ、それに伴い遺物も投棄されたものと考えられる。

遺物 土器139点、礫16点（939.0g：チャート5、デイスait 4、凝灰岩3、砂岩2、流紋岩1、ホルンフェルス1、うち被熱12、割れ11） 第27図9と10は同一個体であり、キザミのはいる隆起線と貝殻腹縁の先端による弱い刺突に沈線の区画をもつ。046出土土器（第22図28～31）と文様構成は類似するが、沈線が加わり、内面に斜位の貝殻条痕を有する点が異なる。ただ、胎土、焼成ともに類似している。9、10ともに底部付近であり、046出土土器が口縁部付近であることを考えると、同一個体でないとは言いきれない。11と12、15は間違いなく046出土土器（第22図28～31）と同一個体である。12と15は隆起線と隆起線の間には施文された貝殻腹縁による列点だが、046出土土器のように隆起線に沿うのではなく、直行する形で空間に充填される。13と14は胎土、焼成が上記の土器と類似する胴部片である。

16の外面は横位擦痕調整、内面は横位貝殻条痕調整をなし、隆起線が1本垂下する。器壁は他の隆

起線を有する土器と比べて厚く、胎土に白色粘土塊を含む。17は胎土に金雲母と礫が多く含まれる。外面は繊維条痕調整で、鋭角な稜を持つ隆起線がみられる。遺構外出土土器 A 類 1a 種（第44図91）と同一個体である可能性が高い。18と19は同一個体であり、B類 1a 種土器（第46図137）とも同一個体である。絡条体圧痕によるキザミがはいる隆帯を有し、集合沈線によって区画内が充填される。野島式と呼べる意匠であろう。20は口唇に竹管によるキザミが入る。平行して三角形を描く沈線間に、角状工具による 2 列の列点刺突が充填される。21はやや内削ぎ状の口唇にへら状工具による斜位のキザミが入る。口唇直下より 2 段 1 単位計 4 段の連続刺突（C 類 2b 種）がめぐり、その下位は弧状沈線の区画と、その中を縦位に充填する 6 本の平行沈線がみられる。22と23は同一個体である。内削ぎ状の口唇面には部分的に貝殻背面を押圧する。22と23では、口唇に対する押圧の角度が異なる。本遺跡出土遺物のなかで、このD類 3 種は、この土器と本遺構出土第28図30の個体のみにみられた。口唇より沈線が垂下あるいは複数本斜行し、その斜行沈線に沿って列点状刺突が施される。刺突の工具は先端の形状が整えられていないものである。23をみると水平沈線によって区画下端が閉じられているようだ。破片の形状からは判断できないが、その横位の沈線をみる限りでは、口縁は波状を呈している可能性も考えられる。胎土には砂が多く含まれ、内外面ともにナデ調整である。

24は連続刺突文 C 類 2a 種である。0 5 1 出土土器（第32図5）と同一個体である。3つの刺突が 1 単位となって横位の連続刺突をなす。3本の工具を使用しているとみられ、微妙に刺突間の縦の間隔にずれが生じている。口唇には丁寧に絡条体圧痕が施される。25～29も連続刺突文を有する土器である。25は C 類 2b 種で、外削ぎ状の口唇に絡条体圧痕がなされる。27と28は同一個体で、分類的には C 類 2b 種である。第28図29は並列 2 個 1 単位の刺突が見られるが、詳細は不明である。

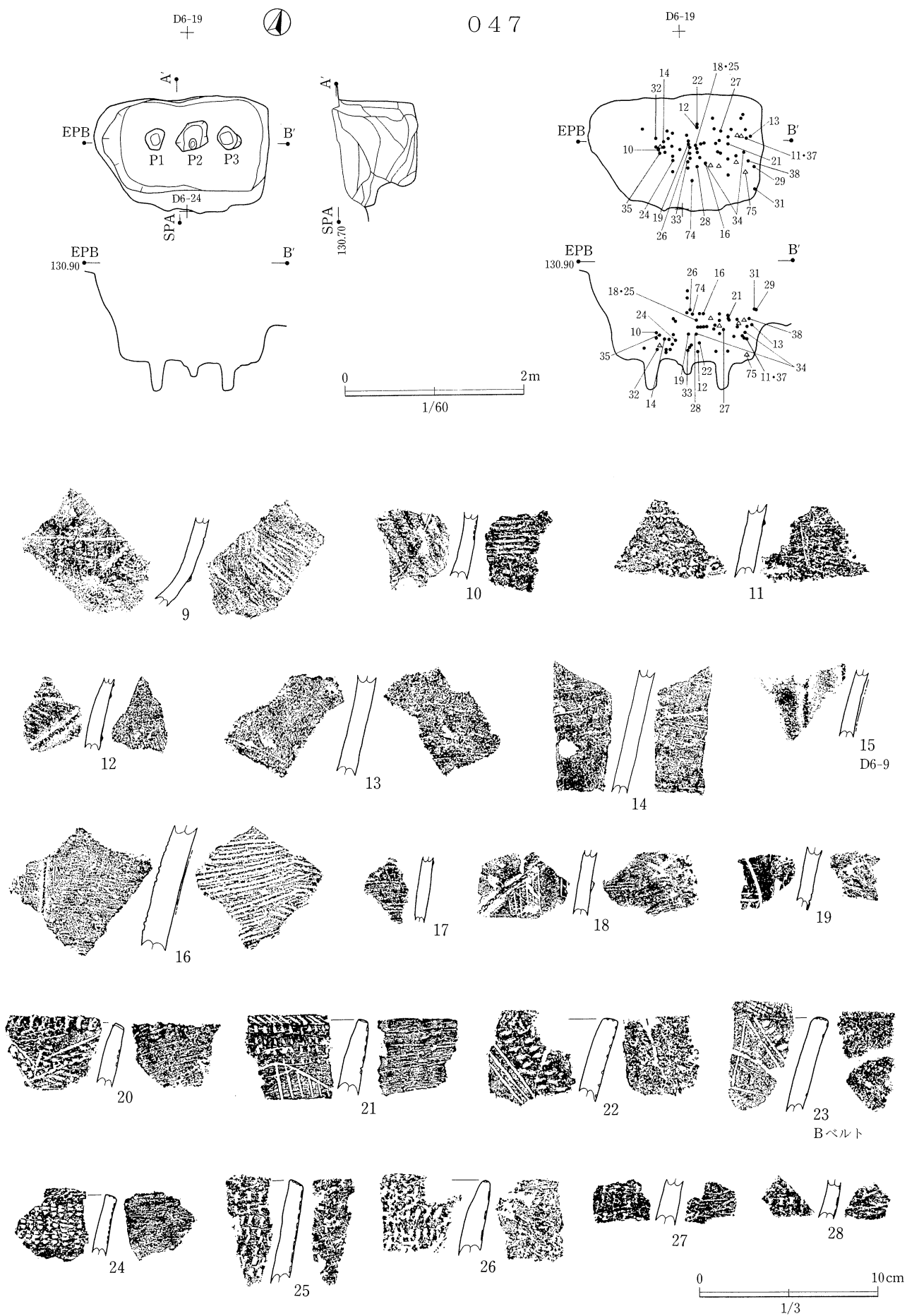
第28図30と31は同一個体で、前述のように、口唇に貝殻背面圧痕が施されている。口唇に対して貝殻の殻頂部に近い部位の放射肋を垂直に押圧し、幅 1 cm 前後の単位をなす。器壁外面は横位の貝殻条痕、内面は縦、横、斜めの条痕が施される。32はやや外反する口縁部の口唇面に、斜位のキザミを有する。33～74は擦痕もしくはナデ調整の資料である。33は補修孔がみられ、内面の口唇直下に炭化物が大量に付着する。34は口径11.7cmの小型土器で、補修孔がみられる。第29図75は黒曜石の石核である。

048 陥し穴（第31図・図版10）

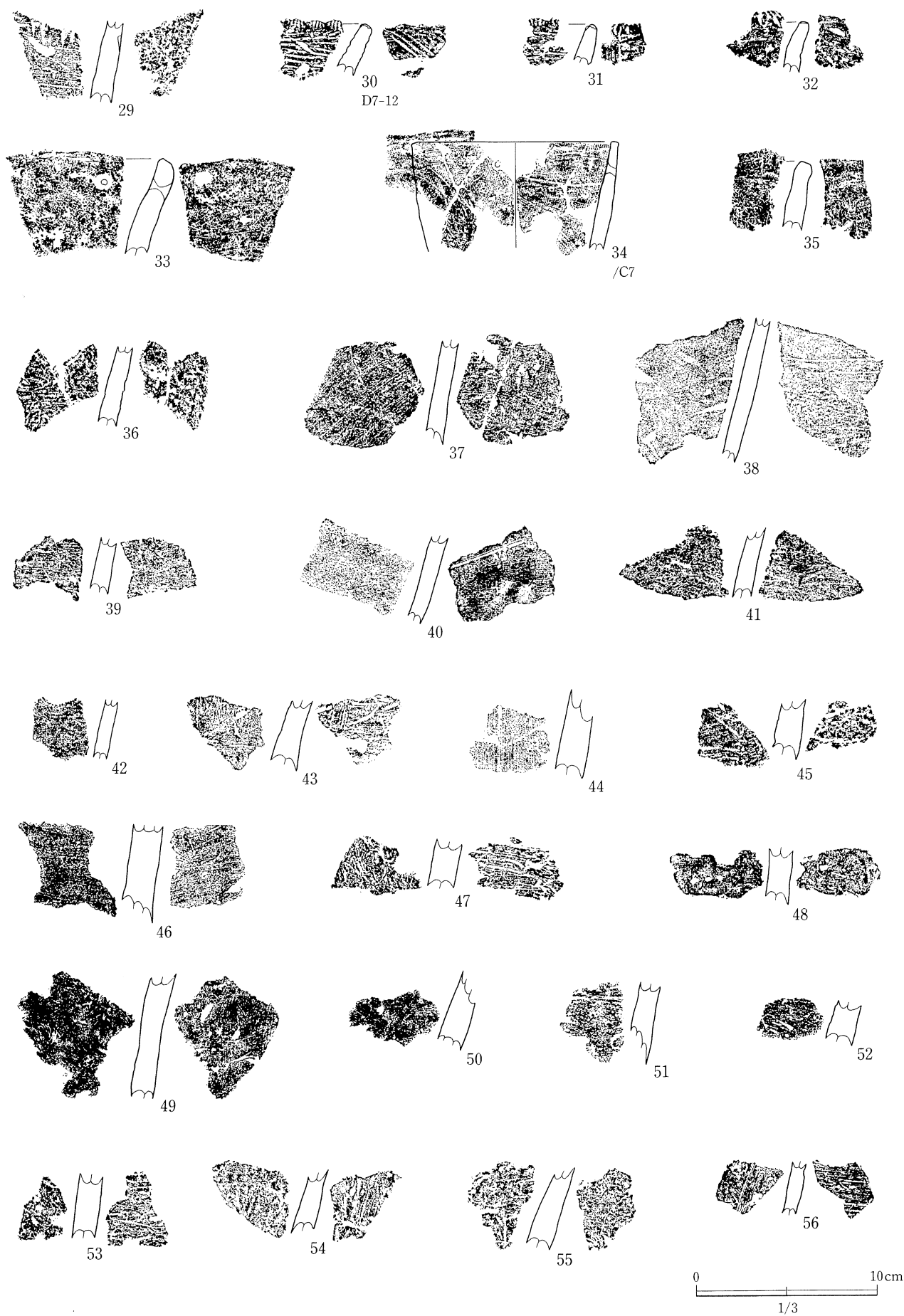
位置 D7-2 付近 層位 下層 規模 長軸1.80m 短軸1.08m 深さ 105.9cm～139.3cm

底面ピット 深さ P1 : 36.6cm 所見 底面中央にピット 1 基を有する長方形の陥し穴である。東側に隣接して浅い土坑状の落ち込みがあるが、本遺構に伴うものかどうか不明である。

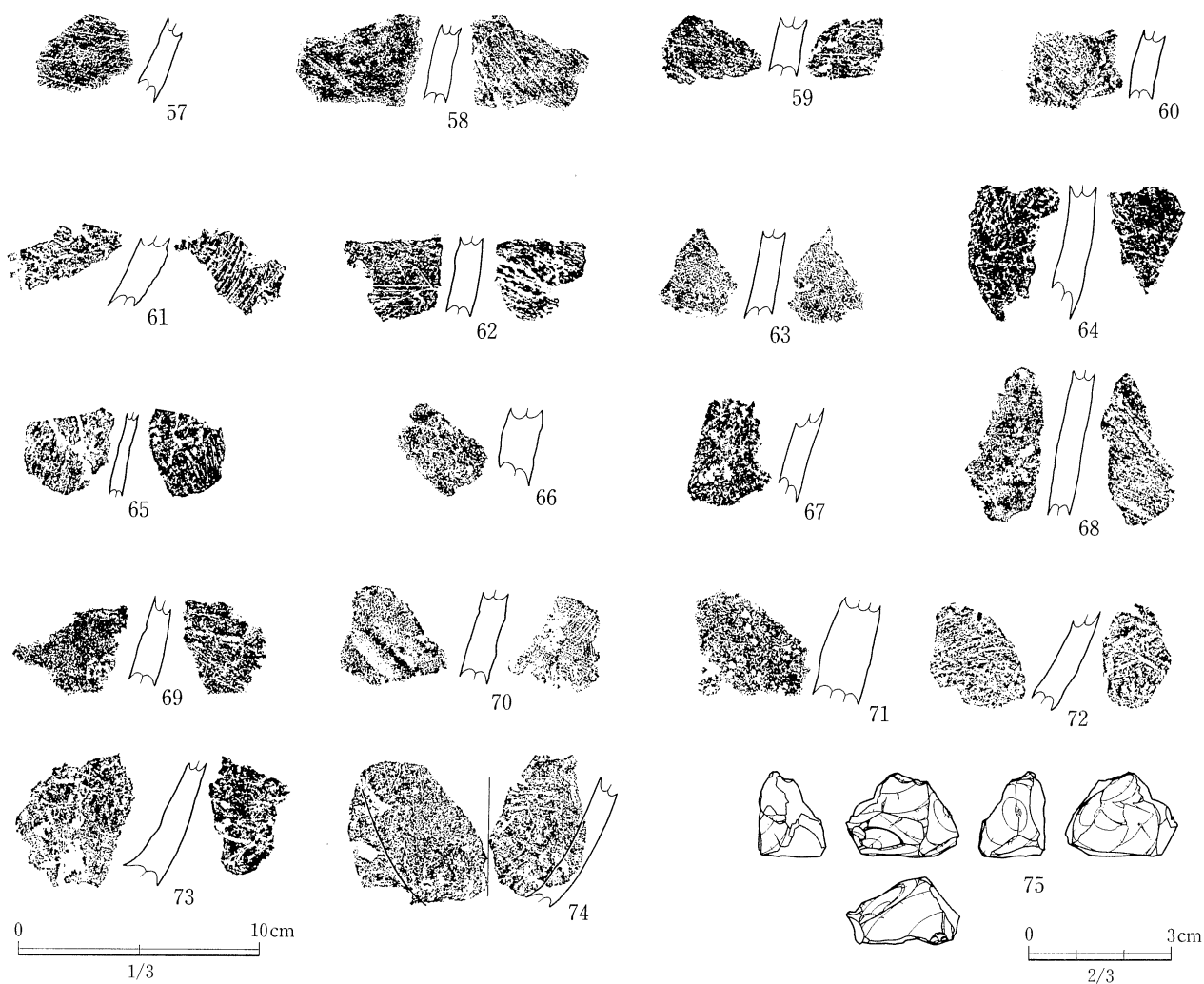
遺物 なし



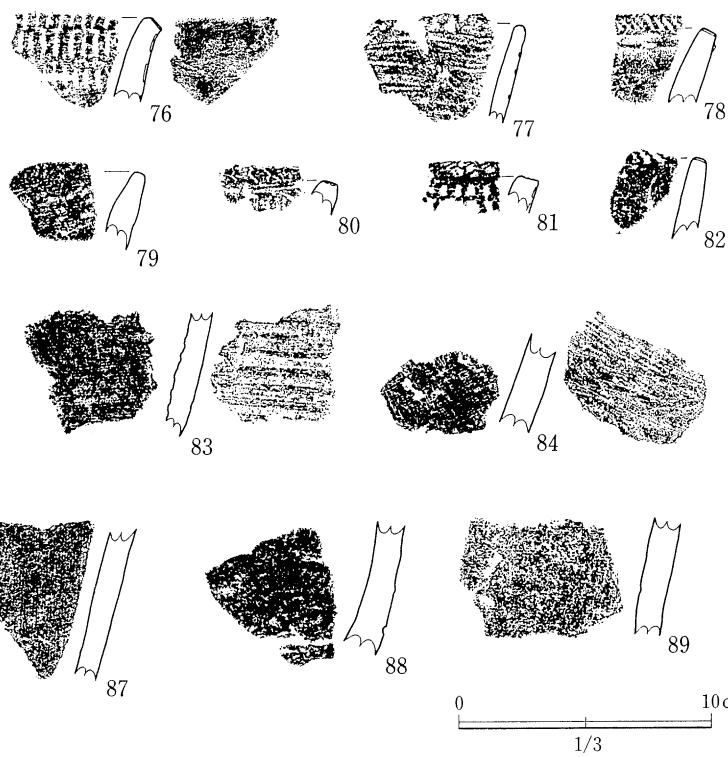
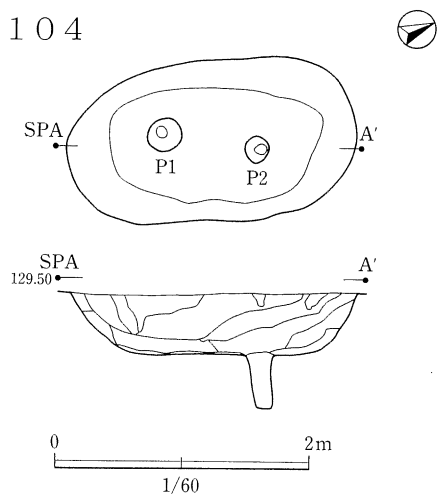
第27図 047実測図・出土遺物(1)



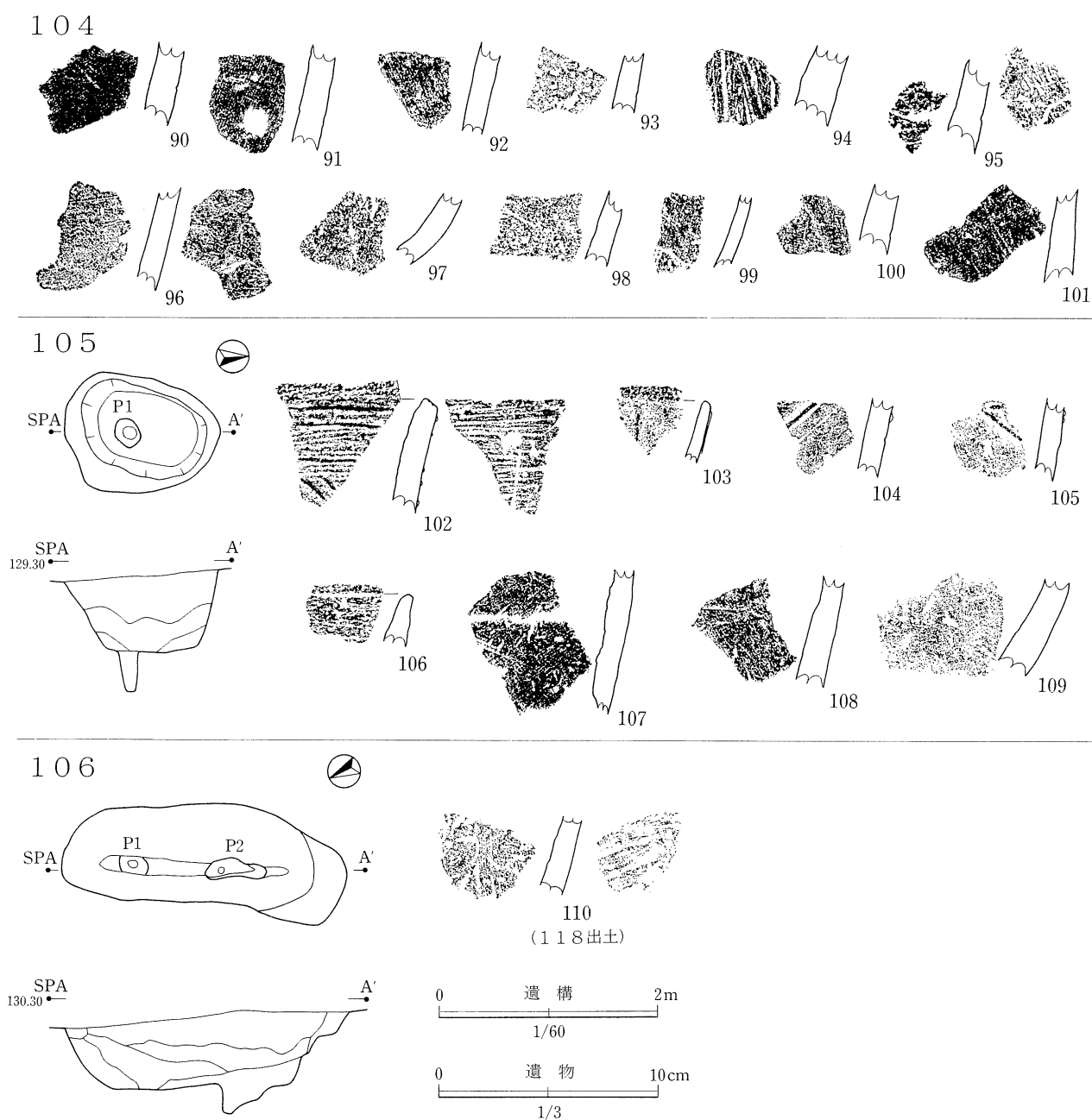
第28図 047出土遺物（2）



104



第29図 047出土遺物(3)、104実測図・出土遺物(1)



第30図 104出土遺物(2)、105、106実測図・出土遺物

050 陥し穴状土坑(第31図・図版10、11、25、27)

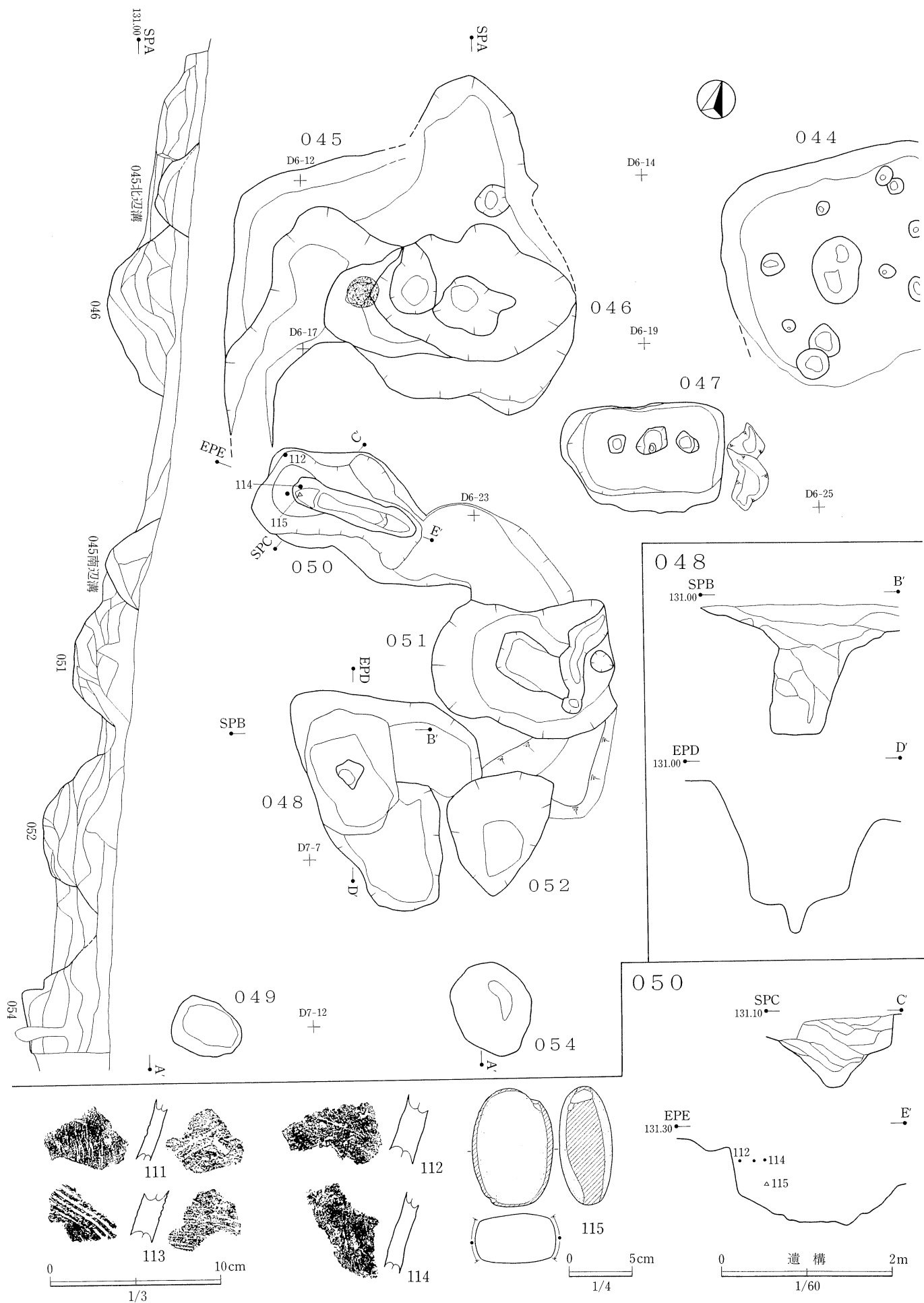
位置 D6-17 層位 下層 規模 長軸2.01m 短軸1.29m 深さ 52.9cm~96.3cm

底面ピット なし 所見 底面の幅が狭いため、陥し穴状であろうと判断した。深さは周辺の陥し穴と比べると浅い。遺物 土器6点、磨石1点、礫1点(45.5g:砂岩、被熱割れ) 第31図111と112、114は擦痕調整、113は外面のみ貝殻条痕調整である。115は砂岩製の磨石である。

104 陥し穴(第29、30図・図版11、25)

位置 A-21 層位 下層 規模 長軸2.28m 短軸1.29m 深さ 40.4cm~44.0cm

底面ピット 深さ(cm) P1: 38.0、P2: 41.6



第31図 南側斜面部048、050周辺遺構実測図・050出土遺物

所見 形状は長楕円形を呈し、底面に2つのピットを有する。

遺物 土器76点 第29図76は連続刺突文 C 類 1a 種になる。やや外反する角頭状口唇に、胴部と同原体の直行するキザミが施される。刺突工具は先端ささくれ状で、僅かに C 字爪形状を呈する。77の外表面は繊維条痕である。78は口唇に斜位の丸棒状工具によるキザミがはいり、口唇直下には水平隆起線が貼付される。内外面に条痕は認められない。80はごく小片であるが、口唇面に貝殻腹縁を直交する形で押圧する。本遺跡出土遺物では数少ないパターンである。81は連続刺突文を有し、内削ぎ状の口唇に斜位の絡条体圧痕が施される。83は胎土に礫を多く含み、焼成などから A 類 1a 種の赤彩された土器に類似する。内面は貝殻条痕とも繊維条痕ともみえる。第30図93は連続刺突文 C 類 2b 種であるが、刺突が浅い。

105 陥し穴状土坑（第30、36図・図版11、26、29）

位置 A-12/13 **層位** 下層 **規模** 長軸1.44m 短軸1.08m **深さ** 53.3cm～73.8cm

底面ピット 深さ37.7cm **所見** 形状的に陥し穴と呼べるかどうか微妙なところである。出土遺物は隆起線を持つものが多い。

遺物 土器26点 第30図102は外削ぎ状の口唇に雑な絡条体圧痕が施される。水平の隆起線が3本、下位に斜行する隆起線が2本みられる。内外面の調整は一見貝殻条痕に見えるものの、条痕の断面形に特徴的な角と平坦さがなく、単位が判然としないため、繊維条痕とみてよいであろう。005出土土器（第26図1）と胎土、焼成、口唇形状ともに類似しており、同一個体と考えられるが、隆起線のつながりがうまくいかないため、断定できない。103は外削ぎ状の口唇直下に水平の隆起線の剥落痕跡がみとめられ、そこから垂下する隆起線がある。胎土は砂を多く含み、焼成が悪い。104は斜行する隆起線がみられる。併行して沈線らしき線も認められる。105は水平隆起線から斜行する隆起線がわずかに残る。

※出土遺物の写真図版は、手違いにより図版29遺構外出土遺物 A 類の最後に隆起線文土器のみ挿入してある。

106 陥し穴（第30図・図版11、25）

位置 A-22 **層位** 上層 **規模** 長軸2.58m 短軸0.93m **深さ** 54.5cm～77.0cm

底面ピット 深さ(cm) P1 : 7.7、P2 : 21.0 **所見** 新期テフラの上面より検出されたため、下層遺構の110土坑と切り合っている。遺物も少なく、時期は特定できない。 **遺物** 土器1点

※図示した110は「118土坑出土遺物」であった。本遺構出土の土器は小片につき図示できない。

D. その他の土坑（下層遺構）

016 土坑（第32図・図版11、25）

位置 F5-3付近 **層位** 下層 **規模** 長軸2.64m 短軸1.23m **深さ** 17.7cm～42.7cm

所見 長楕円形の浅い土坑である。形状的には炉穴に近いが焼土は認められない。

遺物 土器7点、礫5点（249.8g : 砂岩2、チャート、流紋岩、デイサイト、うち被熱1、割れ3）
第32図1～4はいずれも擦痕調整の土器片である。

070 土坑（第32図・図版6）

位置 E5-6 **層位** 下層 **規模** 長軸1.50m 短軸0.99m **深さ** 22.5cm～44.7cm

所見 形状は楕円形を呈しており、066 堅穴住居跡の北東に隣接する土坑である。066 に関連する土坑である可能性も考えられる。 **遺物** なし

051 土坑（第32図・図版12、25）

位置 D6-23付近 **層位** 下層 **規模** 長軸2.30m 短軸1.65m **深さ** 8.9cm～78.6cm

所見 周囲には遺構が密集して（第31図参照）おり、陥し穴3基と隣接する。そのなかでも、047 陥し穴と本遺構は類似する覆土状態であり、同時期に埋め戻されたものと考えてよいであろう。覆土中の遺物も、047 程多量ではないが多く流入しており、同様な状態と言える。

遺物 土器38点、磨石1点、礫12点（840.9g：砂岩5、チャート3、流紋岩2、頁岩、凝灰岩、被熱10、割れ12） 第32図5は連続刺突文C類2a種である。047出土土器（第27図24）と同一個体であるが、刺突はこちらの方がかなり雑である。口唇面には絡条体圧痕が施される。6は横位および縦位の隆起線がみられる。内外面擦痕調整である。7は横位の剥落しかかった隆起線が認められる。内面のみ条痕調整であるが、この条痕もまた断面形状が円く、貝殻条痕とは断定し難い。8は外反する器形の外面に横位の擦痕調整の後、きれいにナデ消している。特徴的な器形とナデ調整のため、9が同一個体であると判別できた。口唇に特に装飾はない。10の外面は縦横方向の貝殻条痕がみられる。内面は繊維条痕である。12は焼成後の穿孔を途中で放棄したものであろうか。21は半分欠失した砂岩製の磨石である。

003 土坑（第33図・図版11）

位置 E2-13 **層位** 下層 **規模** 長軸1.60m 短軸0.70m **深さ** 10.0cm～20.0cm

所見 長楕円形の浅い土坑である。遺構でない可能性もある。 **遺物** 礫1点（65.4g：凝灰岩）

012 土坑（第33図・図版11、25）

位置 E3-2 **層位** 下層 **規模** 長軸1.25m 短軸1.21m **深さ** 21.8cm～30.8cm

所見 底面に2つの窪みを有する浅い円形の土坑である。遺構ではない可能性も高い。

遺物 土器1点、礫1点（23.7g：凝灰岩）

020 土坑（第33図・図版11、25）

位置 E5-19 **層位** 下層 **規模** 長軸1.59m 短軸1.11m **深さ** 20.8cm～42.8cm

所見 不整楕円形の浅い土坑である。

遺物 土器4点、礫1点（575.5g：デイスイト、被熱割れ） 第33図23と24は、注記の誤読からこの挿図に収まるが、本遺構とは無関係の遺構外出土の土器である。

040 堅穴状土坑（第33図・図版12）

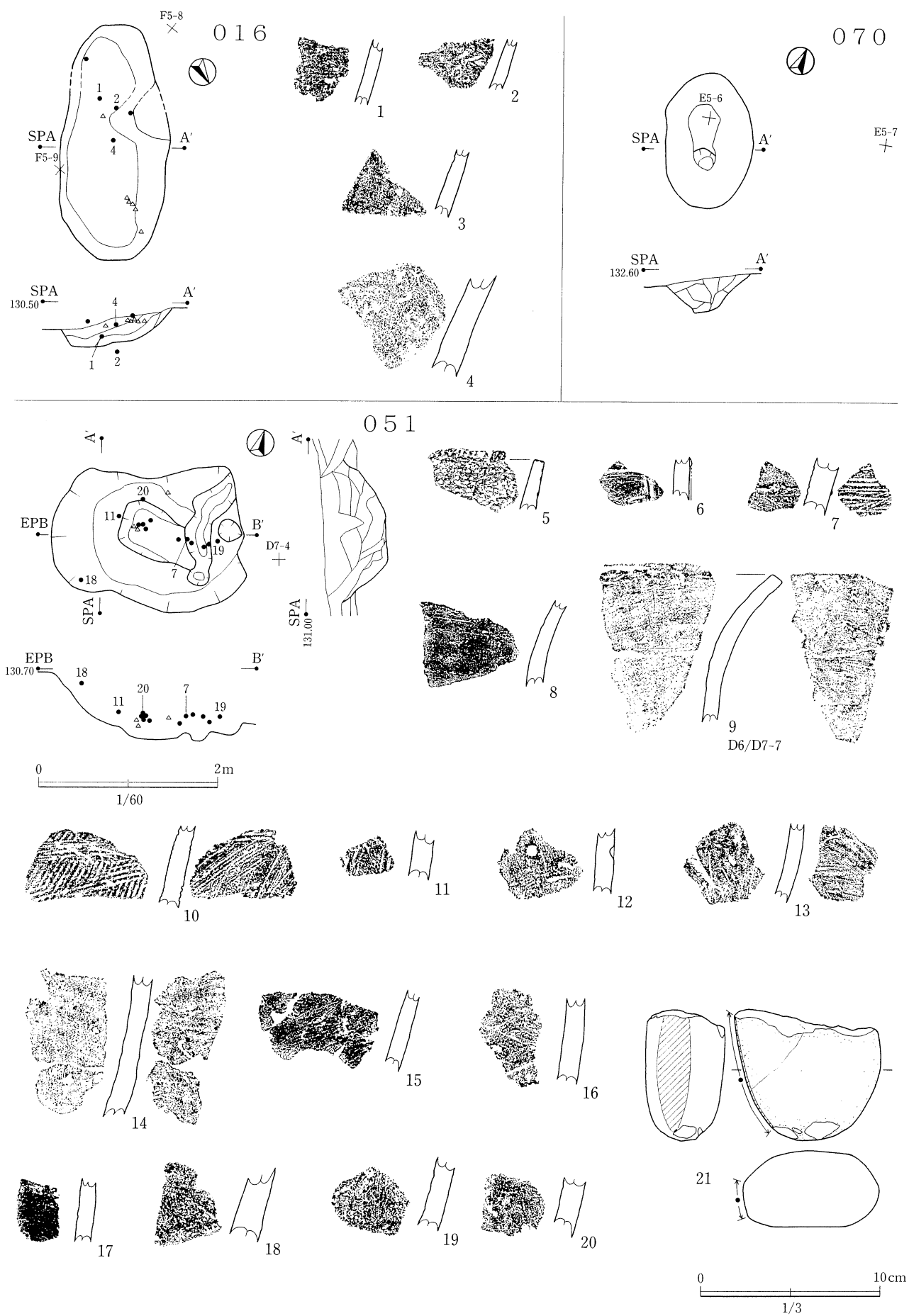
位置 E5-22付近 **層位** 下層 **規模** 長軸3.78m 短軸3.36m **深さ** 1.7cm～63.2cm

所見 不整方形を呈する浅い堅穴状の土坑である。025が覆土上層に掘り込まれていた。ピット1の深さは14.6cm、ピット2が5.9cmである。 **遺物** 土器2点

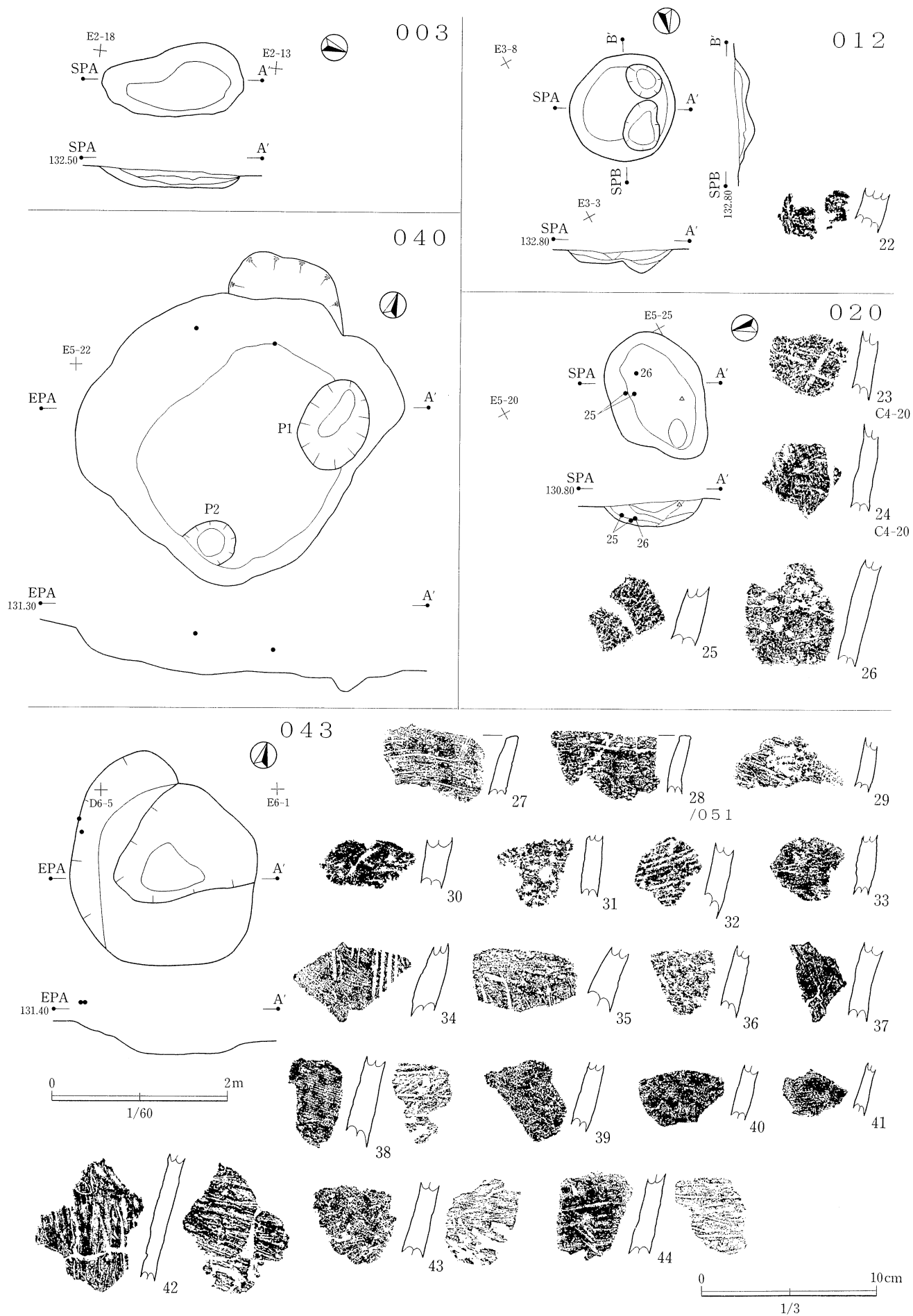
043 土坑（第33図・図版25）

位置 D6-5 **層位** 下層 **規模** 長軸2.55m 短軸2.16m **深さ** 4.5cm～46.4cm

所見 スリバチ状を呈するごく浅い土坑である。「凹み」と表現したほうが適切かもしれない。南東2mに044、西4mに038・039、北西6mに066と4軒の堅穴住居跡に近い位置にあるためか、その規模のわりに、出土遺物量が多い。



第32図 016、070、051実測図・出土遺物



第33図 003、012、040、020、043実測図・出土遺物

遺物 土器53点、礫8点（697.2g：砂岩5、頁岩、流紋岩、デイサイト、被熱7、割れ7） 第33図27の外表面は貝殻条痕と擦痕が混在している。口唇内削ぎ状で、口縁は波状を呈する。28は本遺構から南に10m離れている051土坑の一括遺物と接合している。第60図612と同一個体である可能性が高い。29の内面（拓本なし）には、貝殻条痕調整がなされるが、条痕の間隔が極端に狭いのが特徴的である。34は第56図501～508の土器と同一個体である可能性が高い。42の内外面は繊維条痕が顕著にみられる。外面は縦に、内面は横位に施される。両面とも同一原体を用い、その幅は5～6mmである。44の外表面はナデ消されているが、繊維条痕である。

052 土坑（第31図・図版なし）

位置 D7-3 **層位** 下層 **規模** 長軸1.47m 短軸1.29m **深さ** 13.5cm～58.7cm

所見 不整形のすりばち状土坑である。遺構ではない可能性もある。 **遺物** なし

054 土坑（第31図・図版なし）

位置 D7-8 **層位** 下層 **規模** 長軸1.14m 短軸0.93m **深さ** 不明

所見 木の根など遺構でない可能性もある。 **遺物** なし

064 土坑（第25図・図版12）

位置 C4-5付近 **層位** 下層 **規模** 長軸0.90m（現存）短軸0.81m（現存） **深さ** 不明

所見 063炉穴の南側に隣接している。063と同規模であり、覆土も類似する。炉穴の可能性もある。 **遺物** なし

071 土坑（図面・図版なし 全体図参照）

位置 C4-5 **層位** 下層 **規模** 不明 **深さ** 不明

所見 ほぼ隅丸正方形を呈する土坑である。詳細は不明である。

107 土坑（第34図・図版12、25）

位置 A-21 **層位** 下層 **規模** 長軸1.05m 短軸0.99m **深さ** 82.3cm～90.0cm

所見 平面形状は不整形を呈する袋状土坑であり、貯蔵穴的である。ただ、覆土や遺物の出土状況から、特に「貯蔵穴」と判断できる材料はない。それは他の類似する土坑も同様である。

遺物 土器36点、礫2点（115.0g：砂岩、流紋岩、被熱2、割れ1） 第34図45は縦横方向の格子目状となる繊維条痕がみられる。調整方法としては、第14図67に類似する。46は器壁がやや外反し、刺突と沈線による文様が認められるB類1b種である。文様構成は第46図142に近い。

108 土坑（第34図・図版12、26）

位置 A-18 **層位** 下層 **規模** 長軸1.44m 短軸1.11m **深さ** 118.0cm～129.0cm

所見 107よりひとまわり大きい袋状土坑である。 **遺物** 土器39点、礫4点（155.6g：砂岩、チャート、珪質泥岩、凝灰岩、うち被熱1、割れ1） 第34図52は連続刺突文C類2b種である。口唇面には斜位の絡条体圧痕が施される。56は大柄な連続刺突文（C類1b種）の下端を水平沈線で区画する。本遺構出土の土器片は、器壁および割れ口の摩耗が顕著である。

109 土坑（第35図・図版12）

位置 A-17 **層位** 下層 **規模** 長軸1.50m 短軸0.93m **深さ** 46.2cm～69.5cm

所見 不整形円形を呈し、あまり深くない。 **遺物** なし

110 土坑（第34図・図版12、26）

位置 A-22 層位 下層 規模 長軸1.58m 短軸1.20m 深さ 91.0cm～127.5cm

所見 口径に比して深さがある。108などと形状は若干異なるが、同種類の土坑であろう。

遺物 土器23点 第34図62と63は内外面ともに貝殻条痕を施す。外面は貝殻条痕によって文様を描く、いわゆる条線文になる。64は3本の斜行する沈線がある。ナデ調整は横位である。

111 土坑（第35図・図版13、26）

位置 A-13 層位 下層 規模 長軸1.11m 短軸0.72m 深さ 73.9cm～82.2cm

所見 平面形態は隅円長方形を呈し、107とほぼ同規模の袋状土坑である。

遺物 土器12点 第35図75の内外面は条痕調整であるが、第32図7のように複数の丸棒状工具を用いた繊維条痕であろうと考えられる。隆起線をもつA類2c種土器の胴部片であろう。

112 土坑（第35図・図版13、26）

位置 A-13 層位 下層 規模 長軸1.73m 短軸0.84m 深さ 55.3cm～60.9cm

所見 長楕円形を呈するバスタブ状の土坑である。

遺物 土器22点、礫2点（708.5g：チャート、流紋岩、被熱2、割れ2） 第35図76は連続刺突文C類2b種である。わずかに残る口唇には斜位のキザミがみられる。連続刺突施文後に、先端幅5mmの板状工具によって、刺突文を無視するように斜位あるいは縦位の条線が描かれている。内面の調整や施文などいずれも粗雑である。連続刺突文などを無視して上から沈線もしくは条線を描く手法は、貝殻腹縁による連続刺突的装飾の第47図180などにも見られる。79は絡条体の多段圧痕である。4巻以上の原体を斜位に押圧する。本遺跡出土遺物中に類例はみられない。

113 土坑（第35図・図版13、26）

位置 A-13 層位 下層 規模 長軸1.56m 短軸1.05m 深さ 43.1cm～65.9cm

所見 底面に大型のピット（深さ57.4cm）がみられる。陥し穴状でもあるが、土坑に分類した。

遺物 土器33点、礫7点（392.3g：チャート2、凝灰岩2、珪質泥岩、流紋岩、デイサイト、被熱2点、割れ3点） 第35図83は縦方向の弧状隆起線が2本みられる。左側はキザミが施されるが、隆起線の厚さよりキザミが深いため、器壁に及ぶ。右の隆起線は微隆起状であり、貼付なのかどうか判別し難い。84は連続刺突文C類2b種である。2個で1単位の刺突が斜位に施されるが、施文方向は横位である。85は小片だが2本の隆起線が認められる。86も小片だが、器壁が相当厚い。輪積みの接合部分である。87は連続刺突文C類2b種である。

114 土坑（第36図・図版13）

位置 A-07 層位 下層 規模 長軸1.14m 短軸1.11m 深さ 68.8cm～94.1cm

所見 逆円錐形の土坑である。 遺物 土器4点、礫1点（17.8g：砂岩） 93は繊維条痕をもつ隆起線文A類2c種土器の胴部であろう。

115 土坑（第36図・図版13、26）

位置 A-13 層位 下層 規模 長軸1.19m 短軸0.96m 深さ 79.7cm～97.5cm

所見 2次調査区内に多くみられる袋状土坑の一種であろう。

遺物 土器12点、礫2点（237.7g：砂岩、流紋岩、被熱1、割れ1） 第36図の100だけは105出土土器である。本来なら第30図に組まれるべきであった。器壁外面が荒れているものの、連続刺突文

C 類 2b 種である。刺突文下位に水平沈線による区画がみられる。104と105は同一個体である。104の一部と105は本遺構上層にあった A トレンチで検出されているため、覆土の最上層にあったものであろう。口唇は斜位のキザミが網目状にはいる。外面は貝殻条痕によって条線文を描く。105の穿孔は焼成前のものである。内面はランダムな方向に貝殻条痕を施す。口唇や器壁内外面の雰囲気から、製作者の性格がみえるようである。

116 土坑（第36図・図版13、26）

位置 A-17 層位 下層 規模 長軸1.14m 短軸1.11m 深さ 63.0cm～78.5cm

所見 形態は109に似る。

遺物 土器7点、礫3点（214.2g：流紋岩、安山岩、ホルンフェルス、被熱1、割れ1） 第36図97はキザミの入る口唇部である。

117 土坑（第36図・図版13、26）

位置 A-17 層位 下層 規模 長軸1.89m 短軸1.26m 深さ 39.0cm～58.0cm

所見 形態は112に近く、112よりやや大型である。 遺物 土器17点、礫4点（506.1g：流紋岩2、泥岩1、変質岩1、被熱2、割れ3） 第36図106は連続刺突文 C 類 1b 種である。3段以上の刺突が認められ、補修孔が開く。107の外面は貝殻条痕である。

053 流水痕（第36図・図版26）

位置 E6-17付近 層位 下層 規模 長軸2.67m 短軸2.40m 深さ 8.7cm～42.2cm

所見 流水による浸食の痕跡とみられる。西側の丘陵上部からの流水が、不整円形のスリバチ状土坑に落下し、更にそこから北方向に流れていたらしい。落下点は、酸化鉄によるものとみられる赤褐色を呈し、渦巻き状の形状となる。遺跡は台地の頂部付近に位置するため湧水ではなく、雨水によるものと思われる。自然に形成されても不思議ではないが、下層の検出のため時期的には古い。縄文時代早期において、集水などに使用されていた可能性も考えられよう。

遺物 土器4点、石鏃1点、礫1点（11.8g：流紋岩、被熱割れ）

055 （図面・図版なし 全体図参照）

位置 E6-4付近 層位 下層 規模 不明

所見 053流水跡の北側に続くもの。詳細は不明である。 遺物 なし

E. その他の土坑（上層遺構）

006 土坑（第37図・図版13）

位置 F3-2 層位 上層 規模 長軸1.41m（推定）短軸1.41m 深さ 101.7cm～139.7cm

所見 円筒形の土坑の上層が、木の根による攪乱をうける。 遺物 なし

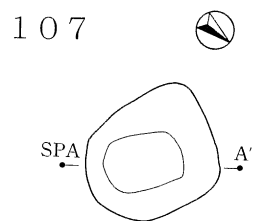
007 竪穴状土坑（第37図・図版14）

位置 F3-8付近 層位 上層 規模 長軸2.96m 短軸2.72m 深さ 20.6cm～64.7cm

所見 形態は小竪穴状を呈する。底面にピットなどではなく、類似する004aとの違いは、確認面上層ということである。北側の壁際が一段低くなる。

遺物 土器2点、礫3点（205.0g：流紋岩、デイサイト、凝灰岩、被熱3、割れ1）

107



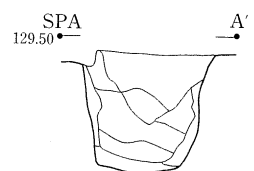
45



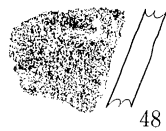
46



47



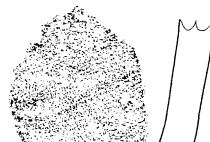
129.50



48



49

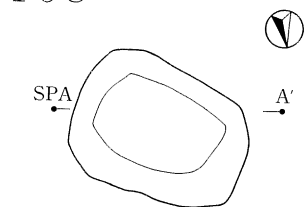


50



51

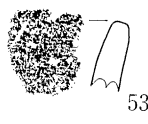
108



129.00



52



53



54



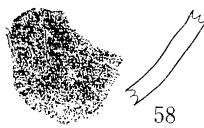
55



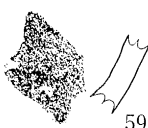
56



57



58

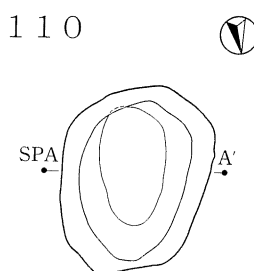


59

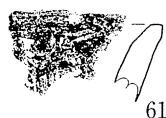


60

110



130.40



61



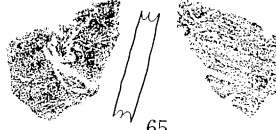
62



63



64



65



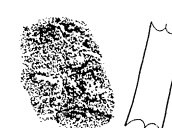
66



67



68



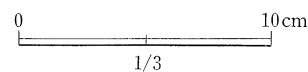
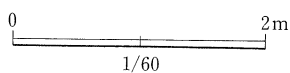
69



70

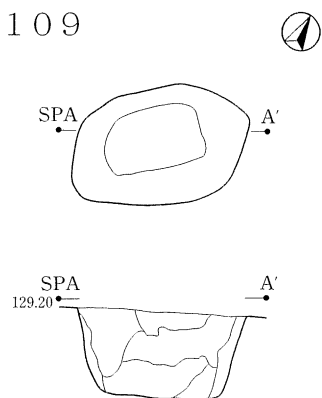


71

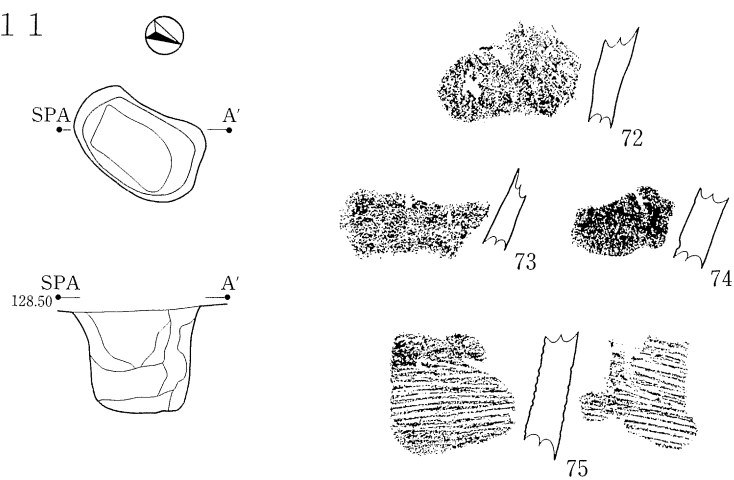


第34図 107、108、110実測図・出土遺物

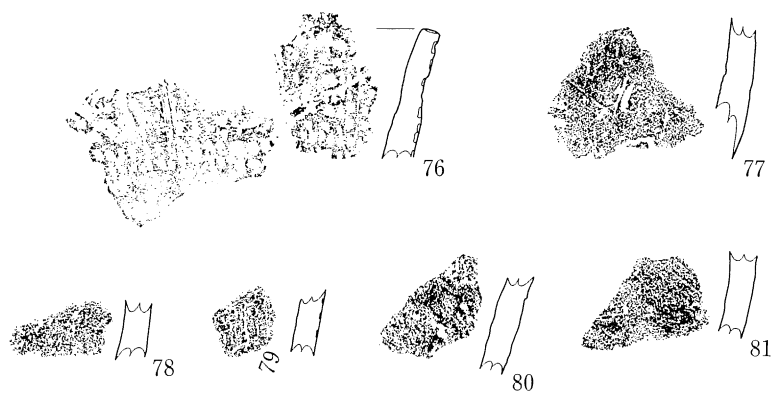
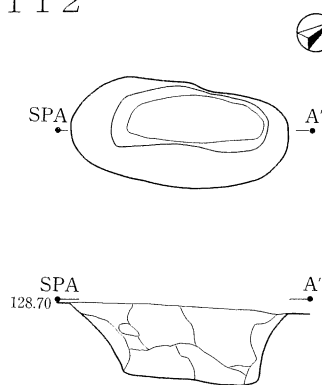
109



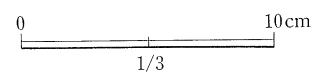
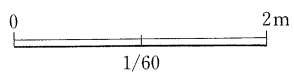
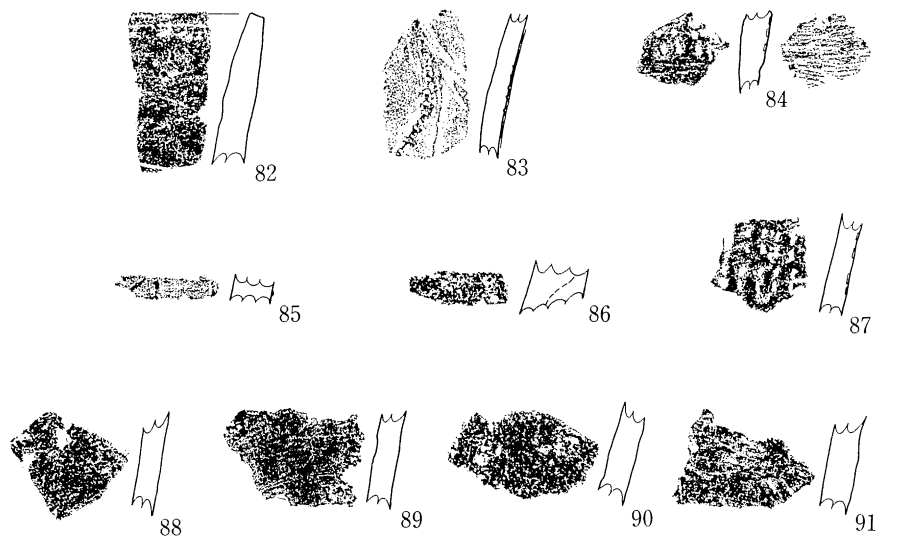
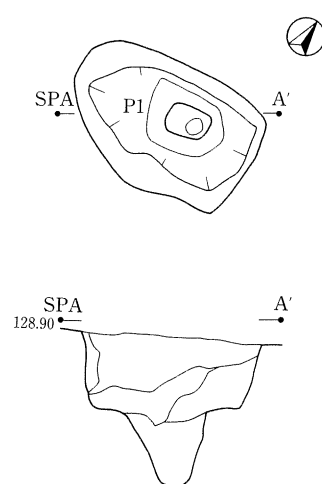
111



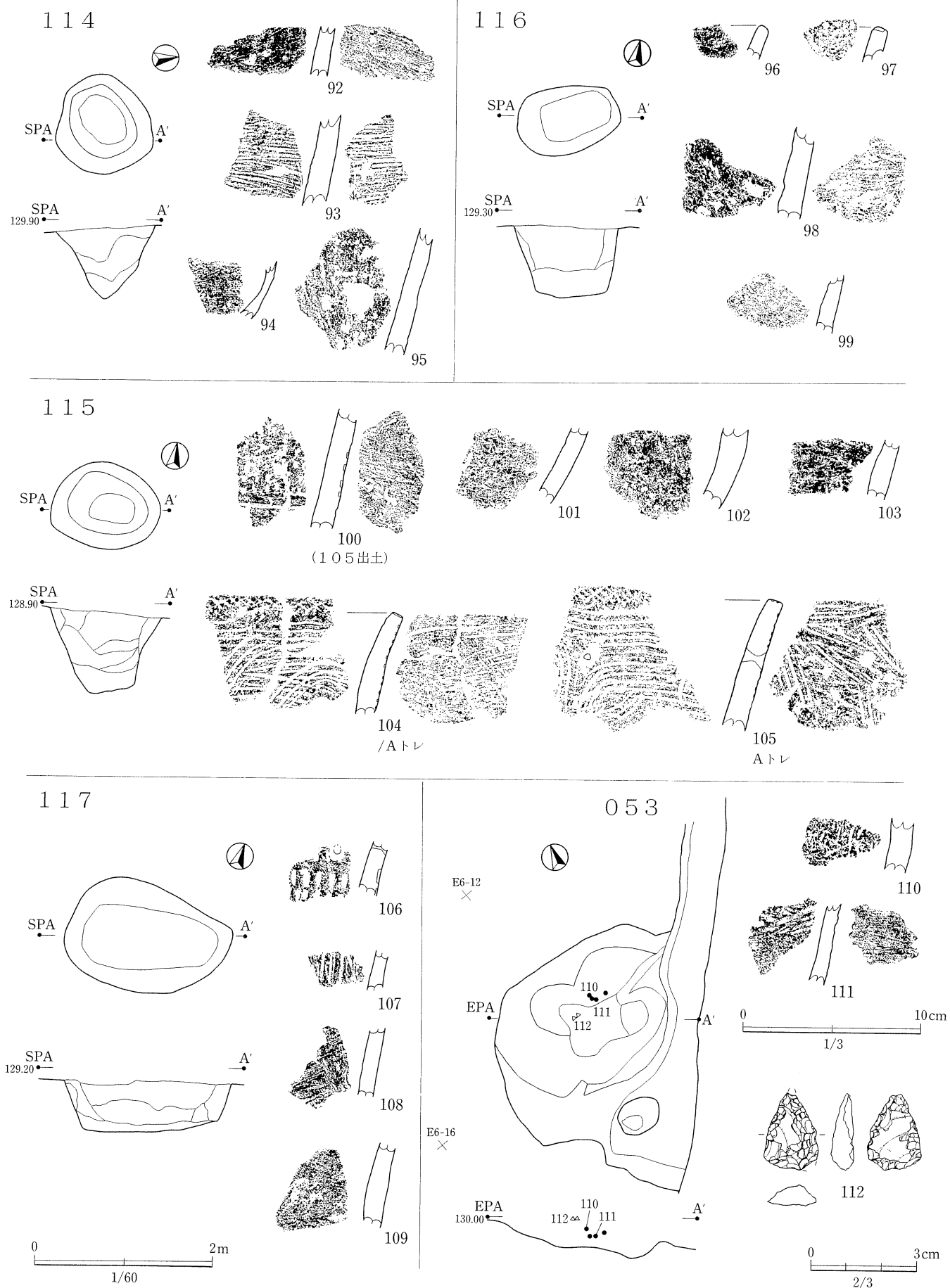
112



113



第35図 109、111、112、113実測図・出土遺物



第36図 114、116、115、117、053実測図・出土遺物

008 竪穴状土坑（第37図・図版14、26）

位置 F3-15付近 層位 上層 規模 長軸2.91m 短軸1.89m 深さ 42.8cm～86.9cm

所見 小竪穴状を呈する。 遺物 土器6点、礫5点（111.1g：チャート4、頁岩1、被熱1、割れ2） 第37図114～116は、繊維を含む擦痕調整の土器である。

009 竪穴状土坑（第37図・図版14）

位置 F3-25 層位 上層 規模 長軸2.61m 短軸1.89m 深さ 13.7cm～34.0cm

所見 007、008と同様に、小竪穴状を呈する。008に比べて浅い。3つの小竪穴状遺構が隣接していることになる。 遺物 なし

015 土坑（第37図・図版15）

位置 E3-13付近 層位 不明 規模 長軸1.80m（現存） 短軸1.35m（現存） 深さ 不明

所見 木の根が大半を占め、西端の一部が遺構であろうか。詳細不明。 遺物 なし

024 土坑（第37図・図版15、26）

位置 E5-9 層位 上層 規模 長軸2.04m 短軸1.46m 深さ 12.0cm～47.5cm

所見 023の南側に隣接する。ティアドロップ形を呈し、掘り込みは浅い。

遺物 土器5点、礫5点（376.0g：チャート2、デイサイト2、砂岩、被熱1、割れ2）

013 土坑（第38図・図版14）

位置 F4-19 層位 上層 規模 長軸1.50m 短軸1.38m 深さ 32.6cm～65.4cm

所見 スリパチ状を呈する浅い土坑である。隣接する014より新しい。 遺物 なし

014 土坑（第38図・図版14、26）

位置 F4-23付近 層位 上層 規模 長軸3.03m 短軸0.96m（現存） 深さ 4.9cm～18.3cm

所見 平面形態は一見陥し穴状であるが、掘り込みはわずかでピットも浅い。

遺物 土器3点、礫2点（77.6g：チャート、流紋岩、被熱1、割れ1） 第38図119は緩やかな波状口縁であり、内外面とも擦痕調整である。

017 土坑（第38図・図版14）

位置 F5-2 層位 上層 規模 長軸1.79m 短軸1.76m 深さ 10.2cm～39.9cm

所見 覆土中に焼土が認められた。炉穴ではないようである。 遺物 礫3（チャート2.4g、他不明）

018 土坑（第38図・図版14）

位置 F5-6付近 層位 上層 規模 長軸2.04m 短軸1.38m 深さ 11.0cm～20.0cm

所見 浅い落ち込みのようにも見える。土層より023、024と同時期か。

遺物 土器2点、礫2点（26.0g：デイサイト2）

021 土坑（第38図・図版14、26、27）

位置 E2-14付近 層位 上層 規模 長軸2.28m 短軸1.20m 深さ 59.9cm～95.0cm

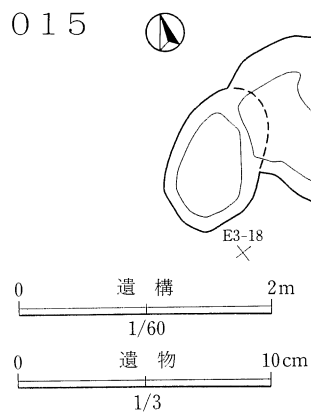
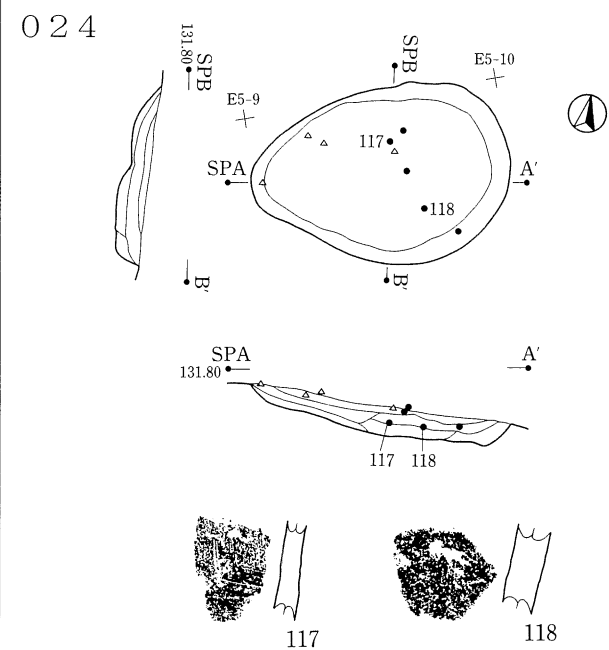
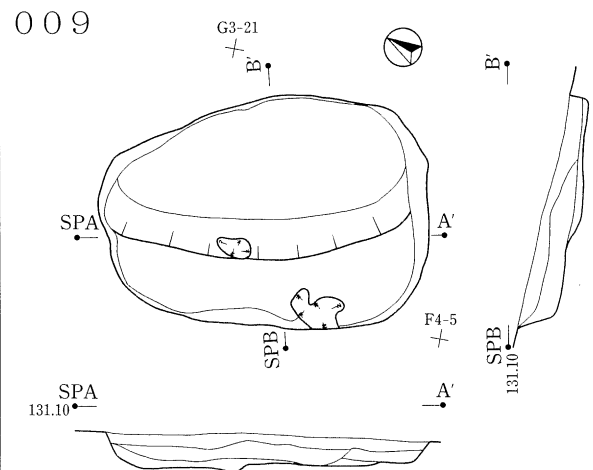
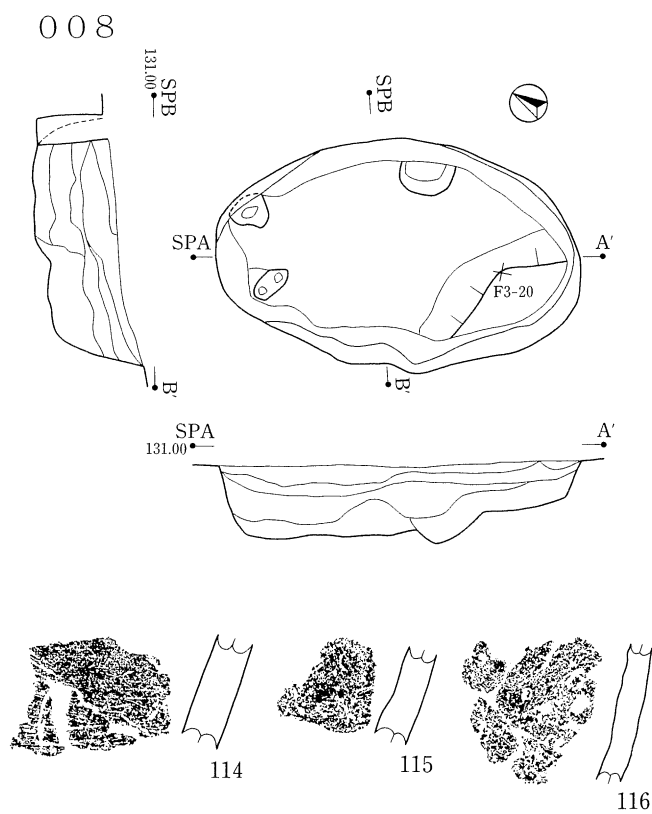
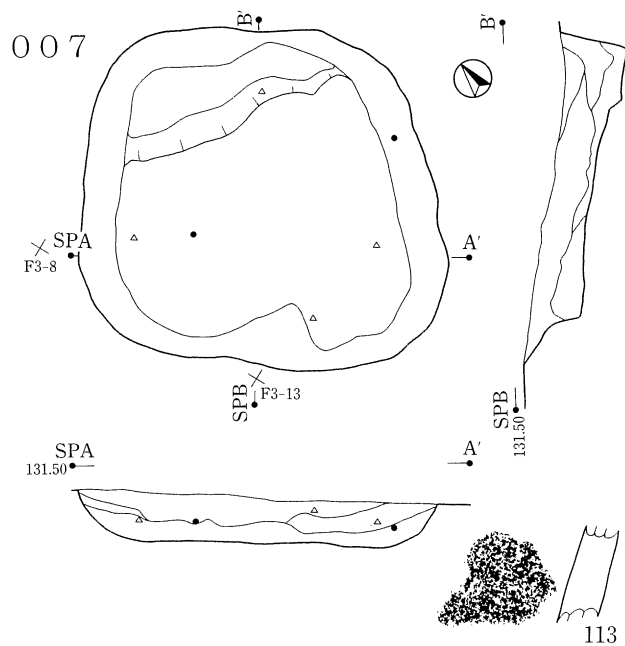
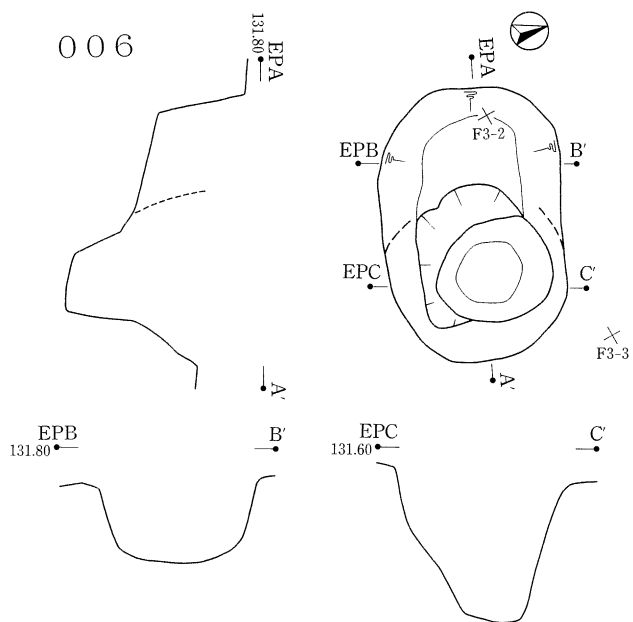
所見 木の根など、遺構でない可能性もある。 遺物 土器2点、石鏃未製品1点、磨石1点

022 土坑（第38図・図版14）

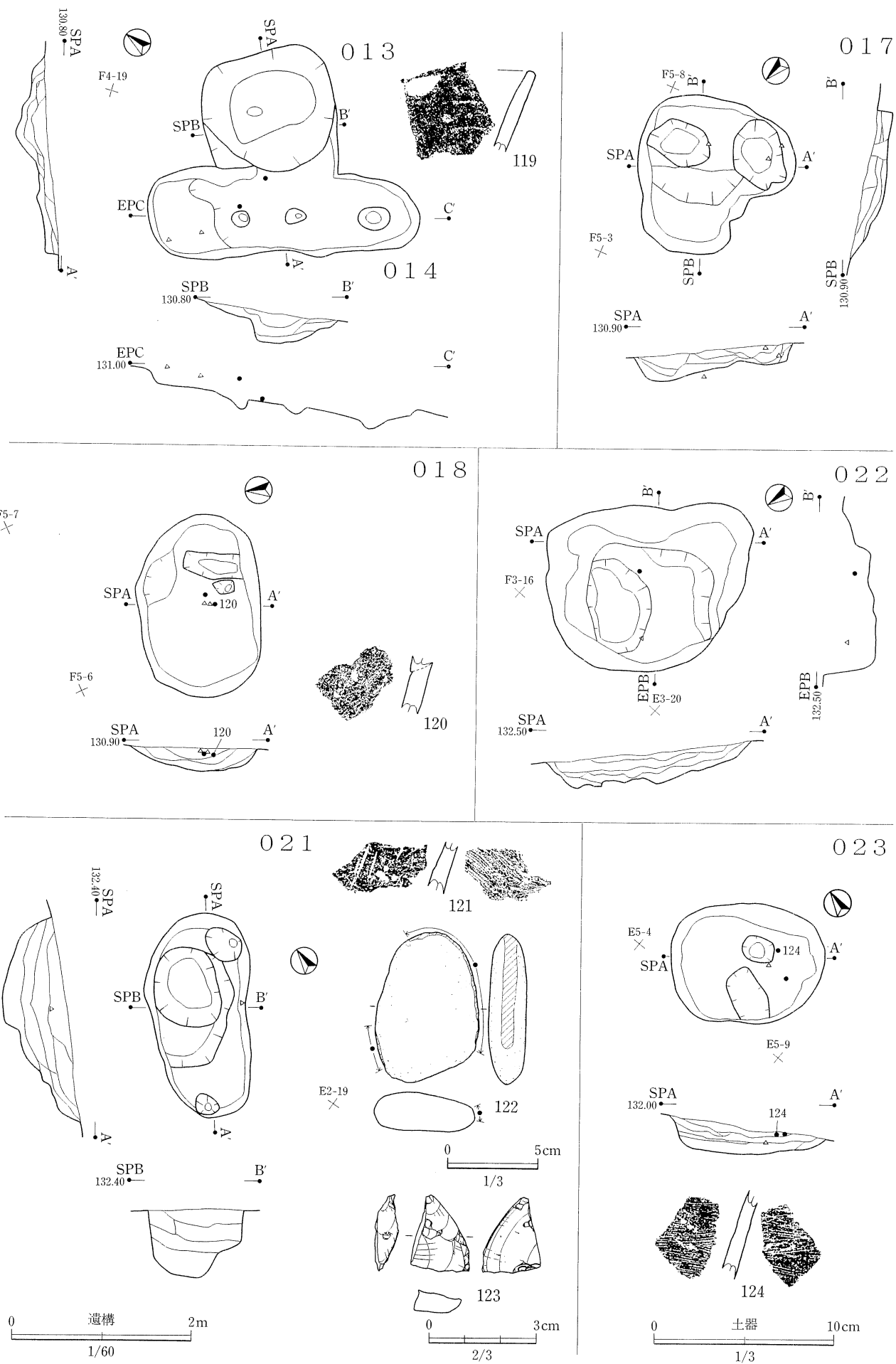
位置 E3-20 層位 上層 規模 長軸2.40m 短軸1.89m 深さ 37.8cm～87.3cm

所見 不整形で底面も平坦でなく、木の根など、遺構でない可能性もある。

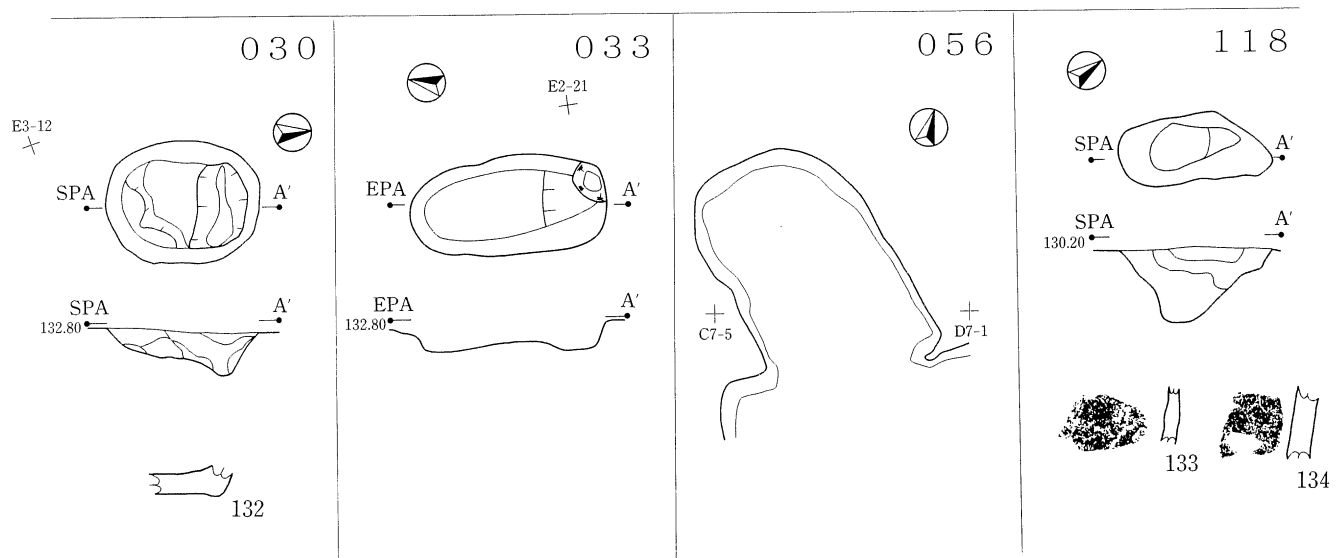
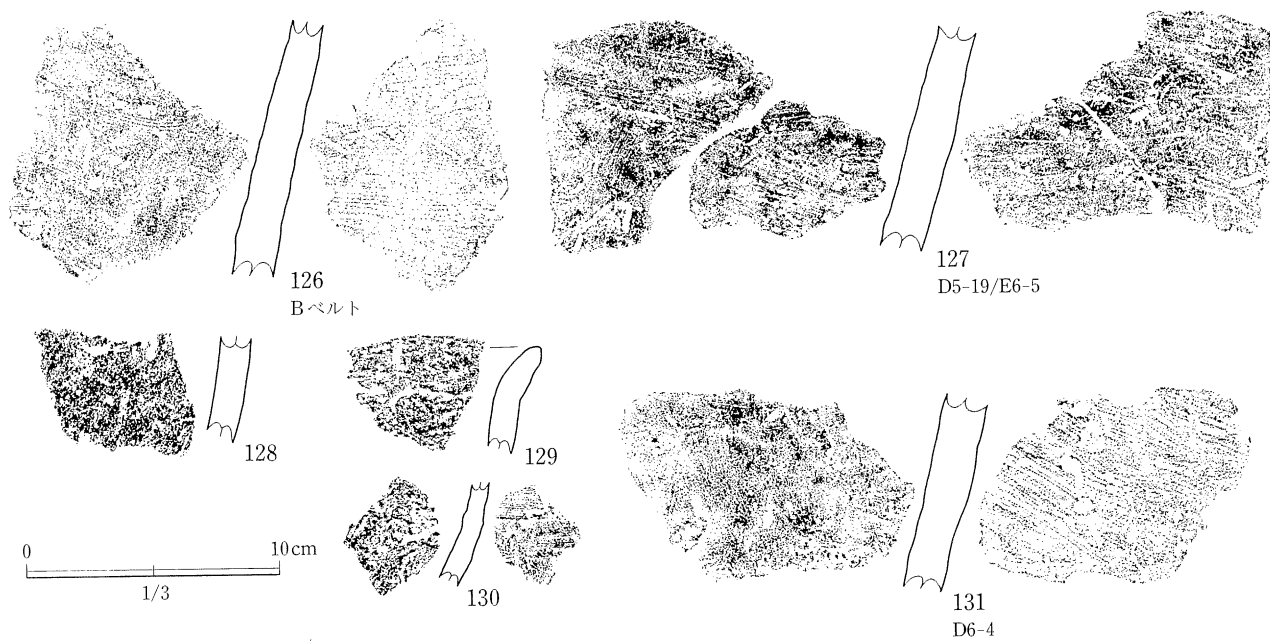
遺物 土器1点、礫1点（639.1g：流紋岩、被熱割れ） 図示できる遺物はない。



第37図 006、007、008、009、015、024実測図・出土遺物



第38図 013、014、017、018、022、021、023実測図・出土遺物



第39図 025、030、033、056、118実測図・出土遺物

023 土坑（第38図・図版15、26）

位置 E5-4 **層位** 上層 **規模** 長軸1.71m 短軸1.35m **深さ** 8.9cm～22.8cm

所見 木の根など、遺構でない可能性が高い。 **遺物** 土器2点、礫1点（63.9g：砂岩、被熱割れ）
第38図124は内外面ともに細かい繊維条痕を施す。

025 土坑（第39図・図版15、26）

位置 E5-23付近 **層位** 上層 **規模** 長軸3.00m 短軸2.52m **深さ** 17.9cm～53.0cm

所見 040土坑の上層で検出、調査された土坑であるが、詳細は不明である。

遺物 土器6点、礫3点（720.1g：凝灰岩2、流紋岩、被熱1、割れ1） 第39図125～127、131は同一個体であり、口径31.2cmを測る。大きめのキザミがめぐる口唇は外反し、内外面ともに横位の擦痕調整がなされる。この個体の破片は広い範囲で散在しており、包含層だけでなく066や072出土遺物にもみられる。

030 土坑（第39図・図版なし）

位置 E3-7 **層位** 上層 **規模** 長軸1.23m 短軸0.98m **深さ** 37.2cm～48.8cm

所見 木の根など、遺構でない可能性が高い。 **遺物** 土器1点、礫1点（152.8g：流紋岩、被熱割れ） 第39図132は繊維を含まない平底の破片である。縄文時代中期であろう。

033 土坑（第39図・図版15）

位置 D2-20 **層位** 上層 **規模** 長軸1.56m 短軸0.79m **深さ** 11.1cm～19.7cm

所見 木の根など、遺構でない可能性もある。詳細不明。 **遺物** なし

056 土坑（第39図・図版15）

位置 C6-25 **層位** 上層 **規模** 長軸2.04m（現存）短軸1.29m **深さ** 5.1cm～18.1cm

所見 掘り込みは浅く、底面は平坦である。詳細不明。 **遺物** なし

118 土坑（第39図・図版15、26）

位置 A-22 **層位** 上層 **規模** 長軸1.20m 短軸0.54m **深さ** 71.5cm～77.5cm

所見 小型の土坑である。 **遺物** 土器2点、礫1点（600.3g：砂岩、割れ） 第39図133、134はともに繊維を含む擦痕調整の土器である。

F. その他の遺構

045 方形周溝状遺構（第40図・図版15）

位置 D6-17周辺 **層位** 上層 **規模** 長軸5.44m 短軸5.20m **溝幅** 48cm～89cm

深さ 8.2cm～45.8cm **所見** 遺物を伴わないため時期不明である。主体部も検出されなかった。

080 炭窯（第40図・図版18）

位置 D2-5付近 **層位** 上層 **規模** 長軸7.41m 短軸2.16m

所見 近世もしくは近代の炭窯である。上位層は破壊されており、深さはほとんどなかった。検出された炭はクヌギ材系で硬質である。 **遺物** 炭化材

081 炭窯（第40図・図版18）

位置 E1-22付近 **層位** 上層 **規模** 長軸1.83m 短軸1.47m

所見 080と同様に炭窯である。規模は080より小さい。 **遺物** なし

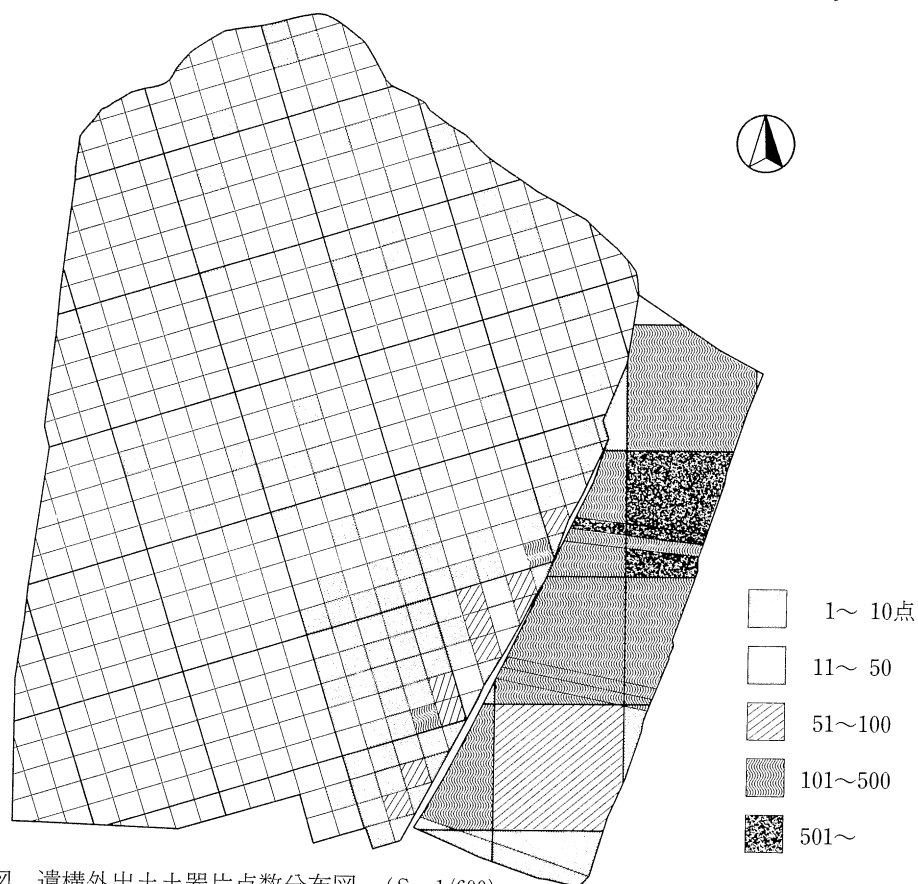
第4章 遺構外出土遺物

調査区ほぼ全体、特に緩い谷が入り込む2次調査区方向に向かって遺物包含層が厚くなっていた。1次調査区域より土器4,328点（遺構内915点）、2次調査区より4,906点（遺構内327点）が出土した。その分布は明瞭な偏りをみせる。丘陵頂部にある三山塚の造営時に、周囲の土を削りとったため、その部分に関しては出土量が少ない。それ以外の場所では、東側から南側にかけての斜面に集中している。この部分は確かに遺構の密度も高い。ただ、そのような人為的な集中に加えて、谷底に向かって移動するという地形的な自然要因が大きく作用したのと考えてよいであろう。

出土した遺物の構成も非常に明解な状態である。縄文時代早期後半（田戸上層～子母口～野島式期）の遺物が99%以上を占める他には、早期前葉撚糸文期10点、鶴ガ島台式期1点、前期1点、縄文時代中期加曽利E式期32点である。近世になって塚がつくられて、その祭祀に関連する遺物はみられたが、それ以外の時期に生活文化の痕跡は一切みられないと言える状態である。

土器を分類するにあたって、小破片から具体的型式を特定することは難しく、そのため「野島式」などのいわゆる型式や時期別ではなく、文様要素と施文方法を中心に分類した。明らかに同一個体と判断できるものは、その文様を有していなくても同じ分類の図に含めた。遺構内出土の土器と明らかに同一個体と判断できるものは、なるべく遺構の遺物と同挿図に組んであるためこちらにはないが、例外もある。

なお、分類の基準は、各類型ごとの細分が一定ではなく、改善の余地がある。ページ数制約の都合上、個々の遺物の記載は最小限に抑えた。改めて別の機会に論じることを考えている。



第41図 遺構外出土土器片点数分布図 (S=1/600)

遺構外出土土器の分類

A 類 隆起線および隆帯（第42～45図・図版28～29）

細い粘土紐を器面に貼り付けることで区画および文様施文を行う。横位単独もしくは平行線のものが多く、それが基線となって縦位あるいは斜位の隆起線が施される。地文に貝殻条痕もしくは繊維条痕を施すものと、擦痕調整をなすものと、2種類がある。1 a種69～79は擦痕調整の器面に、断面台形状の隆帯2条1対が貼付されており、田戸上層式に近い。3種および4種は相当の時期差を含むであろう。

1 種 隆起線 1本もしくは2本の単純な構成

- | | |
|----------|----------------|
| a 隆起線のみ | 第43図69～第44図113 |
| b +貝殻腹縁文 | 第42図1～4 |
| c +沈線 | 第42図5 |
| d +連続刺突 | 第42図6～10 |

2 種 多条隆起線

- | | |
|--------------|-------------------|
| a 横位および斜位の区画 | 第42図11～25 |
| b 区画内の充填、文様化 | 第42図26～38、第45図136 |
| c 地文に条痕をもつ | 第42図39～68 |

3 種 キザミを有する隆帯 第44図114～第45図129

4 種 その他、判別できないもの 第45図130～135

B 類 沈線文（第46、47図・図版29）

沈線のみで文様構成される土器はかなり少ないとみられる。器面に条痕調整を施したものはみられず、ナデもしくは擦痕調整がなされる。

1 種 集合沈線

- | | |
|--------------|-----------------|
| a +隆帯 | 第46図137～141 |
| b +連続刺突 | 第46図142～149 |
| c 集合沈線のみ 部分 | 第46図150～157、178 |
| d 平行沈線状 + 刺突 | 第46図158～166 |

2 種 単沈線による区画・文様

- | | |
|----------|---------------------------------|
| a + 連続刺突 | 第46図167～177、第47図180、181、195～198 |
| b 沈線のみ | 第46図179、第47図182～194 |

C 類 連続刺突文（第47～51図・図版29～31）

主に口縁部文様帯に、横位多段の連続刺突がめぐり、刺突の施文方法で大きく2分することができる。刺突段数単位の明確な土器の口縁は、波状を呈することが少ない傾向にある。分類全体をみても、他分類土器に比べて波状口縁を有する割合は低い。B類より出土点数は圧倒的に多いが、同様に、器面に条痕調整をなす土器はみられない。このことは、各類の時期差を考慮する際のひとつの要点と

なるであろう。

本類の刺突が細かいタイプには、視覚的に、縦位の連続貝殻腹縁文（D類1種）が類似する。同様に1aおよび1b種には、横位多段の絡条体圧痕文（E類1a種）が類似する。

この分類内で、胴部や底部付近部位に施文される土器はほとんど見られず、全体像は不明瞭である。連続刺突施文ではないが、049炉穴出土の第24図68が参考になろうか。

1種 1段づつ施文するもの

- a 竹管へう状工具 緩やかなC字状爪形刺突（逆Cにはならない） 第47図204～217
- b 板状工具 直線的な刺突 第48図218～241
- c 角状工具もしくはb種の斜位押圧による方形の刺突 第47図199～203、第48図228～231、第48図238、239、242～252、第50図318
- d その他工具 竹管・先端加工工具 第48図253～261

2種 複数段単位で施文するもの 3段もしくは2段で1単位に見える

- a 複数工具を束ねた状態の施文 第48図262
- b 安定した幅で1対1単位をなす刺突を横位に連続施文する。若干ハの字状を呈する。
これは先端を分割加工した劣裁竹管などの工具で施文することによるものと考えられる。
本来この中でも細分が可能であろう。 第49図265～第50図317

3種 ラインや単位が無秩序なもの、その他判別できないもの 第50図328～348

D類 貝殻腹縁文（第49、51図・図版31）

口縁部文様帯において縦位かつ連続的に施文されるものが主体をなす。遺構外出土のD類には条痕調整はみられず、擦痕調整のみである。しかし、038他出土の第12図41～第13図59の土器は、胴部下半に貝殻条痕文が顕著に主張される。1種としたものは、はっきり貝殻腹縁文に見えるものと、押圧が弱く施文角度が異なるため連続刺突的に見えるものと、2種類に分けられる。ただ、それが必ずしも同時期の施文方法である確証はない。背面圧痕も同種に分類したが、本遺跡では2個体しかみられない。

- 1種 a 貝殻腹縁の押圧が弱い連続刺突文状 第49図263、264、（B類2a種：第47図180）
b 縦位の連続押圧 第51図350～355、357～359、361、362
- 2種 他文様との複合 第51図356（沈線）、360（扁平隆帯）
- 3種 背面圧痕 第27図22、23、第28図30、31（047陥し穴出土遺物）

E類 絡条体圧痕文（第50、52図・図版31）

軸棒に0段～1段に撚った縄を巻き付けたものを原体とし、それを回転、もしくは側面を押圧することによって施文したもの。本遺跡の出土遺物には、この種類の文様の割合が少ない。特に、扁平隆帯上の絡条体圧痕をもつものは僅かであった。地域差の現れと見るべきであろうか。D類同様、条痕調整の個体はほとんどみられないが、384の外面には繊維条痕がみられる。外削ぎ状の口唇面は回転圧痕、すなわち撚糸施文となり、その同一原体を使用した、いわゆる「絡条体条痕」である可能性

が高く、稀少例である。

第50図319～327および第23図41（0 4 6出土）は、同一個体、もしくは同一時期および作者製作個体である。キザミと絡条体圧痕という口唇面施文が異なることと、口唇形状の差違から、同一個体かどうか断定はできない。胎土には砂、特に透明～半透明粒子（石英もしくは長石： $\phi = \sim 1.5\text{mm}$ ）を多く含み、繊維は少ない。そのため、焼成は良好だが器面はやや荒れており、異質な雰囲気を持つ。このことが特徴的共通点である。口縁部外面は横位の擦痕調整の後、横位5段の絡条体圧痕を施す。絡条体の縄は撚りの弱い1段Rである。胴部下半へ斜位の押圧も見られ、その下方にさらに横位の水平区画的な絡条体圧痕が1～2段めぐり。文様施文帯が口縁部に限らない例を示している。これらの土器は、いわゆる「清水柳E類」土器に類似する。ただ、影響を受けて類似するののか、焼成雰囲気の差が示す、すなわち搬入品であるのか、検討を要する。第52図375～381は同一個体であり、絡条体の軸は半裁竹管を用いる。

1 種 口唇および胴部に施文

a 器壁に直接施文

第50図319～327、第52図363～368、373、374

b 隆帯上に施文

第52図369～372

2 種 口唇のみに施文

第52図375～390

F 類 口唇面にキザミ・刺突を有する（胴部無文）（第53～56図・図版31、32）

口唇面にキザミもしくは刺突がめぐり、残存する胴部はナデもしくは擦痕調整であり、文様のみられないものを選んだ。本来、キザミと刺突は別分類にすべきであったかもしれない。

1 類および3 類は従来、田戸上層式から子母口式に伴うとみなされてきたものである。しかし、本遺跡において明確に田戸上層式と呼べる文様をもつことから判別できる土器は、0 6 6 竪穴住居跡出土の第16図92のみである。他にはA 類土器の平行隆帯をもつ一群か、キザミ隆帯を有する数点などが考えられる。円棒状工具による派手なキザミを有する1 a 種および1 b 種は、その器形および大胆な工具の使い方などから、本遺跡ではどちらかといえば異系統的な存在と感じられる。

第56図501～508は、F 類のなかで唯一器面に条痕調整がなされるものである。口縁部内面3 cm 幅は横位の擦痕調整をなし、貝殻条痕を磨り消している。貝殻条痕は本遺跡において類例の少ない縦位である。刺突は4.5mm角の棒状工具で7～10mmと深く施す。

1 種 口縁部が強く外反するもの

a 口唇に対してほぼ直角にキザミが入る

第53図391～411

b 口唇に対して斜位にキザミが入る

第53図412～415

c 口唇面に収まるように方形の刺突がめぐる

第53図416～第54図420

d その他

第54図421～423

2 種 ほぼ直立する口縁部にキザミを有するもの 外削ぎ状の口唇が多い

a 1 類と同様 直行

第54図425～448、450、453～457

b 同上 斜位

第54図451、452、第55図470～494

c 同上 方形刺突

第54図424、449、458～469 第56図501～508

3 種 キザミの向きが変わるもの、その他変種

第55図495～500

G 類 条痕調整（第56～59図・図版32、33、37）

「条痕」と呼べる調整の工具には少なくとも2種類ある。1つはいわゆる「貝殻条痕」の貝殻であり、もう一つは繊維もしくはその束である。後者は「茎束条痕」「絡条体条痕」とも呼ばれており、その区別は明確ではない。本報告書では、明瞭に繊維の束の単位がみられるもの、もしくは棒状工具によって凹線状に器面を調整したものを抽出し、「繊維条痕」と呼称した。調整方向は横位が多数をしめる。条痕調整と擦痕調整が明らかに異なるであろう点は、その器面調整に、顕著な装飾効果があるか否か、ということであろう。ただ、器壁内面のみに条痕調整がみられる破片も多くあり、そのような状態が「意図的な装飾」と言えるのかどうか疑問でもある。

1 種 貝殻条痕

- | | |
|----------|-------------|
| a 表裏条痕調整 | 第56図501～530 |
| b 表面のみ | 第56図531～541 |
| c 裏面のみ | 第58図542～556 |

2 種 繊維条痕

- | | |
|----------|-----------------|
| a 表裏条痕調整 | 第58図557～第59図572 |
| b 表面のみ | 第59図573～579 |
| c 裏面のみ | 第59図580～583 |

H 類 擦痕調整（第59～66図・図版34～37）

図には、指によるナデ調整の土器も含むが、圧倒的に擦痕調整が多い。調整方向は横位が多数を占め、縦位はほんのわずかである。口縁部破片は、口唇部断面形状のわかるものは、小さいものも含めて図示した。そのため拓影図はあまり意味をなさないものもある。小片が多いため、本来は文様装飾された個体でも、その部位には無文で判別できないものはこちらに含まれる。胴部破片は、きれいに擦痕が残る破片を抽出した。

1 種 口縁部

- | | |
|------------------------|-----------------|
| a 角頭状 もしくはそれに近い状態 | 第59図584～第60図625 |
| b 口唇付近内面を薄くしているもの | 第60図626～第61図641 |
| c 外削ぎ状 | 第61図642～657 |
| d 内削ぎ状 | 第61図658～第62図681 |
| e 顕著に外反しているもの | 第62図682～691 |
| f 上記以外 口唇部の稜がはっきりしないもの | 第62図692～712図 |

2 種 胴部

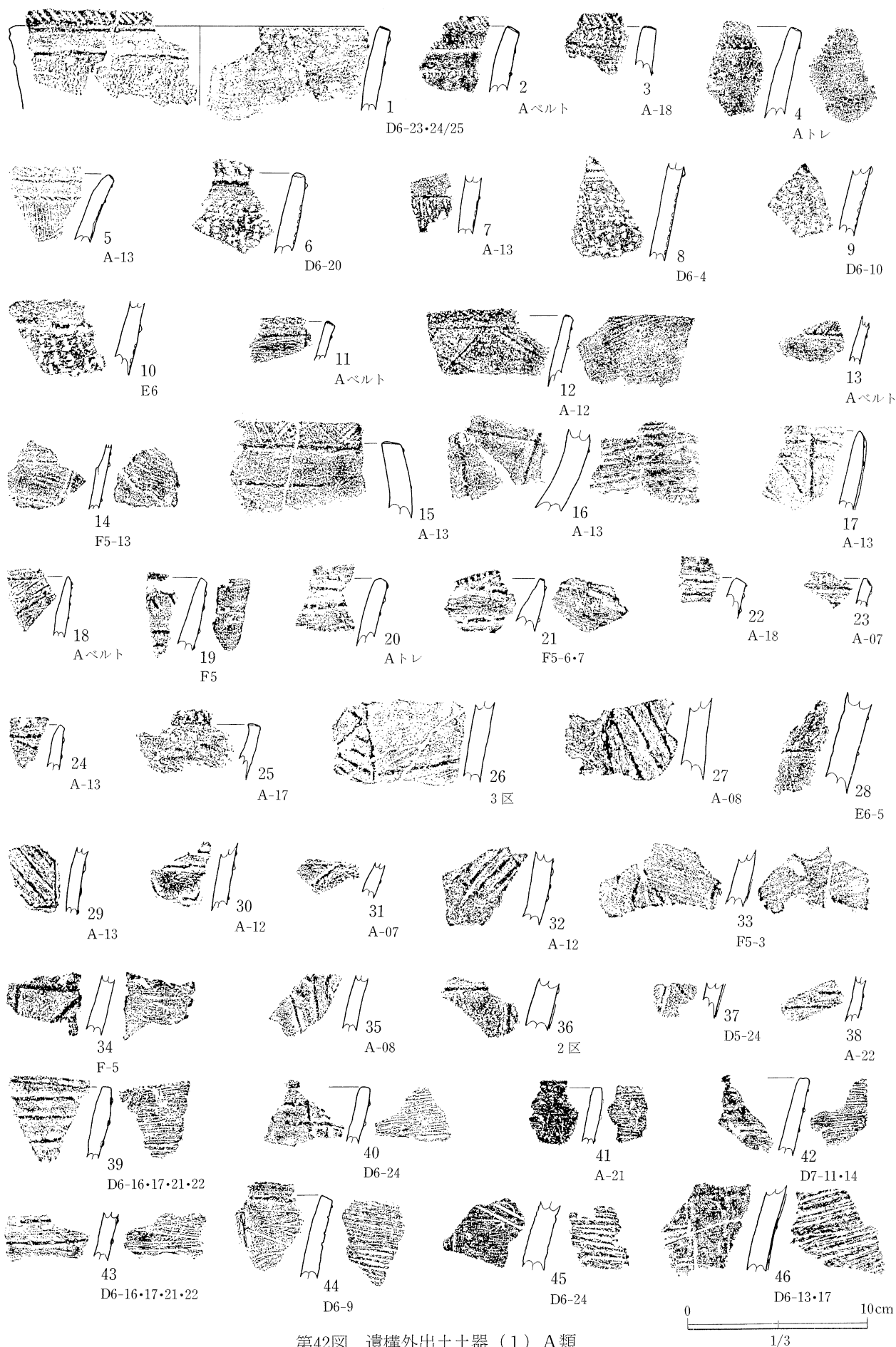
第63図713～第66図765

3 種 底部

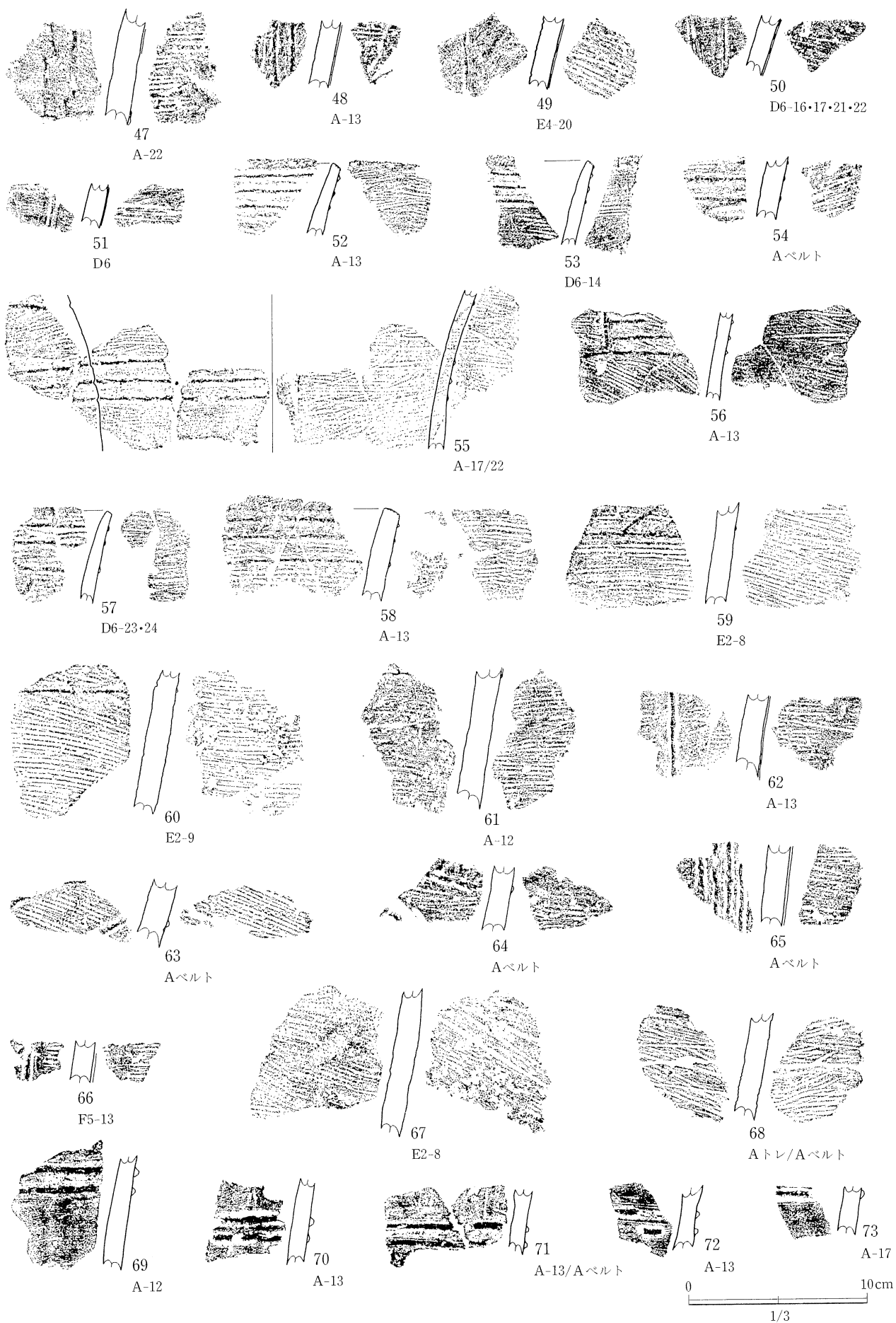
第66図766～787

I 類 その他（第67図・図版36）

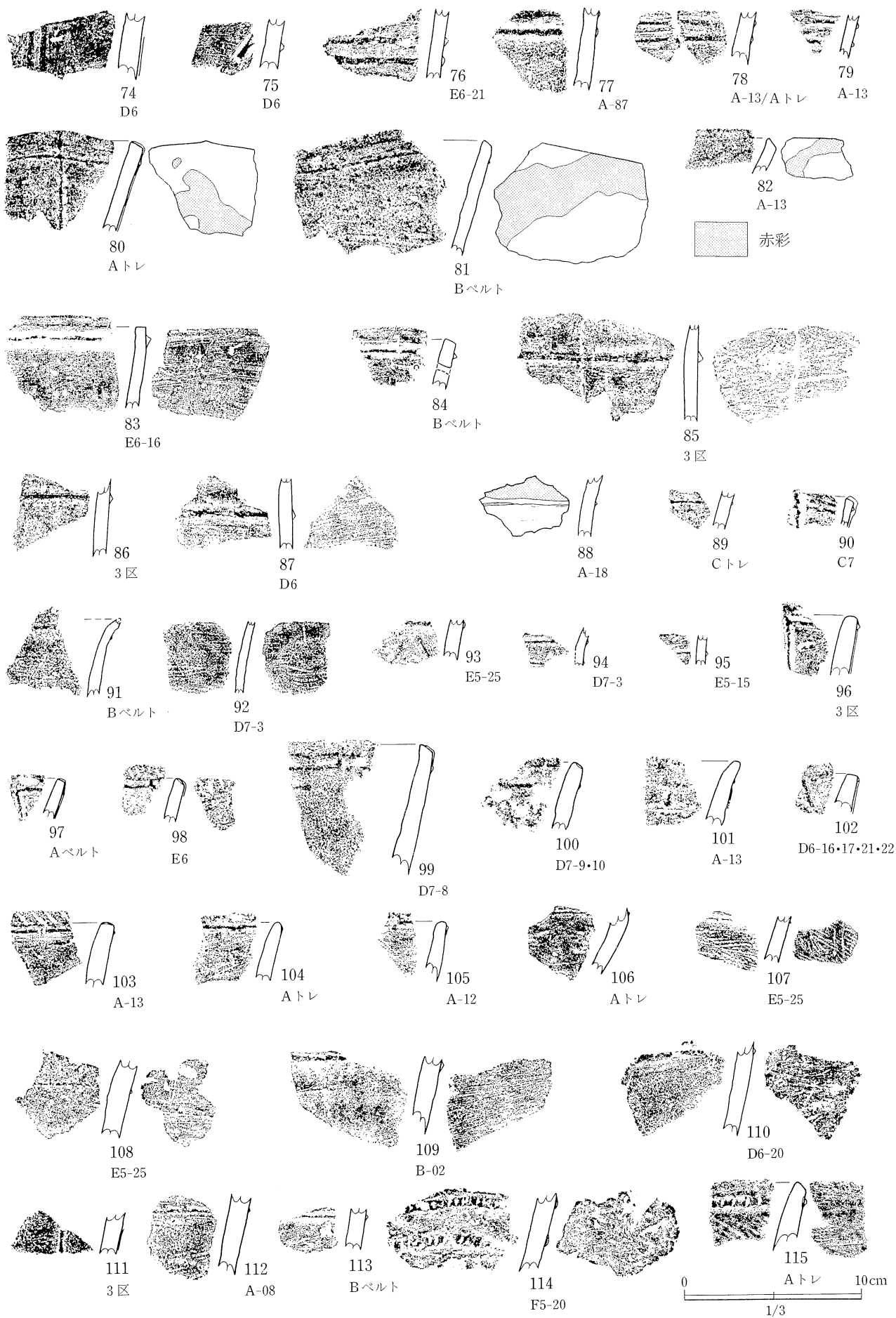
- | | |
|------------|-------------|
| 早期前葉撚糸文期 | 第67図788～793 |
| 早期後葉鵜ガ島台式期 | 797 |
| 前期 | 798 |



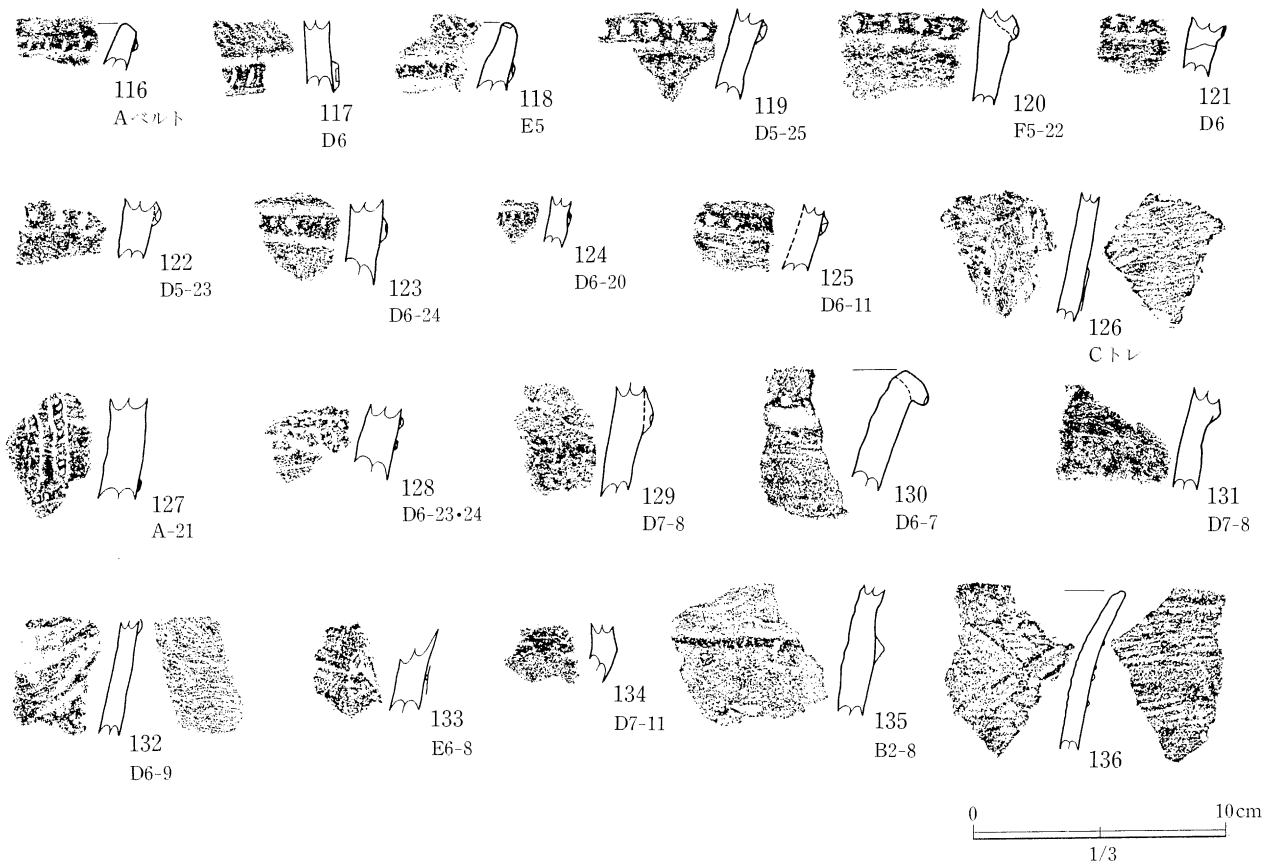
第42図 遺構外出土土器（1）A類



第43図 遺構外出土土器（2）A類



第44図 遺構外出土土器（3）A類



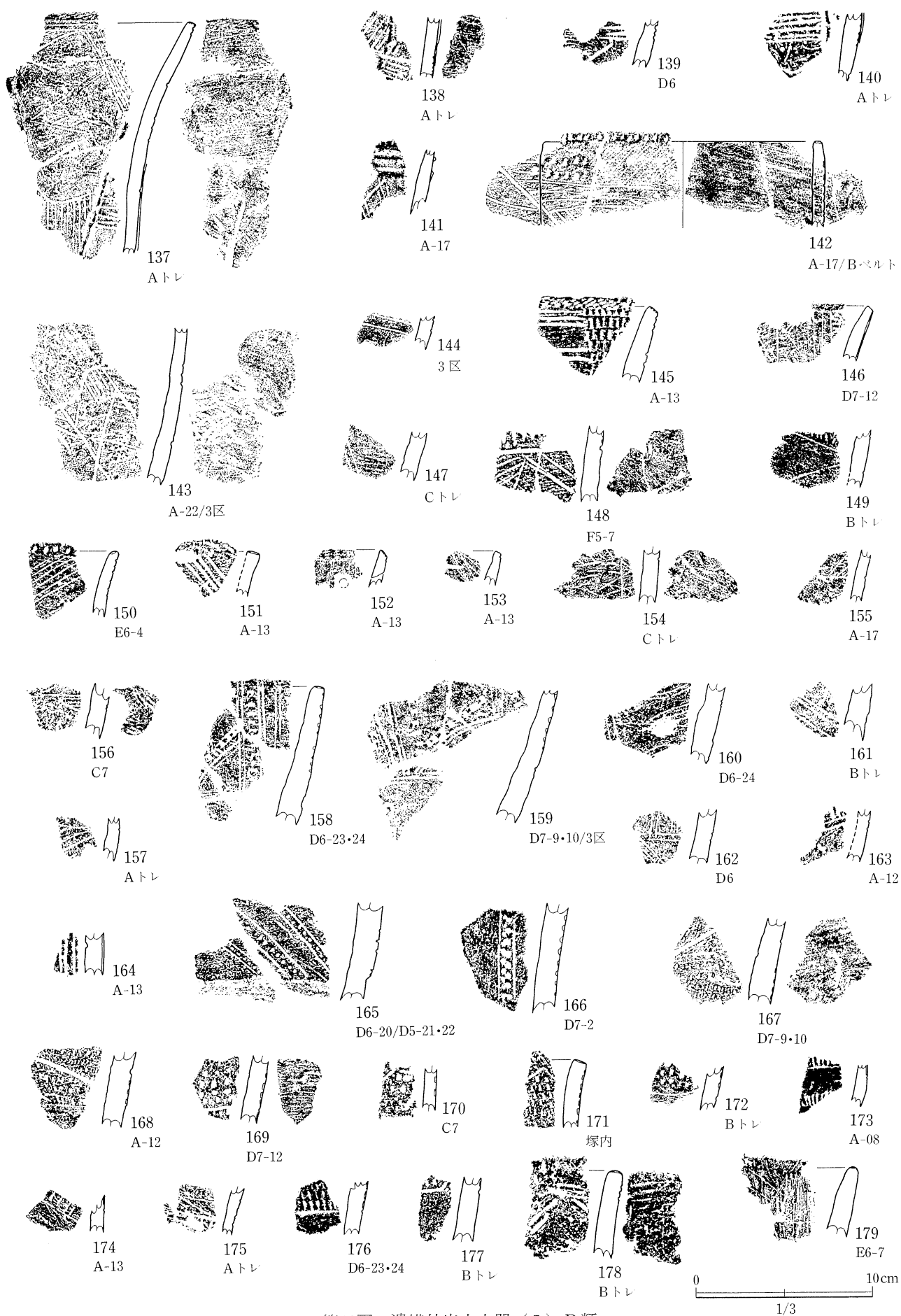
第45図 遺構外出土土器（4）A類

I 類 その他（第67図・図版36）

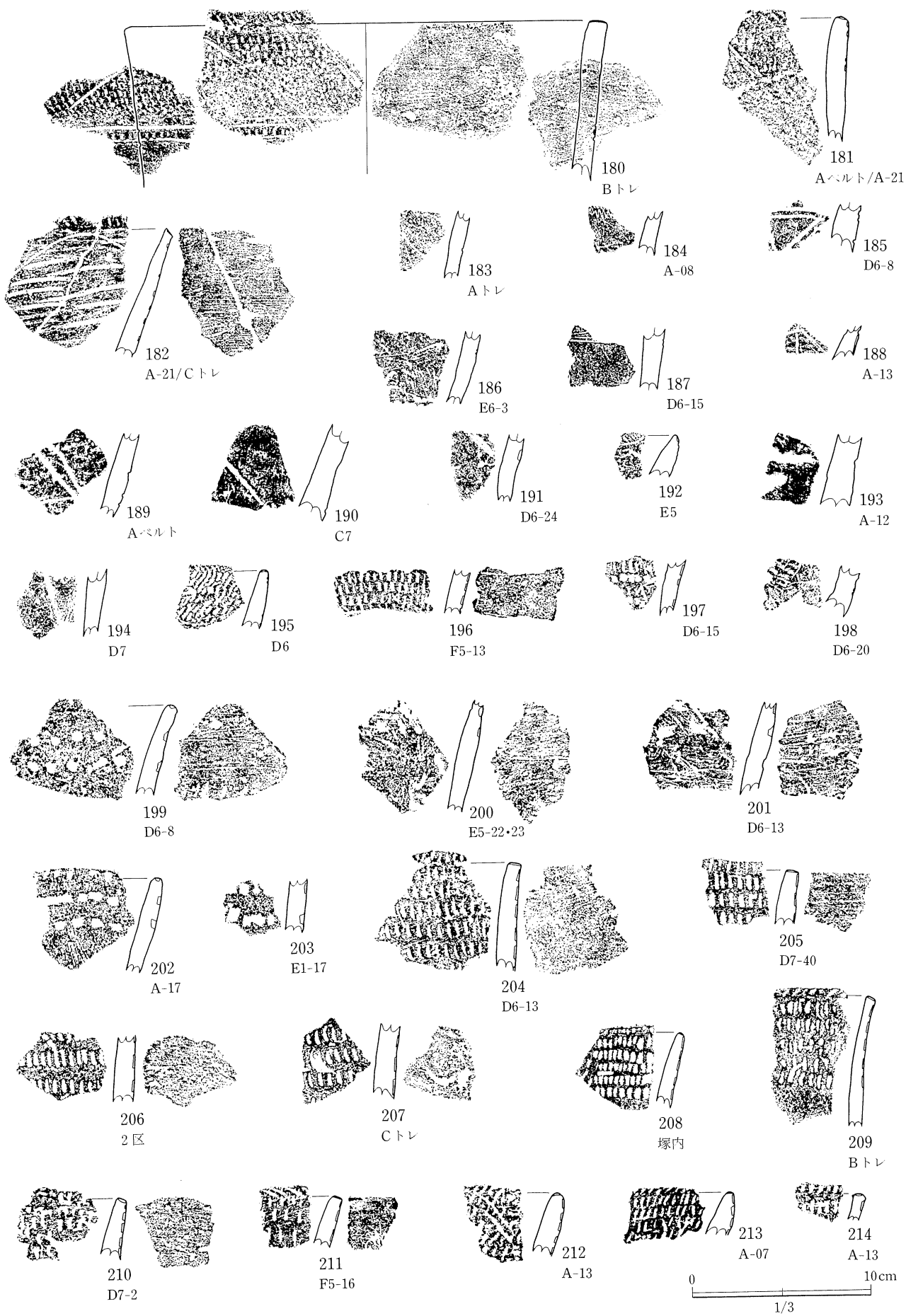
中期加曾利 E 2 ～ E 3 式	799～810
不明	811～814
該期追加資料 表面のみ太い繊維条痕	794、795
盲孔を有する土器	796

山内清男に始まる子母口式土器の記載には、「繊維を若干含む」という表現が多く見受けられる。本遺跡の出土土器もやはり繊維を含むものであるが、どちらかというと全体的に、豊富に含むものと感じられる。これは地域的な特徴であろうか。

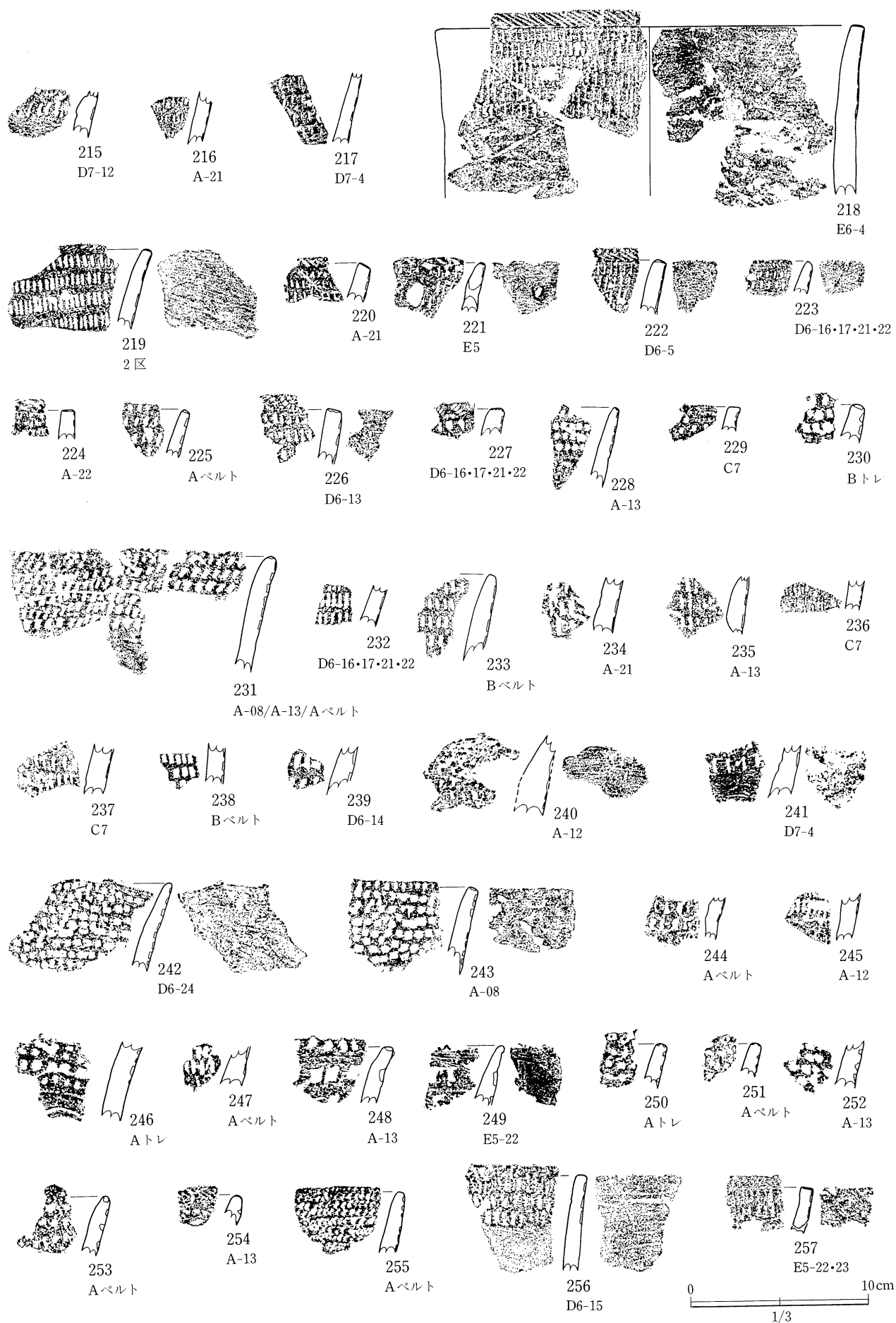
胎土中に含まれる様々な物質のなかで「海綿骨針」が多くみられる土器がある。これらの土器は、海綿が認められない土器と比べて、総じて焼成が甘く器壁が脆いものが多い。これは、採取した粘土の生成堆積環境が異なることに起因するものと考えられる。型式や文様分類の差と、海綿骨針の含有状態の関連性を調べるのが、有機的な結果に結びつくかどうか疑問ではあるが、今後注意すべき点であろう。ただ、胎土中の海綿に関する基礎的情報はいまだ少なく、詳細は不明確なのが現状である。



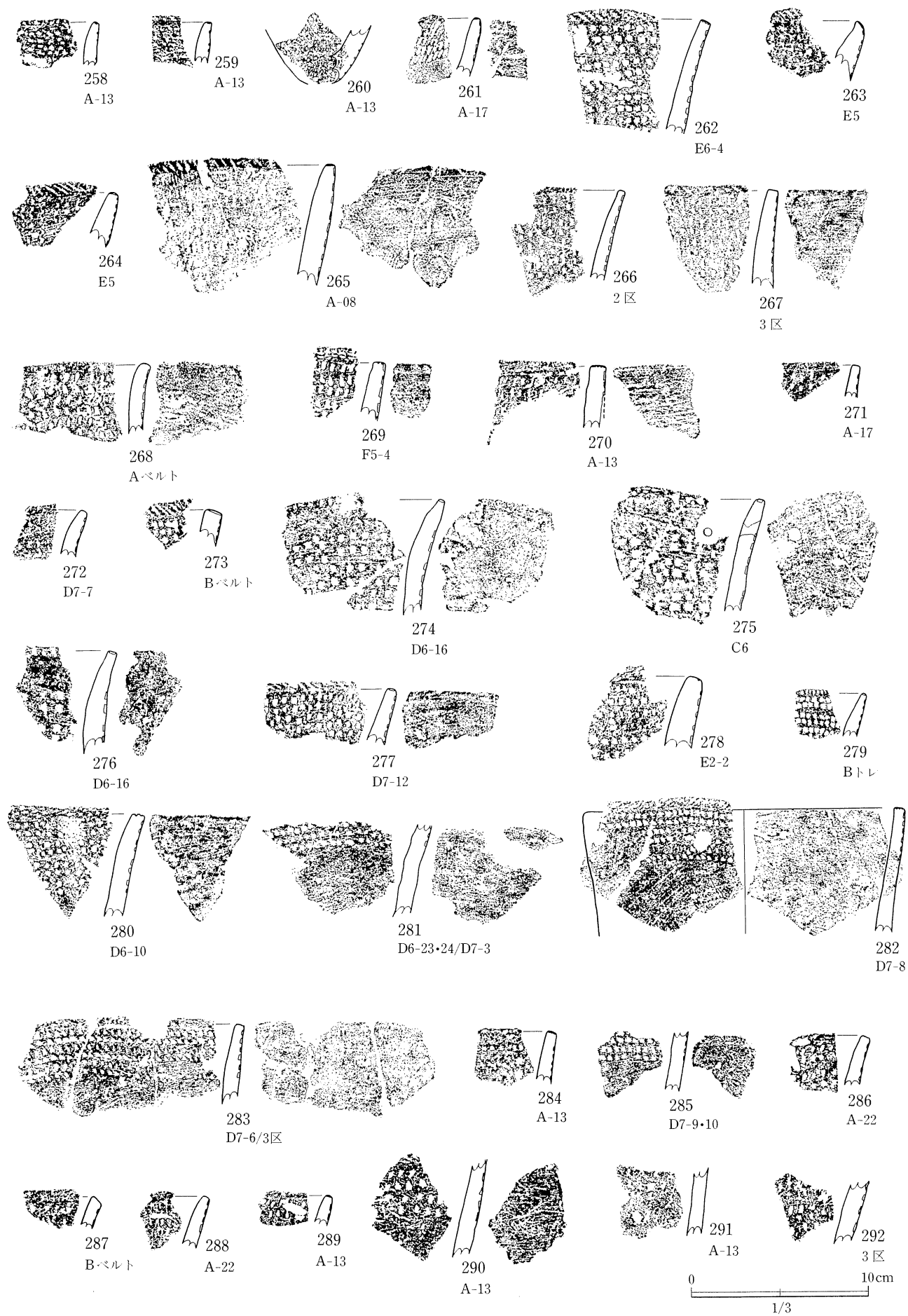
第46図 遺構外出土土器（5）B類



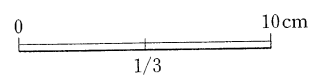
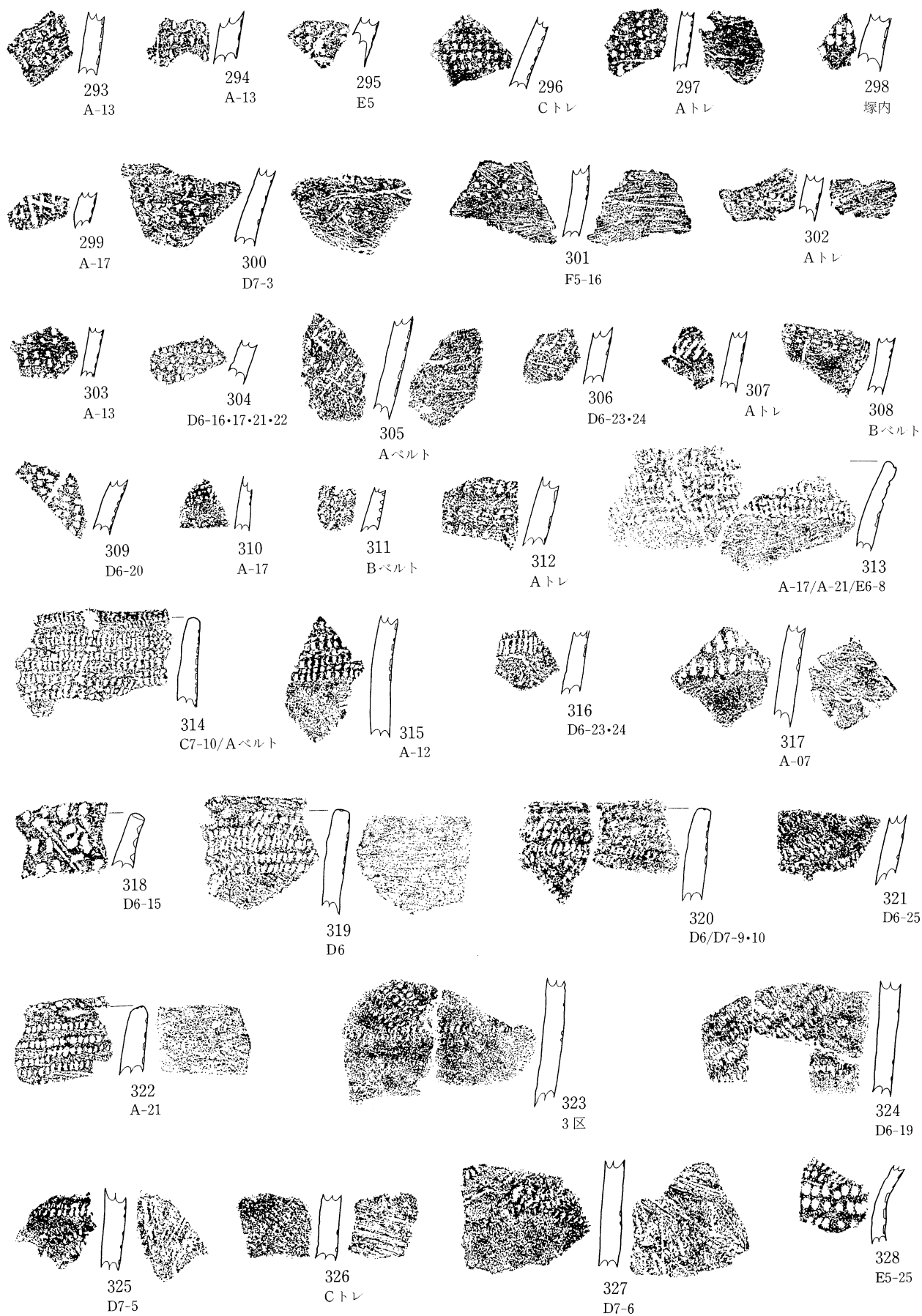
第47図 遺構外出土土器 (6) B類・C類



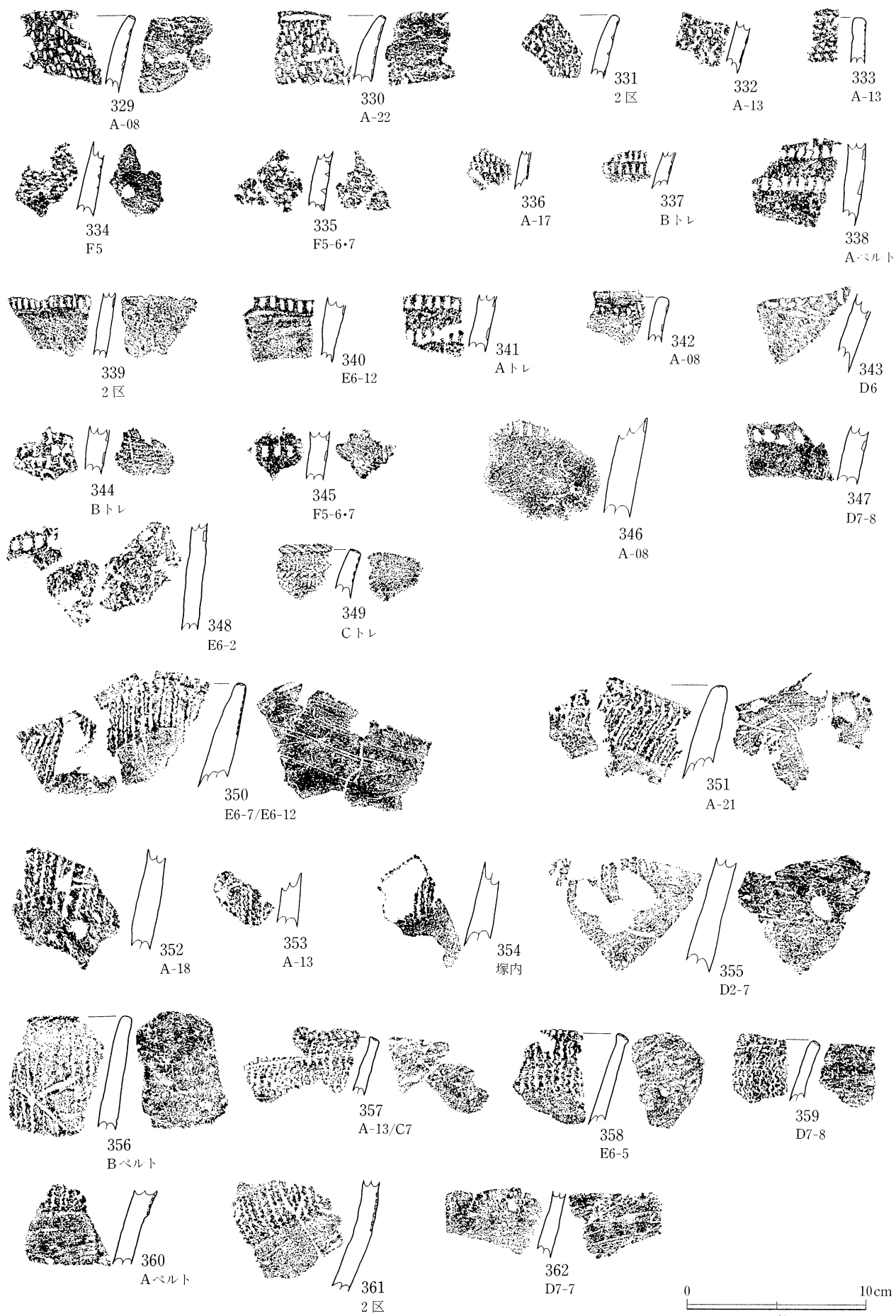
第48図 遺構外出土土器（7）C類



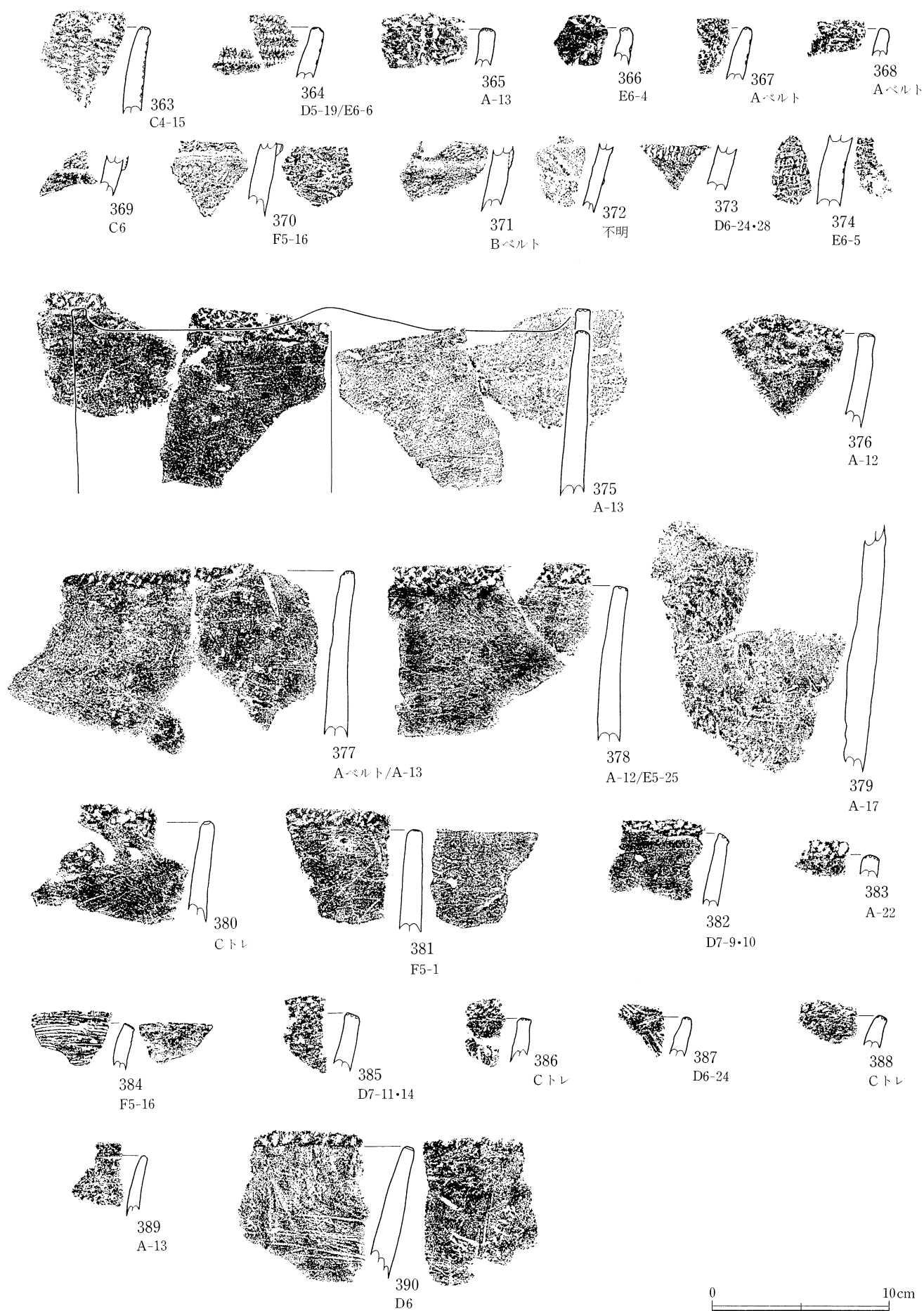
第49図 遺構外出土土器（8）C類



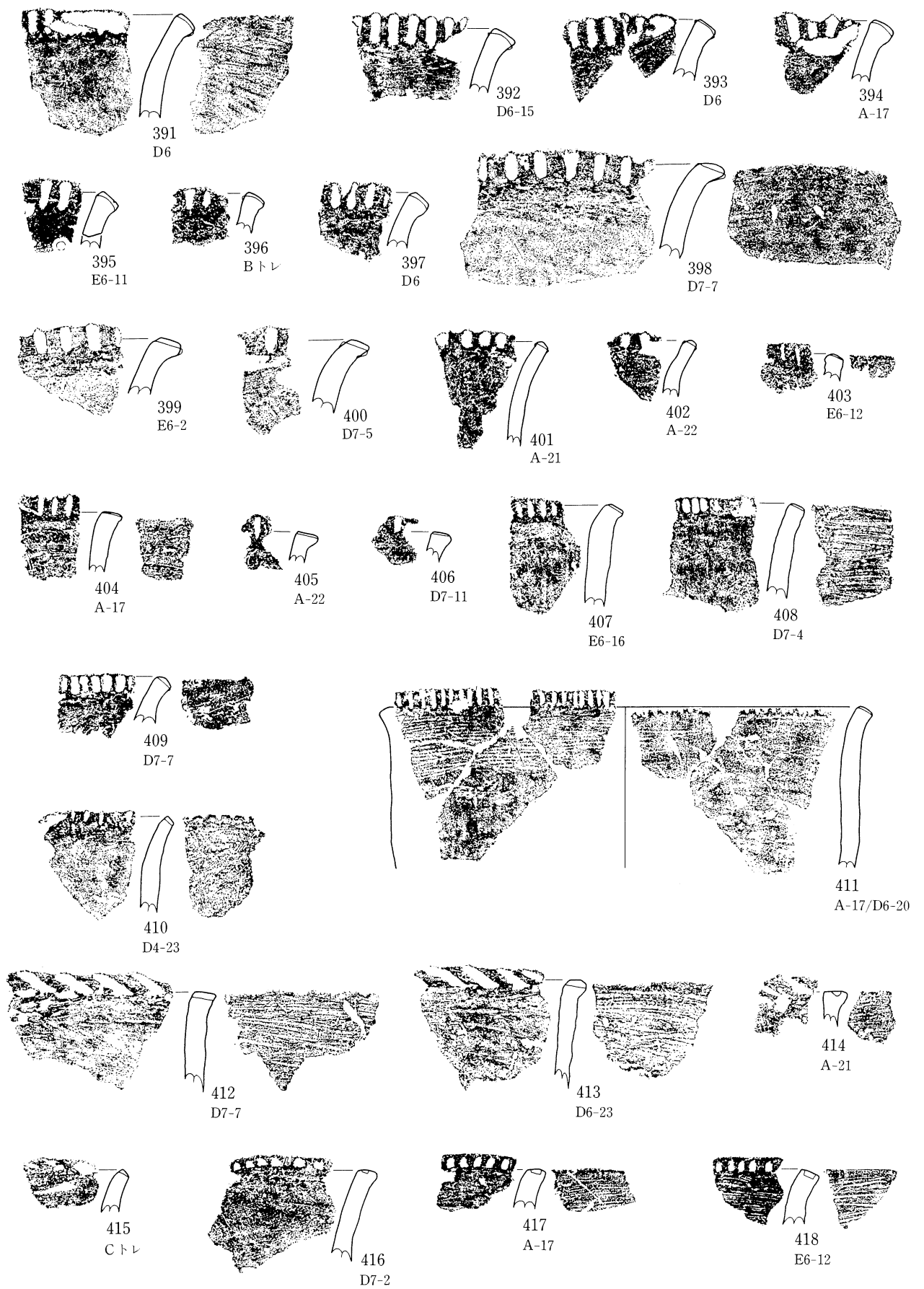
第50図 遺構外出土土器（9）C類・E類



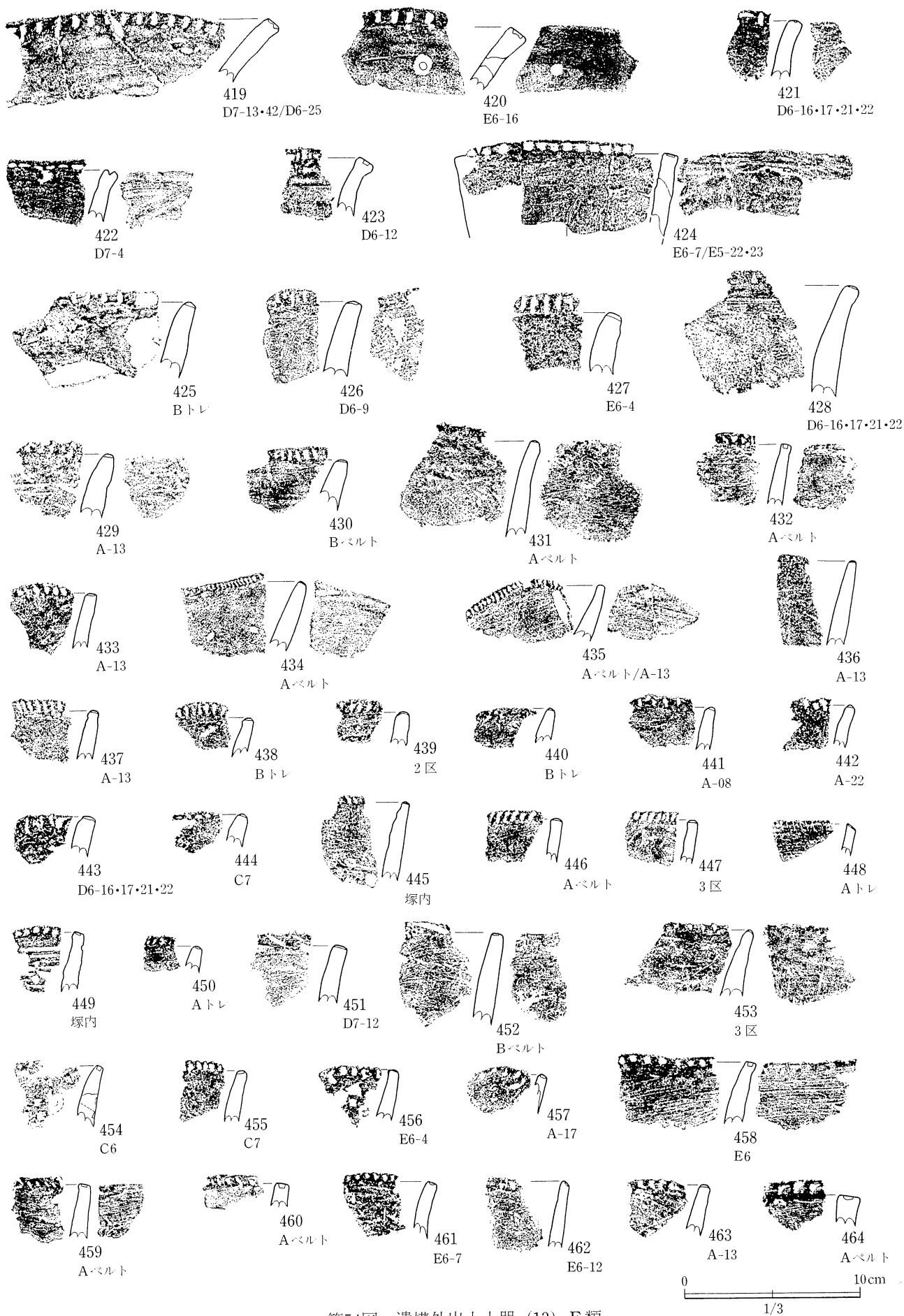
第51図 遺構外出土土器 (10) C類・D類



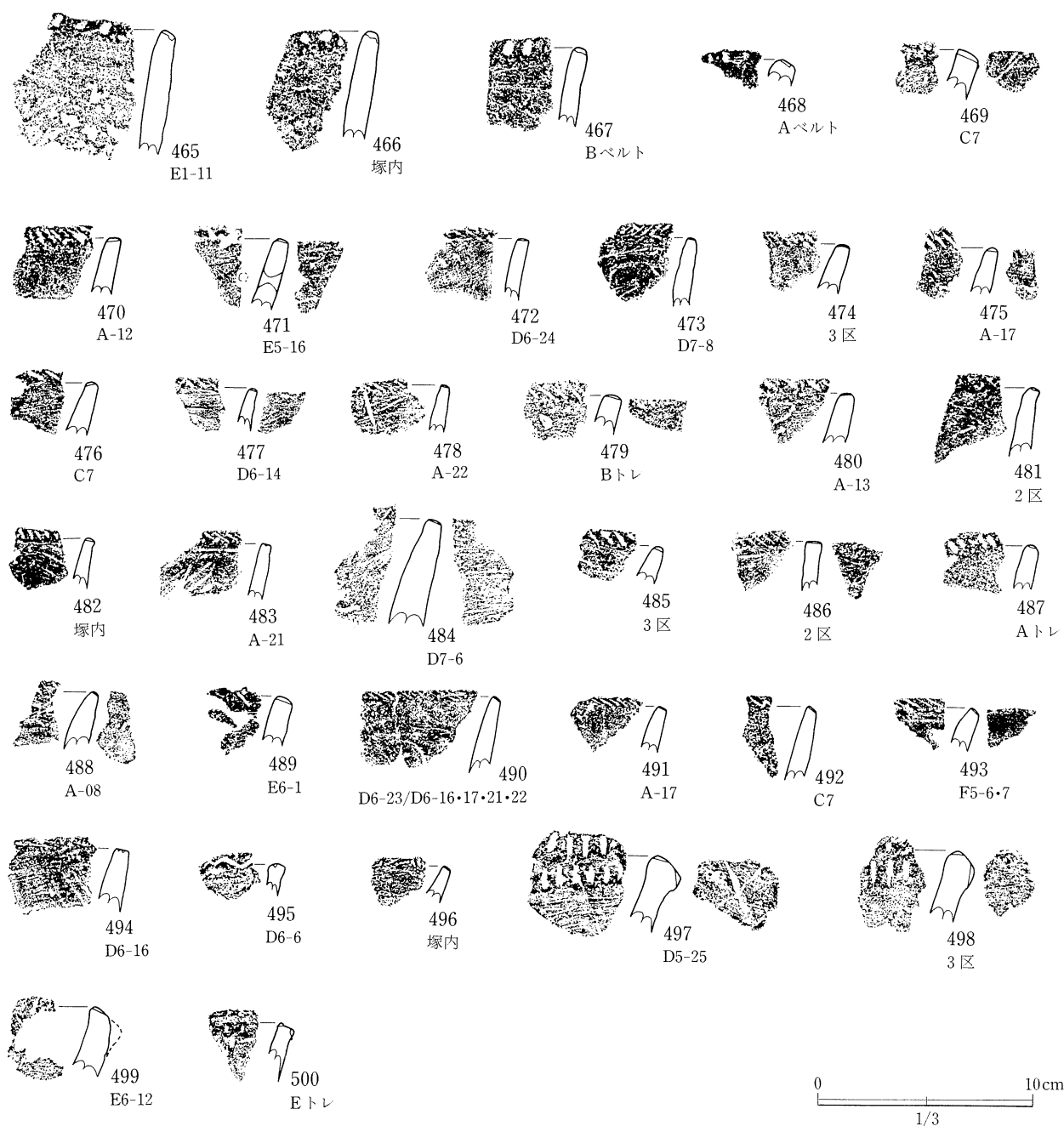
第52図 遺構外出土土器 (11) E類



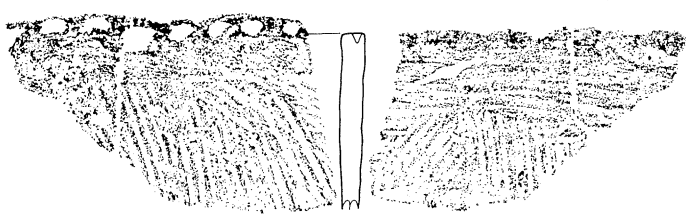
第53図 遺構外出土土器 (12) F 類



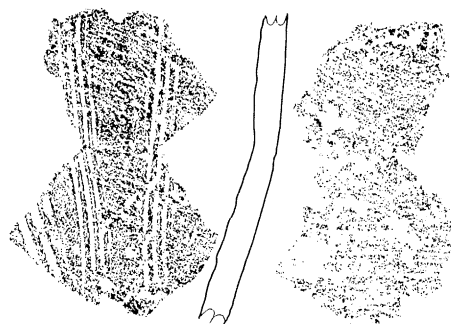
第54図 遺構外出土土器 (13) F類



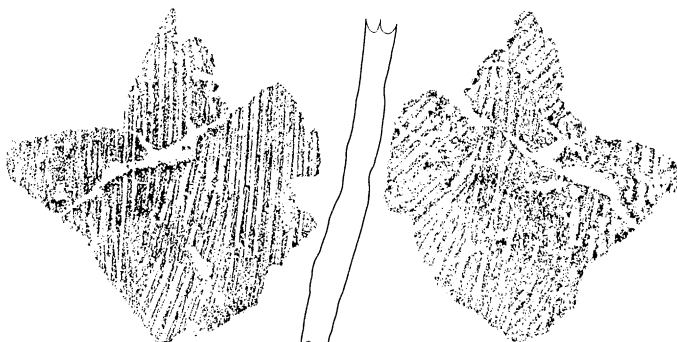
第55図 遺構外出土土器 (14) F類



501
D6-4



502
D6-25/D5



503
D5-24



504
E6-9



506
D5-24/D6-4



507
E6-2



505
D7-4



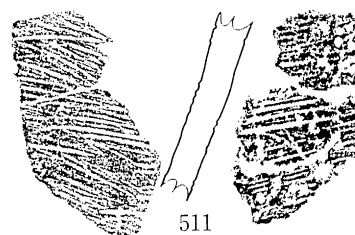
508
D6-4



509
3区



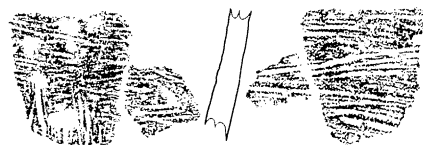
510
A-13



511
A-13



512
塚内/E3-6



513
塚内



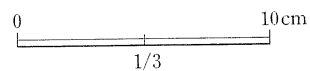
514
塚内



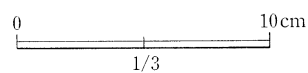
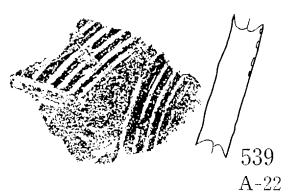
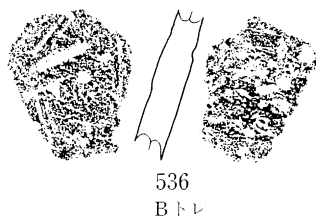
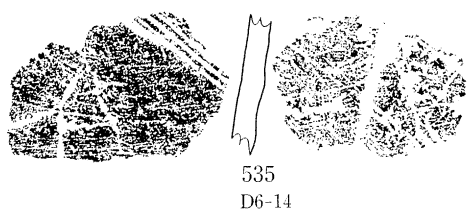
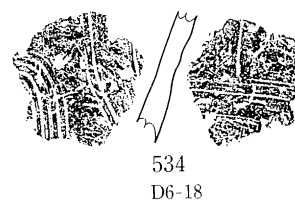
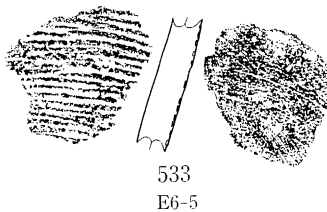
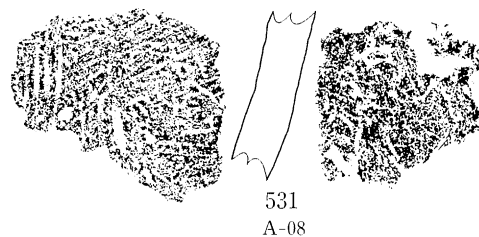
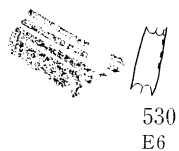
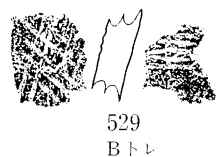
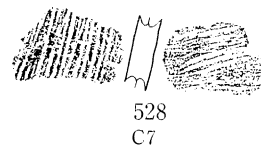
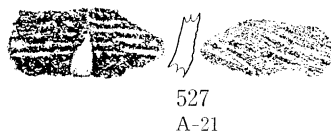
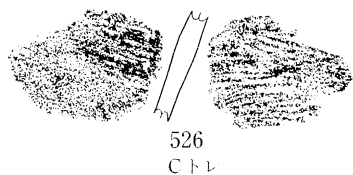
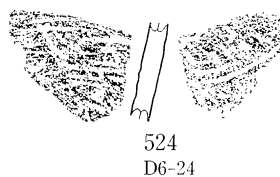
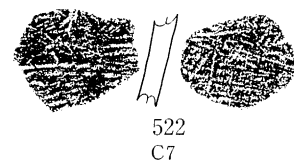
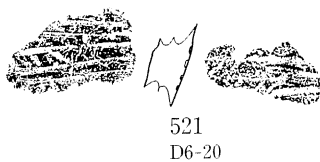
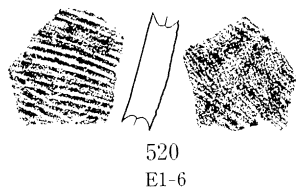
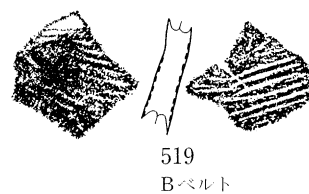
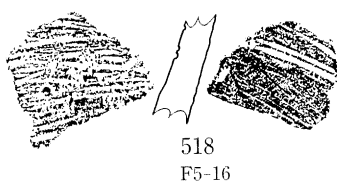
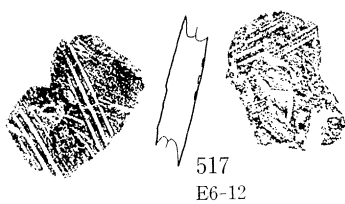
515
D5-25



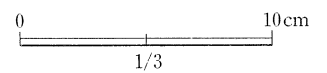
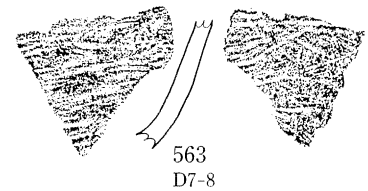
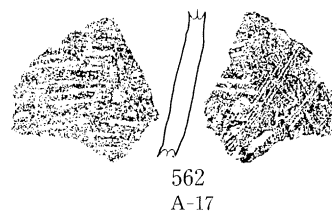
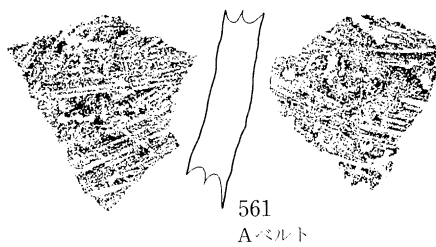
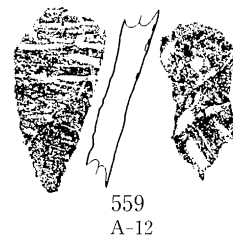
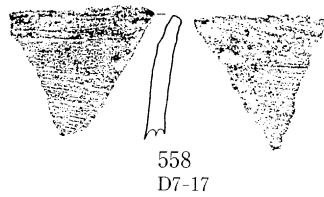
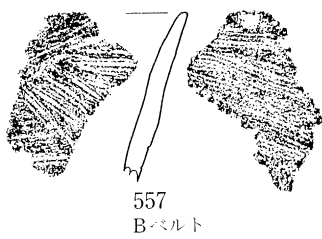
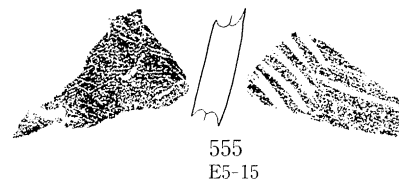
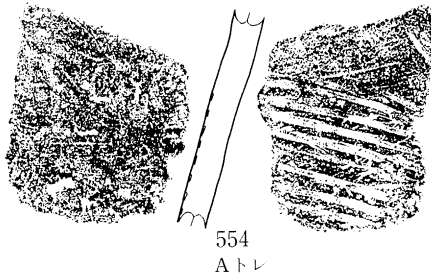
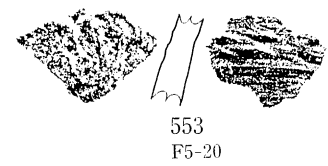
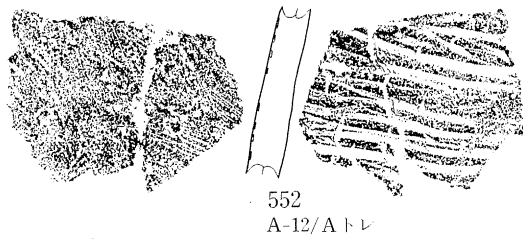
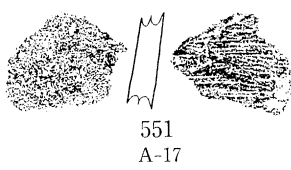
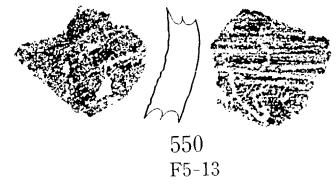
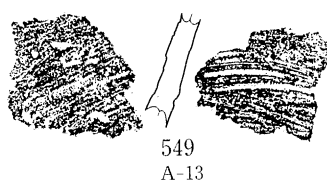
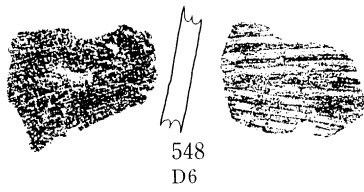
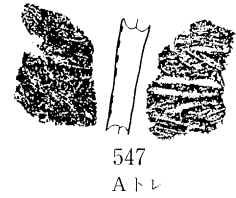
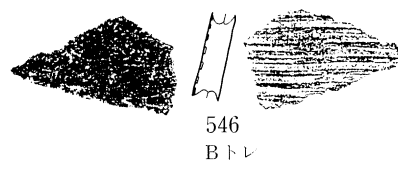
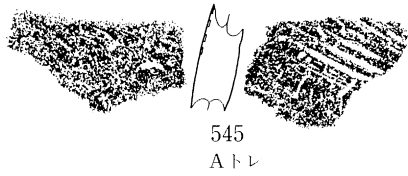
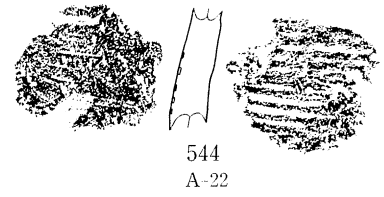
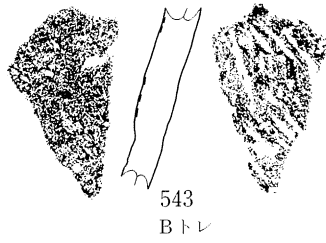
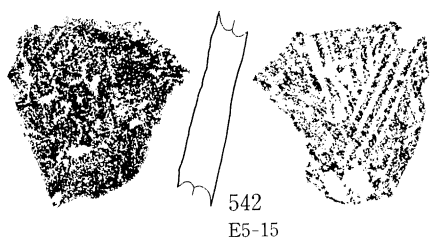
516
3区



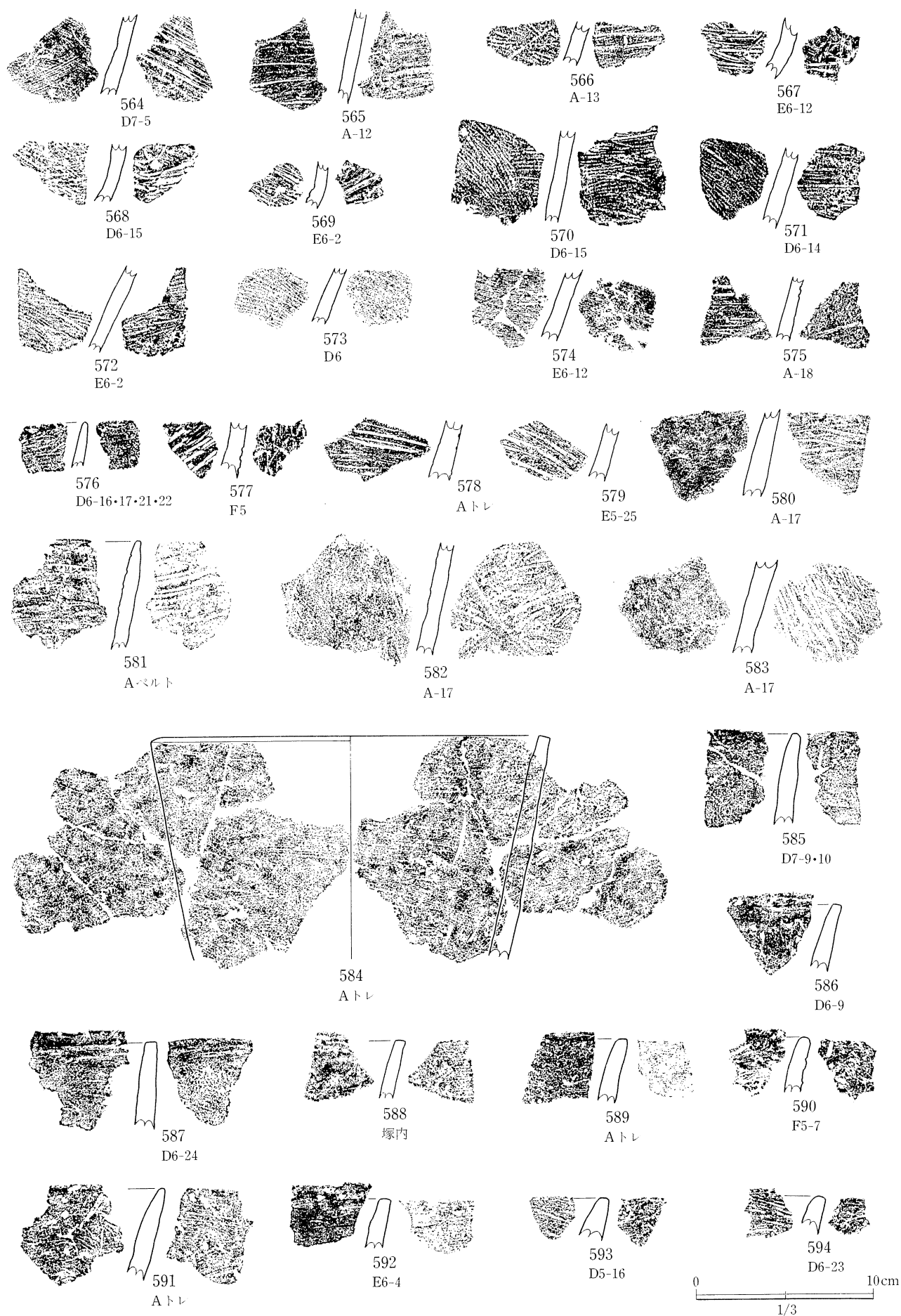
第56図 遺構外出土土器 (15) F類・G類



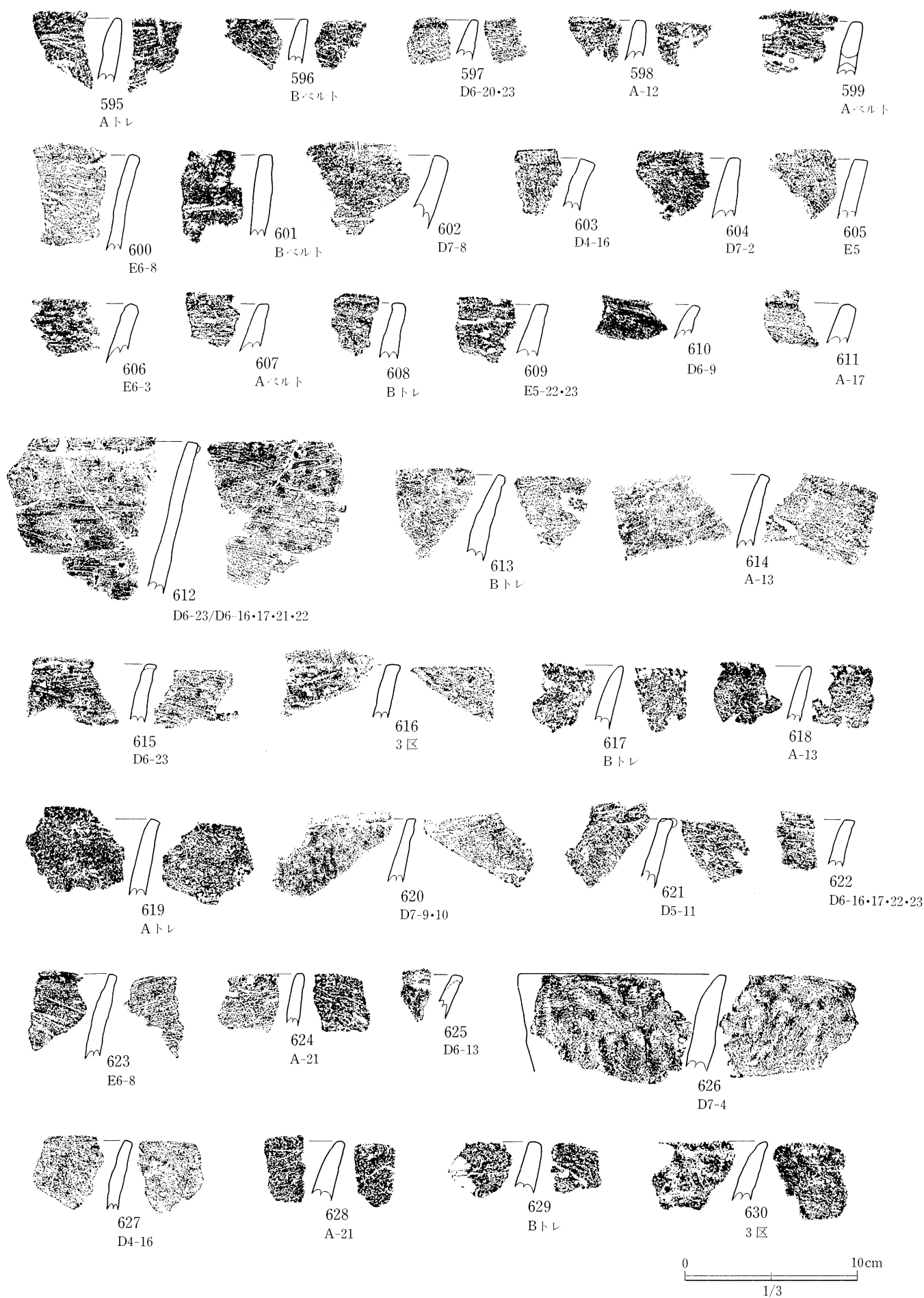
第57図 遺構外出土土器 (16) G類



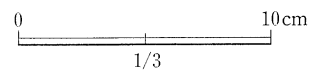
第58図 遺構外出土土器 (17) G類



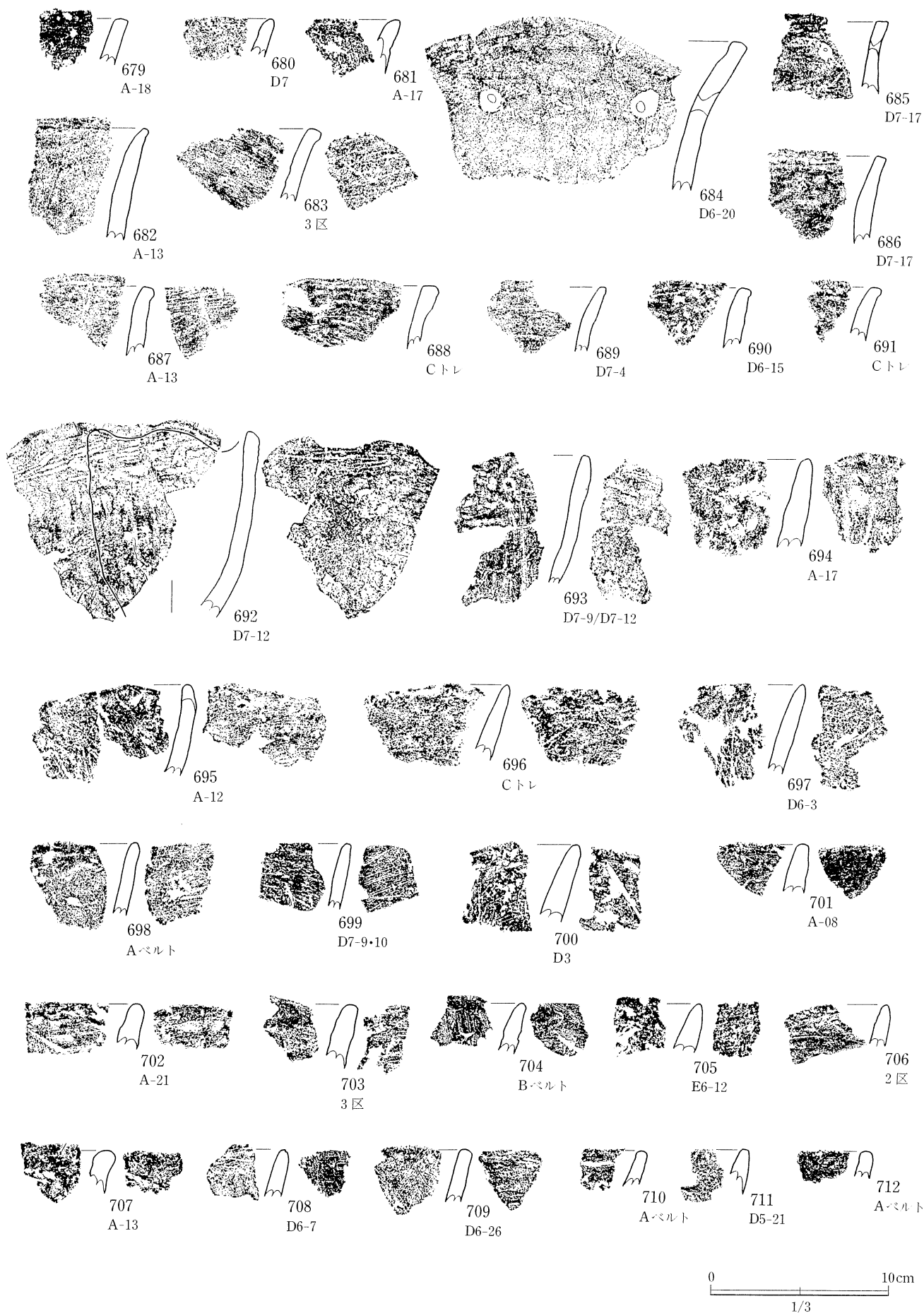
第59図 遺構外出土土器 (18) G類・H類



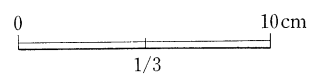
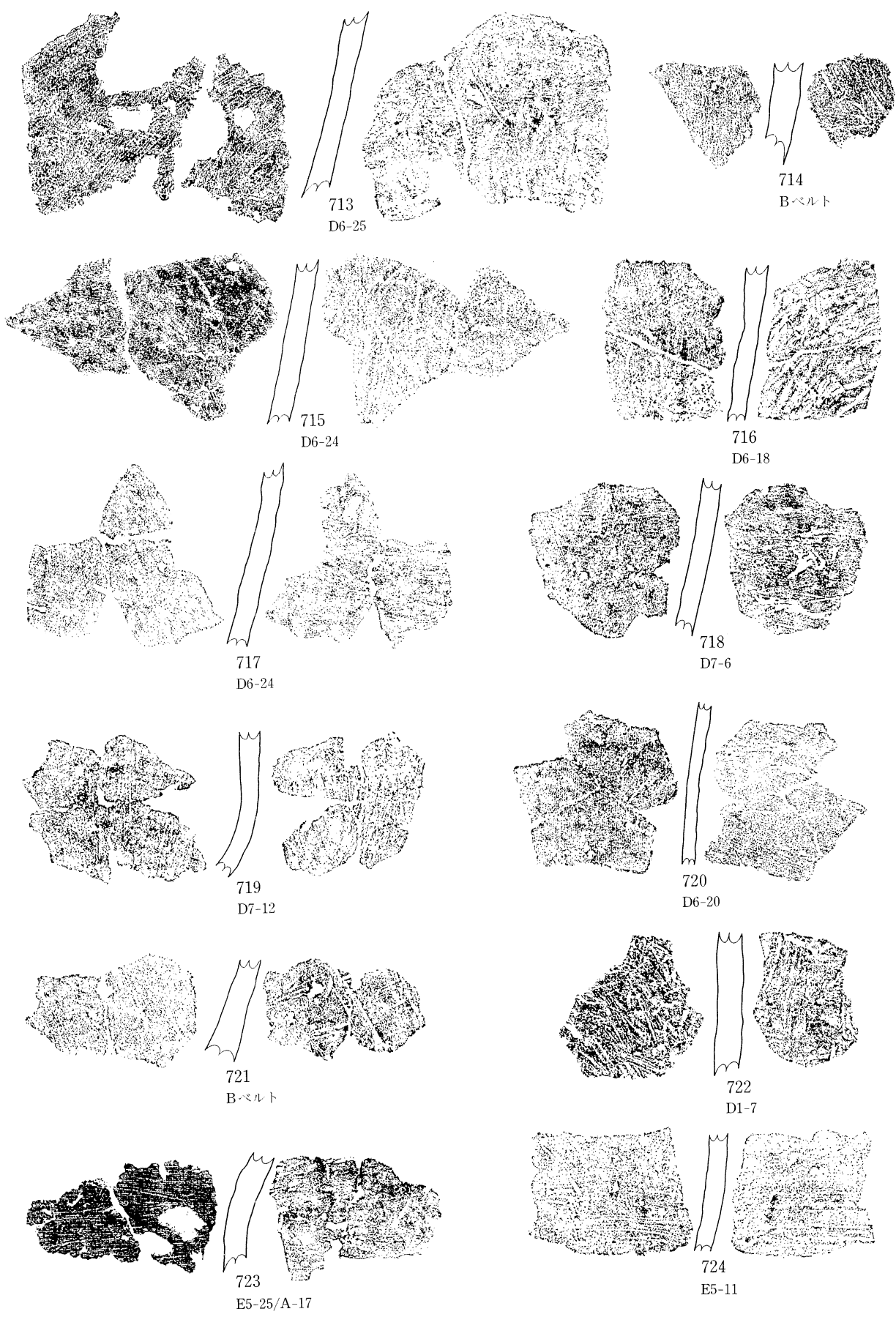
第60図 遺構外出土土器 (19) H類



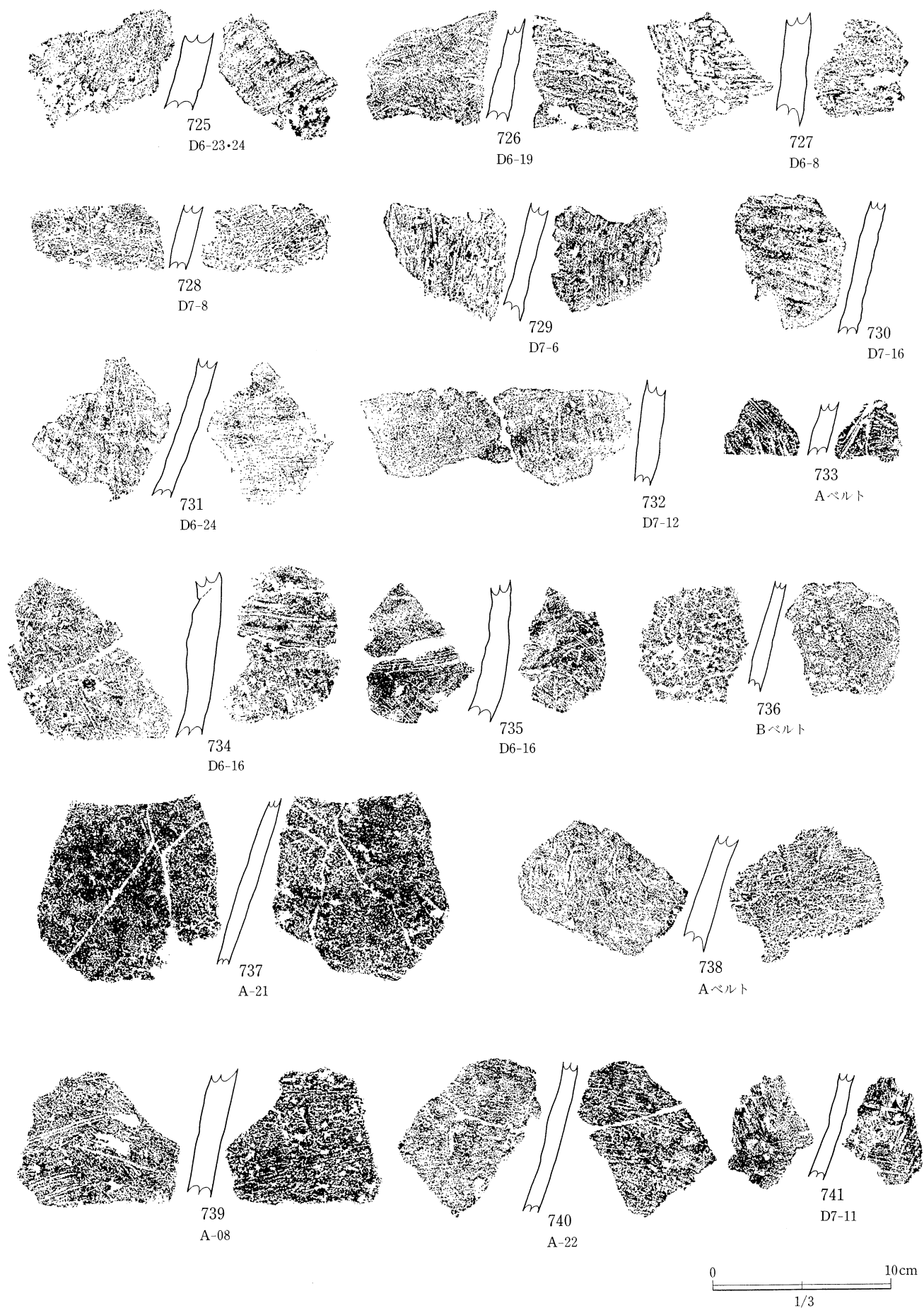
第61図 遺構外出土土器 (20) H類



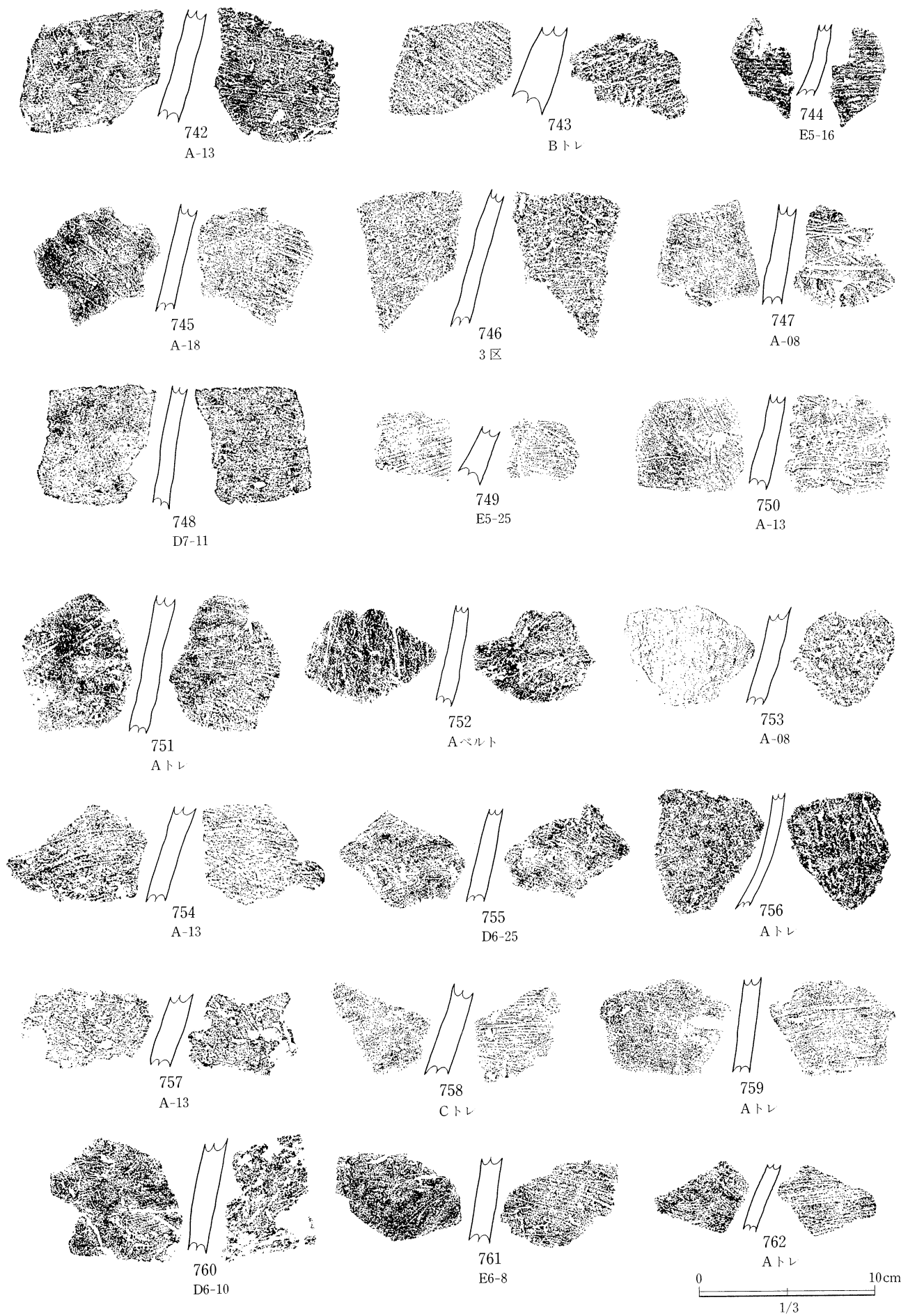
第62図 遺構外出土土器 (21) H類



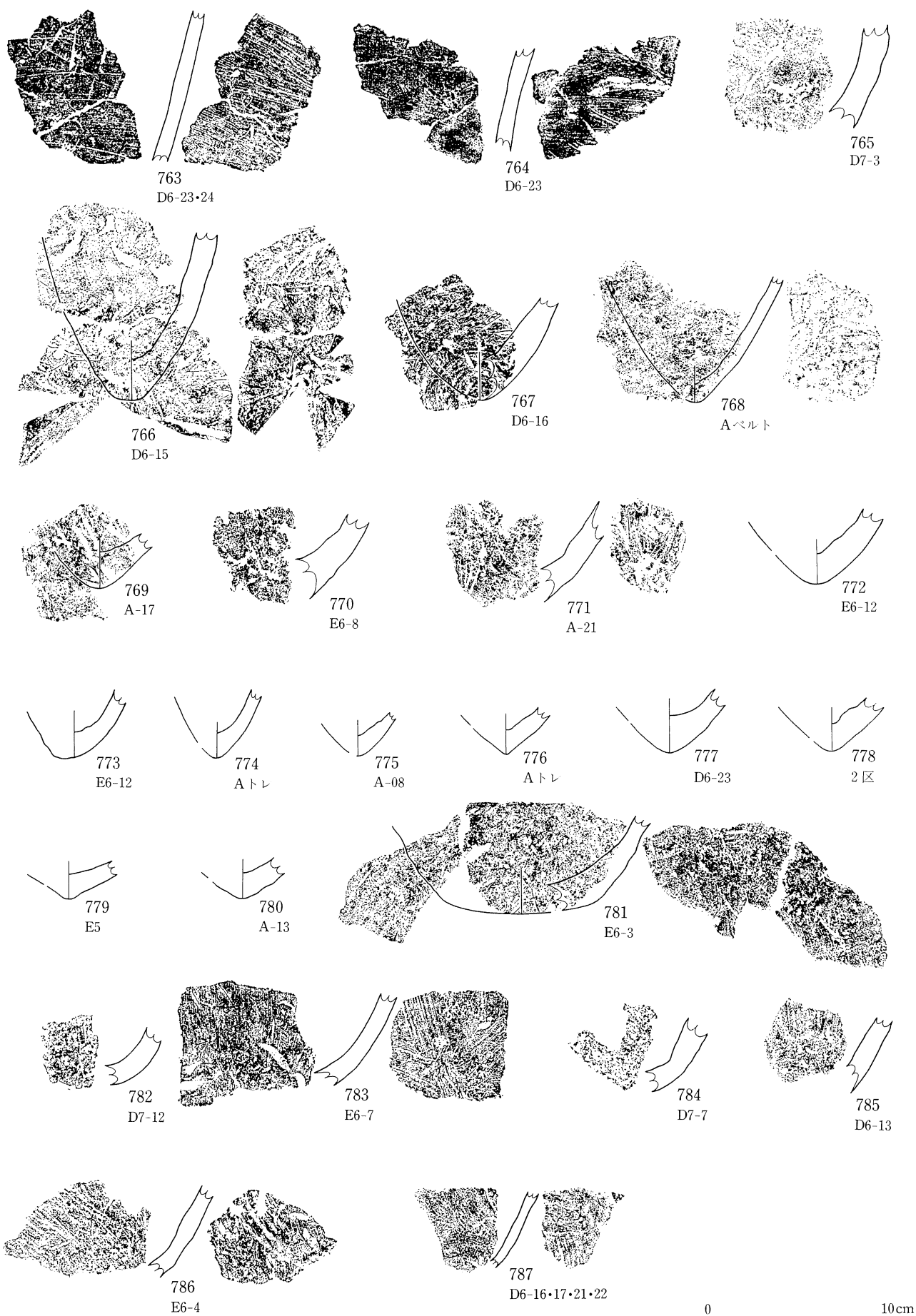
第63図 遺構外出土土器 (22) H類



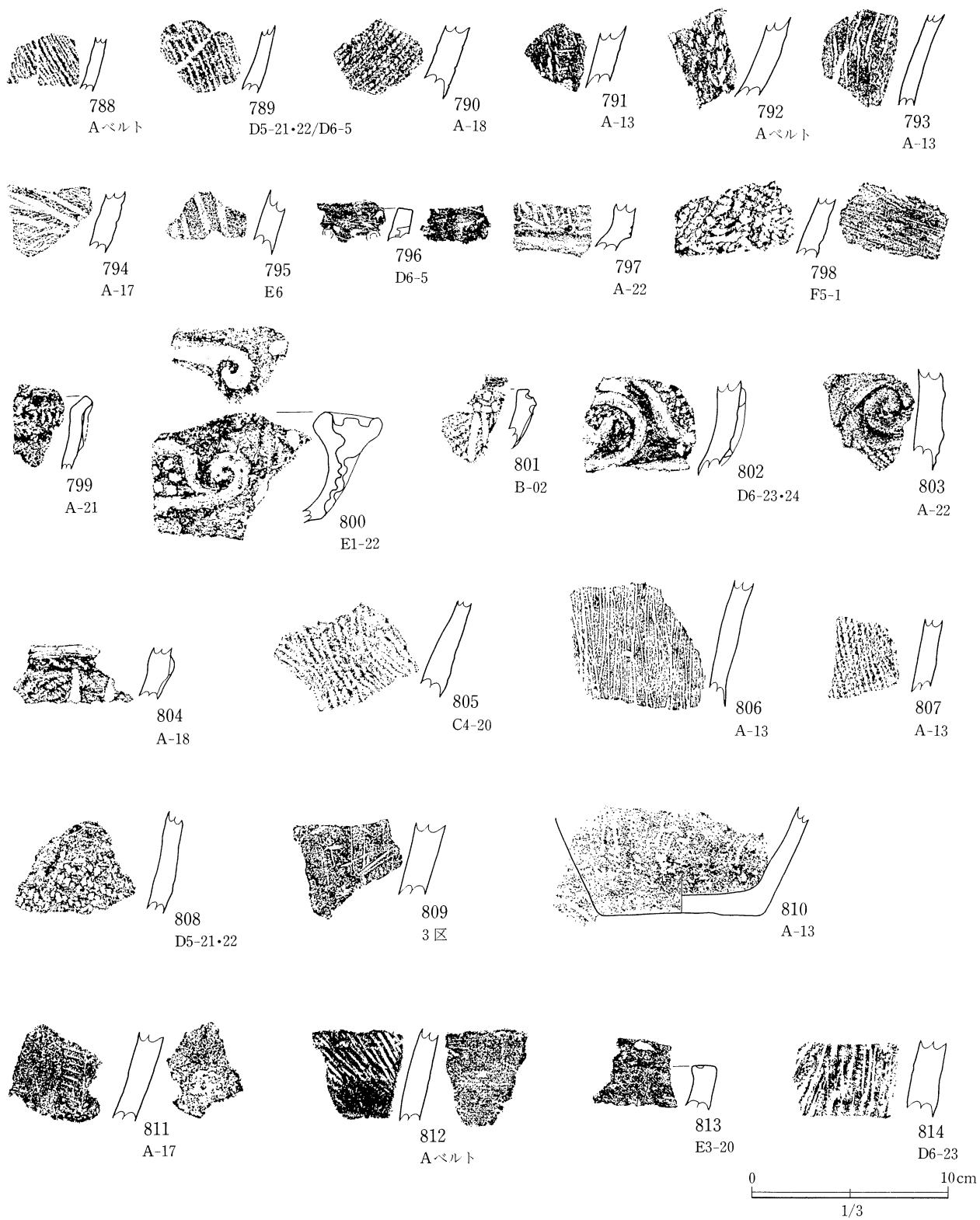
第64図 遺構外出土土器 (23) H類



第65図 遺構外出土土器 (24) H類



第66図 遺構外出土土器 (25) H類



第67図 遺構外出土土器 (26) I 類

遺構外出土石器（第4、5表・第68～76図）

出土遺物の分布状況は、土器や礫の分布状況と重なっている。石器も調査区東側の谷筋付近に多く見られる。遺構自体も緩斜面に沿って検出されていることもあり、もともとそれらの遺構に伴っていたと考えられる。

検出された剥片はほとんどが黒曜石であり、582点（916.2 g、うち遺構内51点：61.1 g）であった。今回は産地同定をおこなっていないため、どこに由来するものかは明らかではない。しかし、周辺地域で確認されている該期の遺跡との行動パターンなどの比較をする上で、今後産地がある程度特定できる石材については、検討する必要がある。

剥片石器については上記のように黒曜石が多い。自然面が残されている剥片はほとんどなく、この地以外の場所で粗割、分割がおこなわれたことになる。また個々の剥片自体も大形のものはなく、石器製作の工程の中でも終わりに近い状況だったのではないだろうか。碎片はほとんど確認されていないため、当遺跡内で製品が作られたものか、持ち込まれたものかの判断は困難である。

石鏃は未製品を含め、65点が確認されている。黒曜石製57点、珪質頁岩製7点、凝灰質頁岩製1点であった。形態は一定せず、比較的整ったものから不定形剥片に調整を施したものまで、幅がある。形態的に共通していると思われるのは、脚の凹の部分があり決られていないことである。もちろん例外的なものもある。尖頭器は3点（第71図66～68）であるが、基部側が欠損しているため、石鏃の可能性もある。他には、搔器2点、石錐1点、削片1点がみられた。楔形石器は5点出土しているが、両極技法を多用する時代にしては少ないと言える。UF（使用痕のある剥片）・RF（二次加工のある剥片）はそれぞれ7点、9点であった。黒曜石の石核は14点である（図化していないもの2点含む）。打面を固定し剥片剥離をおこなうものではなく、剥離作業面を打面とするものや、交互に入れ替えながらの剥離の進行が見られる。その中でも第73図96、97の石核については、他のものと性格が異なり、打面を一定にし剥離をおこなっている。剥離の進行方向も一定で、後退していたものとみられる。第71図69は、ホルンフェルス製の鋸歯状石器である。刃部の作り出しは丁寧である。形態など類例は見当たらないが、工具としての利用が考えられる。

調査区全体から検出された礫は2,682点（288,140.7 g）である。それに比して、石核石器と認められたのは28点のみであり、非常に製品が少ないことが明らかである。

第75図1～7までが、打製・磨製石斧である（図化していないもの他に4点）。特に3は礫斧に相当し、打撃による剥離面は確認できず、直方体の礫をそのまま素材とし、刃部となる部分を両面から磨き出している。8～11は礫斧である。非常に粗い作りであるが、8は両刃である。12は石錘であり、1点のみ認められた。珪質頁岩を使用した理由や使用目的など、判然としない。磨石は遺構内で5点確認されており、遺構外からは、図化していないものを含め4点である。使い込んでいるものは遺構内から検出されている。敲石は7点確認されている。遺構内からの出土はみられない。第76図22は石皿である。欠損品であり全体の状況は把握できないが、全体の1/6程の依存度であろうか。石材は049炉穴出土石皿と同様、いわゆる多孔質の安山岩である。これは、一般的に石皿の石材として用いられるものである。第75図2の磨製石斧は、その形状から、弥生時代の所産である可能性がある。ただ、調査によって出土した弥生土器は皆無である。

第3表 遺構内出土石器観察表

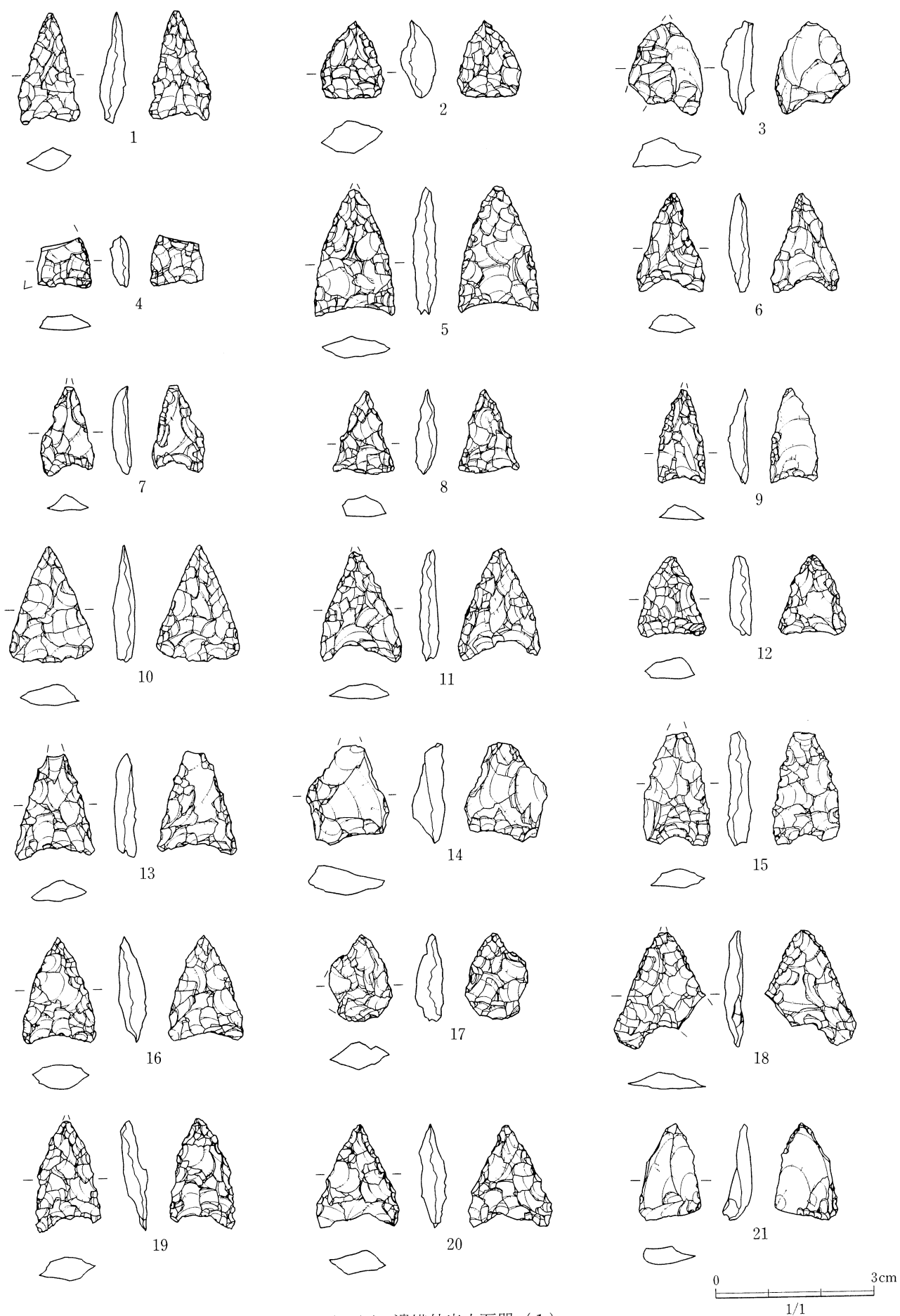
挿図番号	出土遺構	器種	石材	長さcm	幅	厚さ	重量g
第10図 17	0 1 1	磨石	デイサイト	9.80	7.10	4.60	447.0
第10図 26	0 3 7	R F	黒曜石	1.40	1.01	0.41	0.4
第10図 27	0 3 7	楔形石器	黒曜石	1.90	1.27	0.58	1.2
第10図 28	0 3 7	U F	黒曜石	2.39	2.25	1.07	3.1
第13図 60	0 3 8	磨石	安山岩	9.10	6.60	3.50	390.4
第13図 61	0 3 8	石鏃	黒曜石	1.47	1.15	0.27	0.3
第13図 62	0 3 8	搔器	黒曜石	1.89	2.15	0.93	2.4
第14図 86	0 4 4	鏃斧	ホルンフェ	6.00	5.50	1.90	63.1
第19図 139	0 6 6	石鏃	黒曜石	1.69	1.40	0.36	0.6
第19図 140	0 6 6	石鏃	チャート	1.50	1.31	0.32	0.5
第19図 141	0 6 6	U F	黒曜石	1.32	2.32	0.73	1.4
第19図 142	0 6 6	磨製石斧	ホルンフェ	8.90	5.80	4.40	351.7
第19図 143	0 6 6	凹石	ドレライト	6.30	4.90	4.80	207.9
第24図 77	0 4 9	石皿	安山岩	15.10	8.70	4.90	848.9
第26図 4	0 0 5	U F	黒曜石	1.61	2.20	0.61	1.9
第29図 75	0 4 7	石核	黒曜石	1.75	2.26	1.45	5.1
第31図 115	0 5 0	磨石	砂岩	9.40	6.00	3.90	336.7
第32図 21	0 5 1	磨石	砂岩	7.30	7.80	4.40	321.7
第36図 112	0 5 3	石鏃	黒曜石	2.11	1.53	0.63	1.8
第38図 122	0 2 1	磨石	流紋岩	7.90	5.80	2.10	143.9
第38図 123	0 2 1	石鏃未製品	黒曜石	2.13	1.61	0.65	1.6

第4表 遺構外出土石器観察表 (1)

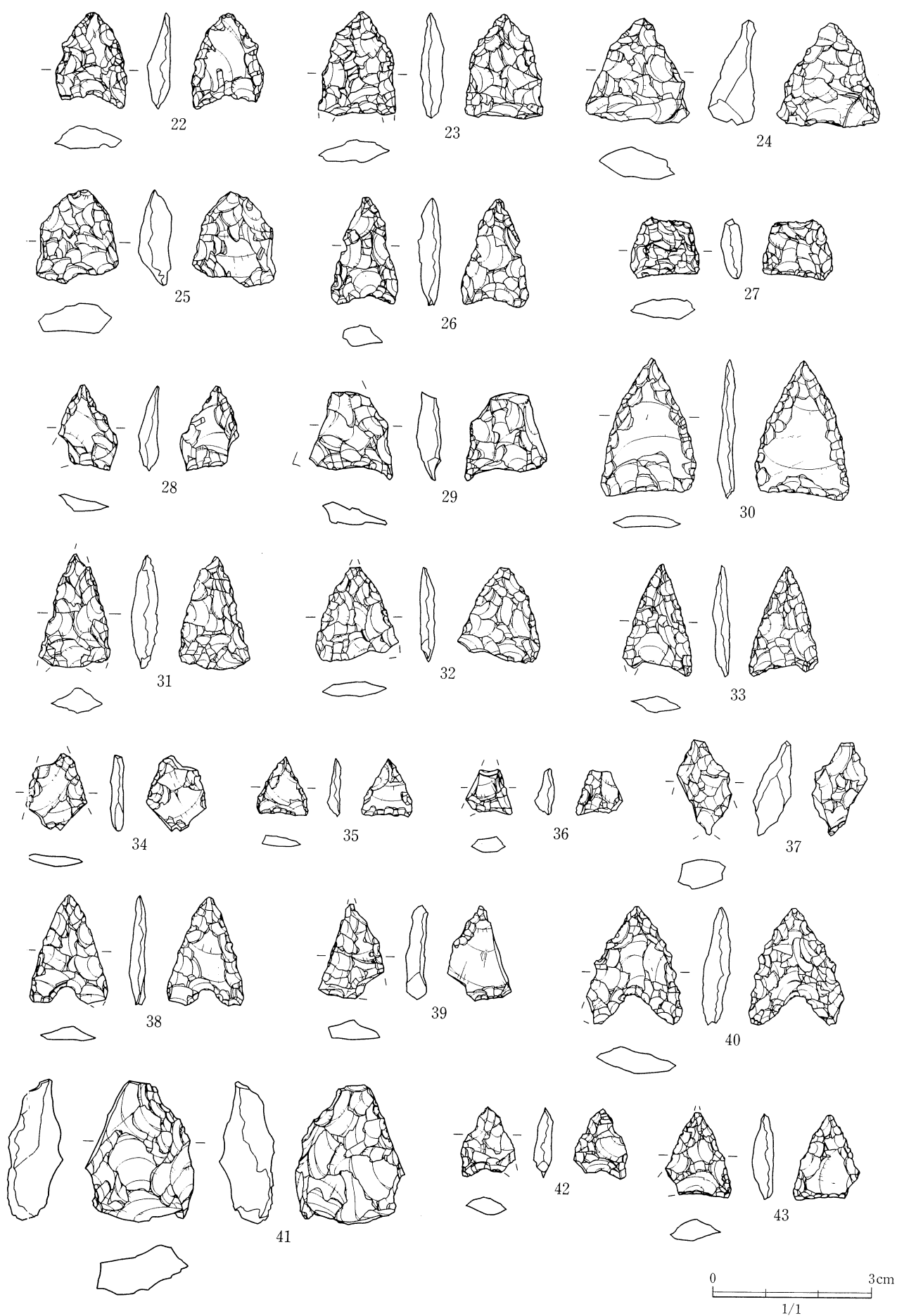
挿図番号	出土位置	器種	石材	長さcm	幅	厚さ	重量g
第68図 1	D4-11	石鏃	黒曜石	2.08	1.16	0.50	0.8
第68図 2	D6-5	石鏃	黒曜石	1.42	1.22	0.68	1.0
第68図 3	D6-16・17	石鏃	黒曜石	1.74	1.40	0.62	1.1
第68図 4	D6-10	石鏃	黒曜石	0.93	1.01	0.31	0.3
第68図 5	D7-8	石鏃	黒曜石	2.38	1.50	0.45	1.3
第68図 6	D7-12	石鏃	黒曜石	1.84	1.30	0.39	0.7
第68図 7	E5-22・23	石鏃	黒曜石	1.64	0.98	0.34	0.4
第68図 8	E5-25	石鏃	黒曜石	1.55	1.17	0.38	0.5
第68図 9	E6-7	石鏃	黒曜石	1.77	0.90	0.36	0.5
第68図 10	E6-12	石鏃	珪質頁岩	2.17	1.57	0.43	1.2
第68図 11	F3-2	石鏃	黒曜石	2.07	1.52	0.32	0.9
第68図 12	F5-4	石鏃	黒曜石	1.50	1.28	0.42	0.7
第68図 13	F5-12	石鏃	珪質頁岩	1.96	1.51	0.39	1.0
第68図 14	D7-8	石鏃	黒曜石	1.86	1.52	0.58	1.3
第68図 15	A-08	石鏃	黒曜石	2.10	0.25	0.43	0.9
第68図 16	A-08	石鏃	黒曜石	1.98	0.36	0.53	0.9
第68図 17	A-08	石鏃	黒曜石	1.62	1.12	0.54	0.9
第68図 18	A-08	石鏃	黒曜石	2.15	1.70	0.28	0.7
第68図 19	A-12	石鏃	黒曜石	2.05	1.20	0.46	0.7
第68図 20	A-12	石鏃	黒曜石	1.92	1.53	0.53	1.1
第68図 21	A-12	石鏃	黒曜石	1.84	1.17	0.57	0.7
第69図 22	A-13	石鏃	黒曜石	1.78	1.34	0.40	0.7
第69図 23	A-13	石鏃	黒曜石	1.95	1.43	0.45	1.1
第69図 24	A-13	石鏃	黒曜石	1.95	1.89	0.85	2.1
第69図 25	A-13	石鏃	黒曜石	1.75	1.55	0.65	1.7
第69図 26	A-13	石鏃	黒曜石	2.00	1.24	0.42	0.8
第69図 27	A-13	石鏃	黒曜石	1.11	1.28	0.39	0.6
第69図 28	A-13	石鏃	黒曜石	1.60	1.07	0.35	0.5
第69図 29	A-13	石鏃	黒曜石	1.66	1.56	0.50	1.0
第69図 30	A-13	石鏃	珪質頁岩	2.55	1.77	0.27	1.2
第69図 31	A-17	石鏃	黒曜石	2.08	1.33	0.50	1.0
第69図 32	A-17	石鏃	珪質頁岩	1.74	1.54	0.30	0.8
第69図 33	A-17	石鏃	珪質頁岩	2.10	1.30	0.32	0.6
第69図 34	A-17	石鏃	黒曜石	1.42	1.13	0.25	0.4
第69図 35	A-17	石鏃	黒曜石	1.06	0.96	0.22	0.2
第69図 36	A-17	石鏃	黒曜石	0.85	0.85	0.35	0.2
第69図 37	A-17	石鏃	黒曜石	1.80	0.97	0.70	0.8
第69図 38	A-22	石鏃	珪質頁岩	2.03	1.45	0.28	0.7
第69図 39	A-22	石鏃	黒曜石	1.75	1.22	0.42	0.7
第69図 40	A-22	石鏃	黒曜石	2.20	1.80	0.51	1.3
第69図 41	A-18	石鏃	黒曜石	2.68	2.05	1.06	4.7
第69図 42	B-02	石鏃	黒曜石	1.30	1.01	0.32	0.4
第69図 43	Aトレ	石鏃	黒曜石	1.62	1.25	0.39	0.6
第70図 44	Aトレ	石鏃	黒曜石	2.04	1.40	0.50	1.1
第70図 45	Aトレ	石鏃	黒曜石	1.46	1.29	0.42	0.6
第70図 46	Aベルト	石鏃	黒曜石	1.61	1.27	0.38	0.5
第70図 47	Cトレ	石鏃	黒曜石	1.06	0.91	0.39	0.4

挿図番号	出土遺構	器種	石材	長さcm	幅	厚さ	重量g
第70図 48	3区	石鏃	珪質頁岩	2.55	1.91	0.33	1.3
第70図 49	塚II	石鏃	黒曜石	2.49	1.57	0.47	1.4
第70図 50	塚内	石鏃	黒曜石	1.95	1.58	0.52	1.2
第70図 51	塚内	石鏃	黒曜石	1.39	1.29	0.34	0.5
第70図 52	塚内	石鏃	黒曜石	1.55	1.20	0.48	0.7
第70図 53	塚内	石鏃	凝灰質頁岩	2.05	1.56	0.37	0.7
第70図 54	塚内	石鏃	黒曜石	1.38	0.90	0.35	0.4
第70図 55	2次表採	石鏃	黒曜石	1.16	1.02	0.22	0.3
第70図 56	2次表採	石鏃	黒曜石	1.41	1.08	0.33	0.4
第70図 57	2次表採	石鏃	黒曜石	1.81	1.24	0.35	0.6
第70図 58	2次表採	石鏃	黒曜石	1.81	1.44	0.40	0.9
第70図 59	D4-11	石鏃	黒曜石	0.87	0.39	0.37	0.5
第70図 60	F5-25	石鏃未製品	黒曜石	1.41	1.25	0.59	0.7
第70図 61	F5-6	石鏃未製品	黒曜石	1.62	1.19	0.36	0.8
第70図 62	塚内	石鏃未製品	黒曜石	1.76	1.43	0.67	1.3
第70図 63	塚内	石鏃未製品	黒曜石	2.75	2.10	1.01	4.5
第70図 64	B-02	石鏃未製品	黒曜石	1.32	1.05	0.32	0.4
第70図 65	F5-4	石鏃未製品	黒曜石	2.27	1.59	0.63	2.0
第71図 69	D5-17	尖頭器	黒曜石	1.83	1.28	0.41	0.7
第71図 67	A-13	尖頭器	黒曜石	1.99	1.66	0.45	0.9
第71図 68	Aベルト	尖頭器	黒曜石	1.77	1.45	0.44	0.9
第71図 69	2区	鋸歯状石器	ホルンフェ	5.47	2.54	0.51	10.3
第71図 70	D6-3	搔器	黒曜石	2.21	1.88	0.76	2.8
第71図 71	D7-8	搔器	黒曜石	1.75	1.00	0.55	0.9
第71図 72	F5-25	削片	黒曜石	2.54	0.99	0.85	1.7
第71図 73	A-17	石鏃	黒曜石	1.99	0.79	0.39	0.4
第71図 74	D6-14	楔形石器	黒曜石	2.02	1.86	0.98	2.8
第71図 75	D6-23	楔形石器	黒曜石	2.51	1.81	1.00	3.9
第71図 76	F6-7	楔形石器	黒曜石	1.93	1.44	0.36	0.9
第71図 77	F5-3	楔形石器	黒曜石	2.28	1.98	1.05	4.4
第71図 78	E6	楔形石器	黒曜石	1.63	2.10	0.80	2.1
第71図 79	塚内	R F	黒曜石	2.45	1.48	0.51	1.1
第71図 80	F5-16	R F	黒曜石	2.20	2.73	1.25	4.6
第71図 81	C4-23	R F	黒曜石	1.68	1.86	0.64	1.7
第72図 82	D6-16・17	R F	黒曜石	1.70	2.33	0.63	1.8
第72図 83	塚内	R F	黒曜石	1.80	1.55	0.51	1.0
第72図 84	A-17	R F	黒曜石	1.30	1.83	0.45	0.8
第72図 85	A-17	R F	黒曜石	2.70	2.07	0.66	2.4
第72図 86	塚内	R F	黒曜石	2.29	2.06	1.16	4.9
第72図 87	D6-23	R F	黒曜石	2.09	1.92	0.74	3.2
第72図 88	D6-15	U F	黒曜石	3.95	2.03	1.26	3.4
第72図 89	3区	U F	黒曜石	2.26	3.24	0.95	4.4
第72図 90	Bベルト	U F	黒曜石	3.09	1.75	0.95	4.2
第72図 91	E6-12	U F	黒曜石	2.26	1.04	0.95	1.6
第72図 92	E6-17	U F	黒曜石	1.99	1.31	0.54	0.8
第72図 93	D7	U F	黒曜石	2.53	1.81	0.95	3.7
第72図 94	F4-9	U F	黒曜石	2.05	1.10	0.56	0.8
第72図 95	Aトレ	石核	黒曜石	1.11	1.94	1.44	2.7
第73図 96	D3	石核	黒曜石	2.23	1.55	2.23	7.3
第73図 97	D4-11	石核	黒曜石	2.32	1.32	2.57	6.3
第73図 98	A-17	石核	黒曜石	3.12	2.82	1.25	8.6
第73図 99	D6-16・17	石核	黒曜石	2.40	2.12	2.03	8.4
第73図 100	A-13	石核	黒曜石	2.16	2.21	1.10	4.3
第73図 101	A-13	石核	黒曜石	3.37	2.87	1.13	17.4
第73図 102	A-13	石核	黒曜石	2.21	1.78	1.81	6.4
第74図 103	A-22	石核	黒曜石	2.80	4.19	1.84	18.0
第74図 104	E6-3	石核	黒曜石	1.63	1.67	3.62	8.0
第74図 105	A-13	石核	黒曜石	4.09	2.96	2.50	28.0
第74図 106	Aトレ	石核	黒曜石	2.58	2.77	1.32	8.9

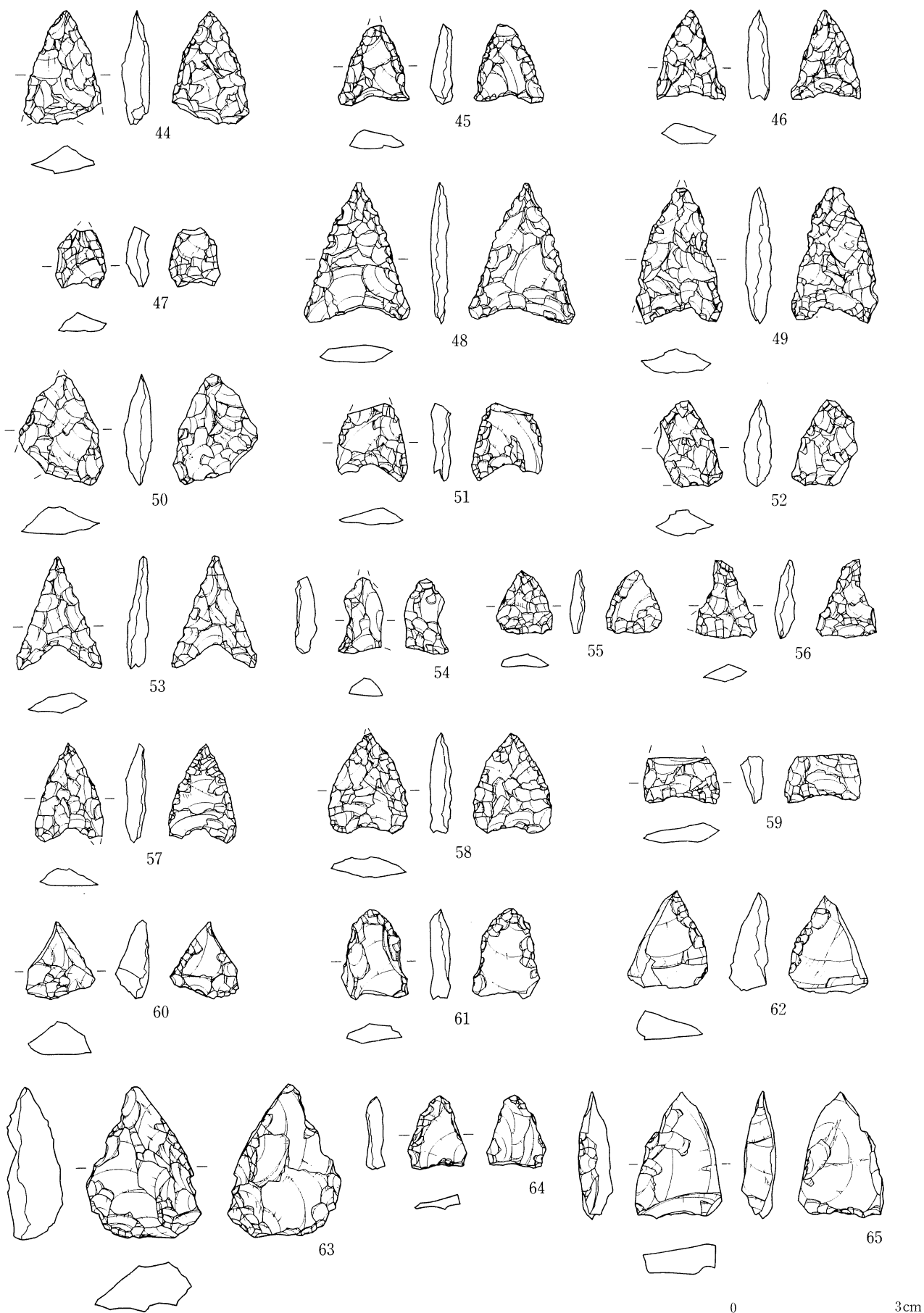
凡例 R F 二次加工のある剥片
U F 使用痕のある剥片
 欠損のため現存値



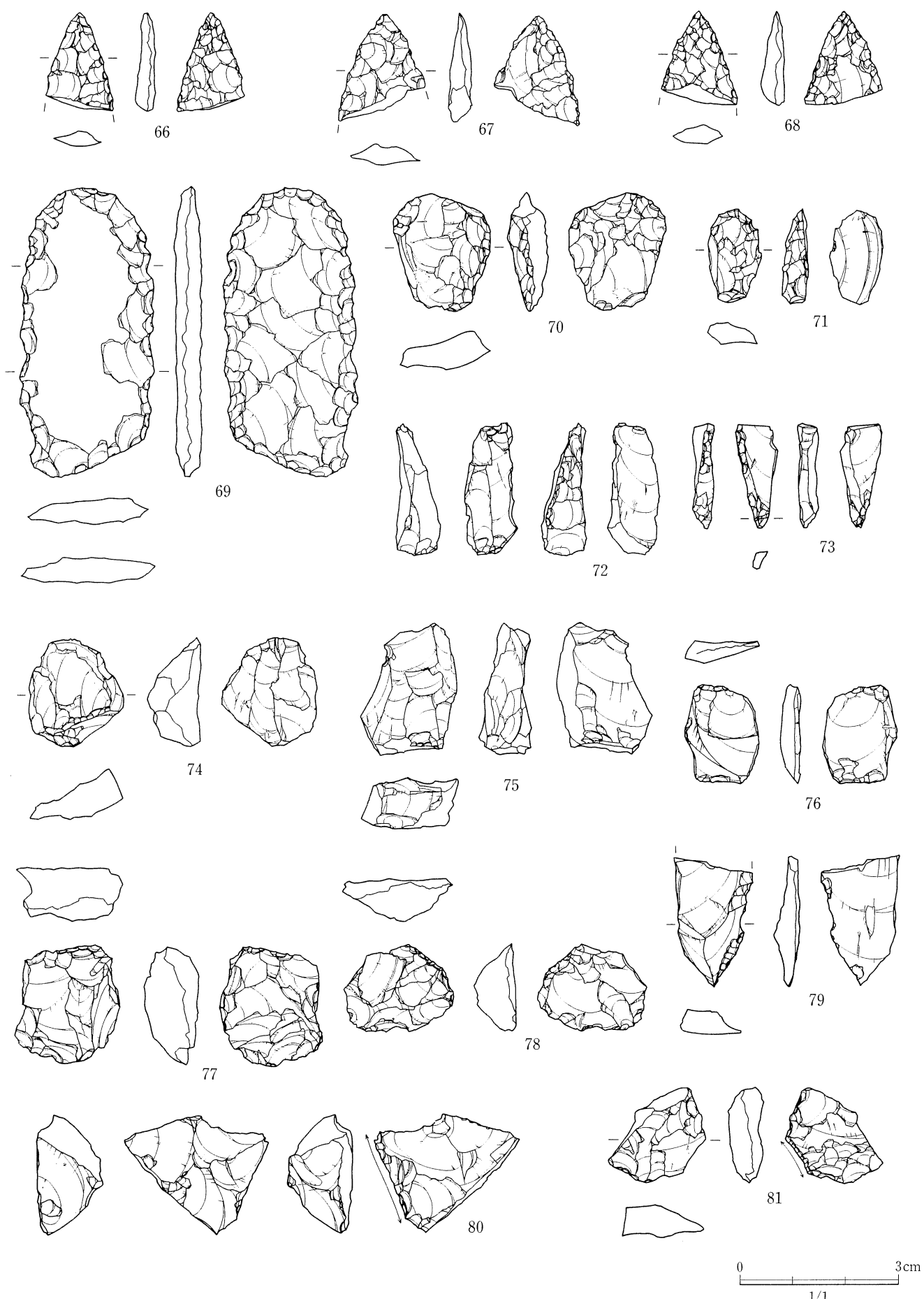
第68図 遺構外出土石器（1）



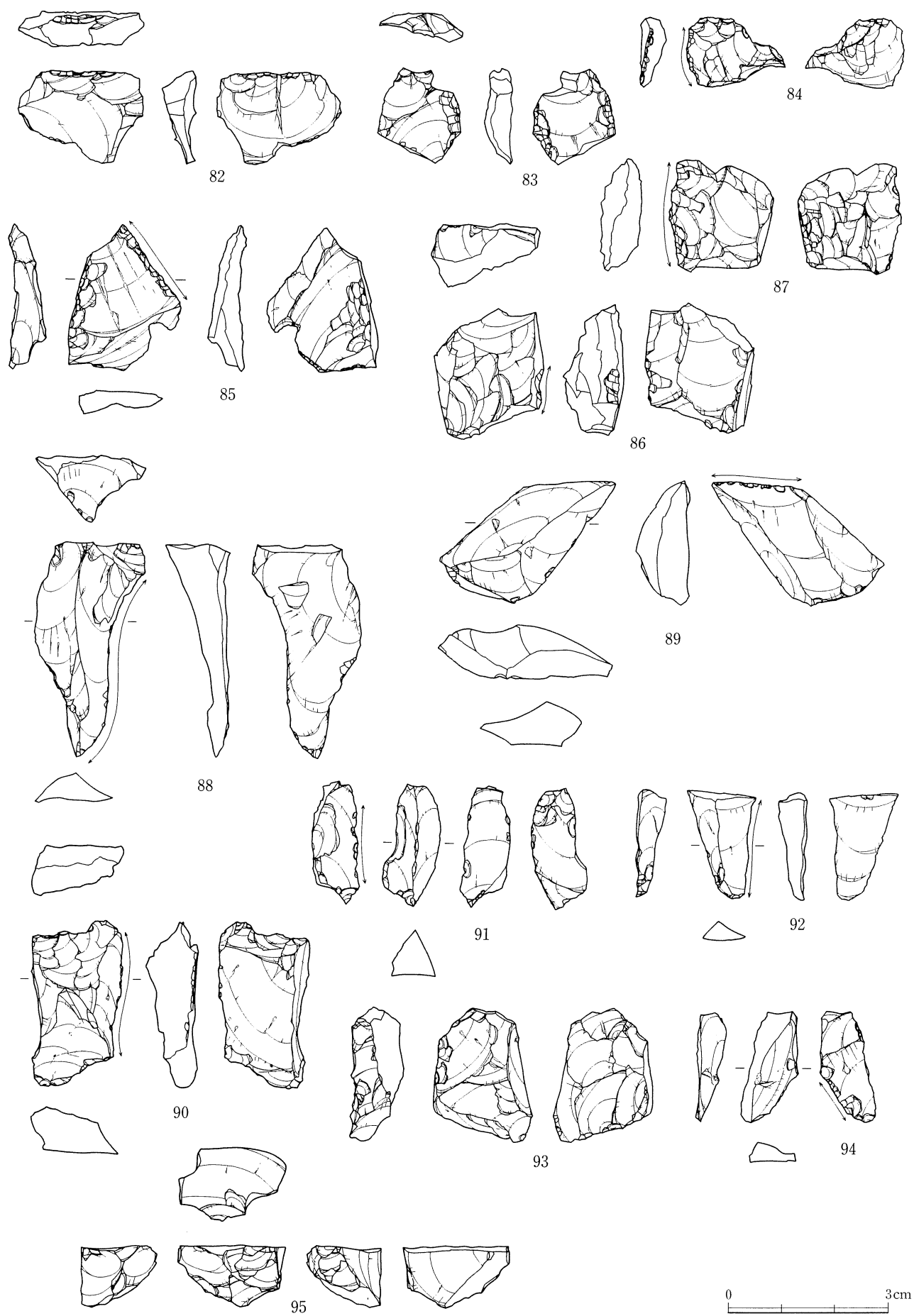
第69图 遺構外出土石器（2）



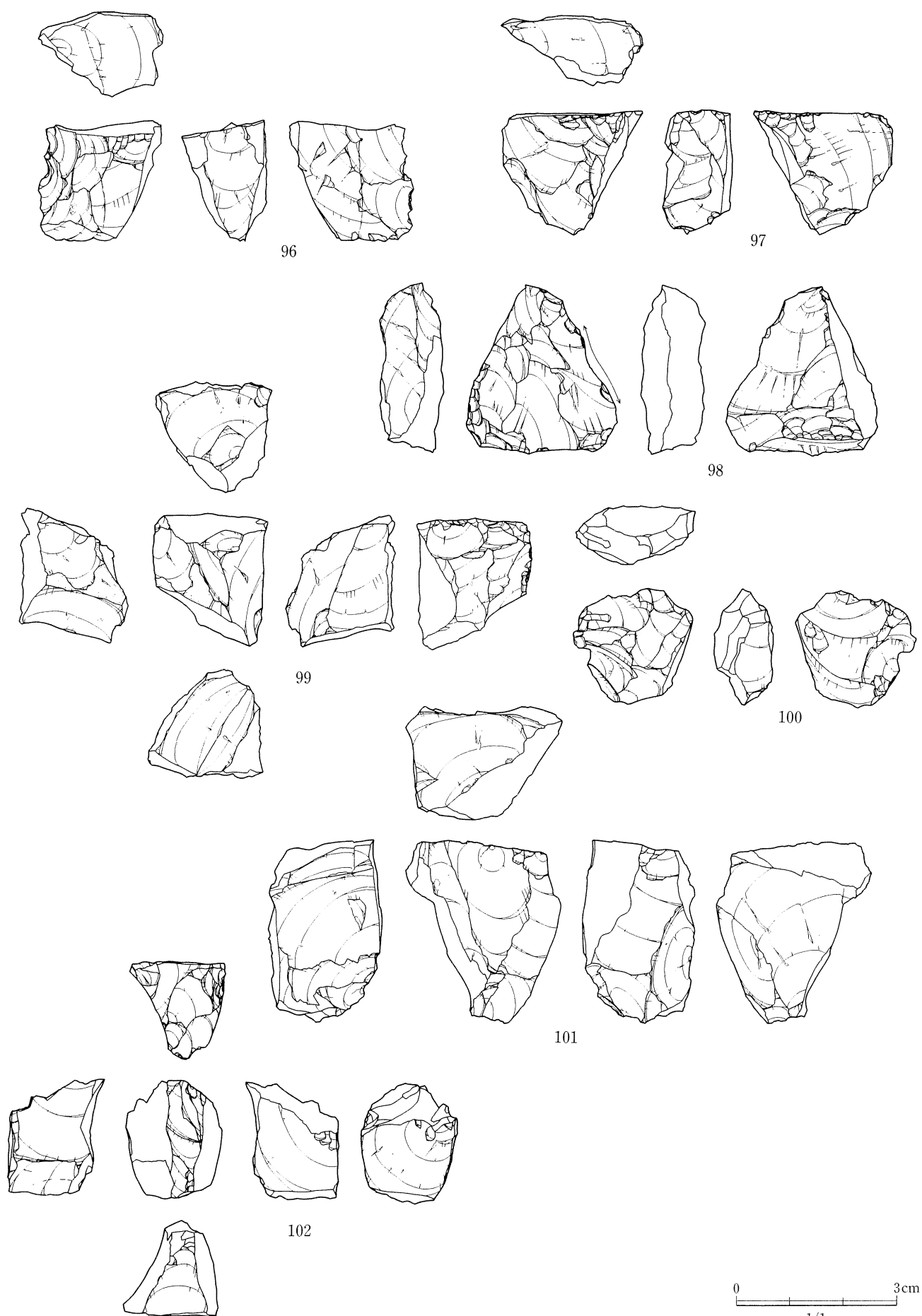
第70図 遺構外出土石器（3）



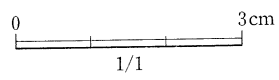
第71図 遺構外出土石器（4）



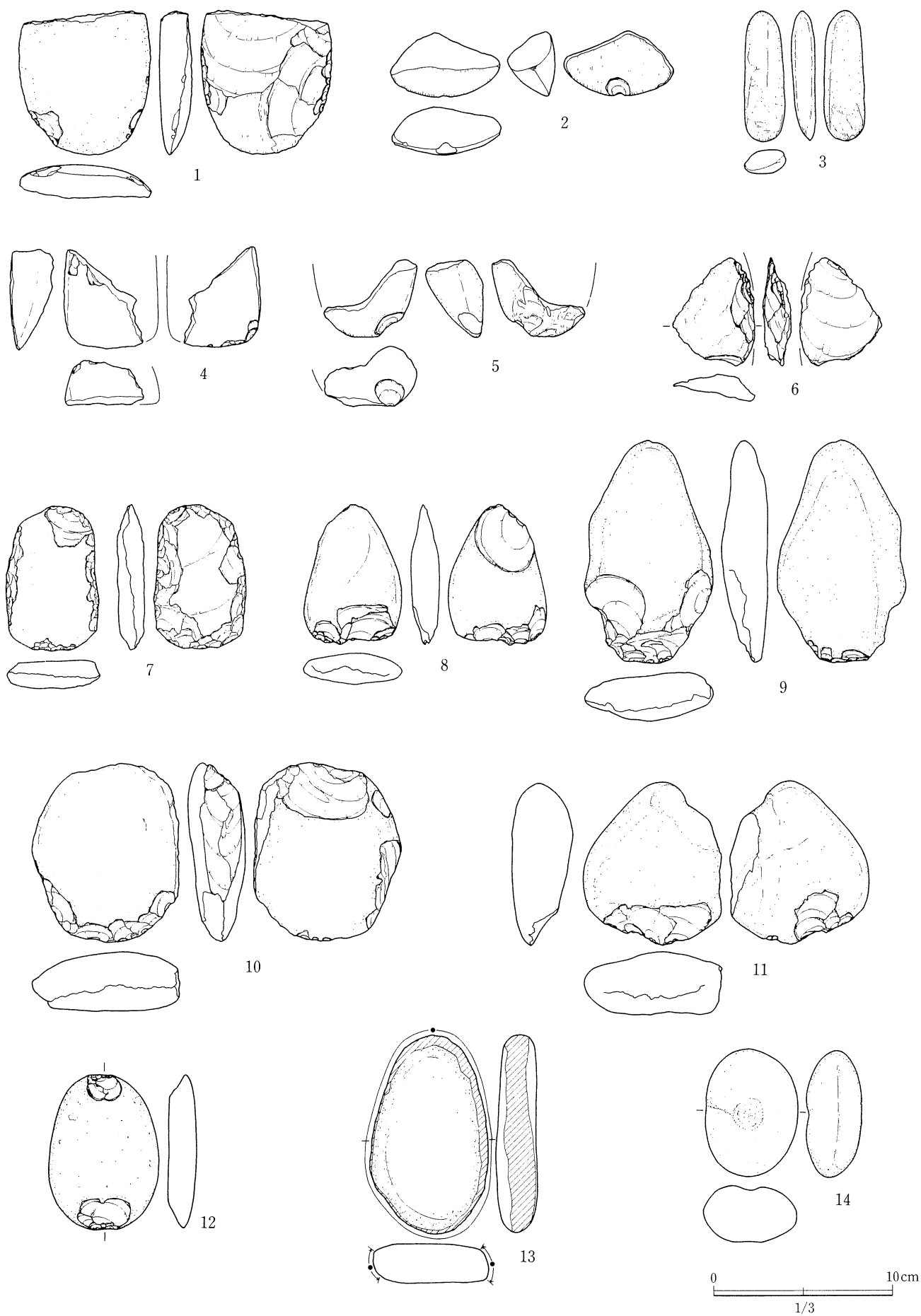
第72図 遺構外出土石器 (5)



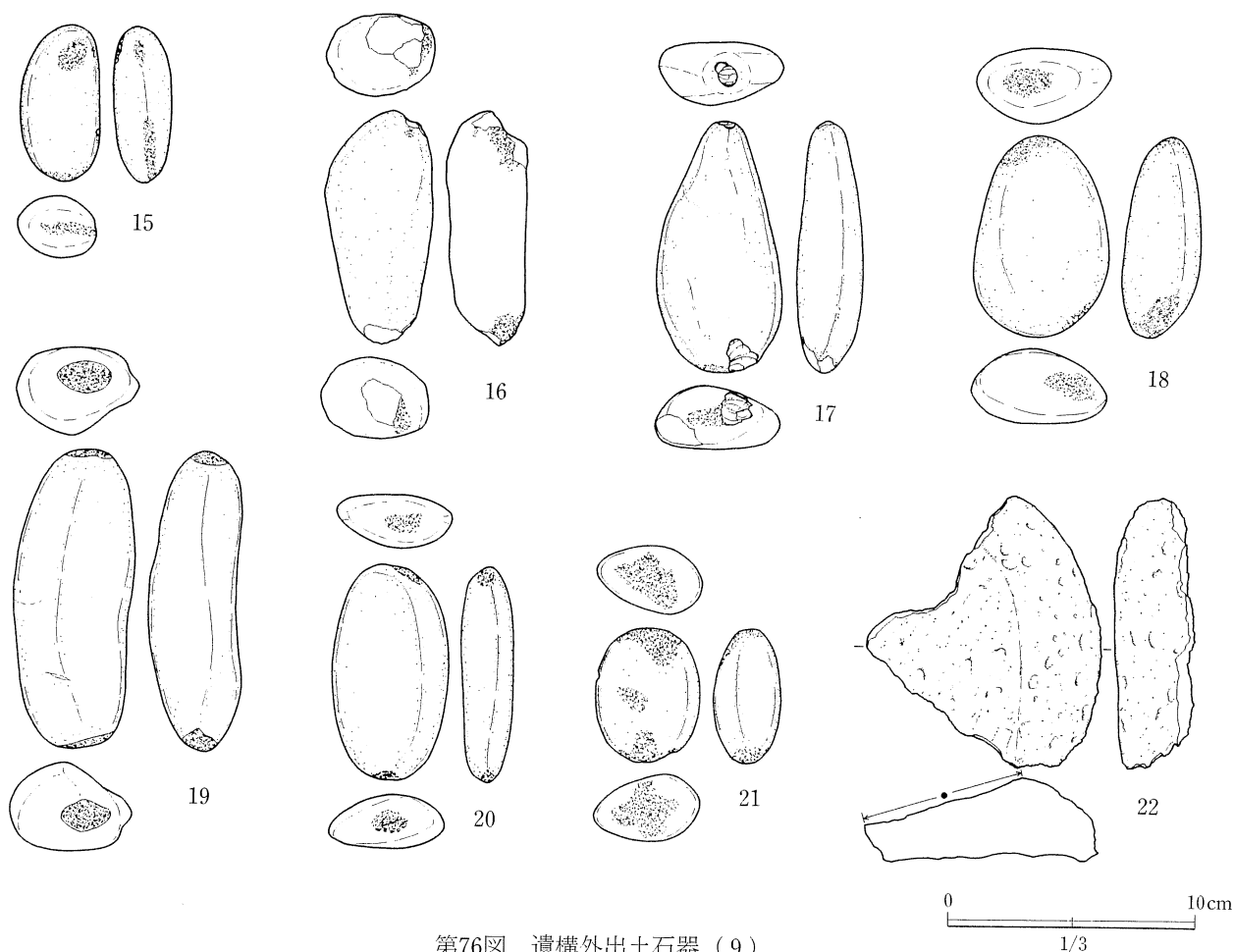
第73図 遺構外出土石器（6）



第74図 遺構外出土石器（7）



第75図 遺構外出土石器（8）



第76図 遺構外出土石器（9）

第5表 遺構外出土石器観察表（2）

挿図番号	器種	石質	出土位置	長さcm	幅	厚さ	重量 g
第75図 1	磨製石斧	ホルンフェルス	E4-19	1.1	7.3	1.8	135.2
第75図 2	磨製石斧	砂岩	A-13	3.4	6.1	2.6	48.2
第75図 3	磨製礫斧	珪質泥岩	D7-4	6.9	2.3	1.3	31.2
第75図 4	片刃磨製石斧	ドレライト	Bトレ	5.3	4.3	2.3	54.6
第75図 5	片刃磨製礫斧	砂岩	Aベルト	4.1	4.6	3.0	37.0
第75図 6	打製石斧再生剥片	珪質頁岩	Cトレ	6.0	4.6	1.5	30.3
第75図 7	打製石斧	凝灰質頁岩	E6-4	7.7	5.1	1.5	90.5
第75図 8	礫斧	ホルンフェルス	D4-16	7.2	5.5	1.6	79.4
第75図 9	礫斧	砂岩	D6-9	11.8	7.1	2.6	239.3
第75図 10	礫斧	砂岩	D5-20	9.4	8.0	3.1	320.1
第75図 11	礫斧	流紋岩	D6-16	8.7	7.7	3.4	289.6
第75図 12	石錘	珪質頁岩	Bベルト	8.2	6.1	1.6	121.6
第75図 13	磨石	砂岩	Aベルト	11.0	6.6	2.3	241.6
第75図 14	凹石	細粒花崗岩	D5-21	6.8	5.2	3.1	150.3
第76図 15	敲石	砂岩	E6-12	5.9	3.2	2.3	64.8
第76図 16	敲石	流紋岩	Aトレ	9.4	4.4	3.3	186.9
第76図 17	敲石	角閃岩	A-13	10.1	4.8	2.6	188.3
第76図 18	敲石	砂岩	F3-18	8.0	5.2	2.9	169.4
第76図 19	敲石	砂岩	C4-23	12.0	4.6	3.3	267.7
第76図 20	敲石	砂岩	D5-21	8.2	4.7	2.1	115.5
第76図 21	敲石	砂岩	F6-1	5.4	4.2	2.7	84.9
第76図 22	石皿	安山岩	A-17	10.4	9.4	3.2	268.5
図なし	打斧剥片	流紋岩	A-17	7.8	4.7	1.7	69.8
図なし	打斧剥片	砂岩	Bベルト	7.0	4.8	1.7	63.1
図なし	磨製石斧	砂岩	Bトレ	4.0	3.6	1.8	23.4
図なし	磨製石斧	ホルンフェルス	3区	6.7	5.9	2.2	107.4
図なし	磨石	デイサイト	塚内	5.8	2.7	3.5	55.6
図なし	磨石	砂岩	E6-12	5.9	4.1	3.3	138.3
図なし	磨石	砂岩	A-13	4.2	7.2	3.6	119.6
図なし	石核	チャート	A-21	7.7	6.0	5.7	271.0
図なし	石核	珪質頁岩	A-17	8.8	5.8	3.4	202.6

欠損のため現存値

第5章 遺構外出土礫

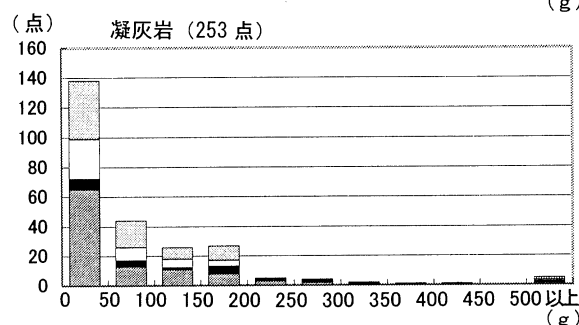
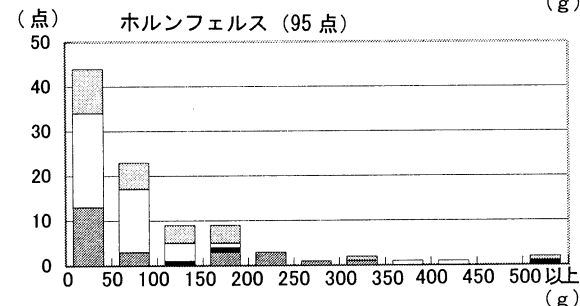
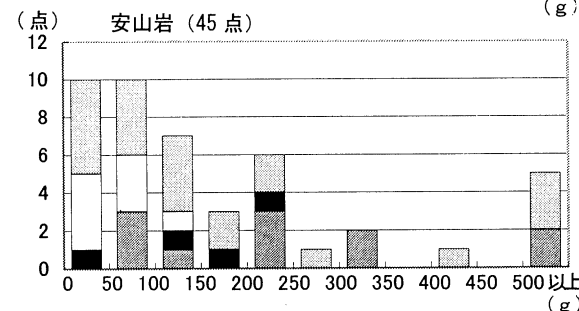
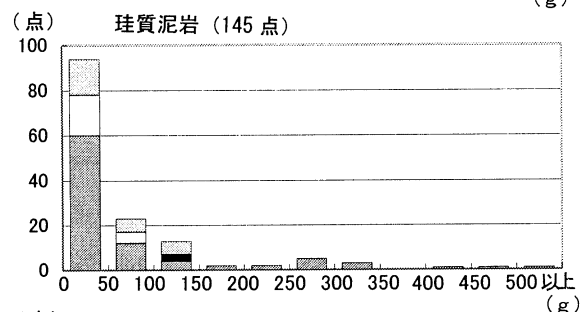
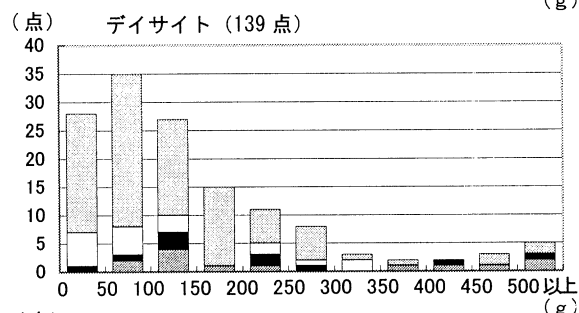
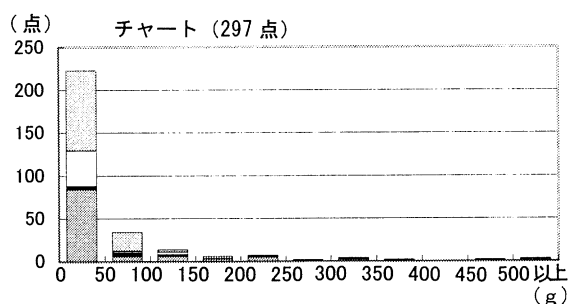
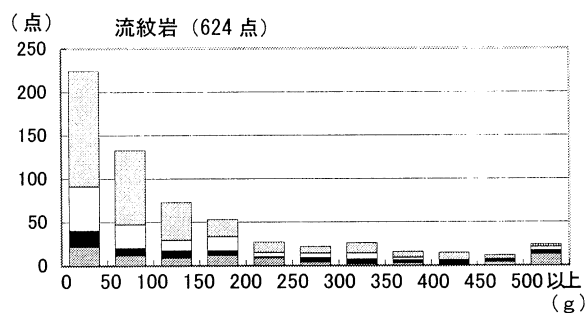
本遺跡からは数多くの礫が出土している。2次に渡る調査での出土量は、1次調査区の遺構内241点(25,823.7g)、遺構外1,225点(145,528.7g)、2次調査区からは、遺構内37点(3,549.9g)、遺構外1,179点(113,238.4g)であり、総計2,682点(288,140.7g)である。出土状況は包含層中に散在している状態であり、特に集中的な礫群もしくは集石を明確に形成するわけではない。このような状況は市原市内の早期の遺跡では一般的であり、特に多い出土点数ではない。これまでそのような礫をすべて採りあげてきても、分析を試みる機会はなかった。今回の整理作業にあたって、データ処理を行うには点数的に多すぎず少なすぎないであろうと考え、全点石材鑑定を依頼した。また、重量・被熱・割れ(欠損)、のデータを取り、あわせて石材別の傾向がみえるようにした。

分析対象は1次調査区および2次調査区の遺構外出土の礫、2,404点(258,767.1g)である。

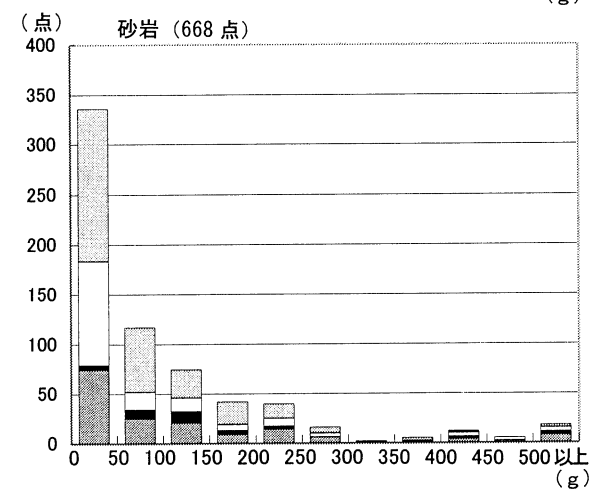
第77図の重量分布図を作製するにあたって、1次と2次のグリッド面積が異なるため、10m×10mグリッドで扱った2次調査区のグリッド一括重量は、1次調査区の最小グリッド単位である4㎡で割った値を使用した。結果として本来の分布との見た目に支障はないであろうと判断した。ここから述べられる礫の分布については2点ある。1次調査区内の三山塚基底部に多少集中し、その周囲は塚造営時に削られたために空白が目立っている。他は、2次調査区に入り込む緩やかな谷方向、つまり調査区東側へと集まっている、ということである。これは、土器の分布(第41図)とほぼ同一状態である。地形的要因の作用が考えられるものの、遺構の密度が高い場所でもある。ただ、炉穴の分布との関連性は特に見出せない。



第6表 遺構外出土礫石材別集計表・グラフ



■ 完形 ■ 完形被熱 □ 欠損 □ 欠損被熱



石材	完形	量比	完形被熱	量比	欠損	量比	欠損被熱	量比	合計
流紋岩	91	14.6%	64	10.3%	131	21.0%	338	54.2%	624
総重量	21820.3	24.5%	13091.2	14.7%	16198.0	18.2%	37919.7	42.6%	89029.2
平均重量	239.8		204.6		123.6		112.2		142.7
分散	65574.9		35419.0		19765.5		15631.8		28159.7
標準偏差	256.1		188.2		140.6		125.0		161.8
デイサイト	13	9.4%	10	7.2%	19	13.7%	97	69.8%	139
総重量	3489.9	16.3%	2166.8	10.1%	2201.3	10.3%	13538.6	63.3%	21396.6
平均重量	268.5		216.7		115.9		139.6		153.9
分散	34258.5		26557.1		10829.2		25188.4		26024.3
標準偏差	185.1		163.0		104.1		158.7		161.3
安山岩	11	24.4%	4	8.9%	19	17.8%	22	48.9%	45
総重量	2967.1	37.6%	504.5	6.4%	424.6	5.4%	3990.2	50.6%	7886.4
平均重量	269.7		126.1		53.1		181.4		175.3
分散	38101.1		5690.4		1521.2		29331.6		29498.6
標準偏差	195.2		75.4		39.0		171.3		171.8
凝灰岩	105	41.5%	20	7.9%	48	19.0%	80	31.6%	253
総重量	7443.8	35.0%	2659.7	12.5%	3337.9	15.7%	7848.1	36.9%	21289.5
平均重量	70.9		133.0		69.5		98.1		84.1
分散	9904.6		24399.0		8419.8		29630.9		17369.8
標準偏差	99.5		156.2		91.8		172.1		131.8
砂岩	165	24.7%	36	5.4%	167	25.0%	300	44.9%	668
総重量	21274.9	30.3%	6966.2	9.9%	15331.4	21.8%	26746.7	38.0%	70319.2
平均重量	128.9		193.5		91.8		89.2		105.3
分散	34635.7		67580.3		19923.1		22086.7		27817.1
標準偏差	186.1		260.0		141.1		148.6		166.8
泥岩	7	50.0%	0	0.0%	6	42.9%	1	7.1%	14
総重量	781.3	62.5%	0.0	0.0%	396.8	31.7%	72.2	5.8%	1250.3
平均重量	111.6				66.1		72.2		89.3
分散	9647.5				3387.0		0.0		6775.2
標準偏差	98.2				58.2		0.0		82.3
チャート	109	36.7%	12	4.0%	50	16.8%	126	42.4%	297
総重量	7151.2	41.7%	1216.4	7.1%	2688.8	15.7%	6074.8	35.5%	17131.2
平均重量	65.6		101.4		53.8		48.2		57.7
分散	17558.4		9088.8		10400.0		6398.0		11417.1
標準偏差	132.5		95.3		102.0		80.0		106.9
珪質泥岩	90	62.1%	3	2.1%	23	15.9%	29	20.0%	145
総重量	6715.3	67.4%	410.8	4.1%	792.3	8.0%	2037.8	20.5%	9956.2
平均重量	74.6		136.9		34.4		70.3		68.7
分散	13099.3		10.7		1672.2		6753.4		9893.5
標準偏差	114.5		3.3		40.9		82.2		99.5
頁岩	5	12.8%	0	0.0%	20	51.3%	14	35.9%	39
総重量	681.0	23.7%	0.0	0.0%	1338.6	46.8%	854.5	29.7%	2874.1
平均重量	136.2				66.9		61.0		73.7
分散	14015.1				23592.8		5428.6		16426.2
標準偏差	118.4				153.6		73.7		128.2
珪質頁岩	10	29.4%	0	0.0%	10	29.4%	14	41.2%	34
総重量	421.4	26.4%	0.0	0.0%	544.6	34.2%	627.7	39.4%	1593.7
平均重量	42.1				54.5		44.8		48.9
分散	1345.1				4923.9		2928.7		3075.0
標準偏差	36.7				70.2		54.1		55.5
ホルンフェルス	24	25.3%	3	3.2%	42	44.2%	26	27.4%	95
総重量	2210.1	23.3%	1220.9	12.9%	2988.4	31.5%	3066.0	32.3%	9485.4
平均重量	92.1		407.0		71.2		119.9		99.8
分散	8476.2		144478.2		6818.9		25346.9		20102.8
標準偏差	92.1		380.1		82.6		159.2		141.8

石材ごとに完形礫・完形被熱礫・欠損礫・欠損被熱礫と大きく4分類した。被熱については判断が難しいものであり、一概に赤く変色しているものが熱を受けているとは限らない。風化による変色も考えられるためである。この判断をより確実に近づけるには、焼成実験を行い、自然礫を採取して比較検討せねばなるまい。今回はそのような機会を得られなかったため、今後の課題である。

石材別のグラフ(第6表)は、ヒストグラムに近い形をとるが、いわゆる釣鐘形状にはならない。それは、いずれの石材でも0~100gの礫の点数が他より多いためである。このグラフ形状の偏りを解消するには、目盛の階級幅を小さくするしかない。しかし、いたずらに区分を細分化しても、それが意味をなす数値となるわけではないと考え、50g単位という平易な均等目盛を採用した。

集計表には、分散と標準偏差を示した。この数値は個々の礫の重量が平均値を中心にどのくらいばらついているかを示す。この数値が小さいほどばらつきが少なく、平均重量値の周辺に分布することを意味する。実際に数値が小さいのは、珪質頁岩、珪質泥岩、チャートであり、値が大きいのは砂岩、流紋岩、安山岩である。これはグラフを見てもわかる通り、前者が100g以下の個体が圧倒的に多いのに比して、後者は500gを越える大型の礫まで、少ないながらも存在している。

なお、表に集計した石種以外に、ドレライト(粗粒玄武岩)や花崗岩、玉ずい、緑色岩、長石、変質岩など51点(6,555.3g)が認められる。

石材種類の組成であるが、砂岩・流紋岩・チャートの3種で1,589点(66.1%)、176,479.6g(68.2%)を占める。これに、分類的にも視覚的にも同類と見てとれるデイサイト・安山岩・珪質泥岩を含めると、その量は1,918点(79.8%)、215,718.8g(83.4%)となり、すでに全量の8割を構成することとなる。この組成が、採取時の意図的な選択を示すものか、採取場所の石種の組成に近いものであるのか、このデータのみでは判断しかねる。

礫の石材を同定したことは、岩石学的視点から礫の具体的な特徴をとらえることによって、客観的分類基準を定めるとともに、産出地などが特定できる可能性を示すためである。千葉県には周知のとおり火山はなく、一般的に堆積岩類以外の石材に乏しい。しかし、現実的には流紋岩やデイサイト、安山岩などの火山岩類が、点数的には3割(808点:30.1%)を占め、重量的には全体量の約半分(118,312.2g:45.7%)となる。それだけ豊富な資源の入手方法を考えることが必要であろう。

もしこれらの組成が、付近の地質を反映するものであったとしたら、可能性として、付近に堆積する上総層群の砂礫層である万田野礫層からの入手が想定される。万田野礫層は南西へとつながっており、その先には木更津市の矢那川上流域など、早期の礫群を検出した遺跡が数多く存在する。それら遺跡の最近の調査成果をみても、流紋岩および砂岩、チャートが圧倒的に多くを占める組成が示されている。これは偶然の一致ではなく、組成的には地質を反映した結果の現れとみてよいであろう。

上記のような、被熱や重量分布、石材組成などの問題は、実際に遺跡周辺の露頭など数カ所から礫を一定量採取することで、確認できる可能性が高い。それらの要素と、縄文時代早期当時の礫の使用状況をいかにして結びつけるか、いかなる意味を見出すかは、考古学的研究に問われる課題である。そのためには、この地域における多数の検出事例を分析しなければならない。もちろん整理作業段階の分析と、発掘調査時点でのこのような礫の扱い方も、分離しては考えられない。一見、ただばらばらと落ちている状態であるが、明らかに人為的にその遺跡に運び込まれたものである。二度と再現のできない状況を、いかなる情報とともに持ち帰るか、もう一度考えなければならない。

岩石の肉眼鑑定について

臼杵 直 (千葉大学)

千葉県市原市新井字花和田に位置する、新井花和田遺跡より出土した礫 (総数2,682点) および石器 (総数158点) の石材を、肉眼およびルーペを用いて鑑定した。その内容は以下のとおりである。

I 火山岩類

◎ 流紋岩

斑晶が粗粒で比較的多量に含まれるもの (流紋岩 I) と、斑晶が細粒・少量でガラス質なもの (流紋岩 II) が認められる。量的には前者が圧倒的に多い。

流紋岩 I 斑晶 : 石基量比 = 40 : 60 ~ 60 : 40

斑晶 (カッコ内の数字は量比)

斜長石 (30-40%)

長径 1-5 mm で、自形から半自形 (短柱状) で、累帯構造をもつものが多い。白色粘土鉱物によって交代されているものが多い。

石英 (30-40%)

長径 1-5 mm で、半自形。無色から淡紫色を呈する。

カリ長石 (5-20%)

長径 3-6 mm で、半自形。淡桃色を呈する。

その他

しばしば、砂岩片、黒色泥岩片、チャート片を含む。

石基

淡灰色から淡緑灰色を呈し、緻密。

流紋岩 II 斑晶 : 石基量比 = 5 : 95 ~ 10 : 90

斑晶 (量比)

斜長石 (5%)

長径 0.5-2 mm で、自形から半自形 (短柱状)。白色粘土鉱物によって交代されているものが多い。

石英 (40-95%)

長径 0.5-1 mm で、半自形から他形。無色。

石基

淡灰色から淡緑灰色を呈し、ガラス質。

◎ デイサイト

粗粒な斑晶を多く含む優白質な火山岩 (斑晶として角閃石を含む)。斑晶 : 石基量比 = 20 : 80 ~ 85 : 15

斑晶 (量比)

角閃石 (1-10%)

長径 1-2 mm で、半自形。斜長石と集斑晶状になっているものもみとめられる。

斜長石 (40-60%)

長径 1-5 mm、自形 (短柱状) で、累帯構造をもつものが多い。白色粘土鉱物によって交代されている。まれに、長径 1 cm 以上の巨晶も認められる。

石英 (20-40%)

長径 1-5 mm で、半自形から他形。

カリ長石 (5-10%)

長径 1-6 mm、半自形。

その他

少量の黒色泥岩片を含むことがある。

石基

淡灰色から淡赤色を呈し、緻密。

◎ 安山岩

斑晶に角閃石を含むもの (角閃石安山岩) と、紫蘇輝石を含むもの (輝石安山岩) が認められる。量的には同程度。

角閃石安山岩 斑晶 : 石基量比 = 35 : 65 ~ 40 : 60

斑晶 (量比)

角閃石 (10-50%)

長径 1-3 mm、自形 (長柱状)。

斜長石 (90-50%)

長径 1-5 mm、自形 (短柱状)。白色粘土鉱物によって交代されている。

石基

淡灰色を呈し、微細な角閃石、斜長石の集合体からなる。

輝石安山岩 斑晶 : 石基量比 = 10 : 90 ~ 20 : 80

斑晶

紫蘇輝石

長径 1 - 3 mm、自形（短柱状）。暗赤褐色を呈する。

斜長石

表面が著しく風化しているため詳細不明。

石基

淡灰色を呈するが、全体に著しい風化を受けている。岩石表面で風化に強い輝石斑晶のみが凸状になっている。

II 火砕岩類

◎ 凝灰岩

白色、淡灰色、淡緑灰色を呈し、細粒から粗粒の凝灰岩。黒色泥岩片、チャート片、砂岩片、頁岩片、凝灰岩片、石英、斜長石、角閃石、黒雲母を含むことがある。

◎ 凝灰角礫岩 礫：基質=65：35

白色、淡緑灰色凝灰岩角礫を多量に含む。基質と角礫が同質であるものも認められる。また、しばしば、堆積岩類の角礫も含む。

礫種（量比）

白色凝灰岩（0 - 60%）

長径 2 - 10mm、角～亜角。

緑色凝灰岩（0 - 100%）

長径 1 - 5 mm、角～亜角。

黒雲母流紋岩（0 - 20%）

長径 5 - 18mm、亜角～亜円。

黒色泥岩（0 - 5%）

長径 1 - 4 mm、角～亜角。

頁岩（0 - 5%）

長径 2 - 10mm、亜角。

基質

淡緑灰色から緑色を呈する凝灰岩。

◎ 溶結凝灰岩

灰白色を呈し、石英、長石、白色凝灰岩片、黒色泥岩片を含む。凝灰岩片は引き延ばされた形態を示す。

III 堆積岩類

◎ 砂岩

暗灰色、淡黄色、淡緑色を呈し、細粒から粗粒、凝灰質から珪長質、固結度の強いものから弱いものといった様々な砂岩が認められる。碎屑粒子は、石英、長石、角閃石、黒雲母、チャート片、泥岩片、頁岩片から構成される。

◎ 泥岩

黒色から淡緑色を呈する。黒色部と淡緑色な凝灰質部が互層状を呈するものも認められる。

◎ 角礫岩

中粒砂岩の角礫を多量に含む角礫岩。基質もほぼ同質の砂岩。礫：基質=50：50

礫

砂岩

長径 5 - 50mm、角～亜角。淡緑色を示す、中粒砂岩。

基質

緑色を呈する中粒から細粒砂岩。

◎ チャート

赤色、淡黄色、淡灰色を呈する。わずかに層状構造が認められるものが多い。黒色の泥岩片、泥質な細脈を含むものが多い。

◎ 珪質泥岩

暗灰色から黒色を呈し、珪質。黒色泥岩片を多量に含む珪質岩も含める。白色から無色の石英細脈が不規則にはいることが多い。

◎ 頁岩

淡灰色、淡緑灰色、淡黄色を呈し、凝灰質のもの、やや珪質のものが認められる。塊状なものが多いが、凝灰質な薄層を挟み、層状構造が明瞭なものも認められる。

IV 深成岩・半深成岩類

◎ ドレライト

細粒な角閃石、斜長石から構成される等粒状組織を示す。

角閃石 (50-60%)

長径0.5-3 mm。自形～半自形 (短柱状～長柱状)。

斜長石 (40-50%)

長径0.5-3 mm。半自形 (短柱状)。

著しく風化しているものが多い。

◎ 閃緑岩

粗粒な角閃石、斜長石、石英の等粒状組織を示す。

角閃石 (10%)

長径1-3 mm、半自形 (短柱状)。

斜長石 (55%)

長径1-3 mm、自形～半自形 (短柱状)。

石英 (35%)

長径2-4 mm、半自形～他形。

◎ 花崗岩

細粒から中粒の黒雲母、石英、長石の等粒状組織を示す。

黒雲母 (10%)

長径0.5-1 mm、自形 (板状)。

石英 (50%)

長径0.5-2 mm、半自形～他形。淡桃色を呈する。

長石 (40%)

長径0.5-2 mm、半自形。

V 変成岩類

◎ ホルンフェルス

原岩は塊状の黒色泥岩が多いが、ブーダン状にちぎれた砂岩片を含むものも認められる。岩石全体に長径1-3 mmの鉱物が点紋状に生成している。これらは黄褐色の粘土鉱物に交代されている。

◎ 緑色岩

原岩は玄武岩質の凝灰角礫岩。角礫は扁平につぶれている。礫の部分は黄緑色の緑れん石、基質部分に濃緑色の緑泥石が多く形成されている。

VI 変質岩

白色の粘土鉱物などに完全に交代され、原岩の推定は困難である。

VII 長石

淡黄色から白色を呈する。珪長質脈の一部がアプライト由来のものであると思われる。

VIII 玉ずい

透明感のある白色から淡黄色、淡赤色を呈する。やや再結晶していると思われるものも認められる。

総 評

全体として、砂岩類、頁岩類、泥岩類、チャート、酸性凝灰岩などの堆積岩類や流紋岩、デイサイトといった酸性火山岩類が多い。玄武岩や深成岩、結晶片岩類はほとんど認められないことから、礫種は比較的限定されていると言える。量的にはわずかであるが、緑色岩やドレライト、閃緑岩の最も近い産地としては千葉県南部に位置する嶺岡帯などが考えられる。

<参考文献>

- 橋本光男 1987『日本の変成岩』岩波書店
久城育夫・荒牧重雄・青木謙一郎 編 1989
『日本の火成岩』岩波書店
水谷伸治郎・斎藤靖二・勘米良亀齡 編 1987
『日本の堆積岩』岩波書店
大久保雅弘・藤田至則 編 1999
『地学ハンドブック第6版』築地書館
地学団体研究会編 1996『新版地学事典』平凡社
財団法人千葉県史料研究財団 1997
『千葉県の自然誌 本編2 千葉県の大地』

第6章 花和田三山塚

市原市内には、出羽三山信仰に係る構築物である、いわゆる三山塚が散見される。遺跡分布地図に記載されているものは、約90におよぶが、現在でも供養祭などが行われる、いわば現役の塚も含まれる。今回の調査で発掘調査した三山塚は新井の集落に伴うもので、かつては塚の頂上にあったであろう石碑は、今は新井の青年館前に移築されている。「文政三（1820）」の年号が刻まれている。

三山塚の発掘調査は市内でもこれまでに数基で行われている。外観がいずれも三段築成であるという点が共通するものの、墳丘下からの遺物の出土状況等は個別的といってよい。おそらく、地元の有力な修験者の主導によるものであったと推測される。今回の調査によって明らかになった諸行為も現段階では類例を欠くものが多いのも上記の事情によるものと考えられる。

市内の三山塚については、對馬郁夫氏により、精力的な研究がなされている。氏の業績には、歴史的的部分と民俗学的的部分があるのは、現代まで息づく信仰であるからにはほかならない。なお、氏ご自身が「里先達」という称号をお持ちである、いわば教団内部の方であるという点で、やや客観的な視点を持ち難いという制約が生じている。三山信仰の歴史そのものにとどまらず、近世の地方の信仰のあり方、宗教政策、教団の活動、それらを受け入れた地方の実情等、今後より広範囲に検討する必要がある。本報告では、報告者の力量および紙幅の都合もあり、そこまで立ち入った論及はなし得ないが、保持すべき観点ではないかと考えている。

調査前および調査の方法

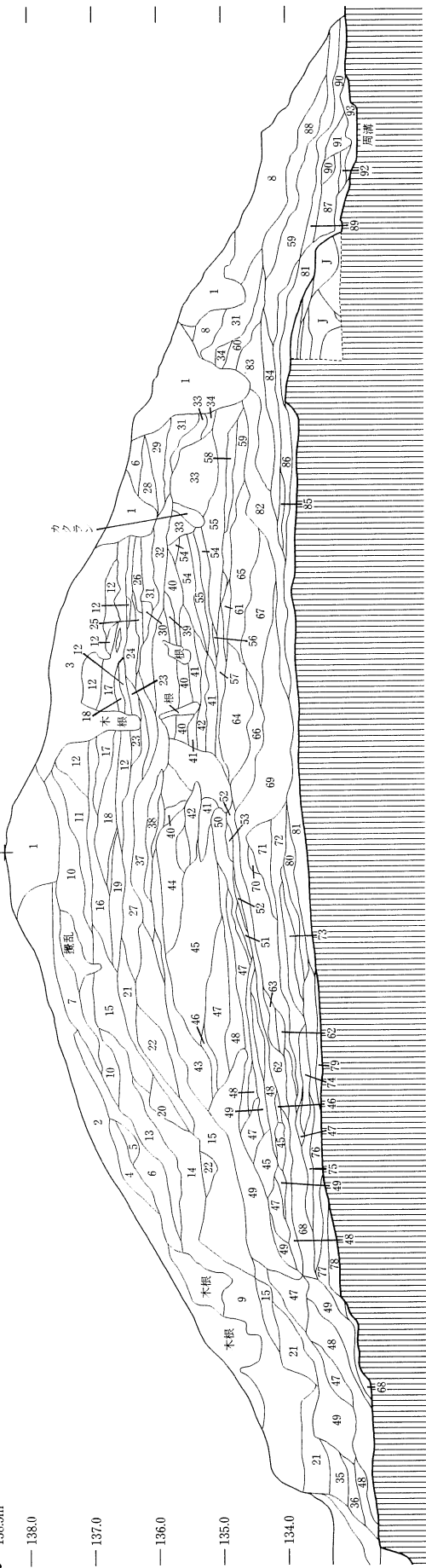
花和田三山塚は、新井の集落からはなれた、標高約133mの丘陵上に築かれていた。山岳信仰の拠点としてふさわしい場所を選んだかのようなのである。着手前の塚の規模は、一辺約23m、高さ約5mで、三段築成であることは必ずしも明瞭ではなく、とくに墳頂部に近い方では崩落が進み、なだらかになっていた。下段のほうは部分的に平坦面を残し、かつての面影を残していた。

墳頂部には三角点が据えられており、これを中心として四方向に土層観察用のベルトを残し、順次盛り土を下げるかたちで調査をすすめた。遺物の出土状況および盛り土の特徴から塚の構築前の行為から最終的な時期までを5期に分けてあつかった。本報告でもその大別を踏襲した。あくまで、相対的な序列であって、たとえば、江戸時代約300年を機械的に一時期60年に5分割するものではない。

以下には、塚築造当初にさかのぼって、検出した遺構、遺物について記載する。なお、遺物の特徴については、観察表を参照されたい。銭については、銭文および諸計測値を記載するにとどめ、微細な特徴の抽出は行っていない。微細な部分の検討によって産地（銭座）の同定が可能なかもしれないが、貨幣経済の浸透を前提とした場合、その流過程は恐らく復元不能であって、単純な分布論は意味をなさないであろうと判断したことによる。

基底部の調査

塚の築造にさきだって、地山の整形が行われている。一辺約15m、高さ約50cmの方形の土壇を削り出しており、その土壇を巡るように、幅約30cmの溝が掘られている。これら溝は全周するものがなくいずれも途中で切れている。なお、西側の縁辺では、この溝に平行して掘り込みの浅い土坑（093）が、さらにその北方の延長上でも浅い溝状遺構（094）が検出されている。方向的には塚の規制を



- 土層説明
- | | | | | |
|---------|---------|------------------|---------------------|-------------------|
| 1 褐色土 | 21 褐色土 | 41 ローム小ブロックと黒色土塊 | 61 黒色土 | 81 ローム小ブロックと暗褐色土塊 |
| 2 暗褐色土 | 22 暗褐色土 | 42 暗褐色土 | 62 ローム小ブロック・ロームの集合層 | 82 暗褐色土 65に黒色土多量 |
| 3 暗褐色土 | 23 暗褐色土 | 43 暗褐色土 | 63 黒色土 | 83 暗褐色土 |
| 4 暗褐色土 | 24 暗褐色土 | 44 暗褐色土 | 64 ローム小ブロック層 | 84 褐色土 |
| 5 暗褐色土 | 25 暗褐色土 | 45 暗褐色土 | 65 暗褐色土 | 85 褐色土 |
| 6 暗褐色土 | 26 暗褐色土 | 46 暗褐色土 | 66 暗褐色土 | 86 褐色土 |
| 7 暗褐色土 | 27 暗褐色土 | 47 暗褐色土 | 67 暗褐色土 | 87 暗褐色土 |
| 8 暗褐色土 | 28 暗褐色土 | 48 暗褐色土 | 68 暗褐色土 | J : 縄文遺構覆土 |
| 9 暗褐色土 | 29 暗褐色土 | 49 暗褐色土 | 69 暗褐色土 | |
| 10 暗褐色土 | 30 暗褐色土 | 50 暗褐色土 | 70 暗褐色土 | |
| 11 暗褐色土 | 31 暗褐色土 | 51 暗褐色土 | 71 暗褐色土 | |
| 12 暗褐色土 | 32 暗褐色土 | 52 暗褐色土 | 72 暗褐色土 | |
| 13 暗褐色土 | 33 暗褐色土 | 53 暗褐色土 | 73 暗褐色土 | |
| 14 暗褐色土 | 34 暗褐色土 | 54 暗褐色土 | 74 暗褐色土 | |
| 15 暗褐色土 | 35 暗褐色土 | 55 暗褐色土 | 75 暗褐色土 | |
| 16 暗褐色土 | 36 暗褐色土 | 56 暗褐色土 | 76 暗褐色土 | |
| 17 暗褐色土 | 37 暗褐色土 | 57 暗褐色土 | 77 暗褐色土 | |
| 18 暗褐色土 | 38 暗褐色土 | 58 暗褐色土 | 78 暗褐色土 | |
| 19 暗褐色土 | 39 暗褐色土 | 59 暗褐色土 | 79 暗褐色土 | |
| 20 暗褐色土 | 40 暗褐色土 | 60 暗褐色土 | 80 暗褐色土 | |

第78図 花和田三山塚土層断面図 (S=1/100)

受けたものと見られるが、性格は不明である。

土壇の四隅からはカワラケが出土し、中央部からはカワラケ・寛永通宝が出土している。寛永通宝は3枚出土しているが、うち2枚はいわゆる古寛永で、1枚は背文が「文」である、新寛永のいわゆる文銭である。文銭の初鑄は寛文8（1668）年で、塚の上限を示している。

なお、これら遺物の出土レベルは調査図面に記載がなく不明である。したがって、遺物出土状況の垂直分布図（第80図）にはこの一群は含めていない。調査時の扱いは、以下にのべる最下層と同様「V期」で、そのうちの遺物番号12から17までが同一図面に記載されており、ここで一括して扱った。

最下層

「V期」のうち、1～11は上記よりやや上層で検出された一群の遺物である。カワラケの一点が「V-17」と接合関係にあるところから、基底部と必ずしも分離できるものではない。盛り土開始直前の行為の痕跡であろう。約2 m四方の範囲にカワラケと銭がやや散らばるような状態で出土し、また、灰が固まって検出されている。この灰については木製の三方との所見が調査時に記載されているが、現状では確認できない。銭は錆びの進行がひどく3枚あるいは4枚重なり、これらは分離不能で、銭文はわずかに一枚で読み取れるのみであった。

下層

最下層より1 mほど上位で、銭がややまとまった8ヶ所で出土した。盛り土の途中の行為か、新たに積みます際の行為かは判断しがたい。調査時には「IV期」とされている。複数枚重ねたものが多く、全体では約20枚である。最下層、下層とは異なりここではカワラケの出土がない。銭文の判読可能なものはいずれも寛永通宝で、古寛永と新寛永が混在している。

中層

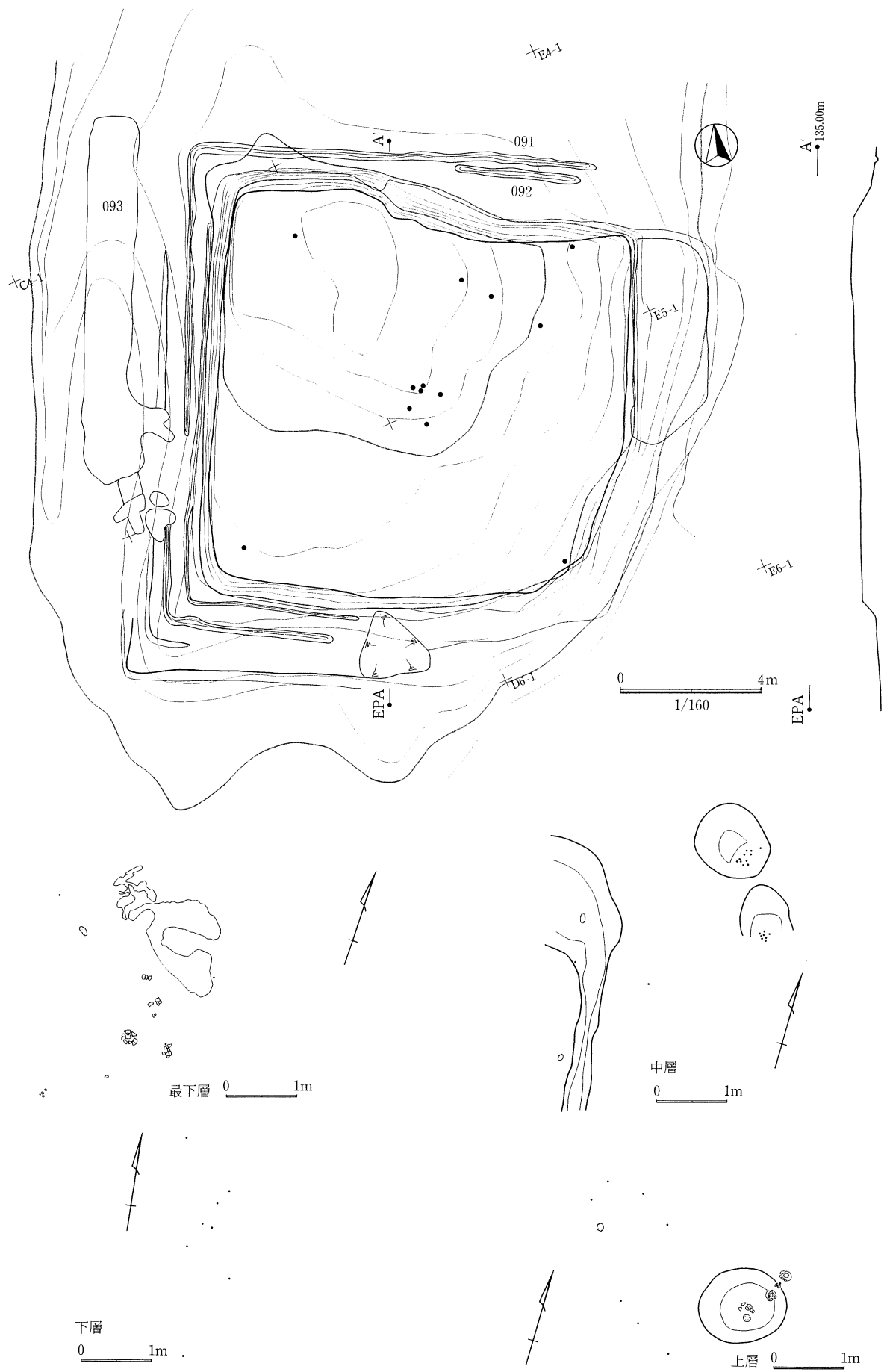
下層よりやや上位で二つの土坑に埋納される形で銭がまとまって出土している（Ⅲ期）。また、これら土坑の西方で検出された細い溝の肩部からも銭が出土している。各土坑からはそれぞれ約10枚、溝からは約15枚の出土である。いずれも寛永通宝で、新・古が混在している。基底部、最下層では土坑の検出がなかったのにたいし、このときは、穴を掘る行為が加わっている。これは、次に述べる時期でも踏襲されている。

上層

中層より1 mほど上位で、土坑内およびその周辺でカワラケが出土し、土坑西方の7箇所では銭が出土している（Ⅱ期）。カワラケは、基底部および最下層出土のものに比べて、全体に小振りの感がある。時期差かどうかは、現段階では断定し難い。銭は、新寛永と古寛永が混在する。この点は、これまでの状況と大きく変わらない。一点のみ中世の渡来銭、聖宋元宝が含まれている。

盛り土

塚の土層断面は図示（第78図）したとおりである。上記の遺物の出土状況に明瞭に対応するような層位のまとまりは見出し難い。ただし、調査者の残したノートによると、二十年に一度くらいの割合いで大規模な供養祭を行うことがあり、そのたびに土を積み増していく場合があるとのことである。祭祀的行為も行われ、この塚のような土器や銭の埋納も、盛り土の積み増しの際の一連の行為であったとも考えられるが、確証はない。塚の盛り土の総量は数百立方メートルにおよぶと見られる。土層観察によると、黒褐色の土、ロームを主体とする土の大きくわけて二種類の土により塚は構成されて



第79図 塚基底部遺物出土状況 (S=1/160)・盛土内遺物出土状況 (S=1/80)

いる。下層において、ロームを主体とする層が顕著である傾向がある。また、表土に近い部分でロームを含む層があるのは、塚の肩にあたる部分を補強する意味合いがあったのかもしれない。盛り土の中からは多くの縄文時代早期の遺物を出土したところから、周辺の土の集積であることがわかる。周辺からはとくに土を採掘したと推測できるような痕跡は認められないところから、広い範囲から寄せ集めたと考えられる。一部に酸化鉄をふくむことが認められているが、その成因は不明である。

周辺出土遺物

上記以外に、図示したような銭が出土している。塚盛り土から出土したのが、ほぼ寛永通宝に限られるのに対して、文久永宝や明治の半銭のように新しい銭の出土が対照的である。塚に対する供養が続けられたことを示すと同時に、新しい銭の流通以前に銭の埋納が終了したことを示すようである。

ま と め

今回の調査によって、塚の築造当初から最終的な盛り土が行われるまでの間に、数度にわたり銭あるいはカワラケを埋納する行為が行われたことが明らかになった。おそらく、このような行為は直接三山に結びつくものではなく、きわめて在地に根ざした鎮壇行為だったのではないと思われる。冒頭にも触れたように、ほかの調査事例間でも現段階では共通性を見出し難いところから、かかる判断が導かれる。たとえば、市内新生に所在した一本松塚では、常滑の壺に大量の銭が入れられていたし、小草畑の棒平三山塚では、盛り土の中層に一面に銭がまかれるような状況が明らかになっている。

塚築造の時期については、遺物からは文銭以降ということになる。對馬氏の論考によると、18世紀初頭以降に三山の宿坊の記録に市原方面からの宿泊者が増加するようであり、このことは逆に教団からの働きかけの強さの反映ともとれる。ここでは18世紀以降の所産とするにとどめておきたい。

在地の習俗と三山信仰の結節点として、この花和田三山塚の歴史的意義を見出すことができるのではないだろうか。市内各所に残る三山塚の築造時期については不明なものもあるが、江戸時代の年号を刻む石造物をのこすものは多い。一気に三山信仰が浸透し、大衆化したかのような印象さえ持つ。単に宗教的構築物として捉えるのではなく、歴史的産物として捉え、それを生み出すにいたった背景も含めて考える必要があろう。文献資料だけではなく、考古資料も含めて総合的に歴史像を構築することが望ましい。しかし、現状では塚のみが孤立している。

<主要参考文献>

岩井克人（1993）『貨幣論』筑摩書房

對馬郁夫（1986）「出羽三山信仰」『市原市史（中巻）』市原市教育委員会

宮家 準（1978）『修験道 山伏の歴史と思想』（教育社歴史新書＜日本史＞174）教育社

第7表 三山塚出土カワラケ観察表

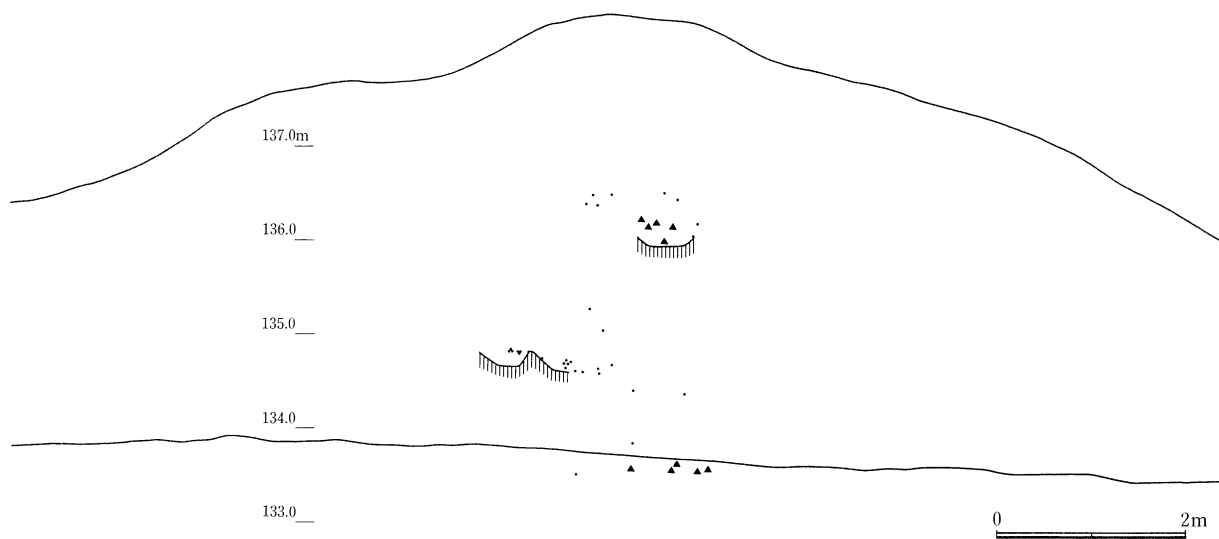
挿図番号	出土位置	口径	底径	器高	遺物番号	備考
1	基底面中央	10.1	6.0	2.0	V-16	
2	"	10.0	6.2	2.0	"	
3	"	10.0	5.9	2.1	"	
4	"	8.3	5.2	1.7	"	
5	"	9.9	5.3	2.0	"	V-5と接合
6	基底面北西角	8.4	5.7	1.6	V-12	
7	基底面北東角	9.8	6.0	2.3	V-13	
8	"	8.6	5.8	1.4	"	
9	基底面南東角	10.0	6.2	2.0	V-14	
10	"	7.8	4.9	1.7	"	
14	最下層	8.5	4.7	1.7	V-6	
15	"	9.9	6.0	2.0	V-7?	
16	"	9.8	6.0	1.7	V-8	

挿図番号	出土位置	口径	底径	器高	遺物番号	備考
17	最下層	8.3	5.2	1.7	V-9	
18		9.2	6.0	2.0	V-10?	注記なし
23	上層	5.2	3.1	1.2	II-9	
24	"	6.7	4.2	1.3	II-10	
25	"	6.6	3.8	1.3	II-12	
26	"	7.5	4.1	1.5	II-11	
27	"	7.3	3.7	1.5	II-13	
28	"	4.8	2.9	1.0	II-14	
29	"	5.7	2.4	0.9	II-11	
30		5.8	2.8	1.3		注記不明瞭
31		8.4	5.1	1.7		注記なし
32		8.4	4.4	1.6	塚(N)	

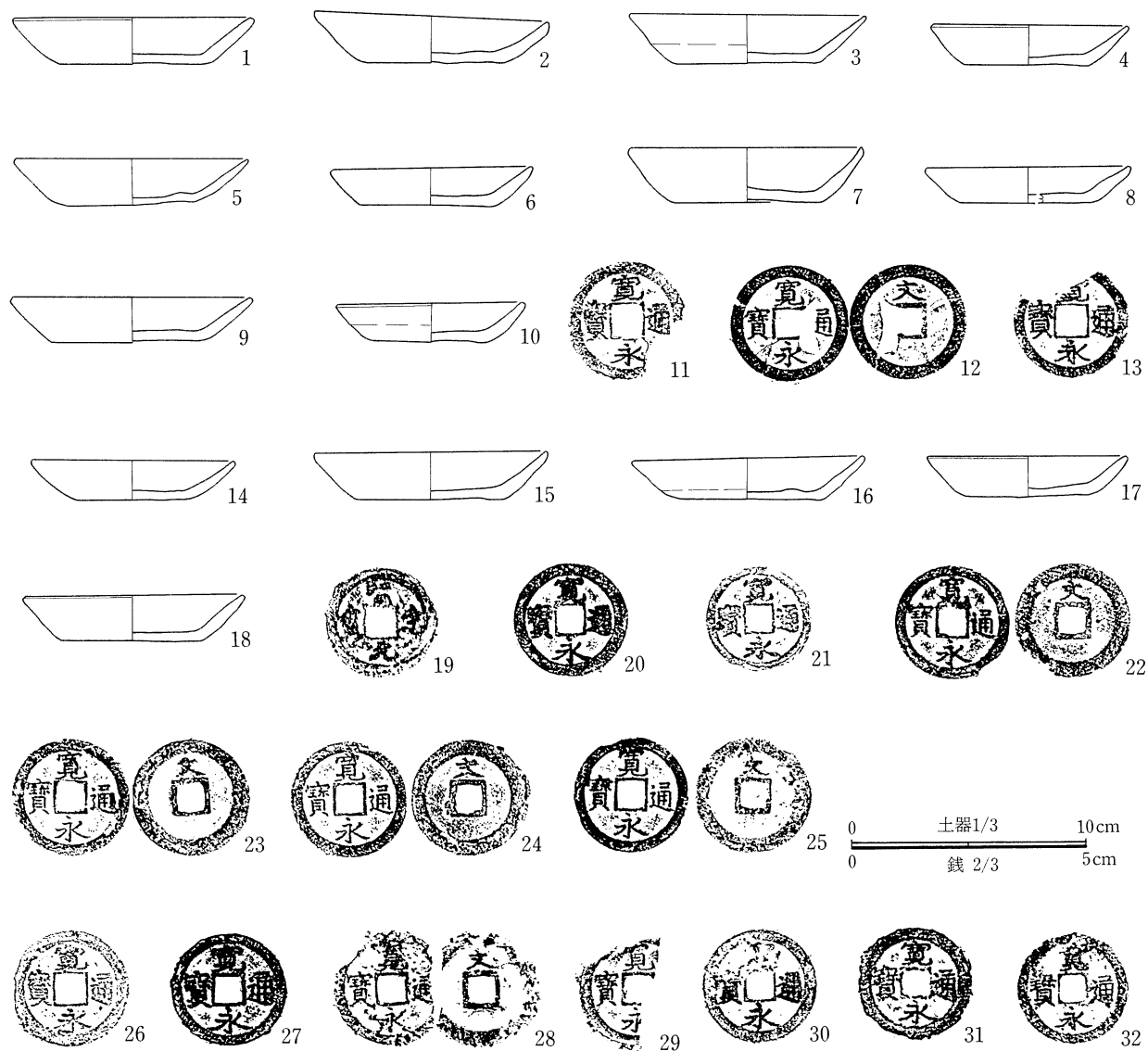
※計測値の単位はcmである

第8表 三山塚出土銭観察表

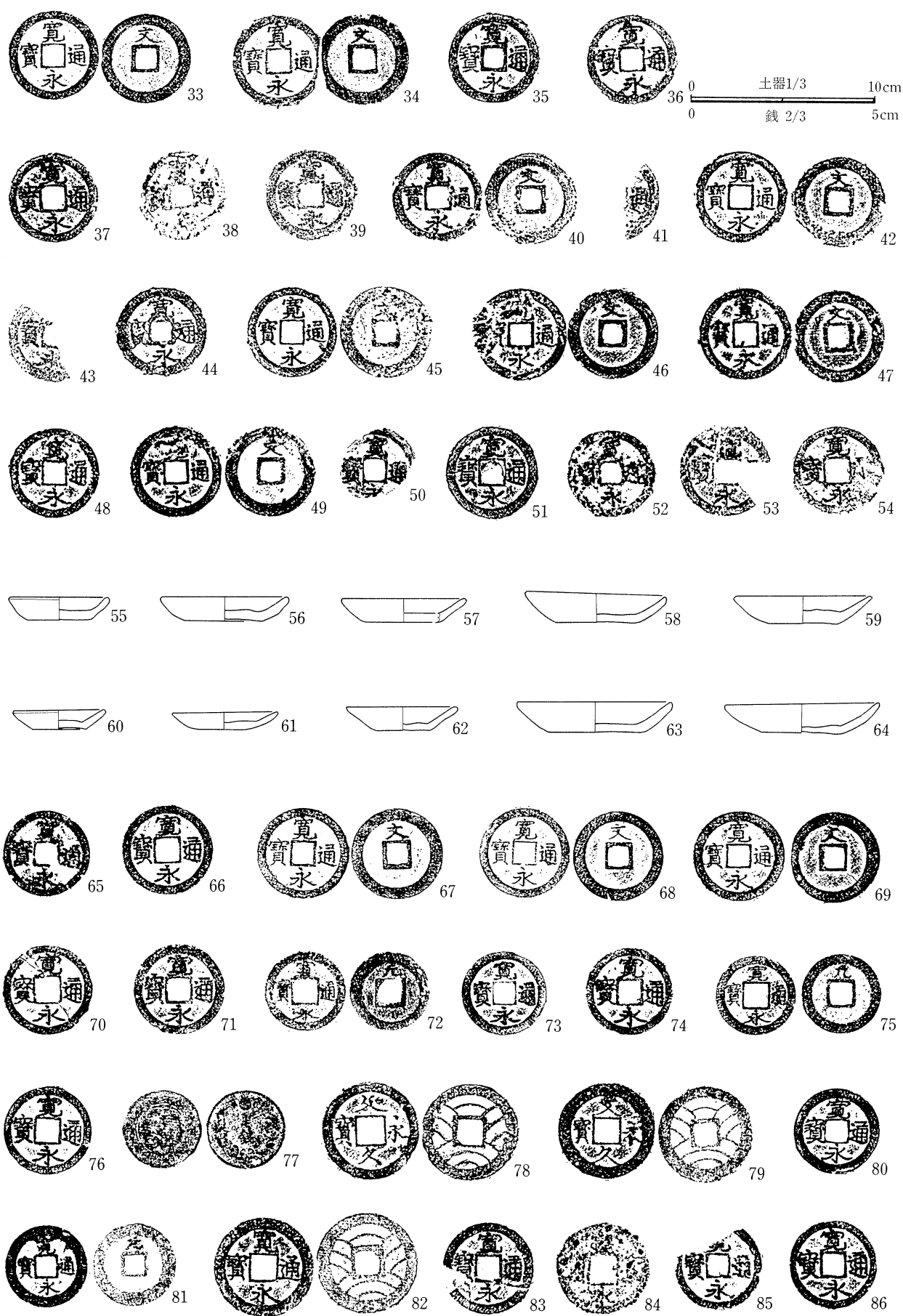
図番号	出土地点	銭文	背文	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁幅	内郭幅	外縁厚	重量	備考
	V-2										10.9	三枚
	V-3	寛永通宝					6	2.2			11	三枚
	V-3							2.9		1.1	1	小片
11	V-13	寛永通宝	無	25.9	19.8	6.9	6	3.1	0.5	1	1.6	古寛永
12	V-14	寛永通宝	文	25.6	19.9	7.2	5.9	2.9	0.7	1.3	2.2	
13	V-15	寛永通宝	無	25	20.4	7.4	6.4	2.3	0.5	1.1	1.6	古寛永
	IV-1-1.2	寛永通宝	無	24.5						1.4	2.6	古寛永
26	IV-1-6	寛永通宝	無	25.4	19.6	7.5	6.4	2.9	0.6	0.9	2.8	古寛永
27	IV-1-4	寛永通宝	無	24.6	21.1	7.1	5.5	1.8	0.8	1.1	2.9	
	IV-1-5	寛永通宝						2.4	1	1.3	2.3	
28	IV-1-3	寛永通宝	文	25	20.7	6.9	5.6	2.2	0.7	1.8	3.1	
	IV-2							3.4	1	1.6	1.4	
	IV-2									1.7	1.7	
	IV-3	寛永通宝		25.2				3		1.4	5.8	二枚
29	IV-4	寛永通宝				6.9	5	2.5			6.6	二枚
41	IV-4	寛永通宝								1	0.8	「通」のみ
	IV-5	寛永通宝	無	24.4						1.4	3	古寛永
30	IV-6	寛永通宝	無	24.9	20.2	7	5.7	2.4	0.7	1.2	3.3	古寛永
31	IV-7-1	寛永通宝	無	24.8	19.2	6.6	5	2.8	0.8	1.1	3	古寛永
32	IV-7-2	寛永通宝	無	24.3	18.9	6	5.2	2.7	0.4	1.6	3.1	古寛永
33	IV-7-5	寛永通宝	文	24.9	20.2	6.9	5.8	2.4	0.6	1.2	3.5	
	IV-7-6							2.8		1.4	1.5	
34	IV-7-3	寛永通宝	文	25.6	21	7	5.9	2.3	0.6	1.2	2.7	
	IV-7-4	寛永通宝									9.4	三枚
35	IV-8	寛永通宝	無	25.1	20.3	7.2	5.1	2.4	1.1	1.1	3.9	古寛永
36	IV	寛永通宝	無	24.8	20.8	7.3	5.4	2	1	1	3	古寛永
37	III-1	寛永通宝	無	24.7	20.4	7.5	5.9	2.2	0.8	1.3	3.4	古寛永
38	III-1	寛永通宝	無	24.5	20.4	7.6	5.8	2.1	0.9	1.2	2.8	古寛永
39	III-2	寛永通宝	無	24.9	20.1	7.1	6	2.4	0.6	1.3	2.9	古寛永
	III-2							2.8		1.7	0.5	小片
	III-3										1.5	0.6
40	III-4	寛永通宝	文	25.6	20.5	7.7	5.8	2.6	1	1.4	3.8	
42	III-5	寛永通宝	文	25.4	20.5	6.9	5.7	2.5	0.6	1.3	3.4	
	III-5							2.4		1.7	0.8	小片
43	III-6							2.1		1.1	1	「永」「宝」のみ残存
	III-6		文					2.7	1.4	1.6	1.6	
44	III-7	寛永通宝	無	24.9	19.3	7.2	5.5	2.8	0.9	1	2.4	古寛永
45	III-7	寛永通宝	文	25.2	20.4	6.3	5.6	2.4	0.4	1.2	3.2	
	III-9							2.5		1.2	0.8	
46	III-10	寛永通宝	文	25.5	20.6	6.8	5.7	2.5	0.6	1.3	2.8	
47	III-10			25.1						1.3	2.8	
48	III-11	寛永通宝	無	24.9	20.1	6.4	5.4	2.4	0.5	1	1.8	古寛永
49	III-12	寛永通宝	文	25.3	20	6.4	5.5	2.7	0.5	1.3	4	
	III-12							2.2		1.3	1.4	「通」のみ
	III-13							2.4		1.2	1.7	
52	III-14-3	寛永通宝	無	24	20	6.2	4.9	2	0.7	0.9	5.5	二枚付着
51	III-14-4	寛永通宝		25.3	20.5	7	5.6	2.4	0.7	0.9	3.1	古寛永
	III-14-5									1.5	1.3	
	III-14-6	寛永通宝						3.4			2.1	
	III-14-7	寛永通宝	文	25.2	20.5	6.7	5.8	2.4	0.5	1.2	2.9	
	III-14-8	寛永通宝				7.2		2.8	0.7		14.3	数枚付着
50	III-14-8	寛永通宝	無			6.2	5.5			1.2	2.2	古寛永
	III-14-9										5.1	
	III-14-10			23.9			5.5			1.2	3	
	III-14-11	寛永通宝						3.2			1.9	
	III-14-11	寛永通宝						2.5	1	1.1	1	
	III-14-12			25.8		9	5				6.8	二枚
53	III-14							3.3		1.3	2.7	鉄銭
	III-14							3.3		1.1	1.3	小片
54	III-15	寛永通宝	無	24.6	20	7	5.1	2.3	1	1.6	3	古寛永
	III-15			25.7	18.4	8	4.3	3.7	1.9		10.8	三枚
	III-18	寛永通宝		24.8	20	7.4	5.8	2.4	0.8		6.7	二枚
	III			24.4						3.1	4.3	二枚
65	II-1	寛永通宝	無	23.8	20.1	7.2	5.8	1.9	0.7	1.2	1.3	古寛永
66	II-2	寛永通宝	無	25.2	20.4	7.3	5.8	2.4	0.8	1.1	2.4	古寛永
67	II-3	寛永通宝	文	25.3	20.5	7.3	5.8	2.4	0.8	1.2	3.3	
20	II-3-1	寛永通宝	文	25.5	20.5	7.1	5.5	2.5	0.8	1.2	3.3	
24	II-3-2	寛永通宝	文	25.5	20.7	7.1	5.8	2.4	0.7	1.2	3.3	
23	II-3-3	寛永通宝	文	25.5	20.7	7.1	6	2.4	0.6	1.2	3	
25	II-3-4	寛永通宝	文	25.4	20.5	7.1	5.7	2.5	0.7	1.2	3.3	
19	II-3-5	聖宋元宝		24	19.9		6	2.1		1.2	3.3	北宋銭、行書
22	II-3-6	寛永通宝	文	25.2	20.6	6.9	5.7	2.3	0.6	1.3	3.2	
21	II-3-7	寛永通宝	無	23.1	18.9	6.3	5.3	2.1	0.5	0.7	2.6	古寛永
68	II-4	寛永通宝	文	24.9	20.2	7	5.5	2.4	0.8	1.1	2.8	
70	II-5	寛永通宝	無	24.7	20.4	7.5	6.3	2.2	0.6	1.2	2.3	古寛永
69	II-6	寛永通宝	文	25.1	20.2	6.8	5.6	2.5	0.6	1.2	3.4	
71	II-7	寛永通宝	無	25	20.3	7.6	6	2.4	0.8	0.9	2.3	
72	I-2	寛永通宝	元	22.3	17.8	7.2	6.1	2.3	0.6	1	2	
73	I-3	寛永通宝	無	23.6	19	6.1	5.4	2.3	0.4	0.8	2.6	古寛永
74	I-4	寛永通宝	無	24.6	20	7	5.8	2.3	0.6	1.2	2.8	”
81	B4-25	寛永通宝	元	23	16.9	6.1	5.1	3.1	0.5	1.1	2.3	
77	D3-4	半銭		22						1.2	2.2	明治十年
78	D5-11	文久永宝	十一波	26.9	21.5	8.2	7	2.7	0.6	1	3.8	
	D5-11										3.6	鉄銭
79	D5-11	文久永宝	十一波	26.5	20.4	7.2	6	3.1	0.6	1	3.7	
80	E4-22	寛永通宝	無	23.8	18.5	6.5	5.7	2.7	0.4	0.9	2.2	古寛永
76	E5	寛永通宝	無	24.2	19.5	7.7	6.4	2.4	0.7	0.9	3.3	古寛永
82	F5-1	寛永通宝	十一波	28.1	22.1	7.8	6.5	3	0.7	1	3.9	四文銭
86	塚北側頂部	寛永通宝	無	24.5	20.1	7.2	5.2	2.2	1	1.3	3.4	
83	塚西トシ	寛永通宝	無	25.1	20.1	7.1	6	2.5	0.6	1.1	2.4	
75	塚-1	寛永通宝	元	22.2	17.8	7.4	6.3	2.2	0.6	1	2	
84	表探			25.6			6.9	2.3		1.3	3.6	鉄銭
85	表探	寛永通宝	無	24.2	19.7	7.1	5.4	2.3	0.9	1.2	2.2	



第80図 塚盛土内出土遺物垂直分布 (▲は土器、●は銭、S = 1/80)



第81図 三山塚出土遺物(1)



第82図 三山塚出土遺物（2）

第7章 ま と め

遺跡と遺構 今回の発掘調査では、標高130mを越える独立丘陵上に広がる、縄文時代早期後半の遺構群を検出した。「早期の竪穴住居跡はプランが不明確で貧弱」というイメージと異なった、しっかりと掘り込みのつくりであり、遺構配置も整えられているように感じられる。

中央の山頂部に6軒の竪穴住居跡が環状に占地し、その周囲を炉穴がとりまく。そして外側に陥し穴がつくられる。斜面部の縁にも数軒の竪穴住居跡があるが、頂部に位置するものより構造は簡易である。遺構分布の基本構成は半環状を呈している。緩やかな谷が南北に入り込む調査区東側部分（2次調査区）にも、土坑群や陥し穴がつくられている。一見、この状態で完結した環状構成の集落であるが、東側および南側には、まだまだ集落の範囲が続いている可能性が高いことは明らかである。北側、西側は斜面が急峻となるため、これ以上広がらないであろう。ただ、斜面に廃棄場や陥し穴などのなんらかの遺構がある可能性は否定できない。

新时期テフラに覆われた下層の各遺構には、それなりの時期差があるものと考えられる。しかし、出土遺物が非常に限られた時期範囲の様相を呈しているため、子母口式期およびその前後の所産であることは確かである。重複している遺構はわずかであり、038（新）と039（旧）竪穴住居跡が目立つ程度である。この2軒は、その形状や炉および柱穴配置などに類似性があるため、連続した使用が想定される。038に切られる039の覆土状態が、人為的に埋め戻されたとみられることから、それは肯定できるのである。

検出された11軒の竪穴住居跡は、円形から隅円方形を呈する。柱穴のある竪穴は11軒中9軒である。そのほとんどの柱穴は壁寄りにあるが、部分的に内部に2重目をめぐらせるものが6軒と多くみられる。基本的には壁柱穴と、部分的にその内側をめぐる柱穴に支えられた上部構造である。038は明らかに対となる柱穴を持ち、あるいは建て替えの可能性も考えられる。柱穴が中心に傾斜して掘られている様子はほとんどみられない。頂部に位置するプランが明確な5軒をみると、柱穴の配置および炉の位置から考えて、037は南南西、038は南南東、039は南東、066は南から西にかけて、072は南、というほぼ南側を意識した出入り口の位置が推定できる。ただ、それはあくまで平面プランだけから導き出せる話であり、本来なら発掘調査時点での意識や些細な情報による考察が、より確実な構造分析のあり方であろう。周辺遺跡における検出事例との対比も必要と考えられるが、付近の遺跡は調査事例も少なく、該期の竪穴状遺構の検出はみられない。

屋内炉もしくは燃焼面を有する竪穴は、丘陵頂上部に位置する5軒であるが、燃焼面が確認できなかった072も、削平された西半に炉が存在した可能性が高い。ただ、いずれも屋外の炉穴のように激しく燃やした状態とは見られず、炉自体の掘り込みがあるものも少ない。このことから、当時火を使う調理を恒常的に行っていたと仮定するならば、それは屋外につくった炉穴を使用していたものと考えざるを得ない。101炉穴の燃焼面直上より採取された焼土・炭化物層サンプルをフルイにかけた結果、161.3gの炭化したクルミ殻が検出された。このことから即〔炉穴＝調理〕という構図を考えることは安易であるが、一つの実証的事例であることは疑い得ないであろう。

ただ、今回の調査によって検出された炉穴自体、数がそれほど多いわけではない。いわゆる複雑な

「炉穴群」を形成しないことが、本遺跡の特徴である。重複する炉穴はわずかに3基である。このことは、多数の「群」を構成するための要因として考えられている「連続的な使用」もしくは「移動後に回帰する断続的な使用」のどちらにも該当しない。検出された遺構全体像は、この場所における明確な定住定着の結果であろう形をなしている。そのために、一つの炉穴を長く愛用していたとも考えられる。それならば、各自所有の炉穴があったのだろうか。竪穴住居跡と炉穴の配置をみると、ありそうではあるものの、はっきりとした特徴などは捉えがたく、推定の域を出ることはない。

炉穴の形態は、卵形から長楕円形を呈するものが多く、煙道の存在を予想できる炉穴は皆無であった。ただ、上位層が三山塚の造成時に削られたものも多く、本来なら、019のように深い掘り込みをもっていたものが多かったはずである。

炉穴をつくる位置は、そこで火を燃やすことから、地形や樹木、風向き、行動領域などの様々な規制に左右されるであろう。立地的には、斜面の角度を利用した構築は019および041の2基と少ない。ほとんどの炉穴が、ほぼ平坦であろう場所に位置する。それに比べて、陥し穴はほぼ斜面に対して直行する場所につくられる。決して広大な面積の調査ではないが、竪穴住居から炉穴や陥し穴まで、このような遺構別配置の条件設定の差が明瞭に見られる。

出土遺物 従来、土器型式を分類するにあたって、土器そのもののみが取り上げられ、文様要素の分析が行われる状況にあったように思われる。この遺跡はある程度遺構内出土遺物が多く、層位的に遺構とともに考察することができるであろうという期待を抱いたが、結果的には覆土上層の出土が多かった。そのため、遺構が充実しているものの、その遺構に伴う出土遺物はほとんどみられない状態である。遺物が多く出土した019炉穴や066竪穴住居跡、046炉穴・土坑、047陥し穴、051土坑は、遺構覆土の中層から上層にかけての一括投棄状況であることに、共通性がある。これらの遺物は、遺構の廃絶より若干でも後の時期の遺物であることは間違いない。ただ、状況的にその一括性が強いことも確かである。

このことについて、066の「遺物集中部分」よりまとまって出土した土器をみると興味深い。第15図91は口縁部に横位連続刺突文をもち、口唇部に絡条体圧痕を施された内外面擦痕調整の土器である。これは「子母口式」の様相である。そして第16図92は明らかに「田戸上層式」であり、94はいわゆる「木の根A式」の隆起線に沈線文が融合している。95は沈線のみ「野島式」であるが、口唇は絡条体圧痕を有する。沈線のみによってモチーフが描かれる状態は、沼津市の清水柳遺跡などにみられる、東海地方的な要素との関連性が考えられる。第16図97～115の擦痕調整のみの土器には焼成前の穿孔が認められる。さらに第18図138の大型土器も明らかにこれらと同時に投棄されたものであり、このなかの破片数量比ではかなりの割合を占める。文様構成は4条から5条の多条隆起線のみであるが、器形はキャリパー形を呈し、内外面は細めの貝殻条痕できれいに埋め尽くされる。

このように、従来それなりの時期幅を持つものと解釈されてきた様相が、ここの一括投棄遺物に凝縮されている。046炉穴・土坑の出土土器も、出土状況からみて、炉穴を切ってつくられた土坑の覆土に、一括して投棄されたものと考えられる。田戸上層式的なキザミを有する隆起線をもつ土器（第22図30、32～34）がみられる反面、絡条体圧痕や隆起線と連続刺突を有する土器（第23図40～42）も共伴する。

これらのような状態が、該期の土器様相の検討に少なからず影響するであろうと考える。本遺跡の近隣において、このような様相を呈する遺物はほとんど検出されていない。時期的には、市域の北部に位置する、今富の大作頭遺跡および不入斗の片又木遺跡において子母口式期の資料がみられる。今富大道遺跡および小田部新地遺跡では、野島式の良い資料がある。しかし、本遺跡の出土土器はそれら市域北部の台地上の遺跡とは異なる様相をもつ。文様構成比などの差があるものの、上総丘陵南西に位置する木更津市台木A遺跡に近いと言える。このような遺跡間の関連性は興味深い。

土器の分類には、その器を製作した者の意図や時代的背景をいかに酌み取るか、が大きく関わるであろう。土器の製作にあたっては、その土器がどのような形に完成されてゆくかを左右するものとして、二つの要素が考えられる。天候や心情に左右されるであろう製作者の気分的な意図の表現と、強い社会的規則もしくは慣習などが働いている表現、である。後者の規則とは、その時代の流行や文化様相を表しているものであり、広域に現れる、現在でいうところの「土器型式」にあたるものであろう。これは文様のみならず、口唇の形状から胴部の屈曲まで、器形にも影響することであろう。本遺跡では、「子母口式」および「野島式」の時代を映した文様要素を多く持つ土器が認められた。そのなかで、どこまでが文化の反映（＝規則・制約）で、どこからが気分によるものなのか、その捉え方次第で、分類方法およびその細分も変わってくるのではないだろうか。

本遺跡資料が残念なのは、斜面が急であるために、包含層出土遺物の層位的出土状態を比較検討することが困難なことである。堆積の乱れはそれほどないようにみられるため、調査時の意識および整理の方法によっては活かせるかもしれないが、力及ばなかった。良い資料であるが、層位的検討を加えることができなければ、資料価値は半減するであろう。

そのような「遺物包含層」という状態の形成過程も問題にしなければならない。いかにしてこのような遺物の水平・垂直分布となるのであろうか。三山塚覆土およびその周辺の削平された部分以外に、縄文時代早期後葉以降の大きな人為的改変が行われた状況が無いことは、出土遺物から推測できる。そこから、自然地形の作用によるものと考えるのは簡単である。土器と礫、黒曜石の剥片の分布がほぼ同一状態を示していることは、地形や土壌が形成される過程の結果なのであろうか。

大量に出土した礫の分析には、今後の課題も多い。集中的な出土がみられない分布状態が土器と変わらないということが、何を意味するのか。このような丘陵上に火山岩が多くみられることの不自然さや、欠損被熱礫が多くみられることから、人為的使用の後の状態であることは確実であろう。しかし、この遺跡全体に石をまき散らした状態が、いつの段階に形成されたものなのであろうか。これが使用の結果であるのか、廃棄の結果なのか、自然の作用によって攪乱されてしまった結果であるのか、考えなければならない。このような根本的な問題すら判然としていないのが現状である。

整理作業の段階で、礫をどのように取り扱うか、意識の分かれるところである。貝塚の貝を分析するのと同様、手間をかけて処理する必要があるのかどうか、現在のところ否定的な意見が多くきかれる。しかし、その答えを導き出すためには、やはり分析を重ねることによって、遺跡における礫の存在意義を見極める必要がある。礫が自然の産物ではなく、人為的にそこにあるということは、それは考古学的に解明しなければならない当時の文化の一端であろう。

本来なら非常に考察甲斐のある遺構および遺物構成を有する遺跡である。しかし、図を優先としたために、紙数制約によって中途半端な内容の記載になってしまった。考察は改めて別の機会におこなうものとして。参考文献も挙げられないことをお詫び申し上げます。